

---

# 新・スケバン！～少年執事とお嬢様～

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新・スケバン〜少年執事とお嬢様〜

### 【Nコード】

N0731G

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

少年執事、只野太郎は執事学校を卒業後、大京市の真行寺男爵へ奉公に上がる。真行寺家の一人娘、美和子に「忠誠の誓い」をするのだが……。以前投稿した「スケバン」を全面的に改稿したものです。キャラもエピソードもかなり増やしました。どうぞお楽しみ下さい。

## 召し使い行動規範三原則（前書き）

すこし考えがあつて、ペンネームを「万墨人」と改名しました。

この「新・スケバン！」は以前このページで「スケバン！」として投降したものの、全面的に改稿した小説です。ストーリーはほとんど同じですが、登場人物の名前、新たに登場するキャラクターなど、いろいろ変更があります。

どうぞ、最後までお楽しみくださるよう、お願いいたします。

## 召し使い行動規範三原則

### 召し使い行動規範三原則

第一条 召し使いは主人の生命、財産を守らなければならない。  
またそれを看過してはならない。

第二条 召し使いは、第一条に反しない限り、主人の命令を守らなければならない。

第三条 召し使いは、第一条、第二条に反しない限り、自分の生命、財産を守る ことが出来る。

## 召し使い行動規範三原則（後書き）

なんでもいいから、感想、評価お送り下さい！

## 執事学校（前書き）

以前投降した「スケバン！」をお読みになったかたでも楽しめるよう、色々工夫したつもりです。

## 執事学校

三月もなかばというのに、ここ松前郡長万部まつまえぐんおしやまんべけんこしよむら県小姓村には春のきざしはまだ来なかった。空はどんよりとした雲がたれこめ、朝からの雪で、あたりは真つ白に染められている。見渡す限りの平原に、ぽつんと一軒のホテルが建っている。それほど規模は大きくはなかったが、建材や細かな装飾にはじゅうぶんに資金がそそがれ、まずは瀟洒な建物とっていい。

窓の外は一面の雪景色だが、室内はむっとするほどの暖気につつまれている。ひろびろとした部屋のあちこちには丸テーブルが置かれ、そこには着飾った男女が料理を前に談笑したり、あるいはチェスや、カードを手にのんびりとした勝負を行っていた。客たちの年令はさまざまだったが、共通しているのは贅沢になれた人間だけかもつ、傲慢とすらいえる落ち着きようであった。その間を、数人の執事や、メイドがひそやかにまわって、接客を続けている。

メイドの服装は紺か、黒の上着に足首までとどく長いスカート、白いエプロン。髪の毛は三つ網か後頭部でまとめている。髪の毛が客の顔にふれたり、食べ物飲み物にたれることを防いでいるのだ。執事もおなじように黒か、濃い灰色の上着に、襟には手で触れたら切れそうなほどかつちりと糊付けされたカラーに、ぴかぴかに磨き上げたエナメル靴。一分の隙もない服装である。髪の毛はみな一様に短めに刈り上げ、髪の毛ひとつじほどの乱れもなくセットされていた。

接客をしている執事やメイドはみな若い。

せいぜい年長のものでも、十七、八才くらいだろうか。接客中の

執事やメイドのほか、壁際にはそれに倍する数のさらに若い執事やメイドが、接客しているかれらを熱心な眼差しで見つめていた。

ひとりの客のグラスが空になった。その客はグラスを見つめ、お替りを頼もうかどうか迷っている。客は年のころ、六十代後半と思える老紳士である。

と、ひとりのまだ少年とっていい年頃の執事が近づき、話しかけた。

小柄で童顔なので、場違いの感はあるが、その目の落ち着きに年令以上のものが感じとれる。声をひそめ、ささやき声に近い喋り方だが、特別な発声法があるのか、老紳士にははっきりと聞き取れた。

「お客さま、失礼ですがそれでおやめになったほうがよろしいかと存じます。かわりになにか軽い飲み物でもお持ちしましょうか？」

客はそれに気づき、にやりと笑った。

「そうだな、わたしもそろそろ限度かな、と思っていたのさ。有難う」

少年執事はかすかに頭をさげ、引き下がる。

老紳士は向かい側にすわる同じくらいの年頃のでっぱりと太った男に話しかけた。

「あの少年、良く気がつくね。さっき、わたしがもう一杯頼もうかどうかどうしようか考えていたのだが、なんとわたしにもうやめたらどうかと忠告するとはな……。召し使いとして客の健康を気遣う心遣いは気に入ったよ」

向かい側の太った男はうなずいた。

「あの只野太郎ただのたろうは、この執事学校開校以来の優秀な生徒でして、卒業してからは真行寺男爵のお屋敷に就職が決まっております」

ほう……と、老紳士はうなずいた。すこし惜しそうな表情になっ



たのは、じぶんが話題になった只野太郎を引き抜きたいと思っ  
たからだろう。

「真行寺男爵といえば大京市の……」

「はい、先月男爵よりかれに指名がありました。来週になれば、  
これは大京市へ旅立つことになります」

太った男はそう答えると、ポケットから葉巻入れを出すと、一本  
ぬきだし吸い口をナイフで切った。口にくわえると、さっきの只野  
太郎という少年が近づき、マッチをすって火をつけた。葉巻を一服  
吸いつけ、太った男はうなずいた。

「わしには温めたワインとチーズをくれ」

太郎は「かしこまりました」と返事して引き下がった。

それを見送り、老紳士は太った男に話しかけた。

「しかし、ここには生徒が何人いるんですかな？ 見たところ、十  
数人しか見えないが」

百名を越しております、というのが太った男の返答だった。

「この接客室へ来ることの出来る生徒は、その中でも特に優秀な者  
に限られております。そのほかの生徒は、まだお客さまにお出しす  
るほどの修行をつんでおりませんので」

「あっちの壁際にいるのは？ あまり接客をしていないようだが？」

「ああ、かれらは来年卒業の生徒です。いま接客をしているのは今  
年卒業する生徒で、かれらの接客を目にして、勉強をしているので  
すよ」

ここは召し使いになるための修行を行う、執事学校なのである。  
学校といっても、見たところ金持ち専用のホテルと変わりはない。  
生徒はここで執事、メイドになるための訓練をつける。

もちろん普通のホテルと同じように客があれば宿泊できる。その  
客の接客を通して、生徒は将来優秀な召し使いになる修行をつむの

であつた。

この学校に宿泊しにくる客は、それらの生徒と接して、将来じぶんの屋敷に招く執事やメイドを見定めるため宿泊するのだ。

太った男はこの執事学校のオーナー兼経営者である山田勇作氏。

執事学校の校長としては三代目にあたる。初代の校長はもともとホテルを経営していたが、客からの執事やメイドを探す声をうけ、ホテルを執事学校にしたのだ。執事学校としての歴史は半世紀におよび、この種の学校としてはもっとも歴史が古い。

学校経営の目論見があたり、ホテルには優秀な執事やメイドをもとめる客がオフ・シーズンにかかわらずやってくるようになった。そのせいで、この学校はホテルとしても充分に収益をあげることができていた。

「ワインとチーズをお持ちしました」

山田氏の注文にやってきたのは、さっきの只野太郎ではなく、ふくよかな頬をしたメイドだった。彼女は銀色のトレーにワインとチーズを盛り、にこにこことほほ笑みを浮かべて給仕する。彼女の頬には笑窪が見えていた。

手早く給仕を終えると、彼女はぺこりと頭を下げ、引き下がった。メイドを見送った老紳士は山田氏に話しかけた。

「彼女も卒業生ですか？」

山田氏がうなずくと、老紳士はさらに言葉を継いだ。

「それで、奉公先は決まっていますか？」

「まだです、という答えに老紳士は勢いづいた。

「それではうちに来て欲しいですな。あの娘、ここ数日見かけますが、良く気がつくし、それにとっても明るい性格をしているようだ。あのようなメイドなら、だれとでもうまくやっていけるでしょう」

しかし山田氏は首を横にふった。

「彼女には奉公させないつもりです」

「なぜです？ 資格がないのですか？」

「資格はじゅうぶんです。しかしわたしは、彼女にはどこにも行かせるつもりはありませんので、あしからず」

ぽかんとした顔になった老紳士に山田氏は説明した。

「実を言うと、彼女……山田洋子というのですが……は、わたしの一人娘なのです。洋子にはいずれ婿を取って、このホテルを継いでもらう計画なのです。この学校で学ばせていたのは、ホテルを継いだときの接客の修行をさせておくためなのです……」

山田氏がそこまで言葉をついだとき、がちゃんと背後でトレイが床に落ちる音がした。

ぎよつとなった山田氏と老紳士が顔をあげると、当の洋子が顔を真っ赤にして立ちつくしていた。

「だからあたしにはどこからも就職の話しなかったのね！」

彼女の目には涙が浮かんでいた。

「ほかの生徒にはみんな奉公先が決まっていて、あたしにはなんの音沙汰もないからおかしいと思っていたのよ！ パパが邪魔していたんだわ！」

洋子……と、山田氏が立ち上がった。

目にいっぱい涙をため、洋子はいやいやをするように首をふった。  
「あたし、パパのホテルを継ぐ気はないわ！ だってあたし、メイドになりたいんだもの……それなのに……」

あとは悲鳴のような嗚咽になると、洋子はスカートの裾をひるがえして駆け出した。ばたばたという足音を残して接客室を出て行く。

その場にいた執事やメイドの卵たちはぼうぜんとした表情になっていた。

召し使いするべかざる第一条　召し使いは決して大声で騒ぐべかざる。

第二条　召し使いは足音を立てて歩いたり、走るべからず。その二条をまるで無視した洋子の振る舞いに、みなあっけにとられていたのだった。

その中で只野太郎だけはそつと接客室を離れ、廊下に出た。

## 洋子

洋子は出たすぐの廊下の隅でまるい肩をふるわせ泣きじゃくっていた。

そこに太郎が近づき、肩に触れた。

顔を上げた洋子に、太郎はだまってハンカチを差し出した。受け取り、鼻にあて音を立ててかんだ。

「ありがと、ちょうど洗濯して持っていなかったの。あとで洗って返すわ」

うん、と太郎はうなずいた。

ふ、と洋子は笑った。ハンカチをあわててエプロンのポケットにしまうと、また顔を赤くしてうつむく。色が白いから、感情が高まるとすぐわかる。

「いいわね、太郎は奉公先が決まってて」

ああ、と太郎は軽くうなずいた。ふつうなら、ここで君もいつか決まるよとかなんとか、なぐさめの言葉をかけるのだろうが、太郎は無言だった。その代わり、ただ黙って立っているだけだ。そんな太郎に感情を激昂させていたのが恥ずかしくなったのか、洋子は冷静さを取り戻した。こんなとき、わざとらしいなぐさめを言わずに黙っていてくれるのが洋子にはありがたかった。

「来週、卒業ね……」

ぼつりとつぶやく。

太郎と目が合う。太郎と洋子は、ほぼおなじ背の高さだ。太郎は

この年頃の男子としては小柄なほうだから、目の高さは同じくらいになる。ふっ、と洋子は目をそらした。

「あなたとはずっと幼なじみだった……あたしがこの執事学校に入る前から、太郎はあたしの遊び相手だったわ……」

ぼんやりとつぶやき、窓を見た。

外はあいかわらずの雪景色で、庭に植えられている桜の樹にはつぼみが固くついているだけだ。つぼみが咲きほころぶのは、たぶん来月だろう。ふたりのいる松前郡長万部県は、扶桑国のなかでももっとも北の果てにある。春がくるのは四月も終わりで、あつという間の夏が過ぎ去れば、あとは急ぎ足で秋が過ぎ行き、長い冬を迎える。

洋子はこのホテル兼執事学校の一人娘、つまりお嬢さまというわけだ。

太郎は母親がこのホテルの従業員であつたため、生まれてからずっとここで育っている。

もちろん従業員宿舎で、という意味だが子供のころはおたがいそんなことは意識せず、仲の良い幼なじみとして暮らしてきた。

ふたりの関係が微妙に変化したのは太郎が中学校に入学したところだった。そして中学を卒業した太郎が執事学校に入学を決めたあと、洋子もあとを追うように入学してきたのだった。

執事学校で太郎はめきめきと頭角をあらわし、卒業間際のいまではだれも最高の召し使いになるだろうという評判をとっている。

お嬢さま育ちの洋子には執事学校の修行は辛いものだったが、それでも必死の頑張りで太郎と同じように卒業の日を迎えることが出来たのだった。

なぜじぶんは執事学校に入学したのだろう……。洋子はあらため

て思い返した。父親の山田勇作の勧めがあつたからだと思ひたかつたが、やはり太郎の存在が大きかつたといまでは省みることが出来る。

息を吸い込み、洋子は口を開いた。

「太郎、あのね……！」

彼女の指が、壁に「の」の字を書いている。頬がほんのりピンクに染まり、なにか決意を固めたようだ。思い切つて彼女はふりむいた。

「太郎、あたし……！」

洋子の言葉は途切れた。

太郎はいなくなっていた。

## 卒業式

卒業式の当日も、天気はあいかわらずの雪模様だった。

式に出席した卒業生はわずか二十数名にすぎない。全校生徒百名ならず、そのうち卒業式をむかえることのできるのは、入学生半分にはすぎない。それだけ厳しい修行が待っているのだ。卒業生にはひとりひとり、卒業証書と記念の品物があたえられる。記念品は、執事学校の紋章が浮き彫りにされたバッジである。バッジを身につけることにより、この学校を卒業したことをしめすのだ。執事学校卒業者の誇りと共に、一種の身分証明にも役立つ。

式はとどこおりなく終わり、銘々卒業証書を手に、式に駆けつけた肉親と共に卒業を喜び合っている。洋子もまたクラスメートの女生徒たちと肩を抱き合い、卒業の別れ涙にくれていた。その泣き声は洋子がひときわ高く、目立っていた。洋子には母親がつきそい、なにくれと世話をやいている。

その中で太郎はただひとり、全員の輪から離れるようにひっそりと立っている。そうしていると、だれもかれには注目しない。長年の修練のたまもので、だれにも注目されない呼吸法を習得しているのだ。執事は不必要に他人の注意を引いてはいけないと教えられている。

会場にひとりの下級生が入室してきた。メイドの服装をした、女子生徒である。胸のリボンの色で、二年生であることがわかる。彼女は会場の入り口で、部屋のなかをあちこちを見回している。やがて彼女の視線が太郎のうえにとまった。ああ、よかったというような表情になって、彼女は小走りになって太郎のもとへやってきた。



「ああ、よかった！ あの……、只野太郎さんですね？」

太郎は彼女に目をとめ、かすかにうなずいた。メイド姿の下級生は頬を上気させている。太郎の名前はこの執事学校では有名で、彼女たち下級生にとっては憧れの先輩であった。

「その……校長先生が呼びなんです」

「校長先生が？」

太郎は反問する。彼女はうなずいた。

「はい、校長室に来るように言われました」

「そう言う場合、来られるように、と言うべきだ。召し使いとして、ただしい敬語はつねに意識しなくてはね」

注意されてメイドはうつむいた。ちら、と太郎の顔に後悔の表情が浮かんだ。

「ごめん、つい余計なことを言ってしまったね」

いいえ、とメイドは首をふった。ふかぶかと頭を下げると、ふたたび小走りに会場の出口に向かった。

太郎はちよつと首をかしげた。校長が呼んでいる……何のようだろう？

とにかく行ってみようと歩き出す。

その太郎の後ろ姿を、洋子がじっと見つめていた。

## 校長

「卒業おめでとう。そして真行寺男爵のお屋敷への奉公もな」

校長の山田勇作氏は校長室で太郎を待っていた。太郎が入室するなり、祝福の言葉をかける。

ありがとうございます、と太郎は頭を下げた。

「これが、真行寺男爵から君によこされた夜行列車の一等切符と男爵邸への道順だ。明日、出発するんだったな？」

校長は机の引き出しから一通の封筒を取り出し、机の上面をすべらせた。一歩前に出て太郎は封筒をそつととりあげた。

あらためると封筒の表には男爵の印璽が押された封蝋で封印されている。かすかに封蝋の香りが漂った。

校長は引き出しからもう一通の封筒を取り出した。

「そしてこれが執事協会の案内状だ。なにか困ったことがあったら、相談するといい。執事規約に反しないことなら、親身になって相談に乗ってくれるだろう」

執事協会……。かすかに太郎はもの問いたげな表情になる。校長はうなずいて説明した。

「知らないのも無理はない。正式な執事になった者だけに案内状がくることになっている。君は男爵家に奉公することになったのだよ。その協会がわたしを通じて案内状を送付することになったのだよ。その執事協会の目的は、召し使い同士の互助会のようなものだ。召し使いに対し、不当な扱いをした主家にたいし制裁を加えることもあるし、また主家を裏切る行為に走った召し使いに制裁をくわえることもある。要するに健全な、主人と召し使いの関係を保持することを

目的とした組織だ。君はまあ心配はないだろうが、憶えておいたほうがいいだろう」

太郎はうなずいた。できることなら、この協会の厄介になりたくはないものだ。

ふたつの封筒を手にした太郎を前に、校長は両手の指を組み合わせた。なにか大事なことを言い出すときの山田勇作の癖である。

「君はわが校はじまって以来の優秀な生徒だ。やはり血は争えないというのかな。お父上もまた、優秀な執事だった。君はお父上のことを覚えているかい？　そう、只野五郎のことだよ」

太郎は首をふった。

「いいえ、父はぼくが生まれてすぐにいなくなりましたから……それに父の写真ありませんので、どのような人物なのかも知りません」

そうか、と山田氏はうなずいた。

「君のお父上は有名な召し使いだつた。最高の執事、という称号すら控えめではないかという評価もある。君が都会へ出て、男爵に奉公するうち、お父上のことでなにか耳にすることもあるかもしれん。おそらくやつかみ半分で、いやな噂を聞くこともあるだろう。だが、憶えておいてほしいのは、君のお父上の只野五郎氏は、つねに最高の召し使いであつたし、その評価は時と共に変わるものではない、ということだ。わかつたね？」

はい、と太郎はうなずいた。

しかし校長が特別にじぶんにこういうことを言つたことは、なにか裏に事情があるのではないか、と太郎は考えていた。

その事情とはなんだろう？

校長室を辞し出口へと向かう太郎を、洋子が物影から見つめていた。どうやら彼女はふたりの会話を盗み聞きしていたようである。

## 母の告白

建物の出口に張り出しているひさしの下で、太郎の母親は待つていた。今日の母親は、和服を身につけている。彼女はこの執事学校のホテル部門に勤める従業員のひとりである。いつもはホテルのお仕着せであるが、今日だけは特別だった。彼女は太郎の顔を認めるとその表情をやわらげた。

「卒業おめでとう、太郎」

うん、と太郎はうなずいた。それだけの会話をかわすと、ふたりは歩き出した。ふりしきる雪に、母親は傘をひろげ、息子にさしかける。ふたりは傘に肩をよせあい雪のなかを歩いていく。

太郎と母親はホテルの敷地内にある、従業員宿舎へとむかった。雪はまだ残っていて、宿舎に通じる道だけは除雪されているものの、夜明けから降った雪がつもり、歩きにくい。

宿舎はいくつもの部屋がつながった、平屋の建物だった。昔風に言えば長屋である。

一家族に割り当てられているのは四畳半と六畳の和室、それにキッチン、トイレなどで、風呂はホテルの従業員用のものを使用する。

じぶんたちの部屋にもどると、ふたりは四畳半の和室に正座して向かい合った。

窓際に太郎の勉強机があり、ちいさな筆筒、押入れ、それに母親の化粧台があるだけの、簡素な室内である。灯油ストーブがあるが、火は入れていない。室内の気温は零度ちかくであるが、ふたりは平気だった。召し使いとしての訓練で、暑さ寒さに耐えることは当たり前で、零度以下にならないと暖房を入れる習慣はなかった。母と息子の口もからは、しきりに白い息が吐き出されていた。

母親は卓袱台をひろげ、息子のためにお茶を入れていた。四畳半の室内に、ほうじ茶の馥郁たる香りが漂っていた。

「とうとう卒業ね……」

湯呑みを手に、母親がぽつりとつぶやいた。

短い独白だが、万感の思いがこもっていた。

太郎も湯呑みを手にうなずいた。

「お屋敷についたら、手紙を出すよ」

ええ、と母親はうなずいた。

太郎は母親を見つめた。

「ねえ、母さん……」

はっ、と母親は顔を上げた。表情が厳しいものに一変していた。

息子が言い出すことを予感している顔つきである。

「お父さんのことだけど」

彼女は目を伏せ、表情を隠した。

「今日、校長先生に呼ばれてすこし話をしたんだ。校長先生は、ぼくのお父さん、つまり只野五郎は最高の召し使いだっつたと言っていたけど……ぼくは一度だってお母さんからお父さんのこと聞いたことなかったね。男爵のお屋敷に行くと、お父さんのことを聞かれると思うんだ。だからお母さんから、お父さんのこと聞いておきたい」

母親はため息をついた。

唇がかすかに開く。

「お前のお父さんはね……」

言いかけ、唇をつぐむ。

「お父さんはね……」

ふたたび言葉を継いでまた黙り込んだ。

ふたりの間に沈黙が流れた。太郎は黙ってその沈黙に耐えていた。とうとう耐え切れなくなったのか、母親は顔を上げた。遠くを見る目つきで、なにかを思い出しているようだ。

「お母さんとお父さんが出会ったのは真行寺男爵のお屋敷だったの」

母親の言葉に太郎は驚いた。

いままで父親のことについて、母親から話されることはなかった。子供のころ、父親のいないことが不思議で、母親にまわりつくようにして聞いたこともしばしばだったが、そのたび母親は言を左右にして話してくれることはなかった。それが、今日にかぎって話しだすということは、やはり卒業という特別な日であるからだろうか？

「校長先生の言うとおり、お前が男爵様のお屋敷に奉公するようになったら、いろいろ聞かれることもあるかもしれないから、話しておこうと思うの」

太郎は膝の上においたこぶしをぎゅっと握り締めた。握りしめた手の平が汗で湿っている。

「そのころお父さんは伝説の召し使いと言われていてね、あたしはただのメイドだった。だからお父さんと付き合い始めたころは忙しくて、なかなかゆつくりと話すこともなかったわ。それでもお屋敷のお部屋をもらって、一緒に暮らし始めることになったの。お前が生まれたのは、そのころだったわ」

ぼうぜんと目を睨る太郎に、母親はうなずいた。

「そう、お前は真行寺男爵のお屋敷内で生まれたのよ」

母親はふたたびじぶんの膝に目を落とした。

「ところがお前が生まれて半年もしないうちにお父さんは……」  
そう言つと、彼女はなにか決意を秘めたように息を吸い込んだ。

「死んだのよ！」

え、と太郎は身を乗り出した。

「そうよ、お前の父親、只野五郎は死にました。わたしはお父さんの思い出すことが辛くて、写真はすべて焼き捨てたの。だからお父さんの写真は一枚もないわ。ただ、お前が成長するにつれ、お父さんに似てきたわ。いまのお前は、お母さんと出会ったころのあの人のものだわ……」

早口でそれだけ一気に言い終わると、母親は顔を伏せ、肩を震わせた。

お父さんが死んでいた……。

意外な母親の言葉に、太郎はそれ以上尋ねることができなくなっていた。父親の死の状況はどうだったのか、墓はどこにあるのか、そういうことを聞きたかったのだが、母親はそれらの問いを拒否しているようだった。

その夜、太郎は翌日の出立にそなえ、荷造りをしていた。着替えとそれまで使っていた教科書、さまざまな身の回りの品をトランクに詰め込む。教科書を手にすると、執事学校の三年間の暮らしが思い起こされる。

太郎の手にした教科書の背表紙を読むと、執事学校の授業がおおよそ把握できる。

礼儀作法の教科書は当然だが、経営学、医学などの教科書がまじ



っているのが目を引く。

経営学は、いずれ筆頭執事となった場合、主家の経済活動をまかされることを考えてのことだ。執事はあらゆることに通じていることを期待されているのである。医学の教科書も同じで、すくなくとも研修医くらいの医学知識を身につけることを義務付けられている。その他、執事が学ばなければならないことは幅広い。おいおい太郎がどのような知識を身につけていることになるか、判明することだろうが、執事は万能人であることを証明するだろう。

明日の用意をすべて整え、上着とズボンをハンガーにきちんとかけると、太郎は寢床に身体をすべりこませた。

天井の木目を見つめるうち、太郎は眠りに落ちていく。

きつと世界一の執事になる……太郎はその誓いをあらたに夢路に  
ついていた。

## 母の告白（後書き）

あとがきを利用して、最近見たお勧めDVDのコーナー始めようかな……。

最近五百円で買える古い作品を集めたやつで、シャーリー・テンプルの「小公女」を見た。

いやあ、さすがに天才子役と言われただけのことはある。実に自然で、周りを圧倒する存在感！  
お勧めです。

## 予期せぬ闖入者

「お乗りのかたはお急ぎくださいーい！」

小姓村駅の駅長が、ながながと語尾をのばす独特の発声で叫んでいる。

小姓村には、いちおう駅舎が完備した駅があった。駅長一人のちいさな駅であるが、それでも初夏から晩秋のシーズンには、執事学校のホテルに避暑のための客がやってくることもあり、施設はそろっている。

線路は単線である。

ただひとつのホームには、蒸気機関車が煙突からもくもくと黒煙を噴き上げ、出発のときを待っている。天候は今日も朝からどんよりとした雪雲がたれこめ、ちいさな雪片が舞い散っている。

のぼりの汽車に乗り込むのは太郎ひとりだった。ほかの執事学校のクラスメートは出発の日にちが違っている。ホームでは母親が見送りに出ていた。

「暖かくしなくてはだめよ。大京市につくまでは、まだこのあたりは冬が続いているんだから」

そう言いつつ、彼女は太郎の首の襟巻きを直した。太郎はうなずいた。

出発しまーす、と駅長がふたたび語尾をながながと伸ばして叫んでいる。乗車をうながすように、汽車が汽笛を鳴らす。機関車のシンダーからはせいだいに白い蒸気が吐き出された。

それじゃ、と太郎は客車に乗り込んだ。

太郎が乗り込むと、すぐにがったんと機関車の動輪が回転しはじめた。

ふたたび汽笛が鳴り響き、ごとごとと震えながら汽車は走り出す。太郎はタラップから顔を突き出し、見送りの母親の姿を探した。

すでにホームの端まで来ている。母親はホームの端っこに立ちつくし、じつと太郎の顔を見つめていた。どんどん母親の姿はちいさくなり、あっという間に見えなくなってしまった。

ほっとため息をつき、太郎は顔を引つ込めタラップから客車の内部へ歩き出した。片手には身の回りの品を詰め込んだトランクを提げている。

手に一等客車の切符を握りしめている。番号を照らしあわせ、じぶんが座る個室をさがす。

大京市までは一泊二日の旅である。

個室は夜には寢室になる。

ようやくじぶんの個室番号を探し出し、太郎はドアを開いた。

「お早う！」

いきなりの女の子の声。

太郎はぎよつとなつた。

見ると個室で太郎を待っていたのは、洋子だった！

## 予期せぬ闖入者（後書き）

「真紅の盗賊」ってDVDを見た。

今から五十年以上前の作品だけど「パイレーツ・オブ・カリビアン」より面白んじゃないのか？

やっぱりアイディアしだいで、低予算でも面白くできるって証拠だよな。

## 洋子の企み

ふふふふ……。

洋子はきらきらと目を輝かせ、悪戯っぽい目つきになって太郎を見上げている。

今日の彼女は学校でのメイド服ではなく、派手な赤い色合いのコートに、膝までおおう白いエナメルブーツ。それにコートと同じ色のワンピースといういでたちだった。彼女の座る横にはおおきな旅行鞆がふたつ、席を占有している。

太郎はぼうぜんとなっていた。

「ど、どうして……」

あは！ と洋子は笑った。

「太郎だって、驚いたときにはそんな顔をするんだ……はじめて見た！」

最初の驚きがさめると、太郎の頭はいそがしく回転し始めた。おそらく洋子はじぶんと校長の 父親の山田勇作氏の 会話を盗み聞きしていたのだろう。それで先回りして切符を買ったか、あるいは車内で求めたかしたのだろう。

なんのため？ 決まってる。洋子は父親の反対を押し切り、黙って大京市へ行くつもりなんだ。ということは……家出だ！

大変だ、洋子は家出を企んでいる。

いや、もう汽車に飛び乗っているから実行しつつあるということ

か。汽車に乗ってしまったいまでは、もう小姓村に連絡する方法はない。なにしろ小姓村には電話がないのだ。昔はあったのだが、山田氏のホテルに宿泊する客が、わずらわしい都会の用件からのがれることをのぞみ、電話を廃止させたことがいまはうらまれる。

どさりと太郎はちからなく洋子の向かい側の席にすわりこんだ。  
「どうするつもりなんだ」

そう切り出したときはいつもの冷静さが戻ってきている。クラスメートには「冷たい」と言われることもある、水のような無表情である。

「あんたと一緒に大京市に行くわ！」

あっけらかんと洋子は答えた。

太郎はうなずいた。

いまさらどうこう言ったとしても遅すぎる。洋子の性格から推すと、太郎がどう説得しようと思駄だろう。それより大京市について、じぶんから父親の勇作氏に連絡したほうがいい。手紙を書こう。そして速達で出すのだ。それが一番、はやく連絡をとる方法である。  
「それで、大京市に着いたらどうするの？」

太郎の質問に、洋子は目をくりくり動かし肩をすくめた。  
「わかんない。でも、どうにかしてメイドを探しているお屋敷を探すわよ。あたし、どうしてもメイドになりたいんだもの」

洋子らしい、と太郎は思った。思い込んだらあとさきのことなど、考えない彼女の性格がよく出ていた。

と、あることに気づいた。

「どうしてばくがこの個室に入ることがわかった？ きみ、ぼくの個室の番号を知ることができたのかい？」

くすくすと洋子は楽しそうに笑った。顎をあげ、白い咽をさらして心底楽しそうだ。

「種を明かすとね、切符を手配したのがうちのパパだったからよ。あなたが真行寺男爵に奉公が決まったとき、パパが男爵家に頼まれて、切符を手配したの。男爵家はそれを大京市で購入して、うちに送ってきたのよ。だからそのときのやりとりの手紙の文面が残っているから、あんたの席番号を探ることなんか簡単だってわけ！」

そう言って洋子は得意そうに眉をあげた。

なるほどね、と太郎はうなずいた。洋子の行動的な性格がもろにでた。

あらためて窓の外を見ると、すでに列車は速度を上げ、小姓村の景色はどこにも見えなくなっていた。どこまでも続く平坦な雪景色がひろがっている。ときおり野生の鹿や、野うさぎが汽車の音に驚いてこちらへ首をむけ、きょとんとした目で見送っているのが見られるばかりだ。

しばらく黙って座っていたが、車内の温度はむっとするほど暖かく。太郎は上着と襟巻きを脱いだ。それを見て洋子もコートを脱ぎ、身軽になる。

いつまでも黙っている太郎に洋子は気詰まりを覚えたのか、勝手に喋り始めた。

「あんたは男爵のお屋敷に奉公することになったらどうするの？」

「どう……って？ そりゃ一生懸命働くさ」

洋子は顎に手をのせた。

「ねえ、男爵様のお屋敷って、ひろいの？」

「さあ……でもお金持ちらしいから、ひろいだろうね」

「何人くらい、召し使いがいるのかしら？」

「知らないよ。でも一人、ふたりというわけにはいかないだろう。」



沢山の召し使いがいるに違いないね」

太郎はだんだん洋子との会話に身が入りはじめていた。お嬢さま育ちの洋子は、ときおり突拍子もないことを言うと思うと、つぎの瞬間にはまるで脈絡のない会話を始めることがある。しかし彼女との会話は不思議と楽しかった。

「ふうん……」

と言った洋子の目がきらめいた。

「それじゃ、ひとりくらい召し使いが……メイドが増えてもわからないかもね？」

「洋子？」

あははは、冗談、冗談と洋子は手を振った。

しかし太郎は心配していた。洋子はときおり、とんでもない行動に出ることがあるのだ。もしかしたら真行寺男爵のお屋敷に乗り込み、じぶんを売り込むことすらやりかねない。

とにかく家へ帰るよう、きちんと説得しなければならぬ……。太郎は気を引き締めた。

## 洋子の企み（後書き）

「スター・シップ・トルーパーズ3」を見る。

相変わらずバーボンベン監督は意地悪だ。右翼、左翼どっちの人間も、この映画には腹を立てるだろう。

それにしても「唄う將軍」のキャスティングが、ビング・クロスビーそっくりなのは意図的だろうか？

## 食堂車

何度説得しても洋子の答えは「否」であった。

「あたしメイドになるまでは絶対家に帰らない。もう、決めたことだもん」

そう言って洋子は腕をくんだ。

「しかしお父さんとお母さんは……」

「書き置きを残したから大丈夫！」

「大丈夫って……きみ……」

いまごろ洋子の父親の勇作氏と母親は半狂乱になっているのではないかと太郎は思った。彼女の両親は、それこそ洋子を掌中の珠のようにして育ててきたのを、太郎は身近に見聞きして知っている。

洋子は面倒くさくなったのか、立ち上がった。

「それよりお腹すいた……。ね、食堂車へ行こうよ！」

ねえねえ、行こうよと洋子は太郎の腕を引っ張った。こうなると洋子は頑固である。太郎は引きずられるようにして立ち上がるしかなかった。

一等客車には食堂車が接続されている。

機関車と一等客車の間に食堂車があるので、ここを利用できるのは一等の客だけである。

両側の窓に面してテーブルが並べられた食堂車にはすでに何人かの客が席について食事をしているところだった。

太郎の訓練された目は、テーブルにかけられたクロスや、用意されたグラス、食器が一流品であることを見てとった。ふたりが食堂

車にすがたをあらわすと、さっそくこの車両づきのボーイがやってきて、太郎の切符をあらため、席へと案内した。

席につくと間もなく、夕食が運ばれてくる。

前菜からメイン・デッシュまで、コースはながれるように運ばれる。学校では生徒同士、主賓と給仕係となつて練習を重ねている。ふたりを給仕するボーイを見て、太郎はついじぶんが給仕をしたくなる気持ちを抑えるのに苦労した。

ようやくデザートとなつて、洋子は料理を堪能したのか頬をほんのりピンクに染めている。

「おいしかった！ 学校の調理部門の生徒がつくる料理もおいしいけど、やっぱりプロの料理は違うわね」

そりやそうだ、と太郎はうなずいた。

執事学校には調理部門が付随している。そこで学ぶ生徒は、将来雇用主の個人的な調理人となることを目指している。もちろん、すぐにそんな地位が手に入るわけはなく、その前にホテルやレストランに見習いとして修行することが前提であるが。そこでの修行の結果、名声があがれば名だたる貴族、名門のあるじが雇ってくれることもあるのだ。

ボーイが近づき、洋子のグラスにシャンペンを注ぐのを見て、太郎はきみは未成年じゃないかと注意した。

「いいのよ、こまかいこと言いつこなし！ あとちよつとで成人じゃない」

扶桑国では十八才の誕生日をもって成人とするのだ。洋子はあとひと月でその年令にたつする。

グラスに注がれた発泡酒を一息に呑むと、洋子は太郎のグラスにも注いであげるとボーイに命じた。ボーイは軽くうなずき瓶を差し

出したが、太郎は断り、かわりに水のお替りをたのんだ。

洋子はそんな太郎を見て舌打ちをした。

「あいかわらずねえ……すこしは羽を伸ばせばいいのに」

じゅうぶん、楽しんでいるよと太郎は答えた。じつさい太郎は楽しんでた。はじめて見る食堂車の様子が珍しく、出される料理や食事をしている客を観察しているだけでも将来じぶんが執事として奉公することを考え、参考になった。

太郎はじぶんの職業である執事のことになると、夢中になるのだ。

## 食堂車（後書き）

ワゴン・セールで買ったVHSソフトの掘り出し物。

「マシンガン・ジョニー」1930年代のギャング映画のパロディで、マイケル・キートンが主演。なかなかアクの強いキャラを楽しそうに演じている。

もし見かけたら、お勧めです！

## 寝台車

個室が客車係の手によって寝台車になると、はじめて太郎は狼狽を感じた。

寝台は上下の二段ベッドである。

ここに太郎と洋子が寝るのだ。

ふたりつきりで！

太郎と洋子は寝台の前で顔を見合わせた。

「やーだ、太郎なんでそんな顔しているのよ？ あたしが、あんたをとって食いそうな顔じゃない」

洋子はどん、と太郎の肩をたたいた。

「あたし、上ね！」

そう宣言すると、とっとと寝台の上へとよじ登る。寝台の上に落ち着くと、カーテンをさっと閉めた。

「パジャマに着替えるから、覗いちゃいやよ！」

そう言って寝台の向こうでこそそこそと着替えの音がした。やがてカーテンが少しだけ開き、洋子はピンクのパジャマに着替え、顔だけ突き出した。

「なにしてんのよ、あんたもさっさと横になりなさいよ。明日は早いでしょ？」

あ、ああ……と太郎は生返事をして下の寝台へ滑り込んだ。仰向けになり、上掛けをかける。着替える気分ではなかった。

と、洋子が上の寝台から顔をさかさにして覗き込んだ。

「信じられない！ あんた、着替えもしないで寝るつもりなの？ まったく、男の子ってがさつなんだから……」

じゃ、おやすみなさいと洋子は言うつと引っ込んだ。太郎もおやす

み、とちいさく返事をした。

就寝の時間でーす、と語尾を長々とのばしながら車掌が触れて回った。やがて廊下の照明が消えて、あたりは暗くなった。

ごとごとという列車の震動が、ベッドの上からも伝わってくる。

太郎は闇の中で目を見開いていた。

明かりはすっかり消えていたが、それでも非常灯の明かりでほの暗い程度である。

この上に洋子が横になっている……。

そう考えると、すっかり目がさえてなかなか寝付かれない。

ときおり洋子が寝返りをうつのか、ベッドの床がみしりと音を立てる。

その瞬間、やっとうとうとしたかと思うとはっ、と目が覚めてしまう。

そんなことを何度も繰り返した。

と、ふいに轟っ、という騒音が列車の車輪から沸き起こった。なんだろうと、太郎はベッドのカーテンをそっと押し開いた。

細めにあけたカーテンの隙間から、客車の廊下側の窓に鉄橋の構造物を通りすぎる。

松前郡と、陸奥郡の間にある海峡に渡された陸橋を汽車は通りすぎているのだ！

松前郡のある北の大地と、大京市がある本州の間には広大な海峡が横たわっている。

政府はその間に、海橋を通したのだった。最初はトンネルを開通する予定だったが、技術的なことと予算がつりあわず、結局長大な橋を渡すことになったのだ。



汽車はその橋を通りすぎている。

やがて騒音は止み、ことんことんという規則的な鉄路の音にもどった。

いよいよ大京市が近づいてきた……。

カーテンを閉め、太郎はうつうつとまどろんだ。

うーん……。

はっ、と太郎は目を見開いた。洋子が寝返りをうつたのか、みしりとベッドの上部がきしむ。

結局、太郎は朝方までまんじりともせず、夜明け前すこしまどろんだくらいだった。

## 寝台車（後書き）

サイモン・シン著「フェルマーの最終定理」を読む。

数学の歴史と、タイトルのフェルマーの最終定理（本当は予想というべき）が解決するまでドラマチックに書かれて夢中になる。

こういうのも、たまにはいいかも。

同じ作者の「暗号解読」「宇宙創生」も楽しみ。

## 洋子の決意

「終点　終点　。大京ステーション到着です……」  
車掌が汽車が終点に到着したことを告げてまわっている。

太郎は起きだし、朝の光の中で洗面所で顔を洗い、歯を磨いた。  
鏡をのぞきこむと、よく眠れなかった証拠が目充血となっており、  
われていた。

いけない、こんなんじゃない、最初の奉公の日というのに……。

太郎はあわてて目薬をさして目の充血を抑えた。

「お早う……」

洋子のはつきりと寝不足とわかる低い声で挨拶してきた。彼女は  
まだ昨夜のパジャマのまま、ぼんやりとしている。

「よく眠れたかい？」

「もちろん！　もう、朝までぐっすり夢も見なかったわ！」

しかし彼女の目は真っ赤に充血しているし、目の下には隈が出来  
ていた。だが太郎はそのことを指摘することはやめておいた。

「着替えたほうが良いよ」

そう声をかけると、彼女はじぶんの着ているものを見おろし「あ  
らやだ！」とつぶやいた。おそらく、寝ぼけて自宅にいるつもりな  
のだろう。彼女は寝起きが悪いのだ。

あわてて彼女は寝台にとびこみ、手早く着替えた。

今朝の彼女は、水色のワンピースに、茶色のハイソックス。そし

て黒い革靴といういでたちだった。髪の毛は紫色のリボンでまとめられている。あの旅行鞆にはかなりの量の着替えが収まっているにちがなかった。

大京市が近づくにつれ、車掌が手早く寝台を元に戻していく。ふたりは椅子に腰掛け、窓の景色を楽しんだ。

すごい！　これが大京市なのか！

はじめて見る都会の景色に、太郎は身を乗り出すように窓の外のがめに夢中になっていた。となりで、洋子もまたおなじように眺めていた。

ビル、ビル、ビル……。

どこまでも四角い、コンクリートの建物が続いている。いくつもの窓ガラスに朝の光が反射して、きらきらと輝いていた。

「あつ、あれ！」

洋子が空を指さした。

かん、と音をたてそうな青空に、銀色の細長い葉巻型の物体が浮いている。

「飛行船だ……」

太郎はつぶやいた。

その通りだった。巨大な飛行船は、両側によつつのプロペラをまわし、ゆつたりと上空を飛行している。飛行船の胴体には「TAKAKURA」とアルファベットの文字が書かれている。

「高倉コンツェルンの飛行船よ！　すごいわあ……ね、あんた高倉コンツェルンって知っている？」

太郎はうなずいた。扶桑国最大の財閥で、その影響力はすみずみまでおよぶ。おそらく、これから奉公することになる真行寺男爵さえ、高倉コンツェルンの前ではデパートと露天商くらいの差はあるだろう。

と、ふたりの視界を大京ステーションのホーム屋根がおおった。  
飛行船は見えなくなった。

列車は停車した。

「大京ステーション、大京ステーション、お降りのお客さまは手荷物をお忘れなく……」

車掌の声にぞろぞろと乗客が個室から顔を出した。たいていが出張のサラリーマンか、あるいは家族連れで、太郎と洋子のようなとびきり若い客はほかにおらず、ふたりはかれらの好奇の視線にさらされていた。

ホームに出ると頭上をステーションの天蓋がおおっている。鉄骨に組み上げられたかまぼこ形の屋根に、ガラスごしに外の日差しが降り注いでいた。

ホームには無数の乗降客がおの目的に急いでいる。このような大量の人々を見たことのないふたりは、この景色だけで圧倒されていた。

「これが大京市なんだわ……」

洋子のほほは興奮でピンクに染まっている。両手に旅行鞆を持ち、歩き出した。

さつときびすをかえすと、太郎に背を向けた。

「洋子！」

太郎が声をかけると洋子は背を向けたまま立ち止まった。

「さよなら！」

短く叫んだ。彼女の背中中はこみあげる決意に震えている。

「あたし、どこかのお屋敷にメイドとして奉公するまでは家には帰らないし、手紙も書かないわ。あんたも真行寺男爵のお屋敷で一生懸命働いて、いい執事になって頂戴。あたしも頑張るから」

洋子の肩はそれ以上の太郎の呼びかけを拒否しているようだった。そのままかつかつと革靴のヒールを響かせ、人ごみに消えていく。

洋子……、と太郎はうつろにつぶやいた。

太郎は彼女が完全に人ごみに消えていくまで見守っていた。

出口へ向かう太郎は、駅構内にある電報局に目をとめた。

そうだ、電報を打とう！

太郎は急ぎ足で電報局にはいると、小姓村の山田氏へ一通の電報を打った。洋子が大京市まで一緒であったことを報せるためである。まずはこれで安心だ。あとは山田氏がどう動くか判らないが、一応の責任は果たしたといっていいのではないだろうか？ 詳しいことは母親への手紙で報せることにしよう。

## 洋子の決意（後書き）

クラシック専門店で富田勲の「惑星」CDを買う。  
ヘッド・フォンで聞くとすごい迫力！

あと同時にルロイ・アンダーソンのベスト版も購入。

## トーナメント？

大京駅を出ると、まぶしい日差しがアスファルトの路面に踊っている。小姓村を出たときは雪雲が重くたれこめていたのを思えば、ずいぶんと季節が違う。あらためてじぶんの故郷が北国にあることを太郎は思った。

それに人！

なんとという沢山の人だろう。

目の届く限り、さまざまな服装をした男女が、じぶんだけの目的を胸に足早に行き交っている。

自動車のクラクション、エンジン音。その騒音に混じって、店先からは客をよびこむ店員の声、音楽がやかましい。それらの音とひかりに、太郎はくらくらとなっていた。

太郎はビルの壁に一枚のポスターが貼られているのに気づいた。ポスターには海原が描かれ、波の向こうにひとつの島が浮かんでいる。しかしふつ々の島ではない。しらっちゃけた崖の上に、廃墟のようなビル郡がごつごつとしたシルエットを見せている。暗く、どんよりとした雲を背景に、その島はどこか不気味な印象をはなっていた。

その島にかぶさるように真っ赤な色である文句が書き連なれていた。それは

番長島トーナメント

今年も開催決定！

参加者募集中！

お問い合わせは「高倉コンツェルン事務局」へ



と、あった。

ほかに優勝者への賞金が書かれている。その金額はまさに天文学的で、いったいこれはなんだろうと太郎は首をひねった。トーナメントというからには、なにかの勝敗をあらそうのだろうが……。

「おい、お前もトーナメントに出るのか？」

いきなり背後から声がかかり、太郎の肩にだれかの手がおかれた。えっ、とふりかえると視線の先に、まさに見上げるほどの巨体をほこるひとりの男が太郎の顔をすごい顔つきで睨んでいる。

太い眉、ぎよろりとした鋭い眼光。その顔には無数の古傷が交錯している。男はぼろぼろになった古い学生服を身につけていた。とはいえ、学生には見えない。頭にはいったい何年洗っていないかわからないほど汚れた学生帽を被っている。足もとはこれまた真っ黒に汚れた下駄を履いていた。

男はぐい、と太郎の肩を引くとじぶんが前に出てポスターに見入った。その唇がゆがんで、笑いの形をつくった。ぐふぐふぐふ……というような奇妙な笑い声をたてる。まるで洞窟の向こうから聞こえてきそうな、低い笑い声だ。男はふたたび、太郎をじろりと睨んだ。

「どうなんだ、このトーナメントに出るつもりで見ていたのか？」

い、いいえと太郎は首をふった。

ふん、と男は肩をすくめた。はじめから太郎が参加するとは思ってもしなかったようである。たんに、聞いてみたかっただけのようだ。と、いきなり腕をあげ、男はポスターをいきなりベリベリと壁から引きちぎってしまった。それをくるくると丸めると、胸のボタンを開けて中へねじこむ。

ひとつ肩をゆすり、男は歩き去った。その場にいた通行人にくらべ、頭ひとつかふたつは飛びぬけているかれの背中、まるで海上で波をかき分け進む船のようだった。がらがらと、下駄が歩道の敷石でやかましい音をたてている。それを見送った太郎はひとつ頭をふっていまの出来事を記憶からふりはらった。

ともかく真行寺男爵の屋敷に急がねば……。

## トーナメント？（後書き）

中古ビデオのワゴン・セールで見つけた「ガンバス」

西部の銀行強盗二人組みが、恩赦を条件に第一次世界大戦の戦場へ送られ、戦闘機のパイロットになるという娯楽作品。

主演の二人も、特撮も頑張っているのに、演出がどうしようもなく駄目！

もったいない！

## タクシー

太郎は男爵邸への道順を記された案内状を手に、駅前のタクシー乗り場に急いだ。

案内状にはタクシーを利用してくるようにという指示がある。ロタリーには客待ちのタクシーが何台も停車している。順番がきてタクシーの横に立つと、後部のドアがひとりでに開き、太郎はびっくりした。自動ドアなど、はじめてだった。

行き先を告げると、タクシーはすべるように走り出した。

タクシーの運転手は話し好きなのか、大通りに出るとミラーを覗き込んで話しかけてきた。

「お客さん、学生かい？」

いいえ、と太郎が答えると、ふーんと運転手はひとりうなずいた。

「真行寺男爵のお屋敷に何のようなんだい？」

「男爵様に雇われましたので……」

「雇われた？ お前さんみたいな若いのが、どんな仕事があるんだい？ 庭仕事か、なんかかね」

「ぼくは執事なんです」

太郎が答えると、運転手は絶句した。

「執事ってなんだい？ メエメエ啼く、羊じゃないんだろ？」

「召し使いのことですよ」

へええ、と運転手は嘆声をあげた。

「召し使い、ねえ。あんた、そんなのになってどうするつもりなんだい？ その若さで、他人の召し使いなんかになるなんて、あたしにはさっぱり判らないねえ」

それには太郎は答えようがない。人はなぜその職業に就きたいと思うのだろうか？ 太郎は子供のころから父親が世界一の執事であ

ると聞かされてきた。そのうち、じぶんも世界一の執事を目指すのが当然と思って育ったから、執事の仕事が他の人からどう映るかなど考えたことはなかったのである。

タクシーが男爵邸のある山の手へと向かうと、喧騒は遠ざかり森閑とした静けさが支配した。お屋敷がつづき、広々とした敷地には黒々と森が盛り上がっている。住宅街にかかわらず、道路は幅広い。

やがてタクシーは目的の屋敷に止まった。

「ついたよ、お客さん」

礼を言つて太郎が料金を払おうとすると、運転手は手をふって断った。

「真行寺男爵のお屋敷に運ぶお客の料金は、あとで男爵様が払ってくれるからいいんだ。これを預かってくれ」

といって、かれは太郎にレシートを渡した。

それを男爵の会計係に渡せば、あとで運転手に支払ってくれるということだ。よく判らないが、上流階級での暮らしはそのようなことは日常なのだろう。

タクシーから降りた太郎は正門前に立ち尽くした。正門は本物の御影石でできていて、鉄製の柵が目届く限り続いている。正門の鉄門上部には真行寺男爵の家紋が青銅のレリーフで輝いている。

ここで今日からじぶんの召し使い人生がはじまる……。

太郎は息を吸い込んだ。

## タクシー（後書き）

最近、諸星大二郎が「西遊妖猿伝」を再開したらしい。ようやく「西域」篇となつて、悟空は天竺へ向かうのだろう。  
はやく単行本にならないか……  
でも来年くらいまで待たないと無理だろうなあ。

## 真行寺男爵

門柱に近づくと、門番がちいさな小屋からこちらをじろりと睨んできた。年のころ、四十なかばの、痩せた中年男である。門番は空色の制服を身につけ、手にはまっしろな手袋をつけている。制服の襟には金モールの襟飾りがついていて、かっちりとした鍔つきの帽子を目深に被っている。

太郎が近づくと門番は「なにか？」と身構えた。

「只野太郎と申します。真行寺男爵様のお屋敷で、召し使いとして奉公することになりました。これが案内状です」

太郎の差し出した真行寺男爵の家紋が浮き出された便箋に書かれた案内状を見て、門番はうなずいた。

「ああ、あんたのことは聞いているよ。なんでも執事学校を卒業してきたんだそうだな」

「はい」

「あんたが来たら通すように言われている。ここをはいって、まっすぐが男爵様のお屋敷だ。こちらから知らせておくから、そのまま行けば良い」

そう言つと門番は小屋にひっこみ、内部の機械を操作した。

とたんに閉められていた鉄門が重々しい響きを立てたかと思うと、ゆっくりとうち開きに開き始めた。どこかでモーターが動いているらしい。ようやく太郎ひとりが通れるほど開くと、門番は手をふつた。

早く通れ、ということだろう。

太郎はぺこりと頭を下げると、急ぎ足で門を通りすぎた。通りす

きたところでふたたびモーターの音がして、鉄門は元通りに閉まり始める。ふりかえると門番が小屋の中で受話器を手にあて、なにごとか報告している。太郎の到着を報告しているのだらう。

太郎は屋敷への道を歩いていく。道は一面白い玉砂利で敷き詰められていた。ざく、ざく、ざくと歩くたびに足音があたりに響く。なるほど……この玉砂利は防犯の役にも立っているというわけか。太郎はひとり納得していた。

道の左右はほとんど自然林とも思えるほど木々が密生している。

楓、樺、ブナなどさまざまな樹木があたりを暗くしていた。

まっすぐと言われたが、道は左右にくねくねと曲がり、なかなかあたりを見通すことはできない。

ふいに視界がひらけ、太郎の目の前に真行寺男爵の屋敷の全貌が飛び込んできた。

太郎は思わず立ち止まっていた。

まさしく豪邸、ととってもいい。

全体にしろつばい灰色の大理石で出来ていて、建物全体は三階建てになっている。銅板を葺いた屋根には三角窓がならび、屋根裏部屋があることが知れる。三階建てといっても、一階部分の天井がたかく、普通の民家の五階建ては充分ありそうだ。建物は翼をひろげたようなつくりになっていて。両翼にあたる建物の真ん中に柱がたちならんだ玄関があった。

その玄関に、ひとりの男が太郎を待っていた。

ひどく痩せて、背が高い。太郎よりは確実に頭ふたつぶんは高いだろう。年令は多分、三十代後半から四十代前半。のっぺりとした表情のとばしい顔に、ボタンのようなちいさな鼻がちゃんまりとおさまり、うすい眉毛のしたにちいさめの両目がひかっている。髪の毛



をオールバックになでつけ、背筋をのばした男の姿は、そびえたつゴシック建築の印象があつた。

「只野太郎だな？」

いきなり男は口を開いた。

太郎は「はい」と返事した。

男は尊大にうなずき、くるりと背を見せた。

玄関の扉を開くと、大股で歩き出す。太郎があとを追つてくると決め込んでいるようだ。太郎は男のあとについて歩き出した。

男は長い足を急ぎ足にさつさと歩いていく。そのため太郎は追いつくため、かなり早足にならざるをえない。

屋敷のながい廊下に男の足音が木霊した。

かつーん、かつーん、と男の靴音はうつろに響いている。

太郎ははじめて見る真行寺男爵の屋敷内の様子について見とれ、男から離れがちになる。

外観から想像したより、内部は贅を尽くしたつくりになっている。高い天井、吊り下げられたシャンデリア。足もとは複雑な模様の格子細工の材木できていた。すべて本物の材料で築き上げられ、熟練の職人による細工であつた。

「なにをしている？ ぼやぼやするな！」

遅れがちな太郎に、男はいらいらしたように叱声をあげた。太郎は無言で足を速めた。

どのくらい歩いたろうか、ようやく男は立ち止まった。

ひとつの扉の前で、男は一礼するとその向こうに声をかけた。

「だんな様、木戸でございます」

扉の向こうで「うん」という返事が聞こえてきた。老人の、かすれ声だった。

どうやら男は木戸という名前らしい。

木戸は長い腕をあげると扉を押し開いた。

あたたかな空気が扉の向こうから押し寄せてくる。

部屋には暖炉があり、オレンジ色の炎がゆらめいていた。部屋の壁はクリーム色に統一されていて、オレンジ色の絨毯に、白いカーテンと全体に明るめの配色がなされている。窓際にはどっしりとしたテーブルがおかれ、窓ガラスを背にひとりの老人がなにか書き物をしているところだった。老人が座っているのは車椅子だった。どうやら老人は足が悪いようだ。

これがおそらく真行寺男爵、そのひとだろう。肌も髪の毛も、まるで漂泊したように白い。さらに身につけているガウンはあかるい灰色のため、白っぽい印象が全体をしめていた。

男爵はしばらくペンをはしらせていたが、やがて顔を上げた。皺の多い顔をほころばせる。眼鏡を調節すると、太郎の顔を見つめた。

「ああ、君が只野太郎君だね」

さつと太郎は膝まづき、頭を下げた。学校で習った高貴な人への礼である。

うん、うんと老人はうなずいた。

「きみのお父上の五郎君はじつに優秀な執事だった。いまでも憶えているが、きみを見ているとかれを思い出すよ」

男爵は軽く手をあげ、太郎に合図した。立つてよし、ということだ。太郎はゆつくりと立ち上がった。

太郎はかすかに頭を下げた。

召し使いは無用なおしゃべりはしてはならないと教えられている。その教えに忠実にしたがっているのだ。

慣れているのか、老人は太郎が返事をしないのを気にせず話をつづけた。

「すまんが、すこし待ってくれたまえ。なにしろサインしなくてはならん書類が多すぎる。わしは引退した身なのだが、それでもこうしてわしのサインが必要な書類が、毎週山になって届けられるんだよ。まったく、いつになったら楽になるやら……」

ぶつぶつとつぶやきながら男爵はペンを走らせる。静かな室内に、男爵のペンの音だけがかすかに響いていた。

ようやくすべてのサインを終え、男爵は顔を上げ両手を組み合わせ、せて太郎を見つめた。

「さて、ようやく君が来てくれて、わしの屋敷で奉公することになるんだが……誓いのことは承知しているかね？」

太郎は一步前へ進み出た。

「はい、召し使いとしてどんな様にお仕えるため、誓いをたてたいと思います。お許しただけは、でございますが」

「そうか。しかしその誓いはわしではなく、娘の美和子にしてみたい。わしはこの年令だ。しかし美和子は君と同じくらいの年頃　召し使いとしての誓いをするには丁度良いと思わないか？」

太郎はうなずいた。

誓いとは「忠誠の誓い」のことである。

召し使いは奉公にはいった屋敷の主人とそれを交わさなければならぬ。それは主人によつて解消されるまで、召し使いを一生の間拘束する厳正なものだ。誓いを交わした主人に対し、召し使いは忠誠を尽くす。それが召し使いの理想とされているからだ。

男爵は片手を挙げ、木戸を差し招いた。

さつと木戸は長い足を動かしてすばやく男爵の車椅子の背後にまわった。車椅子のもち手を掴み、動かす。

「娘はたぶん、道場にいるはずだ。そうだな、木戸？」

木戸はうなずき、返事をした。

「はい、お嬢さまはそちらにいらっしゃるはずでございます」

よろしい、案内してくれと男爵は命じ、木戸は車椅子を廊下へと押し出した。

ついてこい、というように木戸はかるく頭をふる。太郎はあとを追いかけ、扉を閉めた。男爵の言う、道場とはなんだろう？

## 真行寺男爵（後書き）

「広い宇宙に地球人しか見当たらない50の理由」 スティーヴン・ウェッブ著。

内容はタイトルどおり、なぜ宇宙人が見つからないのか、というものの。

「オッカムの剃刀」の法則によれば、もっとも単純な理由が正解に近いというもの。つまり宇宙に地球人以外の宇宙文明が見当たらないのは、宇宙に存在する知的生命は地球人だけだから、というもの。みなさんはどう考えますか？

## 美和子

ふたたび長い廊下を太郎は歩いた。

木戸は男爵の車椅子を裏口へと押していく。裏口をぬけると、目の前にその道場らしき建物が見えた。洋風の屋敷とは違い、木造の瓦屋根の建物である。

建物には舗装された道がつづいている。気がつくと、建物には段差というのがない。男爵の足が悪いことを考慮して設計されているのだらう。道場の建物に近づいてくると、内部から

「やあーっ」という細い叫び声が聞こえてきた。

ついでどたん、となにかが床を打つ音が響く。扉を開け、中にはいるとひろびろとした板敷きの道場に、数人の男女が白い稽古着と袴を身につけ、正座している。道場にはひとりの少女と、師範代らしき壮年の男性が向かい合っていた。

すらりとした背の高い少女は、色白の頬をほのかに赤らめ、長い髪を後頭部でまとめて背中にとらしている。きりつとした美貌の、真剣な眼差しがまぶしい。

はっ、と男性がかけ声をかけ、少女を誘う。

少女は身構え、男性に立ち向かった。

さつとふたりの手が組み合う。男性が少女の勢いを受け流し、足もとを崩す。倒れこむと思った瞬間、少女はじぶんからくるりと宙を回転して男性の肩をつかみ、投げ飛ばした。

だん、と男性は手を床に叩きつけ、受け身をとった。

「お見事！」

師範代は苦笑いをうかべすぐ立ち上がり、声をかけた。頭をふり、言葉を続けた。

「お嬢さまは上達されました。このわたしが、三本に一本はとられるとは……」

ふっ、と息を吸い込み、少女は定位置に戻ると力をぬいた。

「ご指導ありがとうございます」

さつと少女は正座し、深々と頭を下げた。師範代も正座し、答礼を返した。

そのとき少女の目が入ってきた真行寺男爵の姿を捉えた。

「お父さま、いらしてたのを気がつかなかったわ！」

額に垂れかけた数本の髪の毛をかきあげ、少女はにっこりとほほ笑んだ。興奮が残っているのか、頬の赤みはまだそのままだ。

師範代は道場でひかえている男女に声をかけた。

「今日はこれまで！」

男女はうなずき、立ち上がるとぞろぞろと道場を出て行った。師範代もそれに続く。男爵はかれらにいちいち挨拶をしていた。

「あいかわらず稽古に夢中なようだな」

男爵の言葉に少女は肩をすくめ、舌を出した。男爵は太郎に声をかけた。

「これが、わしの娘で美和子という。この娘はどういうわけか武道が好きでね、それでわたしが彼女のためにこの道場を建てたというわけだよ。美和子、かれが今度新しく奉公にあがった只野太郎という召し使いだ」

美和子の瞳はまっすぐ太郎を向いた。太郎は初めて美和子という娘の顔を見ることになった。

卵形の顔に、はっとするほど大きな瞳が輝いている。彼女の瞳はやや薄い茶色をしていて、髪の毛もまた同じような亜麻色をしていた。染めたのではなく、もともとそのような色をしているらしい。

肌の白さが髪の毛の色と調和している。背後からのひかりに後れ毛が金色のひかりをはなっていた。

彼女は立ち上がり、太郎のもとに近づいた。

すらりとした、背の高い女の子だ。向かい合つと、太郎より頭半分は高い。長い手足をまるで男の子のようにふつて歩くのが印象的である。

「よろしく、太郎さん　と呼ばせてもらつわね！　あたし美和子です。よければ、お友達になつてね！」

そう言うといきなりしろい腕をのばし、手を差し出した。

太郎は戸惑いを隠せず、木戸を見上げた。木戸は眉をあげて見せただけだ。

おずおずと太郎は彼女の手を握る。美和子は太郎の手を握り返し、につこりとほほ笑んだ。

ふたりの手がはなれた。

太郎は美和子の手をもつと握りたい衝動を押さえてその手を離れた。

男爵が口を開いた。

「そこでだ、本来はわしがこの太郎と『忠誠の誓い』をせねばならんのだが、なにしろこの年だ。それはお前と交わすのがいいと思つて連れてきたのだよ」

美和子の目が見開かれた。

「忠誠の誓い……それをあたしと？」

「そうだ。やつてくれるか？」

ゆつくりと美和子は太郎に向き直りうなずいた。じわじわと口もとが笑いの形をつくつた。勢い良く美和子はうなずいた。

「ええ、よろしくてよ！」

そう言うつと、わざとらしくつんと顎をあげて見せた。



太郎は彼女の前に進み出て膝まづいた。執事学校で習い憶えた「忠誠の誓い」の文句を一句一語もたがえず口にする。

「只野太郎でございます。どうかわたしをお嬢さまのしもべとしてご下命くださいますよう伏してお願ひいたしましたします。召し使いとなつては、一生忠実にお仕えすることを誓います！」

くすり、と美和子は笑いをこらえている。手をのばし、頭を垂れている太郎のひたいにちよん、と触れるとすぐに引つ込めた。

「これで『忠誠の誓い』は成立した！ 只野太郎は正式にわが真行寺家の召し使いとして奉公することを認める！」

男爵が宣言し、太郎と美和子の「忠誠の誓い」は完了した。これにより、太郎はこの日から屋敷に奉公することになったのである。

太郎は召し使いになったのだ。

## アルバム

木戸は太郎を連れて屋敷の階段を登っていった。階段は長々と連なり、いくつもの踊り場を通過して木戸が太郎を連れて行ったのは屋根裏部屋だった。

その途中、木戸は太郎に念を押すように話しかけた。

「美和子お嬢さまはあのような性格で、だれにでも身分の垣根を感じさせることのない態度をおとりになれる。が、そのせいで勘違いする不心得ものがあることはたしかだ。お前はそのようなことは万が一にもないだろうが、お嬢さまが勝手にお前を友達よばわりすることがあっても、お前はそれに甘えることなく召し使いとしての本分を忘れることのないよう、気をつけることだな」

木戸の言葉に太郎は「わかっています」と答えた。その答えで満足したのか、木戸はうなずいただけだった。

やがて木戸は屋根裏部屋の廊下に太郎を連れて行き、そのうちのひとつの扉の前に案内した。

「ここが今日からお前が寝泊りすることになる召し使い部屋だ。一応、個室になっている。前にいた召し使いがここを辞めてからはそのままになっているから、掃除をして使うように。仕事は明日からやってもらう。おれはこの屋敷の筆頭執事だから、なんでも相談していいぞ」

それだけ一気にまくしたてると、木戸はくるりと背を向け階段を降りていった。

部屋の鍵を受け取った太郎は、ドアに差し込んで開いた。

きい……と蝶番が軋み音をたて、ドアが開く。あとで油を差しておこうと太郎はこころに書き留めた。

木戸の言ったとおり、部屋はほこりまみれで掃除の必要があった。太郎は窓のよい戸を開け、内部に外の明かりをみちびいた。さつと差し込んだ光にほこりが舞い上がり、きらきらとしろっぽく踊っている。

その日の午後いっぱいを使って太郎は部屋の掃除をした。ほこりが舞い上がるので古新聞をこまかくちぎり、水をふくませて床にまき箒ではなく、やっと掃き掃除が終わると、太郎は雑巾をしばらく、拭き掃除を始めた。ようやくすべてが終わったのは夕方になってからだった。

部屋には簡素であるがベッドと、ちいさな書き物机、身の回りのものを片付けるための箒筥が付属している。太郎は机にじぶんの執事学校時代に使っていた教科書をならべた。かれの所有している書籍はそれくらいのもだった。

ひとつひとつ教科書をならべていくと、太郎は執事学校時代のことが思い出されていく。クラスメートの顔が浮かび、洋子の順番にきたときあつ、と小さく叫んだ。

「そうだ、手紙を書かなきゃ……」

母親に無事到着したことを報告することももちろんであるが、洋子が出奔したこともつけくわえなくてはならない。小姓村には電話がないのである。とりあえず電報をうったが、詳しい事情は手紙でなくては伝わらない心配がある。

持ち物から便箋と封筒をさがす。

あ……。

太郎はこつん、とじぶんの頭を叩いた。

筆記具がない！

入れ忘れたのだ。

なんとという失態……。

そうだ、前の部屋の主がもしかしたら書き物机に残してあったかもしれない。

太郎は机の引き出しを開けて探し始めた。

引き出しには雑多な小物が詰め込まれている。ほとんど役に立たないものばかりだったが、ちいさなカメラがその中であつたので太郎は好奇心で手にとってみた。巻き上げレバーを操作し、シャッターを切ると軽快な音と共に動作した。どうやら故障はしていないようだ。レンズにも曇りはなく、完全に使用可能だ。いつか使うこともあるうかと、太郎はもとにもどした。

筆記具……

筆記具……

引き出しの中をかき回していると、一冊のちいさなアルバムを見つけた。手の平におさまるくらいの小ささだ。開くと、数葉の写真が貼られている。

その中の一枚を目にし、太郎の心臓がどきつと高鳴った。

これは……。

写真にはひとりの青年と女性がならんで立っている。青年の年令ははたちくらいか、女性はすこし年上に見える。そのふたりにはさまれ五、六才くらいの男の子がまっすぐ唇をひきしめカメラのレン

ズを見つめている。家族写真のようだが、写っている青年の顔が問題だった。

太郎に似ている。

というより、太郎が数年くらい年をとるとこのような顔になるであらう顔かたちであった。

太郎の脳裏に、執事学校での授業内容が浮かぶ。授業は観相学であつた。

「観相学は執事にとって必要な技術だ。屋敷にやってきた客が主人の血縁か、血縁とすればどのくらい主人と近いか、それを判断せねば対応をあやまる！」

教師の言葉に生徒たちは水を打ったように静まり返っていた。観相学の教師は、四角い顎をした五十代なかばの中年であつた。かれは黒板にさらさらと人間の顔の輪郭を描いていった。

「目と目の間隔、口と鼻の距離、意外と重要なのが耳の形だ。耳の形はかなり血縁関係を推測する手がかりとなるだろう……」

となりの女性は太郎の知らない顔だった。いちおう笑顔を見せているが、どこことなく寂しげな表情が印象的だ。男の子の顔は女性に似ているから、たぶん息子だろう。

写真の背景に写っているのは、この真行寺家の庭である。きちんと刈り込まれた芝生が美しい。

青年の身につけているのは執事の標準的な衣装だ。

もしかしたら、この青年が太郎の父親の只野五郎なのかもしれない……。太郎は観相学の授業内容を思い出し、青年の顔を仔細に観察した。手鏡を取り出し、自分の顔を映してみる。いよいよ似ている……。

しかしとなりの女性と男の子はなんだろう？ 太郎の母親でないことは確かである。もしかして見てはいけないものを目にしたのではないのか？

筆頭執事の木戸は、この部屋には以前住んでいた者がいると言っていた。それが太郎の父親である只野五郎ということは考えられな  
いか？ 木戸はそのことを承知で、わざと太郎をこの部屋に連れてきたのかもしれない。

アルバムを戻そうとした太郎は、引き出しの奥に一枚、写真を見つけた。

取り出すと、裏に

太郎 三ヶ月

とあるのに気づいた。

どきん、と太郎の胸が高鳴った。

いそいでひっくり返すと、椅子の上に揺りかごが置かれ、ひとりの幼児がすやすやと寝入っている写真である。

ぼくだ……。

これは生後三ヶ月の、赤ん坊の太郎である。

撮影されたのは室内のようである。やわらかなガラス戸越しのひ

かりが、目を閉じた幼児の姿を浮かび上がらせている。  
その時太郎は、幼児の背後に映りこんでいる壁のわずかなひび割れに注目した。

もしかすると……。

ゆっくりと目の前の壁に近づいた。写真に写りこんでいるかすかな窓枠を手がかりに、同じ位置を目で確かめる。  
間違いない。

まったく同じ位置に、同じひび割れがある。  
母親の言葉が思い返される。

お前は真行寺家のお屋敷で生まれたのよ。

そうだ、ぼくはこの部屋で生まれたんだ！  
静かな感動が押し寄せる。

じぶんの生まれた部屋を見回し、太郎はひとりうなずいていた。

そうだ、やっぱりぼくは真行寺家の召し使いになるべく、運命付けられていたのかもしれない！

## アルバム（後書き）

ps3を買うか、xboxにするか、悩みどころ。  
どっちにするか今、考え中です。  
でも結局ゲームする暇ってないみたい……



## コック見習い

こつこつ……！

ドアがノックされ太郎は反射的に手にしたアルバムをもとに戻した。

「どうぞ」

答えると、ドアがかすかに開き、そのすきまからひとりの少年が顔をのぞかせた。

白衣と、頭にコック帽を被っている。年のころは太郎とおなじくらいか、ひとつふたつ年下かもしれない。全体にぶっくりと太っている。少年は太郎と目が合うと、にっと笑った。

「あんだ、あたらしく入ってきた執事だろう？」

太郎がそうですと答えると、少年はひとりうなずいた。

「やっぱりな。あんだ、夕食はどうなっている？ もう、食ったのか」

太郎が首をふるると、少年はちえつと舌打ちをした。

「しょうがねえなあ……みんな忘れてやがんだよ。ほら、これが夕食だ。持ってきてやったぞ」

少年は扉を開くと、手に盆をのせて部屋に入ってきた。盆には布巾が乗せられ、すこし盛り上がっている。部屋に入り込んだ少年は布巾をとって見せた。

そこにはほかほかと湯気を立てているシチューと、焼きたてのパン、つけあわせの温めた野菜などがあった。

「腹減ってるんだろう？ 食えよ」

「有難う、ぼくは只野太郎というんだ」

太郎が自己紹介すると、少年ははじめて気がついたというような顔になった。

「ああ、そうか。おれ、田端幸司。たはしこうじコック見習いでね。上の連中の話で、あたらしい執事が来たってことは聞いていたけど、だれも夕食のことを言い出さなかったんで、勝手だけどまかないで持ってきたんだ」

「それはどうも……でも量が多すぎないか。どう見ても、ふたりぶんはあるよ」

へへへ……と、幸司は笑った。

「そりやそうさ。実を言くと、おれも飯がまだなんだ。おれみたいな見習いは、飯なんかまともに食えることが少ないからな。こんなチャンスはめったにないから、おれもご相伴にあずかるうと思つてね。余分に作ってきたんだ。あんたがよければ、ここで一緒に食おうぜ」

別に断る理由もなく、太郎は部屋にあつたちいさなテーブルと椅子をふたつ用意して幸司と名乗った少年と向かい合つて食事をとることにした。

前掛けを外し、被っていた帽子をとつてかたわらに置くと、幸司はテーブルに料理を手早く載せ、パンをちぎつてシチューにひたし食べはじめた。太郎もそれを真似して口にする。幸司が心配そうに見つめているのに気づき、うなずいた。

「うまい！ きみ、料理の腕は確かだな」

誉められ、幸司はへへっと笑った。しかし嬉しそうである。

「そうかい？ おれ、いつか独立してレストランを経営するのが夢でね。本当は勝手に料理なんかさせてもらえないんだけど、先輩の調理をこっそり見たり、食べ残りを舐めたりして味を研究しているんだ」

ふうん、と太郎はあいづちをうちながらもくもくと食べ続ける。ひとにはいろいろな目標があるんだ、と思った。最高の執事になるのがとりあえずの太郎の目標である。

食事の間、太郎は幸司により真行寺家でのいろいろな話を聞かされることになった。たいていは他愛のない、だれとだれが仲が良いとか、だれかはだれかと喧嘩しているとかの噂話だったが、木戸の名前が出てきて太郎は耳を澄ませた。

「あの木戸って筆頭執事の野郎、おれたち下働き連中なんか鼻にも引つ掛けねえ、って態度でよう……ときどきむかつ腹たつときがあるんだぜ」

そこでぺろりと舌を出した。

「いけねえ、あんたも執事だっけな」

太郎はにっこりと笑って首をふった。

「大丈夫、だれにも言わないから」

そうか、と幸司は肩をすくめた。身を乗り出し、あたりに目を配るとささやき声になった。

「お前も気をつけんだぜ。あの木戸ってやつあ、どっか変だ」

「変って、なにが？」

言われて幸司は口を引き結び、考え込む表情になった。

「わかんねえ……なんかこそそしやがってよう……時々こっそり屋敷を抜け出して誰かと会ってるみたいなんだが、なにを企んでいるのか。みんな噂してる。木戸はこの屋敷を辞めるつもりなんじゃないかって」

「辞職するっていうのかい？」 忠誠の誓い」を裏切って？」

太郎には信じられないことだった。召し使いが主人のゆるしなく、勝手に辞職することなど

「執事協約」に反している。この「執事協約」は、太郎たち召し使いをを目指す生徒が最初にたたきこまれる、いわば執事の法律のようなものである。

半分ほど食べ進んだとき、階下で「幸司、幸司！」と、コック見習いの名前が連呼されているのが聞こえてくる。

いけねえ！ と、幸司は立ち上がった。

「先輩が探してらあ！ 悪いが、おれはこれで失礼するぜ。あんたと話せてよかったよ」

そそくさと立ち上がったかれはあわてて前掛けと帽子を手にとり、あたふたと廊下へと出て行った。どたばたと騒がしい音をたて、階段を降りていく。

かれが出て行って、太郎はほっとため息をついた。とたんに部屋はしん、と静けさを取り戻す。気づくと窓の外は暗くなっていた。

食べ残しを始末すると、太郎は部屋の明かりをつけた。筆記具はすでに見つけてあった。

机にむかい、母親への手紙をしたためる。

真行寺家に正式に召し使いとして奉公することになったこと、そして洋子のこと。大京市の印象など思いつく限りのことを書き連ねる。しかしこの部屋で見つけた只野五郎らしき写真については書くことをひかえた。なにも書くことがなくなり、太郎はペンをおいた。いくらでも母親には報せることがありそうで、しかし実際には便箋

に二枚ほど書いただけでもう文面のたねはつきた。封筒にいれ、切手を貼って宛名を記した。

太郎はベッドを整え、着替えをすると身を横たえた。

明日は手紙を投函しなきゃ……そんなことを考え目を閉じると、あっという間に眠りについた。

夢の中で、太郎は洋子の顔を見ていた。洋子はなぜか寂しげな表情で太郎を見つめている。

## コック見習い（後書き）

最近、タイムマシンの理論に興味あり。

タイム・トラベルものなんか、いつか書いて見たいなあと考えています。

## 挨拶

そして翌朝。

足音が近づき、ドアの前に立ち止まる気配がして太郎は立ち上がった。

ノックの音がして、太郎が「どうぞ」と答えると、ドアが開き木戸が姿を現した。

「起きていたか？ ふむ、結構」

太郎は木戸にむかって「お早うございます」と挨拶して一礼する。例によって、一分の隙もない召し使いの服装をしている。

夜明け前、太郎は目を覚まして洗顔をすませ、着替えをして木戸を待ち受けていたのである。部屋の窓にはようやく朝の日差しが差し込みはじめ、窓ガラスの棧をしらじらと染めている。

「これから屋敷内の召し使いたちと顔合わせをする。ついてこい」  
はい、と返事をする。太郎は立ち上がった。木戸はさつと背中を見せ歩き出す。廊下を歩き、階段をおりていき裏庭へ回るとそのまま厨房へと案内していった。

真行寺家の厨房は、それだけでレストランが開けそうな大規模なものであった。巨大な業務用の冷蔵庫に、いくつものバーナーがならんだレンジ。流し台は三列もあり、複数のコックが同時に調理ができるようになっていた。そこに屋敷内の召し使いたちが木戸の命令で集合していた。

木戸と太郎が厨房に入っていくと、ずらりと勢ぞろいした召し使いたちは好奇の表情で太郎を見た。

こんなに沢山の人間が働いていたのか……あらためて太郎は真行寺家という規模のおおきさにうたれていた。

「今日からこの屋敷で働くこととなった召し使い見習いの只野太郎だ！」

木戸が宣言するように口を開くと、全員好意的な微笑をうかべ、ぱちぱちと拍手をして太郎を歓迎した。拍手をしているなかに、昨日夕食を持ってきたくれた幸司の顔もあつた。幸司は太郎の顔を見て、にやりと笑った。

木戸にうながされ、太郎は挨拶をした。

「よろしくお願いします。なにも判らないので、みなさんのご指導をたまわりたく思います」

型どおりの挨拶に、みなうなずいている。たぶん、新しく入ってきた召し使いたちはみな同じことを口にするんだろうな、と太郎は考えていた。



## 挨拶（後書き）

テレビで「MASK」を観る。ジム・キャリーの出世作。しかしジム・キャリーはこういうアクの強い役になると生き生きするな。日本では、竹中直人みたいなものか？

## 老召し使い

挨拶がおわって太郎の初仕事となった。といっても、本格的な召し使いの仕事はあたえられず、庭の草むしりとかトイレの掃除などの雑用である。しかし太郎はそれらの雑用を誠心誠意、かたづけにいった。執事学校でそれらの雑用は授業の一環としてやっていた。太郎にとっては、どんな仕事も執事になるための必要な過程であった。

一日目、二日目とすぎていつて、太郎は屋敷の召し使いの仕事といつてもいろいろあるんだと感心した。

召し使い仲間にはひとり、高齢の老人がいた。年令は七十をこしているだろうか。腰は曲がり、歯はすっかり抜け落ちて入れ歯になっているが、それでも元気な老人で名前を谷村といった。谷村老人の仕事とは、屋敷内の窓の開け閉めそれだけである。

窓の開け閉めといつても、真行寺家の部屋数は百をこし、それらの部屋の窓を夜明けとともにひとつひとつ開けていくのだ。夜明けから昼過ぎにかけ、ようやく屋敷中の窓が開け放たれる。

そして昼からは開けた窓を閉めていく。すべての窓が閉め終わつたころには夕暮れになっている。これを週に一日続けているのだ。

なぜこんなことをするかというと、窓を締め切りだと空気がこもり、家具や壁にわるい影響をあたえる。一周間に一回は窓を開け、外の空気をいれることが建物を長持ちさせる秘訣なのだが、なにしろ真行寺家の屋敷はひろく、部屋もおおい。窓の開け閉めだけで、専門の召し使いを必要とするのだ。

「わしは十八の年からこの仕事を続けてきたんだよ」

そう言つて谷村老人はひやつ、ひやつと空気の漏れるような笑い声をあげた。

「もちろん、はじめたころはこと違う屋敷だったがね。この真行寺のお屋敷が建てられて、窓の開け閉め係が必要となつて呼ばれたのさ。ここのだんな様とは若いころからの親友で、それでこの仕事を世話してもらつたのさ。引退？ うんにゃ、わしは死ぬまでこの仕事をやるつもりだ。子供や孫はそろそろ隠居しろとうるさいが、わしがやらんで誰がやるね？」

太郎は昼休みに庭の芝生で老人の世間話の相手になつていた。厨房からだされた昼のまかないを口にしながら、ふたりは話を続けている。喋るのは老人がほとんどで、太郎は相槌をうつだけだったが、

昼休みの時間が終わり、太郎は仕事に戻ろうと立ち上がった。老人は太郎を見上げ、声をかけた。

「ありがとうよ、わしのような年寄りの相手をしてくれて」

「いえ、ぼくのほうこそ楽しかったです」

一礼して太郎はその場を立ち去った。

仕事はまだまだ残っている。

## 老召し使い（後書き）

椎名誠の「アド・バード」を読んでいます。

異様な世界観と言語感覚は圧倒的。

ばくもいつかこんな小説を書いてみたいですなあ……

## 出会い

太郎のもとに二通の手紙が届いた。

一通は母親からで、もう一通は山田氏からだった。

山田氏は、娘の洋子の家出に大変驚いたという書き出しから始まり、大京市の興信所に彼女の搜索を頼んだと文面にあった。警察に失踪人届けを出すことは興信所の結果を見て考えるということだった。

興信所……つまり探偵を雇うということか。

洋子はメイドになりたいと言っていたから、メイドを雇うような屋敷を探せばわりと簡単に行方が判るのではないかと太郎は思った。もし首尾よく、洋子がメイドになればだが。しかし彼女のことで、しゃにむにメイドを目指すのではないか。

母親からは健康に気をつけるようにとの簡単な文面で、こちらは変わらないから心配しないようにとの結びであつた。

二通の手紙を引き出しにしまい、太郎はベッドに仰向けになった。頭の下に腕をくみ、天井を見上げる。物思いにふけるかれの表情にはなにも浮かんでいない。しかし太郎の心中はさまざまな思いが交錯していた。

「すまん。うちでは新たにメイドを雇う計画はないんだよ。ほかの屋敷をあたってみなさい」

「はい、失礼いたしました」

ぺこりと頭を下げた洋子は、がっかりした内心を現さないように、  
しいて元気よく返事をして引き下がった。

ばたりと彼女の背後でドアが閉められる。

これで何件お屋敷をまわっただろうか。どの屋敷でもメイドはい  
らないと断られることが続いていた。もしかしたら新しいメイドを  
求めている屋敷があったのかもしれないが、紹介状ひとつ持たない  
飛び込みの洋子にやすやすとメイドの職をあたえる屋敷はなかつた  
のである。

太郎と別れた洋子は、あてどなく大京市をさまよっていた。

絶対メイドになる！

そう啖呵を切ったはいいが、彼女を雇ってくれそうなお屋敷のあ  
てはない。ともかく大きなお屋敷がありそうな山の手を目指してバ  
スや、電車を乗り継いで移動する。

両手に提げたバッグが重い。こんなことなら、もっと手軽な荷物  
にするんだった……。

手のひらに食い込む荷物の重みに、彼女は泣き出しそうになつて  
いた。

山の手は坂が多い。なだらかな坂でも、ずっと上り続けていくと  
さすがにこたえた。

とうとう洋子は道端にへたりこんでしまった。

ふう。

ため息が出た。

やっぱり無謀だったのかもしれない……。

彼女の目に涙がたまっていく。

ぼんやりとしていた彼女の目の前に、一台の車が停車した。

白い、高級車である。車体には金色のラインが引かれ、ボンネットにはおなじく金色のマスコットが燦然と輝いている。

すると後部座席のガラスが下がって、ひとりの青年が面白そうな表情を浮かべ洋子を見つめていた。

「やあ、具合でも悪いのかい？」

ほっとしてよ……言いかけた洋子は言葉を飲み込んだ。

彼女は話しかけた青年の出で立ちにぽかんとなっていた。

金色に染め抜いたリーゼント、真っ赤なガクラン。とても目の前の高級車に乗り込むような服装ではない。

「どうしたんだい？ 疲れているみたいだね」

はい……と、洋子はうなずいていた。

どういうものか、目の前の青年の態度には洋子の警戒心を解いてしまう、奇妙なほどの落ち着きを感じる。

がちゃ、と青年はドアを開けた。

くいつ、と首をふって車内にいざなう。

まるでそのことが当然のように、洋子は青年の車に乗り込んだ。

車内は広い。

後席は数人が向かい合わせに座れるようになっている。洋子は青年の目の前の座席に座った。

青年は座席のボタンを押した。インタホンになっているらしく、マイクに向けて「やってくれ」と話しかけると運転手はうなずいて

高級車を発車させた。

「事情を聞かせてくれないか」

青年は尋ねた。洋子はうなずき、いままでのことを説明した。ふんふんと青年は洋子の話しに相槌をうつ。青年の誠実そうな様子に、洋子はつい熱が入ってしまった。すっかり話し終わると、洋子は自分のことはもちろん、故郷の執事学校のことや、大京市に一緒に来た太郎のことまでなにもかにも打ち明けてしまっていた。

「なるほど……面白い！　そうか、執事学校ね……。きみもそこでメイドの修行をしたんだね？」

「はい、あたし、どこのお屋敷に奉公しても、立派なメイドになれるつもりなんです」

ふーん、と青年はちよつと考え込んだ。

そしてふたたび口を開き、意外なことを言い出した。

「よければ、ぼくの屋敷に来てもらえないか？　メイドの空きがあるんだ」



## 初仕事

「今日からお前を美和子お嬢さま付きの召し使いとする。しっかりはげむように」

ことさら厳肅な表情をつくり、木戸は太郎を自分の個室に呼びつけ宣言した。木戸の目の前に立つ太郎の表情は変わらない。木戸には屋敷内で贅沢な個室をあたえられていた。高い天井に、おおきな窓にはどっしりとしたカーテンが垂れ下がり、見上げるほど高い書架にはぎっしりと書物が並んでいる。

木戸はうなずいた。

「これはお嬢さまが望まれたことでもある。お嬢さまはお前が年令も近いこともあり、親しみを覚えられているようだ」

太郎はそれを聞いても微動だにしなかった。すぐれた召し使いはその心中を表情に出すことはしない。太郎はその教えを忠実にまもっている。

「だが、あくまで召し使いとしてだぞ。お前はお嬢さまがどのように親しげな態度に出られても、じぶんの立場を忘れることのないように言っておく」

はい、と太郎は答えかるく頭を下げた。

ふん、と木戸は鼻を鳴らして立ち上がった。窓に近寄り、外の景色に見入る。背中を見せたままつぶやく。

「行ってよし。お嬢さまはじぶんの部屋にいらっしゃるだろう。挨拶してこい」

もう一度はい、と返事して太郎は木戸の部屋を退出した。ドアを後ろ手に閉めるとほっとため息をつく。そっと手を開き、見入った。

手の平にはびっしりと汗が浮いていた。

いけない……こんなことでは召し使い失格だ！  
一息吸い込み、深呼吸すると太郎は歩き出した。

## 初仕事（後書き）

この間テレビで「トリプル・エックス2」というのを観た。アクション物だけど、主演のアイス・キューブってのが髭を生やした出川哲郎に見えてしかたなかった！

## 美和子の部屋で

ドアをノックすると美和子の「お入りなさい」という答えがあった。太郎はそつとドアを押し開いた。

ひろびろした室内に、美和子が椅子に腰かけ手元に本をひろげている。目を上げ、太郎と目が合うとにつこりとほほ笑んだ。

「あら、太郎さん」

「木戸からばくがお嬢さま付きの召し使いとしておおせつかったと言われましたので、ご挨拶にまいりました。一生懸命おつかえいたしますので、なんでも命じてくださいませ」

くすり、と美和子は笑い、首をふった。今日の彼女は最初に会ったときの稽古着ではなく、娘らしく袖にたつぷりとふくらみをもたせたワンピースを身につけている。髪の毛は自然に背中にたらし、身動きをするとやわらかにゆれた。

「まあ、おおげさ！ あたし、あなたを召し使いなんか思ったことはありません。あたし、あなたとお友達になりたいのに。それともあたしとお友達になるのがお厭なの？」

いたずらっぽく彼女は太郎を見つめた。

太郎の顔を見て、美和子は肩をすくめた。

「ごめんなさいね。からかったりして。あたしの悪い癖だわ。つい、あなたの真面目な顔を見ると、余計なことを言いたくなってしまうの。許してね」

「そんなことございません」

太郎はようやく生真面目に答えた。ともかく、このお嬢さまは型破りである。太郎の習った執事の授業には、彼女のようなお嬢さまにつかえる秘訣はなかった。

ほつとため息をつく、美和子は手にした本をかたわらにおいた。「ところで、明日からあたしは新学期をむかえるの。聞いてらしたかしら？」

「いえ、初耳です」

「通学には召し使いが同道することになっていて、いままで木戸がついてきたんだけど、今度からは太郎さんがその役になるわ。覚えておいてね」

「ぼくが……いえ、わたしがですか？」

思わずぽかんと口を開けそうになるのをおさえ、太郎は問いかけた。美和子はうなずいた。

「そうよ。あたしの通う大京女学院では、生徒は召し使いの同道を認められているのよ。もちろん、全員ではないけど。だから授業中、あなたがたは召し使い専用の控え室で待つことになるけど」

「なぜ、そんな決まりが……」

言いかけて太郎は口をつぐんだ。召し使いの主人にたいする質問としては不適切だと気づいたからだ。しかし美和子は気にしていないようだった。

「さあ……もしかしたら、あたしたち生徒たちを監視するためかも」

そう言うとうふつ、と笑った。

「まあいいわ。明日から、あなたと一緒に通学できるから楽しみ！ よろしくね」

はい……と太郎は生返事で答えた。

とにかく驚くことばかりである。

## 家族の晩餐

太郎が美和子付きの召し使いとなったことの結果か、その日から太郎は家族の晩餐に相伴することになった。

家族といっても主人の真行寺男爵と、美和子だけが長いテーブルの両端につき、その間を数人の召し使いたちが給仕につくという形式である。

晩餐をとりしきるのは木戸であった。

木戸はダイナー・ルームのドア近くに陣取り、召し使いたちがなにか失敗をしでかさないか、鋭い目であたりに気を配っている。

テーブルの端で食器を前に、ナイフとフォークを持つ美和子はなんだかつまらなそうであった。出される料理はきれいに食べたが、食事中会話はほとんどなかった。なにしろ男爵と美和子の距離があまりすぎる。気軽な会話をするには、遠すぎるのだ。それに家族が父親と娘ふたりきりでは会話がはずまないのも無理はなかった。

太郎はダイナー・ルームと厨房をいたりきたりする、料理を運ぶ係りになった。

デザートを運ぶ段になって、男爵は思い出したというように太郎に話しかけた。

「太郎君、そういえば明日は美和子と始業式に出席してくれるんだっただな？」

太郎はかすかにうなずき、答えた。

「はい、わたしは美和子様付きの召し使いでございますのでお供い

たします」

ふむふむ、と男爵はうなずいた。

「わしはこういう状態で動けんからな、よろしく頼むよ！」

そう言つと男爵は車椅子の膝をたたいた。テーブルの向こうで、美和子が顔をあげた。

なにか言いかけたが、結局口をつぐんだままもくもくとデザートをたிரげる。

やがて食事は終わり「ごちそうさま」と父娘はおたがい言い合つて自室にひきとつた。

「このひろいお屋敷に男爵様と美和子お嬢さまふたりきりつてんだから、しずむよなあ……」

厨房で太郎はまかない料理を出され、それを幸司と一緒に食べることになった。幸司はぼつりとつぶやき、首をふつた。

「ほかのご家族はいないのかい？」

太郎がたずねると、幸司はうん、とうなずいた。

「そうなんだ。男爵の奥方……つまり美和子様のお母様……は、美和子様を産んですぐ亡くなられて、それ以来男爵様はひとりぐらしを続けている。男爵様の兄弟、親戚もないから、この屋敷はずつとおふたりしかないってことさ」

そうつぶやくと幸司はにやつ、と笑つた。

「だから美和様がご結婚なされて、お子さんを沢山産まれれば、この屋敷も賑やかになるんだけどね」

そうだね……と、太郎は相槌をうつた。

その夜、太郎はなかなか寝付かれないでいた。幸司の言葉が頭か



ら振り払えないでいたのである。

美和子の結婚。

思っても見ないことだった。もちろん、彼女が結婚して悪いわけがない。しかしなぜ、こんなに気になるのか。はっ、と太郎は暗闇のなかで目を見開いた。

ぼくはお嬢さまに。

それ以上考えることすら苦痛だった。

召し使いは主人にたいし、尊敬以外の感情をいだいてはならない……！たとえば恋愛感情などだ。尊敬を交えた愛情は奨励されている。しかし恋愛感情はご法度であった。それは執事学校に入学してからくどいほど教え込まれていることだ。だから太郎も当然のように美和子にたいして尊敬以外の感情を持つてはいないと思っていたのだが……。

ぼくは美和子お嬢さまを恋してなんかいない！

太郎は暗闇の中、その言葉を呪文のように繰り返していた。

## 通学の日

玄関前には美和子の出発を見届けるため、召し使い一同がずらりと勢ぞろいしている。太郎はその列の最後尾にひかえていた。召し使いたちの前に彼女の通学用である高級車がしずかにエンジンをアイドリングさせ、主人を待っていた。高級車の側には運転手が控えていた。

玄関のドアが開き、美和子が木戸と、木戸が押す車椅子に乗った真行寺男爵をしたがえ姿をあらわした。美和子は今朝、学院の制服に身をつつんでいた。制服は伝統的なセーラー服で、丈の長いスカートはすらりとした美和子の足によく似合っていた。

「わたくしが運転手の羽佐間でございます。本日は安全第一でお嬢さまをお運びいたしますので、よろしくお願いいたします」

しかめつらしく挨拶した運転手は、あの門番だった。羽佐間となつたかれは、運転手の制服に身をつつみ、緊張した様子で車の後部座席のドアを開いて待っていた。美和子はおうようにつなずき、太郎を見た。

「それじゃ太郎さん、一緒に……」

はい、と返事をして太郎は一步前へ進み出て美和子の背後にしたがう。

朝の光の中、太郎と美和子は玄関前に駐車した真行寺家専用の自家用車に乗り込んだ。

運転手の羽佐間はふたりが乗り込むとドアを閉め、運転席に乗り込んだ。

「よろしくね、羽佐間さん」

美和子が声をかけると、羽佐間はハンドルを握りしめた。はつ、とかけ声をかけるように答えるとアクセルを踏み込む。ゆっくりと車は走り出した。

「いつてらっしゃいませ！」

ひかえていた召し使いたちが声をそろえて美和子の出発を見送った。車椅子の男爵はにこにこ笑顔を見せている。

開いた真行寺家の正門をあとにすると、車は住宅街へと進んでいく。暫く車が進むと、美和子はほつと息を吐いて口を開いた。

「本当は車での通学なんて、あまり好きじゃないのよ……」

いきなり美和子が太郎の顔をまともに見つめて話しかけてきたので、太郎は彼女の顔を見つめ返した。美和子は肩をすくめた。

「わたしも、ほかの生徒とおなじように電車で通学してみたいの。でも、お父さまはなにかあったら大変だからって、お許しにならないの。太郎さん、どう思う？」

これは質問されているのだな、と太郎の頭は回転した。こういう場合、無言でいるのは主人にたいし失礼であると判断し、太郎は口を開いた。

「だんな様にとって、美和子お嬢さまはたったひとりの大事なかたですからやむをえないのではないのでしょうか？」

美和子はあてがはずれた、というような表情になった。

「つまらない！ 太郎さんも、木戸とおなじようなことを言うのね！」

その言葉を耳にして、太郎は内心胸をなでおろした。木戸と同じ

ような内容ということは、召し使いとして正解を口にしたということである。当たり前障りのない答え、というのが、召し使いとしては理想的な受け答えなのだ。

気が楽になった太郎は、ふと視線を車窓にうつした。

車は高級住宅街から、一般の市民のための住宅街へ移っていた。道幅はせまくなり、立ち並ぶ家々のおおきさも手ごろなものとなる。真行寺家とくらべると、小屋程度の敷地にまるでおもちゃのようなちいさな家がひしめくように立ち並んでいた。

その家々の屋根に突き出している妙なかたちのものに太郎は注目していた。

なんだろう、あれは？

はじめて見るものだ。

興味津々にそれを見つめる太郎の横顔を美和子がのぞきこむようにして、声をかけた。

「太郎さん、なにをそんなに熱心に見ているの？」

美和子の声に太郎ははっ、とわれにかえた。

いけない！

いついかなるときも召し使いは主人の動向に注意をはらうべきと教えられているのに、まるでおこたっていた。

「い、いえ……なんでもありません」

しゃっちこばる太郎を美和子は面白そうに観察していた。

「あれはアンテナ、というものよ」

アンテナ？

ついまじまじと美和子の顔を見つめる太郎に、彼女はうなずいて説明した。

「あれはテレビ・アンテナなの。あなたテレビって見たことないの？」

ぶるぶると太郎は首を左右にふった。

「そうか、あたしの屋敷にテレビってなかったものね。小姓村にはないのかしら？」

テレビ……太郎は必死になってじぶんの記憶をさぐっていた。しかしどんなに思い返しても、それに相当する語句はなかった。

と、たまらずといった様子で運転手の羽佐間が口を挟んだ。

「テレビなど、庶民のものでございますよ、お嬢さま。真行寺家のかたがたが拝見なさるようなものではございません」

羽佐間の口調はさも軽蔑しているような調子だった。羽佐間の言葉に美和子は肩をすくめた。

「そうかしら？ 木戸もおなじようなこと言っていたけど、あたしはテレビを見てみたいわ。お友達のなかには、家にテレビ・セットを備えている人もいるのよ。そのひとの言うことによると、とっても面白いんですって！」

「いいえ、お嬢さまのような上流階級のおかたは、あのようなものは必要のないものでございます。そのようなことを申すお友達は、失礼ながらお嬢さまの通う女学院に通学する資格にかけると申し上げざるをえません」

羽佐間はあくまで言い張った。

美和子はあきれたように口をとがらせる。

その横で太郎は背筋をのばした姿勢で膝に手をおき、じっと座っていた。

テレビか……。

太郎は内心、はげしい興味を覚えていた。

## 大京女学院

大京女学院は高台の丘の上に、優美なシルエットを見せ聳え立っている。曲線を多用した白い建物の姿は、翼をひろげた白鳥を思わせた。

真行寺家の車は学院の入り口から専用の車寄せをつかい、校門に接近していく。車が止まり、運転手はすばやく後席にまわって美和子側のドアを開き頭を下げた。美和子は優雅な仕草で車から降り立ち、背をのばした。その背後に太郎がつづく。

「おはようございます、美和子さま！」

だしぬけに背後から声がかかり、太郎は反射的にふりかえった。

声をかけたのは美和子とおなじくらいの年頃の女生徒だった。女学院の制服を身にまとい、にこにこ笑みを浮かべている。つやのある黒髪を三つ編みにして、ほっそりした顔にはそばかすが目立っている。彼女の顔を認め、美和子もほほ笑みをかえした。

「おはよう、幸恵さん」

美和子は太郎に説明した。

「このかたは三島幸恵さんといって、あたしのクラスメートなの。幸恵さん、こちら只野太郎さん。お屋敷にきてくれた……」

そこで彼女は口ごもった。

察して太郎は自己紹介をした。

「はじめまして、只野太郎と申します。真行寺家に召し使いとして奉公することになりましたので、よろしくお見知りおきを願います」

すらりと太郎の口から「召し使い」という言葉がでて、幸恵はう

なずき太郎にむけ笑みを浮かべた。

「そうなの……前はもつと大人のかたがついてきていたわね」

美和子はいそいでつけくわえた。

「ね、幸恵さん。太郎さんは召し使いといっても、あたしのお友達なの。あなたもそう思っていただけない？」

うふつ、と幸恵はうなずいた。

「ええ、よろしくてよ！　ただし、あたしも太郎さんのお友達ということなら……」

まあ……、と美和子は目を見張った。

「よろしくてよ！　でも、一番のお友達はあたし、ということならね！」

うふふ……、と幸恵は笑った。ぷつ、と美和子も吹きだし、ふたりして笑いあう。

学院にきて、美和子の口調が変化したのに太郎は気づいていた。この学院の雰囲気、彼女の口調をよりお嬢さまっぽくしているのだろう。

太郎はふたりが熱心に話しこんでいるすきに、あたりを見わたした。気がつくと、登校してくる女生徒の半数が太郎のような召し使い、あるいはメイドを引き連れている。幸恵はひとりだが、これはそれぞれの事情があるのだろう。

そのうち、話しこんでいる美和子と幸恵に気づいて、ほかの女生徒たちが会話に入ってきて、正門前は彼女たちによって花が咲いたような有様になっていった。おたがい、冬休み中のことなどを口々に言い合っている。太郎はそつとその輪からはなれた。

「こりゃ、長くなるな……登校時間に間に合えば良いけど」

ふいに話しかけられふりむくと、ひとりの召し使いのお仕着せを身につけた老人がほのぼのとした笑みを浮かべて立っていた。おそ



らく、この女生徒たちのだれかのお付きのものだろう。太郎が会釈すると、老人はうなずいた。

「あんた、どこのお屋敷の召し使いだね。ずいぶんお若いが」

「真行寺家に今度奉公にあがった只野太郎と申します。よろしく」

老人の口がぽかんと開かれた。額に皺がより、ぐいと眉毛がもちあがる。

「真行寺家の……というと、あんた只野五郎となにか関係があるのかね？」

「只野五郎はぼくの父です」

「あんたの父親……それはまた……」

言いかけ、老人は口を閉ざした。さぐるような目つきになり、しげしげと太郎を見つめる。

「なるほど、確かに只野五郎の面差しがある。しかし息子とはこれはまた……」

「あのう……あなたはぼくの父親をご存知なのですか？」

いや……、と老人は片手をあげ襟首をさすった。まずいことを言ってしまったという表情になっている。

「なんでもないさ。あんたの父親は有名だからね。なにしろ最高の召し使いだからな」

そう言っただきり、老人は黙ってしまった。あとはなにを尋ねても知らん、憶えていないの繰り返しだった。

父親、只野五郎についてはなにか秘密がありそうだ。

太郎はぜひともその秘密を知りたいと思った。

「どういうこと、こんなところで騒がしくするのはだれなの？ 新学期なのよ、大京女学院の生徒として恥ずかしくはないの？」

とつぜん、切り込むように高い声がして、美和子を中心とした女

生徒たちの会話はぴたりと止まった。その声は、まるでナイフのように喧騒を切り裂いていた。

声のぬしは、美和子と同じ学年の女子生徒が発したものだ。すらりとした肢体の、背が高い女の子であった。豊かな髪の毛はなだれおちるように腰まで達し、白磁のような肌にきりつとした濃い眉をして、そのしたのふたつの瞳は燃えるように輝いている。

「おはよう、あんな杏奈さん」

美和子が挨拶すると、杏奈と呼ばれた少女はうつすら皮肉な笑みを浮かべた。

「あなたこそおはよう、美和子さん。ずいぶんお騒がしいこと！」  
彼女の背後には数人の召し使いが控えていた。まずふたりのメイド、そして四人の屈強な体格の召し使い。その六人は二列できつちりと隊列を組み、杏奈の背後を守っている。

四人の屈強な体格の召し使いを見て、太郎はまるでボディ・ガードみたいだと思った。

かれらは通常の召し使いが身につけるタキシードを身につけていたが、そのデザインが奇妙だった。妙にこつこつとしていて、タキシード本来の優雅なラインは影をひそめている。

太郎の訓練された目は、そのタキシードは見せ掛けで、本来の目的は戦闘用の防弾チョッキなのではないかと推測していた。最初のボディ・ガードのようだという印象は間違っていないかった。さらに仔細に観察すると、胸の辺りにかすかなふくらみが見える。たぶん銃器を隠しているのだ。いよいよ剣呑である。

ずい、と杏奈と呼ばれた少女は一步を踏み出した。

美和子を取り巻いている女生徒たちをかきわけるようにして、大股に歩いていく。その背後に、さきほどの六人が続いていた。

「なあに、あの人。まるで女王様気取りじゃない！」

美和子の周囲にいたひとりの女生徒がつぶやいた。

と、背後をかためていた召し使いたちがいつせいに声のぬしをぎらりとした視線で睨んできた。女生徒はびくりと肩をすくませ、目をそらす。

しかし杏奈と呼ばれた女生徒の足はとまらず、さっさと校門に消えていった。

とん、とんと太郎の肩をつつく指先がある。

ふりむくと、メイド服の女の子が悪戯っぽくこちらを見つめていた。太郎より二、三才年上だろうか。制服の胸に光るものがある。

執事学校のバッジだ！

すると彼女は太郎の先輩ということになる。太郎の胸にも同じものがある。おたがいのバッジを確認して、彼女はうなずいた。

「気になるでしょ？ あの女の子のこと」

言外に、おなじ執事学校の卒業生同士、助け合おうという口調だ。うん、と太郎はうなずいた。

たしかに気になる。召し使いとしては、主人の友人関係を把握することは必要だ。

「ここじゃまずいから、あとで召し使い部屋で落ち合いましょう。そのとき、教えてあげる」

召し使い部屋？

太郎のものの問いたげな表情に、メイドは目をまるくした。

「いやだ、知らないの？ お嬢さまたちが教室で授業にはいると、あたしたち召し使いは専用の待機所で終業を待つよ。そのための部屋があるの」

「そうか、ぼくは今日始めてなんだ」

「ああ、そうなんだ。どうりで見た顔じゃないと思った。でも、それ……」

彼女は太郎のバッジを指さした。

「それをつけているから、教えてあげようと思ったの。そうでなかったら、知らんぷりしているところだったわ！」

そう言つて、メイドはころころと笑った。

なんだか、陽気な性格の女の子のようだ。太郎は彼女に洋子のことを思い出した。

そういえば、洋子はどうしているだろうか？

## 千賀子

始業式はとどこおりなく終わり、生徒たちはめいめいのクラスにわかれ教室へと向かった。といっても授業らしき授業があるわけではなく、担任による簡単な挨拶があるだけである。その間、太郎たち召し使いたちは専用の控え部屋へと移動し、生徒たちが帰宅するのを待つのだ。

女学院の生徒の半数くらいが召し使いを同道しているので、控えの部屋といっても結構広い。

しかし調度は簡素なもので、固い木の椅子が人数分出されているだけで、召し使いたちはおのおの椅子に腰掛け、しずかに生徒たちの帰宅時間を待つ。太郎はその中に、あの杏奈という女の子の召し使いたちの一団を目にしていた。六人はほかの召し使いたちと距離をおき、固まるようにして椅子に腰かけている。かれらからはまわりを寄せ付けない、かたくなな雰囲気を発散させていた。

あのメイドの女の子が太郎を見つけ、こっちこっちというように手招きをしてきた。

太郎はゆっくりと彼女に近づいた。

彼女は太郎を部屋から連れ出し、廊下へとさそった。

「あたし栗山千賀子<sup>ちかこ</sup>っていうの。それでもメイドとして五年目なのよ」

となると、はたちはとうに過ぎている計算だ。しかし小柄であることと、童顔も手伝ってそんなに年上には見えない。

「よろしく、ぼくは只野太郎。今年から召し使いになったんだ」

太郎が名乗ると、千賀子の目が見開かれた。

只野太郎……と口の中でつぶやく。

ああ、彼女もぼくのお父さんのことを知っているんだと太郎は思った。彼女にすら知られているとは、父親の只野五郎は相当の有

名人のようである。

が、千賀子は余計なことを言わずすぐに本題に入った。その態度に太郎は好感を持った。

「杏奈さんのことだったわね！ 彼女の名前は高倉杏奈。この名前でないかこころあたりはない？」

高倉杏奈……？

太郎は口を開いた。

「もしかして高倉コンツェルンの？」

そうよ、と千賀子はおおきくうなずいた。

「おおあたり！ そうなの。彼女は高倉コンツェルンのお嬢さまなの。そして高倉コンツェルン総帥、高倉ケン太さまの妹でもあるのよ！ あなた、高倉コンツェルンについて、なにか知っていて？」

太郎は顔を左右にした。高倉コンツェルンについては、最大の財閥であるという通り一遍の知識しかない。

「もともと彼女はあなたのご主人、真行寺美和子さんにはなんの感情も持っていなかったんだけどね、あることがあって大変なライバル心を持つようになったの」

そう言つと千賀子はもつたいをつけるように腕を組んだ。

「さつきも言つた高倉コンツェルンの総帥、高倉ケン太さんと美和子さんのあいだに婚約が発表されてから、ああいう態度になったのよ」

……。

太郎は顔色を変えずに耐えた、と思つた。

しかし千賀子の言葉は思いがけないことだった。

美和子が婚約？

そんな太郎を、千賀子はさぐるような目で見つめている。

「驚いた？」

「ああ、驚いたよ」

しいて太郎は平板な声でこたえた。

千賀子はちよつと唇を尖らせた。

「もつと驚くかと思った。つまんないの！」

肩をすくめ話を続けた。

「高倉ケン太さんって、すごい格好いい殿方なのよう！ 年はあたしたちとそんなに変わらないけど、高倉コンツェルンをひとりで背負って、切り回しているの。ああ、あたしも高倉家にメイドに入ればよかった……」

そう言うとき手を組み合わせ、宙に視線をさ迷わせる。はっ、と太郎の視線に気づくと顔を赤らめた。

「ま、それはそれとして、やっぱりあんなすごいお兄さまがいるんだから、婚約者の美和子さんにやきもち焼くのは当たり前よねえ……とにかく杏奈さんったら、ことあるごとに美和子さんをライバル視して、ちかごろじゃ武道を習い始めるようになったのよ。いつか試合で、美和子さんを叩きのめすつもりだって、言っていたくらい」

大変なことだね、と太郎は相槌をうつた。

そんな太郎の様子に、千賀子はなんだかじぶんだけ興奮しているのが恥ずかしくなったようだった。  
えへ、と舌を出し肩をすくめる。

ぐつと太郎の顔にじぶんの顔を近づけささやいた。

「ね、あんたテレビ見たことない？」

え？ と、太郎は千賀子を見つめた。彼女の瞳はきらきらと輝いている。

「テレビかい？」

そう、と千賀子は顎をひいた。さつとあたりに視線をやり秘密めかして話しかけた。

「あんたも真行寺家のようなおおきなお屋敷に奉公しているんだから、たぶんテレビなんか見たことないでしょ？ あたしんとこのご主人はお金持ちじゃないけど、大学教授ってお役目のせいか、テレビなんかもつてのほかという家風なのよ。だからあたし、お嬢さまについてこの学院にくる日を楽しみにしているのよ。なぜなら……」  
そう言うといっそう声をひそめた。

「この学院にテレビがあるのよ！」

こつちよ、と千賀子は足音をひそめて歩き出した。太郎はついっられて足を踏み出す。

しん、と静まりかえった廊下をふたりはひそひそと歩いていく。

ひとつの扉をからりと音を立てて千賀子は開いた。ちいさな部屋があり、数人が座れるくらいの応接セットがそろっている。

「ここは先生方の休憩室なの。だから教室にいる間は、だれもこないわ」

指差した方向に、ひとつの箱がおいてあった。おおきさは太郎が腕をひろげてかかえるくらいで、前面にしかくいガラスがはまっている。ガラスは暗く、なにも映ってはいない。千賀子は箱に近づくと、その下にあるスイッチに手を触れた。

するとガラスが輝きだす。



太郎はびっくりして見つめた。  
やがて表面に映像があらわれた。

「これがテレビっていうのよ」  
これがテレビ……。

はじめて見るテレビに太郎はこころを奪われていた。  
ちいさな画面だったが、その中に映し出される映像は太郎の初めて見るものだった。

どうやら漫才をやっているらしい。ふたりの派手な背広を身につけた漫才師が、奇妙なことを言いあいながらおかしな仕草を続けている。ふたりの会話に、画面のそこから笑い声がまじる。

やがて漫才がおわると画面はコマーシャルとなる。

胸にせまってくるような壮大な音楽とともに、海の上に浮かぶ島が映し出される。島は灰褐色の断崖にかこまれ、その上に廃墟のようなビルが立ち並んでいた。太郎はその画面をどこかで見たと思っていた。

番長島トーナメント開催！

と、映像に文字がかぶさった。

そして画面にひとりの若者が姿をあらわした。

学生のような格好だが、その学生服が異様である。なにしろ真っ赤なのだ。しかも若者は髪を金色に染め、リーゼントにしていた。

「高倉ケン太さまよ！ わあ、素敵……」

千賀子は興奮している。

この若者が高倉ケン太……。

太郎は熱心に画面に見入った。

そうだ、大京駅のちかくでこれとおなじようなポスターを目にしたんだった。

画面の高倉ケン太はにやりと笑いかけると口を開いた。

「全国の腕自慢の諸君。わが高倉コンツェルンは番長島において、最強のバンチョウ、スケバンを選出するためのトーナメントを開催することを決定した！ われこそは、と思われんものはふるって参加してほしい。そしてこのトーナメントで最強の称号を手にするのだ！ では、諸君の奮闘を待っている」

さつと指をひたいにあてると、敬礼をするような挨拶をして高倉ケン太は背をむけた。

その背中に”男”という文字が金の刺繍で縫い取られている。

「優勝者には、この伝説のガ克蘭を進呈しよう！ このガ克蘭は代々の最強のバンチョウが身につけてきたものだ。きみも、伝説のバンチョウの仲間入りはしたくないか？」

そう言うとにかくと、笑う。

すつ、と高倉ケン太の姿が消え、あとに番長島だけが映し出される。高らかに音楽が鳴り響き、高倉コンツェルンのマークがでかくと輝いてコマースャルは終わった。

ほつ、と千賀子はため息をついた。

「ああ……やっぱりケン太さまって素敵！ 知ってる？ ケン太様は伝説のバンチョウの称号を手にして、高倉コンツェルンの総帥の地位にのぼられたのよ」

伝説のバンチョウでしかもコンツェルンの総帥？ 太郎の頭は混乱した。

もちろん、バンチヨウという言葉の意味は太郎も知っている。

ようするに喧嘩の強いものが、バンチヨウとよばれるのだ。しかしそれで高倉コンツェルンの総帥という責任ある地位にあるのがわからない。

その時、休憩室の扉ががらりと開かれた。

はっ、とふたりはそちらを見た。

見るとあの、校門前で太郎に話しかけた老召し使いが、苦虫をのみつぶしたような顔で部屋をのぞきこんでいる。

「こんなところでなにをやっておる！ 千賀子、お前にはきつく言っておいたはずだな。この休憩室に忍び込むことはやめろ、と。ここは教職員専用の休憩室だ。お前の来るところではない！」

どこかと足音高く老人は部屋に踏み込むと、テレビのスイッチを切った。画面はふたたび暗くなって消えた。

老人は太郎を見て眉をしかめた。

「あんたも千賀子につられてこんなところへ来るようではいかん！ いいかね、このような娯楽はしよせん、庶民のものだ。感化されてはあんたの身の破滅だぞ！」

そこまで強く言うことはないだろうと太郎は思ったが、おとなしくうなずいた。

「申し訳ありません。しかし彼女を責めないでください。ぼくがテレビを見たいと言ったせいで彼女がここに連れてきてくれたのです。だから悪いのはぼくなんです」

はっ、と老人は頭をふった。

「あんたもすぐわかるような嘘をついてはいかな。召し使いとして嘘をつくことは許されて良いが、今の場面では必要ない。第一、千賀子があんたを誘ったのはわかりきっておる！」

その時、かーん、かーんと鐘の音が学院に響き渡った。

おっ、と老人は顔を上げた。

「いかん！ 帰宅時間だ！ お嬢さまのお供をしなくては……」  
そそくさとその場を立ち去る。

ちら、と太郎が千賀子を見ると、彼女は肩をすくめた。

「ごめんね……でも、あたしをかばってくれてありがとう！」  
につ、と笑うと彼女も立ち去った。

太郎は歩き出した。

美和子の帰宅に付き添う役目が残っている。

## 指きり

「テレビを見たの！ どこで、どこで？」

屋敷に帰った太郎が美和子と共に彼女の部屋にはいり、テレビを観賞したと報告すると、美和子は興奮した。

教員の休憩室でと説明すると、彼女は悔しそうに膝をついた。

「ああ、やっぱり先生方の休憩室にあったのね！ 学院にテレビのアンテナがあるからどこかにあるとは思っていたんだけど、休憩室とは盲点だったわ！」

美和子は窓際の長椅子に腰かけ、髪の毛をとかしながら話をつづけた。彼女の髪の毛はほそく、しなやかで開いた窓からの風にふわりとなびいている。

櫛をおくと悪戯っぽい目つきになる。

「あたしも休憩室に行ってみようかしら？ 一度見てみたいもの……」

太郎が困った顔になると、美和子は肩をすくめた。

「なーんてね、嘘よ、嘘！ 休憩室に忍び込んだりしないから、心配しないで！」

休憩室で見た高倉コンツェルンのコマーシャルのことについては太郎は口をつぐんでいた。そのことに触れると、当然美和子の婚約について話がおよぶ。それは真行寺家の内々のことで、召し使い風情が好奇心を抱いていい事柄ではないのだ。だから太郎は美和子がテレビ番組について質問されても、あいまいに答えていた。

しかし太郎は大声で尋ねたかった。

お嬢さま、あなたの婚約とは本当のことですか！

だが太郎はしずかに美和子の相手をしているだけであつた。

あーあ、と美和子は長椅子のうえで手足をながながとのばし、寝そべつた。

「新学期もはじまつたし、なにか面白いことないかしら」

そうだ、と美和子は身を起こした。

「お父さまにねだつて、テレビを買っていただこうかしら？」

しかし顎に手をやり、眉を寄せた。

その顔を見て、太郎は彼女がどんな表情になつても美しい、とひそかに思っていた。

「でも駄目ね。あの木戸がきつと反対するにちがいないもの」

というと、彼女はきりつと太郎を見た。

「ね、太郎さん。あなた頑張つてこの屋敷の筆頭執事になつてちょうだい。そうすれば、あなたの裁量でこの家にテレビを入れることができるもの。ね、約束して！」

手を挙げ、小指をたてる。

「指切りしましょ！ あなたがこの屋敷で出世して、筆頭執事の地位を手に入れると！」

太郎は指を美和子の指にからめた。

指きりげんまん      ！

美和子は子供のように高い声で指きりの儀式を行った。

太郎は心の中で誓っていた。

お嬢さま、かならずぼくはこの真行寺家で筆頭執事になって見せます。そしてお嬢さまに忠実につかえます……。

その誓いが以外なはやさで現実になるとは、そのときの太郎も美和子も知る由はなかったのだが……。

## 手紙

美和子専属となったとはいえ、太郎は屋敷のこまごまとした仕事をこなさなければならない。そのひとつに週一回の郵便物の受け渡しがある。

真行寺家はさまざまな企業を傘下におさめている。男爵はそれら真行寺グループとでもいう企業連合の会長として君臨しているのだが、男爵自身は第一線からは引退し、悠々自適の生活を楽しんでいる。

しかしそれでも男爵の決裁をおおぐ書類は毎週のように送られてくる。ほとんどは事後承諾のかたちで男爵のサインを求めるだけなのだが、なかには緊急の指示を求める書類が郵送されることもあって、それらの書類を仕分けするのが太郎の仕事になった。

といっても作業そのものは単純である。

男爵のサインだけ必要とする郵便物は、真行寺家の家紋がはいった白い封筒に入って送られてくる。そのほかの男爵みずから判断をおおぐ書類がはいった封筒は、青い色の封筒に入っている。だから太郎のする仕事は、それらを分けておくだけでいい。あとは午前中までに男爵の執務室に運び、昼までに男爵がサインした書類をふたたび送付用の封筒にいれて専用の袋に入れるだけだ。あとは郵便局の局員が出向いて受け取るので、郵便局に直接行く必要すらないのだ。

いつものように袋いっぱい届けられた郵便物の山を仕分けしていくと、そのなかに一通だけ見慣れない郵便物が混じっているのに



太郎は気づいた。

なんだろう？ 茶色い、事務封筒が一通だけいかにも場違いにまじっている。

あて先は木戸になっていた。差出人は記されていない。

太郎はその封筒を手に、木戸の部屋へ出向いた。

木戸の部屋のドアをノックすると、中から返事があった。ドアを開け、一步踏み込むと木戸がデスクの向こうからじろりと睨んできた。太郎の手にした封筒を目にした瞬間、木戸の顔が真赤にそまつた。

「なんでそんなもの、持っている！」

だしぬけの怒声に太郎はびくりとなった。木戸は唸り声をあげて立ち上がると、猛然と太郎に突進し、手にした茶封筒をひったくるようにむしりとった。

「よこせ！ それはお前なんかが手にしていいものではない！」

「宛名が木戸さんだったので……」

太郎が言い訳すると、木戸はふんつと横を向いた。ふーっ、ふーっ　と荒い息を吐いている。相当動揺しているようで、太郎はいったいなにが木戸をこんな激昂させたのかと考えた。

真っ赤に染まっていた顔がすうつ、と元に戻る。荒い息も平静に戻った。いつものすべてを見下したような表情になると口を開いた。「これはおれの個人的な手紙だ。郵便局員が間違えて袋にいれたんだろう。このことは忘れることだ、いいな？」

はい、と太郎はうなずいた。

そのまま木戸の部屋を辞する。

廊下を歩く太郎は、背中に木戸の視線を痛いほど感じていた。

## サイン

「ああ、またサイン、サインか！ まったく、いつになったらわしはこんな雑務から解放されるんだろうね……」

太郎が書類のたばをもつて部屋へはいると、男爵はため息をついてペンを取り上げる。

どさりとデスクに積み上げられた書類の所定の箇所に、一枚、一枚サインをさらさらと記入した。書面の事項にはほとんど目を通さない。届けられた書類の大半は男爵が資金を出している慈善団体からの経営内容を記したものだ。男爵は慈善家であった。太郎はそんな男爵をじつと見つめ、しずかに待っている。

ようやくすべての書類にサインをいれた男爵は、ほっと息をついた。

「終わった……。まったく、こういう仕事は老人には骨だよ」

太郎は一礼してデスクの上に積み重ねられた書類をきちんと揃えると、くるりと回れ右をして出て行こうとした。

そのとき、男爵が片手をあげ太郎を呼び止めた。

「ああ、太郎君。ちよつと……」

なんでしょう、と太郎はふりむいた。

男爵は悪戯っぽい目つきになっている。

「ちよつと耳にしたんだが、美和子がこの家に ああ、なんといつたかな？ その、家で劇場や映画をいながらにして見るこの出来る機械とかいうもの」

「テレビ、でございましょうか？」

太郎が助け舟を出すと、男爵は勢い込んだ。

「そう、そう、テレビだよ！ たしか、美和子がそんなこと言って

おった！ それを欲しがっているそうじゃな」

太郎はうなずいた。

「はい、お嬢さまはそんなご希望をお持ちのようでした」

男爵の唇がにんまりと横にひろがった。

「そうか！ 美和子に伝えておくれ。近いうちに電器店のものを呼ぶから、そのときテレビを家へ運び入れようとな！」

「そうですか、お嬢さまは大変お喜びなさると思います」

男爵はうん、うんと何度もうなずいていた。

失礼いたします、と太郎が男爵の部屋を出ようとしたその時、入れ替わりに木戸が入ってきた。扉を閉める直前、木戸の声が太郎の耳にはいった。

「男爵さま、折り入ってサインしていただきたい書類があるので……」

ちら、と室内をのぞきこむと、木戸がその長い上半身をおりまげるようにして男爵のデスクに一枚の書類を広げているところだった。男爵は老眼鏡をかけなおし、その書類に見入っている。木戸は太郎の視線を感じたのか、横目でこっちを見た！

はっ、と太郎は引き下がり、木戸の視線からのがれた。

## 不安

廊下を歩き、太郎は美和子の部屋の前へ立った。こつこつとノックをすると、すぐ返事がする。

ドアを開けると、美和子は本をひろげ、ぼんやりとページを目で追っている。しかし熱がはいっているようではなく、太郎に気づくとすぐにぱたりと本を閉じた。

顔を上げ、太郎の顔を見てにつこりとほほ笑んだ。

「いらつしゃい。今日はどんな用かしら。なにか面白いことある？」

そう言うのと期待に満ちた目で見上げてくる。美和子はいつでもなにか変わったこと、面白いことがじぶんを待っている、と思つているようである。

「お嬢さまに良いお知らせです。男爵さまが、このお屋敷にテレビをお入れになられるようでございます」

きゃあ！ と、美和子は飛び上がって喜んだ。立ち上がるなり、いきなり太郎の両手を掴んでふりまわした。

「本当？ 本当なの？」

「ええ、男爵さまがはつきりと仰いました」

嬉しい……！ と、美和子はじぶんの腕で胸をだきしめた。こんなお嬢さまはじめて見る、と太郎は驚いていた。

「クラスのお友達にもテレビのあるお家はあるのよ。木戸はそういうなことはご学友にふさわしくありません、なんて言っただけそんなことないわよねえ！ ね、太郎さん。テレビが来たら、一緒に見ましょうね！」

はい、と太郎は短く答えた。

うつろきとしている美和子を前に、太郎は木戸が持ってきた書類のことを気にしていた。

「いったい、あれは何の書類なのだろう……。」

美和子の前を辞去し、太郎は男爵の部屋へ引き返した。

ドアを細めに開き、中をのぞきこむ。

木戸はいない。男爵がひとり、ぼんやりと窓の外を眺めているだけだ。

太郎はドアをノックした。

「おはいり……。」という返事に太郎はドアを開け一礼して中へ入った。男爵は太郎の顔を認めてちょっと驚いた顔になった。

「どうした、太郎君。わしは君を呼んだかな？」

「いいえ、と太郎は首をふった。」

「さきほど木戸がまいりまして、あたらしい書類を男爵さまにお持ちしたようですが、それは郵便袋に入れておきましようか？」

男爵は手をふった。

「ああ、あれはわしがサインしてすぐに木戸がじぶんで郵送するといつて外出したよ。なんでも急ぐ書類らしいな」

じわり……とした不安が太郎の胸にわき上がってきた。

## 不安（後書き）

最近見たDVD「僕らの未来へ逆回転」主演はジャック・ブラック。消去されたビデオの変わりに、自分たちで映画を再現して大人気になる、という内容。映画への愛が熱く感じられる、傑作でした。

## 配送車

失礼します……と、男爵の前を引き下がると、太郎は廊下に出て外を眺めた。

広々とした男爵邸の庭園に、ひとりのひよろ長い瘦身の男がせかせかとした歩き方で通用口へ向かっている。木戸である。

木戸は通用口につくと、あたりを気にするようにしてきよろきよろと見回し、ドアを開けた。ほどなく郵便局さしまわしの配送車がやってきた。木戸は局員になにかを手渡し、話し掛ける。郵便局員はいはいと頷き、木戸から一通の封筒を受け取った。

あれだ！

太郎は窓ガラスに顔を押し付けた。

局員は木戸から受け取ると、一礼して配送車に戻った。木戸はそれを見送り、用心深くぐるりと周囲を見渡した。

見咎められないよう、太郎はあわてて窓から離れた。

間違いない……あれはなにか、木戸にとって大事な書類なのだ。

太郎は走り出した。

たたたた……と全力で走る太郎は、ひそとも足音をたてない。執事学校で習った、特殊な速歩術である。

裏口にまわると、庭をつつきる。

すぐ男爵邸の塀が見えてくる。



ぶつかる寸前、太郎は飛び上がった。

たった一度の跳躍で、太郎の両手は塀の上に達していた。  
たん、と塀の上へ這い登ると待つ。

ほどなく郵便局の車が角をまがり、視界に見えてきた。太郎は息を吸い込むとふわりと宙に浮かび、配送車の天井へ舞い降りた。  
気配を殺しているので、配送車の運転手には気づかれていないはずだ。天井から太郎は配送車の後部にとりつき、ドアを開け内部へ忍び込んだ。

これまでにかった時間は二十秒たらず、だれにも見咎められない。

やがて配送車は信号で停車した。

配送車の後部が開き、太郎が姿をあらわした。ドアを閉めると、配送車は走り出した。

それを見送り、太郎はほっと息を吐き出した。

ゆつくりと男爵邸へ戻っていく。

## 草むしり

太郎は一日、朝早くからおきて庭の草むしりをつづけていた。木戸から命じられたからだ。季節は春で、昼近くになると温度はあがり、太郎の額に汗がふきだした。むつとするほどの草いきれがたちこめ、あたりには冬眠からさめたカエルや、ちいさな昆虫がはいだしている。

やあーっ、というかけ声が遠くの道場から聞こえてくる。

美和子が師範相手に武道の稽古をつづけているのだ。彼女の声は高く澄んでいて、すぐわかる。ときおり竹刀の音がまじる。今日の武道の練習は剣道だった。

合気道、剣道、薙刀などさまざまな古式武道を美和子は習っている。よほど性に合っているようで、どの武道でも美和子は師範代クラスの前腕を誇っていた。

テレビは結局駄目になってしまったな……と、太郎はふと思った。男爵の計画に、木戸が猛反対をしたのである。

「テレビなど、この真行寺家に必要ありません！ そのような汚らしい機械がこの屋敷に入れるなど、断固として反対いたします。もしお認めいただけないのなら、わたしは辞職しますのでそれでもよろしいのなら、どうぞお買いになられればよろしい……」

そこまで言われ、男爵は計画を進めることができなくなった。木戸の反対に、男爵はうなずかざるをえなかったのである。

実際、真行寺家の経営のすべては木戸が握っており、かれがいなくてはなにも動くはずはなかった。木戸の辞職という脅しは、男爵の一番弱いところを突いたのである。

あとで男爵は太郎と美和子を呼んでわびた。

「すまん、木戸にああ言われたのではあきらめるしかないんでな……」

それを聞いた美和子にはにっこりとほほ笑んで答えた。

「いいのよ、お父さま。たぶん、見ても楽しくないと思うわ。よかったわ、テレビが家に来なくなってる！」

## 高倉ケン太

ふっと太郎は汗をぬぐい、立ち上がった。なにかが目じりを捕らえる。

きらきらと、真行寺家の正門の方向からなにかが日の光を反射している。なんだろうと顔をあげた太郎は、まっしろな高級車が正門をくぐるのをみとめた。車のボンネットに飾られているマスコットに太陽のひかりがさしこみ、反射していたのである。白い車体に、金の縁取りがいやがおうに高級感をただよわせている。車はゆっくりと真行寺家の車寄せに近づき、玄関前で停車した。

ドアが開き、後席からひとりの若者が姿をあらわした。

真っ赤な色彩が目飛び込んでくる。

若者は全身、真っ赤な学生服を身にまとっていた。

たてた詰め襟、金髪に染め抜いたリーゼント。

太郎はおもわず作業の手をとめ、見入っていた。

高倉ケン太！

間違いない。

つい先日、テレビで見たときとまったく同じだ。上下真っ赤なそろいの学生服で、背中の”男”の刺繍が陽射しにきらめいている。

玄関には木戸が出迎えに出ていた。

木戸は大腿に歩み寄るケン太に深々と頭をさげた。

うん、とばかりにケン太はうなずく。木戸の口が「ようこそ」と動くのが見えた。

木戸が開いた玄関に高倉ケン太の姿が吸い込まれる。

立ち上がった太郎は、ふと玄関前に止まっている高級車に目をやった。

運転手が外に出て、羽簞で丁寧に車体の汚れを落としている。

運転手は女だった。

太郎は思わず、庭仕事の道具を取り落としていた。

運転手は山田洋子だったのだ。

## 婚約者

近づいた太郎に洋子は気づき、羽簾を握る手をとめた。

「やあ……」

太郎の挨拶に、洋子はかるくうなずいた。

今日の洋子は運転手の制服に身を包んでいる。きつちりとボタンをとめ、両足をつつむズボンには黒いラインがはしっている。

「運転手をしているのかい？」

話しかけた太郎に、洋子にはやりと笑って見せた。

「たまにね！ あたし、高倉ケン太さまの召し使いになったのよ。ケン太さまの命令で、運転免許をとらされたの。でも、まあ執事学校の勉強にくらべたら楽なもんだったわ」

「君が……」

太郎は絶句した。まさか洋子が高倉ケン太の召し使いになつていようとは思っても見なかった。なんとか太郎は会話をつづけた。

「今日はいつたい、なんの用なんだい？」

うふふ……と洋子は笑った。

「あなた知っているかしら？ あの高倉ケン太さまがここの真行寺家の一人娘、美和子さまの婚約者だってことは」

太郎がうなずくのを見て、洋子はなんだ、というような顔になった。

「知っていたのね……でも、それも無理はないかも。なにしろ最大の財閥である高倉コンツェルンの総帥と、高名な真行寺家のひとり娘との婚約だもの。召し使いの間で話題になつても不思議じゃないわ」

太郎は洋子のおしゃべりをさえぎった。

「それより、ご両親に連絡はしたのかい？ 心配しているよ」

洋子はちよつと顔を赤らめた。

「忘れていたわ……でも、今日中に手紙を書くから」

太郎はあきれた。忘れていたとは、いかにも洋子らしい。

彼女はひそひそ声になった。

「ね、知ってる？ ケン太さんって、美和子さんと婚約したのに、いままでおたがいの顔を見たことがないんだって！ 今日時間は取れたから、この機会に美和子さんの顔を見に来たんだっていうのよ。やっぱり上流階級のひとたちって、あたしたちと違うのね」

ふうん、と太郎はうなずいた。

「只野太郎！ 何をしている？」

背後からの怒鳴り声に太郎はふりむいた。玄関に木戸が仁王立ちになって、こつちを険しい顔つきで睨んでいる。

太郎と目が合うと、木戸はぐいと顎をしゃくった。

急いで太郎が木戸に近づくと、かれは唇を動かさないままで話しかけた。執事独特の秘密話法である。他人の目がある場合、唇を読まれることを懸念して、この方法で話し合うことがある。なぜなら執事は読唇術を心得ているから、こういう会話法は必要なのだ。

「あれは高倉家の召し使いだぞ。他の家の召し使いと勝手に話してはいかんということは、執事の心得としてお前も知っているはずだろう？」

「彼女はぼくとおなじ執事学校の同級生だったんです。それに幼なじみでもありますし、ひさしぶりの再会でつい、話しこんでしまつて申し訳ありません」

ふむ、と木戸は肩をすくめた。

「まあいい。それよりお嬢さまがお前をお呼びだ」

ぼくを？ と、太郎は驚いた。

木戸は片方の眉をつりあげた。

「いまいらした高倉ケン太さまとお嬢さまが、今日はじめてお会いになれる。いま、お嬢さまは道場からお部屋へ戻って着替えられておられる。お前はそれを手伝う」

それだけ言うと、木戸はくるりと背を向け屋敷内に入ってしまった。とりのこされた太郎はちよつと洋子をふりむいた。

洋子は知らん顔をして車の掃除を続けている。

太郎はじぶんの顔に血が昇っているのをおぼえていた。  
着替え？

お嬢さまの！



## 上流階級

美和子の部屋へ入ると、彼女は数人のメイドに取り囲まれ、下着姿になっていた。太郎の気配に気づくと、そのままふりむく。

下着姿だというのに恥ずかしがる様子もなく、明るく声をかけてきた。

「ああ、太郎さん。来てくれたのね。あたし、今日はじめて高倉ケン太さまにお会いするのよ。道着すがたではお目にかけれないから、大急ぎで着替えなきゃ……。太郎さんにも手伝ってもらおうと思ったけど、メイドたちがいるからいいわ。それより、来客用のラウンジに先に行って、ケン太さんにお待たせするよう言ってお願ひできないかしら？」

かしこまりました……と太郎は頭をさげた。

じぶんも仕事着を着替えないと……。

部屋へ向かう太郎の脳裏に、執事学校で言われたことが蘇る。

「上流階級で生まれ育ったかたは、たいがい他人の前で下着、もしくは全裸になっても平気なのです」

講義をしているのは礼儀作法の講師だった。小柄な、五十代の老婦人で、一生のほとんどもメイドで過ごしたという経験豊富な女性だった。彼女は講義をつづけた。

「なぜなら幼少のころからメイド、召し使いたちに着替えを手伝ってもらっているから、他人の、しかも召し使いの目は気にならないのです。だからあなたたちも上流階級のお屋敷に奉公することになったら、そのような場面に出会ってもうるたえることのないように気をつけないといけませんよ」

そう言って講師はにやりと笑った。

「もしあなたがたが恥ずかしがったり、顔を赤らめたりしたら、かえっておたがい気まずい思いをすることになりますから。いいです

ね、けっして表情を変えることなく、平静でいることが肝心です……」

部屋に帰って急いでスーツに着替えると、太郎は言われたとおり来客用のラウンジへと移動した。廊下を歩く太郎は、美和子の下着姿を目にしたとき平静でいられただろうかと自問自答していた。お嬢さまに気まずい思いをさせなかった自信はあったが……。

息を整え、太郎は来客ラウンジのドアの前に立った。そつとノックし、返事を待つて中へと入った。

来客用のラウンジの庭に面した側は一面のガラス窓になっている。そこからの採光で、部屋はまぶしいくらいに明るい。窓際にいくつかの長椅子がのべられていて、ひとつに高倉ケン太がゆったりと座っていた。

## 忠実な召し使い

日差しの影には真行寺男爵の車椅子がおかれ、男爵は好々爺といった面持ちで高倉ケン太との会話を楽しんでいるようだ。男爵の背後にはいつものように木戸が無表情な顔をぶら下げている。

太郎が入っていくと、一同は顔をあげた。

「おお、これがさっき話していた只野太郎ですわい！」

男爵が上機嫌に声をあげた。

ほう、と高倉ケン太は立ち上がるとつかつかと太郎に近づき右手を差し出した。かれは背が高く、ほとんど木戸とおなじくらいの背丈だった。

「よろしく、君の事は男爵から聞いている。優秀な召し使いだそうだね」

太郎は差し出された右手を握った。ケン太の握手は力強い。かれはあけっぴろげな笑顔を見せた。

「ぼくのことば聞いているかな？ 美和子さんの婚約者として……」

「はい、うかがっております。ようこそいらっしゃいました」

うん、とケン太はうなずいた。ちらりと男爵をふりかえり、ふたたび太郎に向き直って話しかける。

「もし、ぼくが美和子さんと結婚すればの話したが、そうになると君は美和子さん専属の召使として引き続き、ぼくらに仕えることになるのかな？」

太郎はうなずいた。

「はい、お許しがあればお仕えしたいと存じます。ぼくは美和子さまに”忠誠の誓い”をしましたので、どのようなことがあっても忠実にお仕えます」

「”忠誠の誓い”？ それはなんだね」

これには太郎は驚いた。召し使いをかかえているかれが、このことを知らないとは。太郎は説明した。

「召し使いになった者は、主人となったかたと誓いをかわすのです。誓いをかわした召し使いは、なにがあってもお仕えしなくてはならない決まりです」

黙り込んでいた木戸が急に口をはさみこんだ。

「高倉さま。お聞きになつていないのも無理はありません。その”忠誠の誓い”に拘束されるのは太郎の卒業した執事学校の卒業生にかぎられます。それにすべての召し使いが誓いをするというわけでもないのです。現にわたしは男爵さまとその誓いをしていませんが、忠実な召し使いとしての立場がゆるぐわけもないのです」

木戸は”忠誠の誓い”をしていない！

太郎は驚きに言葉をうしなっていた。また、誓いをしていない召し使いがいるということにも驚いていた。

とんとんと男爵が車椅子の肘掛けをたたいて一同の注目をひいた。おほん、と咳払いをすると、男爵は話しました。

「以前、太郎君の父上の只野五郎がこの屋敷に仕えてくれたところ、かれとわしの間でその誓いをかわしたのだよ。だからわしも、娘の美和子に誓いの儀式をするようすすめたのだ。まあそんなことしなくとも太郎君は忠実に仕えてくれることはわかっておるが、かれの父親のことを思い出すとつい、おなじことをしてもらいたくない。なにしろ五郎はすばらしい召し使いだったから……」

ケン太は肩をすくめた。

「執事学校か……うわさは聞いている。そういえば、こんど新しくうちに入ったメイドの山田洋子という女の子、たしか執事学校の卒業生だと言っていたね」

そう言うと太郎を見た。

「彼女のことは知っているかね？」

「はい、同級生でした」

ほう、とケン太は顔をあげた。

「それじゃあ、ぼくが彼女に”忠誠の誓い”の儀式をすれば、彼女はぼくにたいして忠誠を誓うことになるのか」

太郎はうなずいた。

ふうん、とケン太は楽しげな表情になった。

「なるほど……だが、それはやめておこう。ぼくはそんな誓いで他人を拘束する趣味はないし、それにぼくが主人としてふさわしくない振る舞いをすれば、彼女は自然と見限るだろう。ぼくとしてはつねにじぶんが他人の模範となるよう努力しているつもりだからね、そんな儀式はする気はないよ」

その時、がちやりと部屋の扉が開いた。

扉の方向を見たケン太の表情がぱっ、とあかるくなった。  
一歩踏み出す。

「これは……お美しい！」

賛嘆の声をあげる。

つられて入り口の方角を見た太郎も思わず目を見張っていた。

美和子が立っていた。

## 紅茶

道場での稽古着から着替えたばかりのせいなのか、頬にはまだ練習の興奮がのこり、うつすらピンクに染まっている。

すらりとした肢体を包み込む真っ白なワンピース。長い髪は高く結い上げ、赤いリボンでまとめている。ただそれだけの色彩を許しただけの彼女の装いは、ぱっと華が開いたような効果をかもしだしていた。

美和子はケン太に向かい、ふかぶかと頭を下げた。

「真行寺美和子と申します。高倉ケン太さまには、はじめてお目にかかり、嬉しく思っております」

いやいや……というようにケン太は首をふった。

美和子の前に近づくと、いきなり両手で彼女の手をつつみこんだ。美和子はこのふるまいには、と顔を赤らめた。

「そんな堅苦しい挨拶はぬきにしましょう。ぼくはいま、感動しているんですよ！ 噂には聞いていたが、なるほど聞きしに勝る美しい女性です」

言うなり、ケン太は美和子の手を取ったまま窓際の長椅子に案内していく。彼女を座らせ、その隣にケン太も腰をおろした。

椅子の前のテーブルにはティー・セットが置かれている。ケン太はポットに湯をそそぐと、美和子のために紅茶を一杯淹れた。香料入りの砂糖壺の蓋を開いて美和子に尋ねた。

「砂糖はおいくつですか？」

ふたつ……美和子が蚊の鳴くような声で答える。なるほど、とケン太はうなずき角砂糖をふたつ、ティー・カップに入れスプーンでかき回した。

室内に紅茶と、砂糖に溶かし込んだ香料の香りがただよう。ふたりはゆっくりと紅茶をすすっていた。

男爵がぼん、と膝を打った。

「なあ！　ここはひとつ、ふたりにしてあげてはどうかかな？」

背後の木戸をふりかえる。

木戸はうなずいた。

「それがよろしかろう、と思います」

うん、うんと男爵はなんともうなずいた。

「美和子、わしらはここで部屋へ帰るからな、あとはケン太さんと楽しくやっつけていなさい」

「お父さま！」

美和子はなぜか狼狽していた。

「あ、あの、あたくし……！」

それまで彼女はぼうつ、としてケン太の顔だけを見つめていたのを自覚したのだろう。ぽーっ、と頬が真っ赤に染まっている。

男爵の合図で、木戸は車椅子を押しながら出口へと向かい、太郎をじろりと睨んで顎をしゃくった。出る、ということか。太郎は木戸の後ろについてドアの方向へ歩き出した。

「待つて！」

美和子が叫んだ。

「あ、あの……太郎さんはここにいてくれないかしら……」

ケン太はぐい、と眉をあげた。

「いいでしょう、そのほうが美和子さんも落ち着くというもの。ぼくも太郎君にここにいてほしいな！」

男爵は肩をすくめた。

「それじゃ、そうしなさい。太郎君、あとはよろしく頼むよ」

邪魔をするなという言外の含みがある。太郎は男爵に向け、頭を下げた。

ふたりがドアから出て行き、部屋には太郎と美和子、それに高倉ケン太の三人が残された。

## 使命

「さて！」

ケン太は陽気に立ち上がった。

窓に近づくところりとふり向き、美和子を見つめた。ケン太の視線に、美和子はさっとうつむいた。

「美和子さん、ぼくはいま高倉コンサルの総帥となっています。全国すべての高倉傘下の企業のうち、ぼくに忠誠を誓わないところはまあ、ないでしょう」

一体何を言い出すのか？ 太郎は内心首をかしげた。自慢話はこういう場合、ふさわしくはない。しかし美和子は大人しく聞き入っているようだ。

「ぼくには夢がある！」

ケン太は腕をひろげた。

「高倉コンサルをさらに発展させること！ そしてこの企業を世界企業にすることがぼくの当面の夢です！」

言いながらケン太は歩き出した。両手を背中にまわし、熱心な口調になる。

「しかしその夢の実現にはぼくの身体がいくつあっても足りはしない。いま、ぼくは猛烈に忙しい！ 実際、こうして美和子さんと会ってお話する段取りを取るだけでも、一週間スケジュールを調整しなくてはならなかった……」

はあ……と、美和子はぼかんとした表情になっていた。彼女もケン太のこの演説には戸惑っているようだな、と太郎は思った。

美和子は口をはさんだ。

「そ、それじゃケン太さん。あたしのために、大事なお仕事が……？ あ、あのよろしかったら、いますぐにでもお仕舞いになさってお仕事にお戻りになったら……？」

「そんなこと言っているわけじゃないんだ！」



ケン太は叫んだ。

美和子は目をぱちくりさせている。

「ぼくは考えている。ぼくの夢の実現のためにはパートナーが必要だつてね……そしてそのパートナーが美和子さん、あなたなのです！」

ケン太はぐい、と美和子を指さした。

ぐつと美和子にのしかかるように近づくと、さつとケン太は膝まづき、その手を取った。

「美和子さん、どうかぼくと結婚してくれませんか？ いま、とは言いません。あなたが女学院を卒業するまで待ちましょう。そしてぼくと手を取り合つて、高倉コンツェルンを世界企業に成長させていきましょう！」

「あ……あの……」

いつもは饒舌な美和子の口が、今日に限ってまったく働かないようだった。ただただ、彼女はケン太の長広舌を聞き入っているだけである。

ケン太はさらりと美和子に対し、結婚の申し込みをしてしまったのである。

彼女の困惑を見てとったケン太はにやつ、と笑った。そのとき、太郎はかれの八重歯がきらりと光ったのを見た、と思った。見間違いだろうか？ いや、確かに光った！

さつとケン太は美和子から離れた。

「いや、申し訳ない。つい、熱がはいってしまつてあなたのことも考えず……。いまお答えを貰おうとは思いません。あなたも考える時間が必要だ。いまは待ちましょう」

ケン太は窓際に近づき、外の庭を覗き込んだ。

真行寺家の庭は専門の庭師が丹精込めて世話をつづけている。ひろびろとした庭のあちこちの立ち木はきちんと刈り込みがされ、西洋風の庭園では花が季節ごとにあらゆる色彩を乱舞させる。この部

屋からはもつとも庭園のすばらしい景色が堪能できるのだ。

庭をながめていたケン太はしばらく黙っていたが、ふと腕時計に目をとめた。

「おや、こんな時間だ。それでは美和子さん、失礼いたします。あなたの美しさに、つい長居をしてしまった」

さつと椅子に座り込んでいる美和子の前にくると膝まづき、かれは彼女の手をとってその甲に口づけた。

あ！ と、美和子は全身を震わせた。

すばやく立ち上がると、ケン太はそれではと一礼して、ドアを開けて出て行った。

しまった！

太郎は後悔した。

あのとき、ドアを開けるのは召し使いである太郎の役目だったのに、ケン太みずから開けさせてしまった！

あわてて追いかける太郎を尻目に、ケン太は屋敷の廊下をさっさと大股に歩き去っていく。

どうしよう……このまま美和子の側にいるべきか、それともケン太を追いかけるべきなのか？

太郎は迷った。

そのとき、美和子が口を開き、太郎の迷いを消し去ってくれた。

「太郎さん。お願い、ここにいらして……」

はっ、と太郎はすばやくもとの位置にもどって美和子を見た。

彼女はぼう然としているようだった。

視線は窓の外に向けているが、なにも見ていないのは確実である。首筋まで彼女は真っ赤にそめていた。

ふ、と美和子は太郎のほうに顔を向けた。

太郎は愕然となった。

美和子の目に涙がいつぱいたまっている。

「あ、あたし……どうしていいかわからない……。ケン太さんのこ

とは前から聞かされて、許婚だからと言われて……」

美和子はくしゃくしゃと手にしたハンカチを握りしめていた。

太郎はおおきく息を吸い込んだ。

「お嬢さま……」

話しかける。美和子はぽかんとした目で太郎を見つめた。太郎から美和子に話しかけることはめつたにない。

「お嬢さま……ぼくはお嬢さまと”忠誠の誓い”をはたしました。ですからどんなことがあっても、ぼくはお嬢さまの召し使いとして忠実に従います。お嬢さまが結婚なされて、高倉夫人となってもそれは同じです。どうかご安心を……」

う……、と美和子はうつむいた。ハンカチを目にあて、涙を拭いた。

「ありがとう、太郎さん。あたし……あたし……あなただけが頼りなの！」

感動が巨大な波となって太郎に押し寄せる。太郎はただ、その波に必死に耐えていた。

そうだ、ぼくは”忠誠の誓い”をはたしたのだ！ だからどんなことがあっても、美和子の側にいて守るんだ！ それがぼくの召し使いとしての使命なんだ！

あらためて太郎はその思いを固くしていた。

## ケン太のモットー

ケン太が車に乗り込むと、洋子はアクセルを踏み込み、屋敷から道路へと進める。

「これからお屋敷へ向かいますか？」

後席でケン太はああ、とうなずいた。

その表情をミラーで確認して、洋子は内心首をひねっていた。どうしたというのだろう。真行寺家に向かうケン太はどちらかというと陽気だったのに、美和子と会ってからまるで拭い去られたようにその態度が影を潜めている。ぼんやりとした視線を車外に送っているケン太は、なんだか物思いにふけっているようだ。

ケン太に拾われ、かれの屋敷に奉公することになってそれほど時間とはっていないが、彼女の主人である高倉ケン太は謎の人物であった。

高倉コンツェルンの総帥という重責にある人物にしては、町の不良のようなこの格好。本来なら一流のスーツを着こなしてもおかしくはないはずなのに、つねにこのような派手な格好を続けている。かといえその態度は総帥という地位にふさわしく、めったに態度を荒げたこともなく、つねに冷静さをたもっている。

むしろよそよそしい、という言葉がぴったりくる。他人の前ではどちらかというと、あけっぴろげで、陽気な表情を保っているが、それは仮面にすぎないことを洋子はすぐ悟っていた。

彼女はケン太のメイドであるが、はたしてじぶんがそれにふさわしいのか、考え込むことがある。

なにしろケン太はどんなことも自分でやってしまうのだ。メイドがやるべき、部屋の掃除、洗濯など日常のこまごまとしたことを、かれはさっさと自分でこなしてしまう。最初のうち、洋子はそれらの仕事をしようとしたのだが、そのたびにケン太は丁寧に、だがきっぱりと断るのだった。

自分のことは自分でやる。

これが高倉ケン太のモットーらしい。

したがって洋子の仕事はいまはこの、ケン太の車を運転するくらいしかない。

あたしはメイドなのかしら、それとも運転手なのかしら……。

洋子は高倉家の屋敷へ車を進めた。

高倉家の屋敷に到着すると、ケン太はすぐに屋敷内の自分のオフィスに閉じこもった。しばらく会話はすべてキャンセルして、ケン太はどかりとデスクの椅子に腰をおろし、しばらく物思いにふけていた。

ちら、とデスクの上を眺める。

写真たてが目にとまる。

ケン太は腕をのばし、写真たてを引き寄せた。

一枚の写真が飾られている。やや色あせているが、一目でだれのものも奪う、ひとりの美少女がカメラの方向を見て笑っている。年令は十才以下か。あどけない、しかしこの年頃にしては周囲を圧倒する気品が漂っている。

写真の少女は、十年ほど前の美和子のものだった。

ケン太は熱心に写真の美和子を見詰めていた。ぼうつとしたかれの表情は誰にも見せることのない、うつろなものだ。

引き出しを開け、かれは一冊のアルバムを取り出した。

ぱらぱらとめくり、あるところで手を止めた。

一人の少年がまっすぐ前を見詰め、きちんと両手をのばした姿勢で写っていた。

髪の毛はきつちりと眉の辺りで切りそろえた坊っちゃん刈りであるが、これもまた少年のころのケン太であった。一枚ページをめくると、そこにはさっきの少女のころの美和子と、少年が並んで写っている。ふたりは仲がよさそうに手をつないで笑っていた。

ケン太はいつまでもその写真を眺めていた。

## 迷い

どたん、とおおきな音を響かせ美和子は道場の板敷きに倒れこんだ。

師範が叫ぶ。

「いかなされた？　いまのお嬢さまには迷いがございますぞ！  
そのような迷いがあつては、技を出すどころかまともに仕合すらできません」

言われて美和子はうつむいた。

呼吸がはやく、せわしく肩が上下している。師範は首をふつてしかたがない、というように眉をしかめた。

「よるしい……今日はここまでにいたしましょう。いまのお嬢さまのこのころの状態では、おもわぬ怪我をしそうですな」

ばた、と美和子は道場に膝をつき両手を板敷きについて頭を下げて謝った。

「申し訳ございません！」

師範の言つとおり、美和子の動きにはいつもの切れがない。

ケン太の登場がそうさせたのか？

太郎は道場のかたすみで美和子の稽古を見守っていた。

師範が道場を立ち去ると、美和子は手ぬぐいで汗をぬぐい、立ち上がった。出口へと向かう彼女に、太郎がつき従う。

袴をさばきながら美和子は屋敷へとはいり、自分の部屋へと戻っていく。太郎も一緒である。

このところ、太郎は美和子が屋敷にいるときはほとんど付き従っている。まるで美和子の影のようだ。

彼女の部屋にはシャワー・ルームが完備されている。

美和子はすぐに中へ飛び込むと身につけた稽古着を脱ぎ捨て、シャワーの音を響かせ始めた。太郎はドアの外で待っている。手には

すでに彼女の着替えを用意していた。

やがてシャワーの音がとまり、ドアの隙間から美和子のほそい腕が伸びてきた。太郎はその手に着替えを渡す。

着替えが終わって、美和子は出てきた。

今日の彼女は薄いレモン・イエローのブラウスにぴっちりとしたパンツといういでたちだ。髪の毛は後頭部でまとめてポニー・テールにしている。

美和子はすとな、といった感じで寝具に腰をおろし手に顎をのせた。あまり機嫌がよいくないことは歴然だ。

いきなり太郎に話しかけた。

「太郎さん、あたし迷いがあるかしら？」

「と申しますと？」

太郎は聞き返した。この場合、黙っているのは彼女の機嫌をさらに悪くさせる。

美和子は返事をせず「あーあ！」と叫ぶと、両手をあげそのまま上半身を倒れこませた。

あげた両手は首の後ろにまわし、ぼんやりと天井を見上げている。「あたしね…… どういうわけか子供のころからお転婆で、身体を動かすのが好きだったの。武道を始めたのも、小学生のころからだわ……。最初は技を身につけるのが楽しくて、毎日夢中だった。でも、なんだかちかごろ違う気持ちが出てきて うまく説明できないけど、物足りないのよ」

太郎は彼女の言葉の中に、あるいらだちを感じとっていた。おそらく、ずばり一言であらわせば、美和子はじぶんの実力を試してみたいという欲望に駆られているのだ。

他流試合。

美和子は太郎の知る限り、子供のころから同じ師範、おなじ練習仲間とともに鍛錬を重ねてきた。その結果、師範すら凌駕するほどの腕前を身につけたが、それは他の人間と手合わせしなくては実感できないのだろう。しかしそれは彼女にとっては出来ない相談だっ

た。また、美和子の語彙に他流試合という概念はないはずだ。

まだ見ぬ、見知らぬ他人との腕試しを美和子は無意識に欲求していることが、いまの言葉となって口を出たにちがいない。

だが太郎にとって、それを指摘することは美和子の欲求不満の問題を意識させることになり、さらなる苛々を嵩じさせることになる。

だから太郎は黙っているだけだった。

その時、美和子のドアをこつこつと叩く音がする。

振り返った太郎はドアに歩み寄り、開いた。

きょとんとした目の、美和子の世話をしているメイドの一人が立っている。彼女は太郎を目にして、なにか言いかけた。

「なあに？ あたしに何か用なの？」

美和子が頭をあげ、メイドに話しかける。メイドは恥ずかしさに真っ赤になってうつむいた。

「あ、あの……只野太郎さんにお客さまです！」

ぼくに？ と、太郎は驚いた。

メイドはひとつうなずくと、スカートの裾を翻してばたばたと足音をたてて駆けて行った。

なんだろう、と太郎は首をかしげた。

この大京市に太郎の知り合いは洋子ひとりしかない。その洋子も、いまは高倉家のメイドであるから、そう勝手に出歩くことはできないはずだ。

美和子をふりかえると、彼女は上半身を起こしてうなずいた。

「失礼いたします。どうやらばくに来客らしいので……」

うん、とうなずいて美和子はまたぱたりと寝具に身体をあおむかせた。すこし、お嬢さまらしくはないはしたなさだ。もっとも、こんなことをするのは、太郎の前にかぎられるが。



## 山田氏

来客とは山田勇作氏だった。

洋子の父親である。

すでに筆頭執事の木戸は、勇作氏を来客用の小部屋に案内していた。真行寺家にとって、そう重要ではない来客のあった場合、通される部屋である。しかし小部屋とはいえ、じゅうぶん広々として天井も高い。ほかの部屋から比べれば小部屋であるが、通常の家からすれば大広間と違っていい豪華さだ。

その応接セツトに山田氏はちんまりと膝をそろえて座っていた。

太郎が部屋に入ってくると、救われたような表情を見せた。真行寺家の屋敷の豪華さに圧倒されていたのだろう。山田氏が経営する執事学校はホテルとしてじゅうぶんな調度を備えているが、それでもこの屋敷からくらべれば相当おとる。

「やあ、太郎！ ひさしぶりだな」

「はい、校長先生もお変わりないようで」

その校長先生はやめてくれ、と勇作氏は手をふった。

「わたしはここではただの山田勇作だよ。執事学校の校長うんぬんは意味がない。それより手紙をもらった。洋子が高倉コンツェルンの総帥、高倉ケン太氏のところへメイドとなっているそうだな？」

「はい、元気そうでした」

あいつめ……と、勇作氏はつぶやいた。顔が渋面になっている。

ほつと息をつき、かれは椅子にふかく座りなおして腕を組んだ。

「まったくあの娘が置手紙を残して家を出たときほど驚いたことはなかったぞ。あれの母親はあれ以来、寝込んでいる始末だ。今日はなんとしても、小姓村に連れ帰ってやらねばならん！」

「と言うと、もしかしていまから高倉家に向かわれるおつもりですか？」

太郎の問いかけに、当たり前だと勇作は力んだ。

表情に決意があらわれている。

立ち上がった。

「それじゃ、これからすぐに高倉家に行かねばならん。君の顔を見たくて寄ったのだが、立派な召し使いになってくれて嬉しいよ」

太郎は頭を下げた。

勇作はつぶやいた。

「しかし、それにしてもこのお屋敷の筆頭執事の木戸という男。たいしたものだ。わしの執事学校とは関係ないそうだが、あれほど出来る執事は、そういないだろうな」

太郎はうなずいた。さすがに執事学校を経営するだけあって、一目見ただけで木戸の実力を見抜く勇作氏の眼力は確かである。

来るときと同様、山田勇作氏はあわただしく真行寺家を出て行った。

その後ろ姿を見送って、かれは首尾よく洋子を連れ戻すことが出来るだろうか、太郎は思っていた。

## 残照

結果としてうまくいかなかったようだ。

あとで山田氏から太郎に手紙が届いた。

その内容から、洋子と勇作氏のやりとりはつぎのようなものだった。

「どうしても厭、というのか？」

「厭よ！ 絶対、帰らない！ あたし、この家のメイドになったんだもの。お父さんがなんと言おうと、一人前になるまで帰らないわ！ お母さんにもそう言っておいて」

高倉家の庭にある東屋で山田氏と娘の洋子は顔をあわせていた。

山田氏はごく普通の背広姿だが、洋子はメイド服である。デザインはクラシカルなもので、しろいエプロンにはふんだんにレースがあしらわれ、足元の革靴にはちいさなりボンが紐をきゅっと締めている。このいでたちで現れた洋子は、驚きの目をみはる父親にたいし、自慢そうにスカートのはしを持ち上げて見せた。あこがれのメイド姿で現れた洋子に、山田氏はこれからの交渉の難しさを予感していた。

屋敷の全貌が見渡せるこの場所で、洋子は憤然と勇作氏の帰郷するようにという言葉を跳ね返していた。

なんどくり返しても洋子のがんと首を縦に振らない。

山田氏は疲れ果てた。

かれは執事学校の授業を思い返していた。

執事学校では召し使いとしての心得、そして誇りを繰り返し教え込む。それは理想的な召し使いになるには必須の授業だが、洋子には特に利きすぎたようだ。

背後の高倉家の屋敷をふりあおぐ。

山田氏の目には、高倉家の屋敷は異様に映った。いや、誰の目にも奇妙に映ることだろう。

まさに様式の混乱、といった言葉がぴったりとする。

天に高々と屋根を突き刺すようにそびえたつ母屋、その母屋に接続する大小無数の屋敷は空中通路でつながれ、壁には冷暖房のためのダクトが這い回っている。あとから思いつきで建て増しされた住宅は統一感のかけらもなく、ただただ実用一点張りの目的しかあたえられていないようだ。

母屋には高倉コンツェルンの紋章がかかげられ、夜には照明で明るく浮かび上がるのだそうだ。コンツェルンの総帥、高倉ケン太はこの屋敷を事実上のコンツェルン司令部として活用しているようだ。それよりも気になるのはこの屋敷にあちこち見受けられる屈強な身体つきの、目つきのするどい召し使いたちだ。

あきらかにかれらは武装している。

まるで軍隊の駐屯所にまぎれこんだような錯覚を山田氏は感じていた。かれらはきびきびと歩き回り、まるで兵隊のように足をそろえて行進していた。

そのことを洋子に聞いただと、彼女はまったく気にしていないようだった。

「あの人たち、高倉家の人たちのボディ・ガードだって。とっても忠実なのよ。ケン太さんの言いつけはもちろん、妹の杏奈さまの言いつけにも従うし、このお屋敷の召し使いたちって、とっても高倉家に忠実なのよねえ。執事学校の”忠誠の誓い”以上だわ」

娘の言葉に山田氏は不安を感じていた。

たしかに召し使いは主人への忠実さを期待されている職業である。しかしこのこの屋敷の召し使いたちの忠実さには、別の理由がありそうなの……。

それがなにか判らないが、かれの娘がそれに巻き込まれるのではないかと感じとっていたのだ。

ふと気づくと、屋敷を夕日が照らしている。  
もう夕刻に近い時刻である。

疲れ果てた山田氏は立ち上がった。

洋子への説得をあきらめざるを得ないようだ。小姓村への最終列車の時刻がせまってきた。

高倉家を立ち去ろうとする父親に、洋子のはじめて娘らしい表情を見せた。

「ごめんね。お母さんによろしく言うておいて。一人前になったと思えたら、かならず帰るって」  
うん、と父親はうなずいた。

とぼとぼと大京駅へむかうかれの背後に、高倉家の屋敷が残照のなか、黒々としたシルエットを見せていた。

## 発作

じりりん、とベルの音に太郎は顔を上げた。

屋敷内の、執事控え室である。用のない召し使いたちは、男爵や美和子呼び出すのを待ったためにここで控えているのだ。部屋の壁にはいくつものランプがまたたくパネルがすえられている。美和子か、男爵が召し使いたちを呼び出すためのボタンが各部屋には備えられている。ランプの位置で、どの部屋から呼び出されたかがすぐわかるようになっていいるのだ。

しかし呼び出しは裏の通用口からだった。ということは外来者がボタンを押したと言うことである。

今日は木戸は外出して屋敷にはいない。太郎が応対しなければならぬようだ。

太郎は立ち上がり、玄関に向かった。

玄関から通用口へと向かう。

通用口は通常、御用聞きとか配達のための入り口である。用のある人間は、通用口に備えられている呼び出しボタンを押すのだ。

裏口のドアを開くと、郵便局の制服を身につけた配送員が立っていた。配送員は一通の封書を手渡した。受け取りにサインして、太郎は珍しいこともあるものだと思っていた。

あて先は男爵になっている。

ふつつ、男爵への郵便物は週に一度、郵便局専用の袋に詰め込まれ配達される。それほど毎週の郵便物が多いのだ。それが今日は週に一度の配達日ではなく、しかも封書が一通だけ。いったいどこから届いた郵便だろう。

差出人の住所を確かめたい気持ちをぐつと抑え、太郎はそれ勝手に男爵の部屋へ急いだ。

そんなことをすれば男爵のプライベートへの侵害である。

急ぎ足で男爵の部屋へ向かう。

「ああ、太郎君か」

太郎がドアを開けると、男爵はぼんやりとした視線をよこした。その側に美和子が座っている。美和子の手には本がページを開かれたまま持たれていた。太郎の顔を見た彼女は、ぱたりと本を閉じた。男爵の車椅子は日当たりの良い、窓際におかれている。手許に男爵の老眼鏡があり、どうやらかれはうとうととしていたようだ。美和子は男爵のために本を朗読していたようである。細かな字が書かれている書物は、男爵の目にとって読みづらいもので、最近彼女が男爵のために朗読することがあるのだ。その最中にうとうととしてしまったのだろう。

男爵はいつも昼過ぎに昼寝をかかさないう習慣である。年でもあり、最近とみに身体の不調を訴えているせいで、昼寝は男爵にとって健康をたもつ唯一の方法だった。

時刻はまだ昼寝の時間にはやいが、今日はなにもすることがなく、美和子の朗読に聞き入っているうちに、ついうとうととしてしまったのだろう。

老眼鏡をかけた男爵は、太郎の手にした封書を目にした。

「手紙かね？ 珍しいな、一通だけとは」

はい、と太郎は返事して車椅子に近づいた。

机のペーパーナイフを使って封を切り、男爵に手渡す。老眼鏡を調節して男爵は封筒から中の紙を取り出した。

ひろげて日の光にかざすようにして読み始めた。  
引き下がろうとした太郎を男爵は呼び止めた。

「ああ、ちよつと待ってくれたまえ。もしかしたら返事が必要なものかもしれない。返事を書くまで、そこで待つように」

太郎は待った。

美和子は別の本を取り出し、今度は部屋の反対側に座って読み出した。今度はじぶんのための読書である。

老人は黙って文面を目で追った。ぶつぶつと口の中で文章を復唱

している。

静かな時間が流れていった。

と、男爵の表情が見る見る変化した。驚き、そして怒りがさしのぼる。顔色も変化した。

最初青ざめ、ついでどす黒く変色した。こめかみに血管が浮き、ぐくと呻きながら胸をかきむしった。無意識に老眼鏡をはずしていた。

かちゃん、と音を立て老眼鏡が男爵の手の中から床へ落ちていく。

「だんな様！」

その声に美和子が顔をあげた。

事態を見てとった彼女は悲鳴をあげていた。

「お父さま！」

美和子と太郎が駆け寄ると、男爵はぜいぜいと苦しそうな息のしただから言葉を押し出した。

「ば……馬鹿な……こんなことって……！」

ぐう、と喉の奥から奇妙な声を絞り出すとどた！ と、男爵は車椅子からころげ落ちた。震える指先で車椅子の車輪をつかみ、よじのぼろうと必死にあがく。ぐるり、と車椅子の車輪が動いて床に落ちた老眼鏡を下敷きにしてしまう。ぱりん、と小さな音を立て眼鏡のレンズが弾けとんだ。太郎は男爵の腕をつかみ、椅子に腰かけるのを手伝った。

男爵の顔色は紙のように白い。

ふたつの両眼が美和子の顔を見つめている。

「は……破産だ！ 真行寺家は破産した！」

なんですって……。

太郎はあつけにとられていた。

真行寺家が破産？

男爵の異変に太郎はすばやく反応した。

老人の身体をかかえあげると、寝室に連れて行き、寝具に横たえ



た。

服のボタンをはずし、胸元をくつろげ息ができるようにする。  
ひくつ、ひくつと男爵は発作を起こしていた。ときおり背中をの  
けぞらせ、全身が痙攣している。

いけない！

心臓発作だ！

美和子は蒼白になっていた。

太郎は腕をふりあげ、どんと男爵の胸にふり下ろした。すばやく  
男爵の胸に耳を押し当て、鼓動を確認する。

どく……どくん……どくどく……！

弱々しい心臓の鼓動が、途切れ途切れに聞こえている。

あきらかな不整脈である。

太郎は男爵の上半身にのしかかるようにして両手をつかって心臓  
マッサージを開始した。

これでもってくれればいいが……。

さつと美和子をふりむく。

彼女はぼうぜんと立ちすくんでいた。

太郎は叫んでいた。

「お医者さまを！」

はっ、と美和子は目を見開いた。

「早く！」

太郎はせきたてた。

見ている前で、男爵の顔色は見る見る紫色に変化していく。  
チアノーゼである。

その心臓が役目を終えようとしているのだ。

ばたばたと足音を立て、美和子は部屋の電話に飛びついた。  
ぐるぐるとハンドルを廻し、受話器にかじりつく。

電話の向こうで交換手が応対に出た様子である。美和子は悲鳴の

ような声で、男爵かかりつけの医者の名前を告げていた。

それを耳にしながら太郎は必死にマッサージを続けていた。ときどき太郎は口移しで人工呼吸を施した。

ふうーっ、と男爵はおおきく息を吸い込んだ。

それを確認して、太郎は額の汗をぬぐっていた。

脈を取ると、不整脈は変わらないが、さきほどよりは力強い鼓動が感じとれた。顔色もよくなっていく。なんとか太郎の応急手当は効果を見せたと言うことである。

男爵の目がぱちりと開いた。

ぼんやりと太郎の顔を確認する。

あたりを見回し、美和子の姿をさがす。

美和子は電話の前で床にへたりこんでいた。

美和子、と男爵の口が動いた。

太郎は「お嬢さま」とささやいた。

びくりと美和子の顔があがった。

男爵の意識が戻っているのを見て、ぱっと立ち上がり駆け寄った。

「お父さま！」

枕もとに膝まづいた。

ぶるぶると震えた男爵の手が、美和子を求めるようにあがった。

美和子はその両手で男爵の手の平をつつみこんだ。

かすかに男爵の口もとが動いた。

「美和子……お前を……」

そしてゆっくりと太郎を見上げる。

その目にいっぱい涙がたまる。

「この娘を……頼む！」

それだけ言うのがやっとのようだ。そのままがつくりと力が抜け、目を閉じる。

「お父さま、しっかり！」

美和子は声を励ました。

ゆすぶろつとする彼女の手を太郎は押しとどめた。

「お静かに……いまはお眠りになっておられます」

太郎の言葉に美和子は顔を上げた。

「本当？ 死んじゃったのじゃ、ないわよね？」

はい、と答えた太郎に、美和子は肩を落とした。

どうして、とつぶやく。

太郎は男爵の部屋へとつてかえし、床に落ちたままの手紙を拾い上げた。それを持って美和子の側へ戻る。

「これをお読みになっておられる間に、あのようなことに……」

受け取った美和子は食い入るように文面を読み始めた。

途中まで読み進めたところで顔をあげ、つぶやいた。

「破産……真行寺家が破産だなんて……」

ぱさり、と紙を床に落とした。額をおさえ、よろりと身体を傾けた。太郎は彼女の落とした紙片を取り上げ、文面に目を落とした。

拝啓、尊敬いたします真行寺男爵にこのようなお知らせをしなければならぬことを残念に思いますが、真行寺家を筆頭とする全株式、資産はすべて差し押さえの対象となりました。経過は以下に記したとおりで、あなたの……。

長々と説明が続いたが、結局真行寺家の全財産が奪われたこと、そしてそれは真行寺男爵みずからがサインをした一片の書類からはじまったことが記されていた。

文面の最後に、あらたな真行寺家の財産受取人の名前があった。木戸になっていた。

## 厨房

「その只野太郎さんの処置が良かった。あの場合、最善の措置ですな。もし心臓マッサージが遅ければ、手遅れでした」

真行寺男爵のかかりつけの医師は、耳につけた聴診器をはずしてつぶやいた。男爵は寝具に横たわり、その傍らに点滴の用意がなされ透明なチューブが腕の静脈に繋がっている。男爵はすやすやと寝息を立てている。老人の弱った心臓はいまはなんとか命を保っているが、いつその鼓動を止めるか判らない状態である。

男爵の部屋はにわかな病室となり、そこには美和子をはじめ屋敷の召し使いたちが心配そうな顔をならべている。が、木戸の姿はなかった。

太郎はゆつくりとその場から離れた。いまは太郎のすべき役目はこの部屋にはない。

かれは木戸を探していた。

男爵の財産すべてが木戸に奪われた！

なんとということだろう。

太郎は怒りに燃えていた。

あの書類……あの日、木戸が持ってきた書類がこの事態を引き起こしたことは明白である。

これは裏切りだ。召し使いが、しかも筆頭執事というもつとも主人から信頼されている召し使いがこともあるうに主人の財産をわがものにするとはい。

ひとり、廊下を歩く太郎の耳に、ざわざわというざわめきが聞こえてくる。

ぴたり、と太郎は足を止めた。

ささやき声は厨房から聞こえてくるようだ。

足音をしのばせ、近寄ると数人の人の声が聞こえてきた。そーっと覗きこむと、心配そうな表情をした屋敷の召し使いたちが額を寄せながら話し合っている。

「ともかく、男爵さまの財産はすべて失われたそうじゃないか！  
いまは男爵さまは文無し同然だつてよ」

押し殺した声ではあるが、熱心に話を続けているのはコック長の飯田である。ぎよろりと飛び出た目と、いまにも飢え死にしような痩身が特徴だ。話すたびに、長いコック帽がふらふらと揺れている。「それじゃあたしら、どうなるんだい？ 給料はもらえるんだろうね？」

それを受け、最年長のメイドの赤木という女が額に皺をよせてささやいた。

彼女の言葉に、その場にいた全員が顔を見合わせた。

ぽつり、と飯田がつぶやいた。

「もし給金が貰えねえ、つてことになる……おれたちや、飢え死にだぜ」

いまにも飢え死にしようなかが言う、それが真実味をおびてくる。ぞくり、と全員が青ざめていた。

「そんなことになる前に、このお屋敷の金目のものを……」

だれかがつぶやき、そのつぶやきに全員すばやく目配せしあった。

「おだやかではないな。泥棒の相談とは」

その言葉に全員、文字通り飛び上がった。

いつの間にか、木戸がそのひよろりとした姿をあらわしていた。

あいかわらず、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

「だれか言っていたな。このお屋敷の金目のものをどうにか、こうにかとかな」

飯田コック長がおもねるような表情で話しかけた。

「木戸さん、本気にしちゃいけませんや。あたしら、なんにもそんなこと」

「給金のことは心配しなくても良い」

木戸は断言した。

彼の言葉に全員、顔を見合わせる。

「みな、仕事はおなじように続けてくれ。給料は保証する」

「本当に……？」

うむ、と木戸はうなずいた。

## 木戸の熱弁

その会話を耳にして太郎は拳をわれ知らず、握り締めていた。

木戸は完全に主人きどりである。

その肩を、そつと叩く者がいる。

はっ、とふりむくと田端幸司のまるい顔があつた。しっ、と幸司は一本指を口の前にたてた。太郎はうなずいた。

こつちへこいよ、というように幸司はくいつと頭をかたむけた。

うん、とうなずき太郎は幸司とともに廊下に出た。

ほつとため息をつく、と、幸司は肩をすくめた。

「聞いたかい？ 保証する、だつてよ！ なんでえ、ご主人さまのつもりなのかよ」

幸司は知らないんだ、と太郎は思った。

つもりではなく、実際そうなのだ。いまや、この屋敷、そして真行寺家の財産すべては木戸のものになっている。それを説明すると、幸司は目を丸くした。

「そんなこと……違法じゃないのか？」

違ふ、と太郎は首をふった。

あの手紙にあつた法律上の項目は、すべて木戸が合法的に真行寺家の財産を受け継いだことを説明していた。太郎もなにか抜け穴がないかと何度も検討したが、遺漏はない。おそらく、腕利きの弁護士が書類を作成したのだろう。

「畜生！ なんてこつた！」

幸司は憤慨していた。ぱしっ、と音を立てて手の平に拳を打ち合わせる。

「なあ、太郎。おれ、ここ辞めるぜ」

「辞める？ どうして」

「あんなやつがおれのご主人様だなんて、馬鹿らしくてやれっかよ。コック長は別らしいけどな」

幸司は肩をすくめ、じろつと太郎を見る。

「おめえはどうすんだ。やつぱりあいつにお仕えするのかよ」  
「いいや、と太郎は首をふった。

「ぼくはお嬢さまと”忠誠の誓い”をしたんだ。だから木戸がここの持ち主となつても、お嬢さまにお仕えすることは変わりない」

「なるほどな。でも、お嬢さまがお前にどうやって給料をはらえるんだ？」

「そんなこと関係ないよ。給料がはらえるか、はらえないかなんてぼくはお嬢さまの召し使いだ。給料が払えないからって、辞めるわけにはいかない」

ふうん、と幸司は感心した。

「とにかく、頑張れや。おれはどつか別のお屋敷に勤めることにする。なあに、コックの口はどこにでもあるさ」

にやつと笑うと、ぽんと太郎の肩をたたきぐるつと回れ右して歩き出した。

「君も頑張れ！」

太郎のかけ声に、幸司はかるく右手をあげてこたえ出口へと去っていった。

見送った太郎はそつと厨房の中をのぞきこんだ。

木戸は召し使いたちに熱弁をふるっている。

じぶんがこの屋敷のあたらしい主人になったこと、真行寺家のあらゆる財産はかれの管理のもとにおかれ、したがってこれからの給料は木戸の名前で支払うこと。

太郎はしずかにその場を立ち去った。



## 美和子様の召し使い

召し使いは裏口の通用門から出入りすることになっている。

幸司はいつもの習慣で裏口に向かい、立ち止まった。

くると今来た廊下をふり返る。

「このままおさらばして、いいのか？」

つぶやいた。

いいや、と幸司は首をふった。

よくない！

絶対、よくない！

幸司は厨房へ戻っていった。

厨房の入り口から中をのぞくと、あいかわらず木戸が熱弁をふるっている。

「……だから諸君らの生活はわたしが保証しよう。いつもの仕事を続けられたい。なにか質問はあるかね？」

召し使いたちは顔を見合わせた。

何か言うべきなのだろうが、それが思いつかない。ただ、木戸の熱弁に圧倒されているだけだった。

「あるぜ！ 言いたいことはひとつ！」

がらり、と幸司は厨房の引き戸を勢い良く開いた。

ぎよつ、と召し使いたちがその音に一斉に幸司を見た。

「幸司、お前……こんなところで何をしている？」

先輩の調理人がつぶやいた。

木戸は幸司の闖入に眉をしかめた。幸司は腰に手をあて、ぐいと背をそらし木戸の顔を怖れることもなく見つめた。

そして召し使いたちのほうに顔を向け、口を開く。

「あんたたち、何か間違っていないか？」

え……？ と、召し使いたちは顔を見合わせる。

「あんたら真行寺男爵の召し使いだろう？ この木戸のおっさんの召し使いじゃないはずだ！」

幸司の言葉に、みな顔をうつむけた。木戸は唸り声をあげた。

「何を言う？ わたしが真行寺家の財産、企業を受け継いだのだ。給料もわたしが支払うと言っているのだ。わたしの召し使いで何が悪い？」

木戸の言葉に、幸司はふたたびかれの顔を見上げる。

「何を言ってやがんでえ！ お前なんか、真行寺男爵の代わりになるもんか！ 男爵の跡継ぎは美和子お嬢さまだ！ だからおれたちは美和子様の召し使いなんだ！」

ざわ……。

幸司の言葉に召し使いたちの表情が変わった。あらたな思いが、かれらの心中を一杯にする。

美和子様の召し使い……。

全員、口の中で幸司の言葉を復唱した。そのつぶやきは繰り返され、そのたびにかれらに確信が深まっていくようだった。

一変した部屋の空気に木戸の顔は険しいものになっていった。

幸司はにんまりと笑みを浮かべた。

対決！

木戸の部屋の前にたつ。

ドアは固く締め切られ、鍵がかかっていた。

太郎はポケットから道具を取り出した。鍵をこじあけるための道具である。先がまがつた金属の板を鍵穴にそつとさしこむ。何度か手さぐりを繰り返すと、かちやりと音がしてノッチが外れる音が響く。

太郎の受けた特殊訓練の成果である。

執事はあるとあらゆる状況に即応しなくてはならない。鍵開けの技術も、そのひとつである。

そつとドアを開き、中をのぞきこんだ。

執務室はがらんとしている。

大急ぎで片付けたのだろう。必要のない書類が床に散乱し、家具を移動したあとの、日の当たっていない壁はあたらしい色を残している。木戸はこの部屋から屋敷の、いままで男爵が使っていた部屋に移動することを決めていた。さつそくの主人としての決定である。机はそのままになっている。それまでの仕事がほおりだされ、筆記具や計算尺のたぐいが残されている。

引き出しを開け、中をさぐる。

やつぱりなにもめばしいものは残っていない。領収書とか、注文書のたぐいはかりだ。

太郎は肩を落とした。

なにか木戸の不正の証拠がないかと思って忍び込んだが、そんな尻尾をつかませるようなものを木戸が残すと考えるのが間違いだ。最初からそれほど期待はしていなかったが……。

「なにを探しているのかね？」

ぎくりとしてふりむくと木戸がにやにや笑いを口の端にはりつかせ、ドアの側にたっている。長い両腕をだらりとのばし、目は鋭く太郎を観察していた。

「木戸さん……」

「なにを探していた、と聞いている！」

太郎は黙っていた。

ひと声うなると、木戸は大股に太郎に近づいた。ぐっと太郎を上から睨みつける。

「こそこそと泥棒のような真似をしておって！ お前の受けた執事の教育とは、泥棒をするためのものか？」

「あんたこそどうなんだ！ 真行寺男爵の財産を奪ったのは、泥棒じゃないか！」

太郎は叫び返した。

木戸の右手がひゅつ、と動いた。

ぱしーん、と太郎の頬が鳴った。じいーん、と痺れに似た痛みがはしり、頬に木戸の手形が真つ赤に浮かび上がった。

「生意気言つな！ おれのやったことはすべて合法だ！ 第一、男爵は経営者としての適性がない。毎年、ぼうだいな額の金を慈善事業につぎこんできて、その穴埋めにおれがどれほど苦労したことか……。それももう、終わりだ」

「許せない……ぼくは、あんたを絶対許すことはできないぞ！」

木戸はせせら笑った。

「ほう、そうかね？ どうするつもりだ？ 法廷で争うか？ そんなことしても無駄だぞ。どんな検事だって、おれを訴追することはできないことはわかりきったことだ」

太郎は齒を食い縛った。

口の中をきつたのか、金臭い血の味が舌にからみつく。

「出て行け！ ここはおれの部屋だ。そしてこの屋敷もな！ 真行寺一家はおれの情けで屋敷内に住まわせてやろう。だが、お前にはびた一文、金は払わんど。つまり、首だ！ どこか、別の屋敷にも

ぐりこむか、他の仕事を探すんだな」

木戸の顔に嗜虐的な笑みが浮かぶ。

「ホテルのドア・ボーイなんかどうだ。おれが紹介してやってもいいぞ」

「ぼくはお嬢さまの召し使いだ。あんたがぼくを首にすることはできない！」

「金を払わん、と言ったのだぞ。聞こえなかったのか？」

「そんなの関係ない。ぼくがお嬢さまの召し使いでいることと、給料が払われる、払われないは別のことだ」

「馬鹿め……」

木戸は歯を剥き出しうなった。

太郎は横を向き、木戸の横をすりぬけた。

その時、木戸は身構えた。

やる気か！

太郎はさつと身を沈める。

ぶん、と音を立て木戸の足が旋回して太郎の髪の毛がふわりと揺れた。身を沈めた太郎はその反動を利用して前方に飛び出し、とんと両手を床について一回転して身を翻した。

はっ、と木戸が息をはき、ふたたび前蹴りをかけてきた。さつと太郎は一步引き下がってそれをかわす。

屋敷の長い廊下でふたりはにらみ合った。

木戸はにやつと笑った。

「やるな！ お前も執事の格闘術を習っているのか？」

「あんたもそうだろ。召し使いなら、当然のことだ」

ふむ、と木戸はうなずくと構えを解いた。

ぼん、ぼんと両手をたたくとわざとらしく服のほこりを払う仕草をする。

「やめだ、やめ！ お前と勝負しても、おれにはなんの得もない。汗をかくだけ馬鹿らしい……」

ふつと太郎も背をのばした。

まったく同感である。

召し使いの習得する格闘術は、ほんらい主人を暴漢などの攻撃からまもるためのものだ。死闘に使うたぐいのものではない。

くるりと背を向け、太郎は歩き出した。

背中に木戸の声が投げかけられた。

「後悔するなよ。お前はもう、召し使いでもなんでもないのだ！」  
違う！

太郎は激しく胸のなかで叫び返した。

ぼくは美和子お嬢さまの召し使いなんだ！

男爵の部屋へ向かうと、なんだか慌しい。

ばたばたと何人もの足音が交錯し、見かけるメイドや召し使いたちはうつろな表情になっていた。

どきん、と太郎は不吉な予感がした。

まさか！

メイドの一人が顔を真っ赤にさせ、口を手でおおってばたばたと走ってくる。太郎は彼女の手首をつかんでじぶんの方に引き寄せ話しかけた。

「なにがあつたんだ？」

あ！ とメイドは太郎の顔を認めた。そのまま表情がくしゃくしゃに歪む。

「男爵さまが！ だんな様が！」

「なんだって？」

わっ、と叫ぶようにメイドは泣きながらそのまま駆け去ってしまった。

まさか……まさか！

太郎は部屋へと急いだ。

ドアを開けると、その場にいた全員が顔をあげ太郎を見た。美和子はすうりとした背をのびし、静かにベッドの男爵の顔を見つめている。

太郎は足音をしのばせ、美和子のそばに近寄った。

気配に彼女は太郎の方に顔を向けた。

はっ、と太郎は美和子の顔を見つめた。

大きな目にいっぱい、涙が浮かんでいる。

「男爵様は？」

美和子はうなずいた。

「たった、いま……」

ぽつりとつぶやく。

「そうですか」

太郎は美和子の横に立ち、男爵の顔を覗きこんだ。

まるで眠っているようである。いますぐにでも起きだして、あの

陽気な声を張り上げてもおかしくはなかった。

脈を取る医師は、沈痛な表情であった。

懐中時計を取り出し、宣告した。

「午後二時十分でした。やすらかなお最期でありました」

うつうつ……と、だれかが鳴咽を漏らした。

それをきっかけに、その場にいた召し使いたちはこらえていた涙を流していた。

くたくた、と美和子はベッドの横に膝まづき、男爵の身体にかけられている掛け布団に顔をおしあてる。肩が細かく震えていた。

## 破産

男爵の葬儀に出席したのは、おもに屋敷で働いていた召し使い、それに男爵の資金の援助をうけていた慈善団体の職員などで、奇妙なことに血縁者の姿はほとんどなかった。

男爵その人が高齢であり、おもだった近親者はすでに先立っていたということあるが、このような高貴な家柄の主人の葬儀にしては淋しい顔ぶれではある。

真行寺家は無宗教に近く、そのため葬儀そのものもあつさりとしたものになった。真行寺家が破産宣告を受けていたこともあり、葬儀会場は墓所のある寺の境内で行われることになった。

喪主の美和子は全身黒づくめのスーツに身を包み、ひっそりと来客者を迎えていた。

来客者は美和子の顔を見ると痛ましそうな表情になり、ぼそぼそと悔やみの言葉をかけ急いで焼香をすませる。美和子はその来客にかすかに頭を下げ、礼を言うのだった。

太郎は会場の入り口で来客の受付をしていた。香典を受け取り、金額をノートに書き入れる仕事である。ぬつ、とおおきな手が香典袋を押し出し、太郎の目の前の机にすべらせた。

顔を上げると木戸と目が合う。

「木戸さん……」

太郎の顔がこわばった。木戸はにやりと薄笑いを浮かべた。

「お悔やみにきた」

どうぞ、と太郎は言うしかない。弔問にきた客を追い返すことは召し使いの領分ではない。

大股で木戸は男爵の遺影が飾られている葬儀会場に入っていく。かれの姿を認めた美和子の顔も一瞬、けわしいものになったが、それでも気丈に耐えていた。



軽く木戸が頭を下げると、彼女も礼を返す。

遺影に頭を下げ、焼香をする。

焼香を済ませた木戸は、遺影に背を向けぐるりと周囲を見渡した。

葬儀に出席していた男爵の召し使いたちは、木戸の視線をさけるかのようにうつむいた。

かすかに木戸の唇が開き、歯がむきだしになる。じっとひとりひとりの顔を舐めるように見つめていく。

視線がむけられた召し使いたちははっ、と顔をあげるが木戸の視線にまたあわてて顔を伏せた。

木戸はにやにや笑いを浮かべ、それらの様子を眺めていた。まるで新しい主人はおれだぞ、と宣言しているようである。

満足したのか、木戸はふたたび大股に会場を出て行った。

その後ろ姿を、太郎はじっと見つめていた。

葬儀が済んで、美和子はふたたび屋敷へと帰った。彼女と共に、

部屋に入った太郎はあっ、とちいさく口の中で叫び声を押し殺した。となりで美和子もぼうぜんあたりを見回している。

「これは……」

つぶやく。

太郎もまた驚いていた。

部屋中の家具に赤い紙が貼られている。近づいて見ると、みな「差し押さえ」という文字が読み取れた。

そうか……男爵家は破産したんだ。それがようやく実感としてこみあげた。美和子を見ると、なんの表情も浮かんではいない。

「ほかの部屋も見てきます」

太郎がそう言うと、ぼんやりと美和子はうなずいた。

太郎は大急ぎで廊下に出て、屋敷中の主だった部屋をまわった。来客用のラウンジ、男爵の仕事部屋、書斎、図書室……。

すべての部屋に真つ赤な紙がべたべたと貼られていた。

美和子の部屋に取って返すと、彼女はちからがぬけたようにベッドに腰かけていた。上掛けに彼女の制服がひろげられている。

「女学院の制服だけは紙が貼られていなかったわ。そのほかの私服は、ぜんぶ差し押さえになったから、いまはこれ一着があたしの服ってわけね」

つぶやいて、制服を手にする。

太郎は拳を握り締めた。

美和子は顔をあげた。

「太郎さん、いまのあたしにはお金がないの。あなたに給料は出せません。だからもう、召し使いを続ける必要はないわ。ここを出てどこか別のお屋敷に勤めたらどうかしら？　それでも父の知り合いは沢山いるから、紹介だけはできそうよ」

太郎は首をふった。

「いいえ、それは出来ません。ぼくはお嬢さまに忠誠を誓った召し使いです。給料がぼしくて召し使いになっているわけではありません。ですから一生、お嬢さまの側で働くつもりです」

きっぱりと言い切る。

美和子は驚いたように目を見開いた。

太郎は笑顔を見せた。

「つまり、いまのぼくはお嬢さまの筆頭執事ということになります。よろしいですね？」

彼女は首をふった。

「わからない……あなたがいてくれるのは嬉しいけど、でもこんな重荷、あなたに背負わせるわけにはいかないわ」

「重荷なんかじゃない！」

太郎は叫んだ。

美和子は顔をあげた。

「お嬢さま、いつか真行寺家を再興させましょう。いまはこんな状態ですが、きっと明日はよくなります。この只野太郎、微力ですが」

お手伝いをさせていただきます！」

美和子の目がうるんだ。

「ありがとう……なんて言って良いか判らないけど、とにかくありがとう……」

その時、来客をつげるチャイムがやわらかく鳴り響いた。

だれだろう、と太郎は窓に近寄り玄関を眺めた。

赤いガクランが目にとまる。

美和子をふりむいた。

「お嬢さま、高倉ケン太さまがお見えです」  
えっ、と美和子は立ち上がった。

## 称号

美和子の部屋に通されたケン太は、中を一目見てちつとちいさく舌打ちをした。

「なんてことだ……こんな無粋なまねをするとは信じられん！」

あたりに氾濫している差し押さえの紙を見て表情をくもらせる。

つかつかと美和子の側に近づくと、頭を下げた。

「お父さまのこと、今朝知りました。お悔やみを申し上げます」

ありがとうございます、と美和子は丁寧な礼を言った。ケン太の後ろから、ひとりの少女があらわれた。高倉ケン太の妹、杏奈である。彼女は女学院で、美和子に対し激しい闘志をむき出しにしていたが、今日の彼女は大人しげで口数も少なかった。

ケン太は腕を上げて、あたりを指し示した。

「こんな紙が貼られているとは、知りませんでした。すぐぼくが資金を出しますので、明日にでも外せると思いますよ。心配しないでください。真行寺家のことは知っています。高倉コンツェルンが援助をしますから、あなたはいつもどおりの生活を続けられます」

そしてちらりと笑顔を見せた。

「それに結婚のことも。こういうことになったいまこそ、ふたりの結婚の話も進めておくべきだと思っんです。ぼくはあなたが女学院を卒業するまで待つといいましたが、撤回します。いますぐ、結婚を申し込みます。それが亡き男爵の遺志だと思っんです」

そう言うとき美和子の顔を覗きこんだ。

「どうしたんです？ 嬉しくはないんですか」

ふつと美和子は首をふった。

「せつかくのお申し出ですが、お断りします」

ぐい、とケン太の眉が持ち上がった。

杏奈もまた、驚いたように美和子を見つめている。

美和子はまっすぐケン太の顔を見つめ、口を開いた。

「それではわたしはあなたの持ち物のひとつになってしまいます。あなたのお金で生活し、結婚式をあげるなんて、わたしにはできませんわ」

「しかし真行寺家は破産したんですよ」

「わかっています。しかしわたしはなんとしても真行寺家を再興させるつもりです。それこそが、亡き父の想いだと思います」

「でも、どうやって……？」

ケン太の問いに美和子は悩ましげな表情を見せた。

「判りません……判りませんが、でもあなたの援助によって生活するなど、耐えられませんか」

顔をそらせた美和子に、ケン太は一息ため息をついたが、すぐまた笑顔をのぼらせた。

「なるほど……お話しはよく判りました。やはりあなたはぼくの思っていた以上に誇り高い娘のようだ。いいでしょう、結婚の話はやめにしましょう」

ケン太の言葉に妹の杏奈はかすかに顔を赤らめた。

その代わり、とケン太は指を一本たてた。

「真行寺家の再興について、ぼくにひとつアイデアがあるのですが、聞いていただけますか？」

「どのようなことですか？」

ケン太はガ克蘭の内ポケットに手を入れた。一枚の紙を取り出し、美和子に手渡す。後ろから見ていた太郎は「番長島トーナメント」という文字を認めていた。

美和子は眉をひそめた。

「これが、なにか？」

「それはぼくが所有する島で行われるトーナメントのポスターです。賞金の額を見てください」

「大変なお金ですね」

「それだけあれば、真行寺家の再興には充分ではないですか？　たしかにかつての真行寺家の財産にくらべれば、十分の一にもたりませんが、一企業を所有するくらいの資金にはなります。その資金を手がかりに財産を運用すれば、再興がかなうと思いますが」

美和子の顔にじよじよに血がさしのぼりはじめた。

「このトーナメントに出場せよ、と仰りたいの？」

「そうです。格闘のトーナメントです。ルールは単純、戦いに勝ち抜き、最終的な勝者になれば、賞金が手に入ります。その賞金はたしかに高倉コンツェルンが用意したのですが、それは問題ないでしょう。手にするもしないも、あなたが勝ち抜けるかどうか、だけなのですから」

美和子は考え込むような表情になった。

ケン太はおつかぶせた。

「それに聞くとところによりますと、あなたはさまざまな武道を習得しているというではないですか。喧嘩のための武道ではありませんが、しかし戦いは戦いです。どうです、あなたの腕で勝ち抜き、賞金を手にして見ませんか？」

美和子はポスターの文字を読み進んだ。

首をかしげる。

「“来たれ全国のバンチョウ、スケバン諸君”……このバンチョウ、スケバンってどういう意味ですか？」

「どちらも喧嘩が強い者への称号のようなものです。男の場合はバンチョウ、女はスケバンと呼ばれます。美和子さんが勝ち抜けば、スケバンという称号で呼ばれることになるでしょう」

「あたしにその“スケバン”になれ、と仰るのね……」

ケン太の瞳がきらめいた。

「そうです、ぼくはあなたに“スケバン”になってもらいたいんです」

「なぜ……？」

「ぼくはそのバンチョウという称号を得ているからです」

「あなたが？」

「そうです！」

ケン太はくるりと背を向けた。

背中に刺繍されている”男”の文字がきらめいた。

「この”男”の文字が縫い取られているガクランは、代々のバンチョウが受け継いできた伝説のガクランです。ぼくは五年前、戦いに勝ち、ガクランを受け継ぎました。バンチョウという称号はぼくにとって大事な誇りなんだ。だからあなたにはスケバンという称号を得てもらいたい！」

ふたたび美和子に顔をむけたケン太は熱心な表情になった。

「伝説のバンチョウとスケバン、似合いのふたりだと思いませんか？ その上で、ぼくはあらためて結婚を申し込みたい！ いや、返事は結構。とにかく、トーナメントに出場してください。お話しはそのあとでいいでしょう」

美和子は唇を噛みしめた。

「すこし……考えさせてください……」

つぶやく。

ケン太はうなずいた。

「判ります。いきなりの話で驚かれましたよう。番長島へのトーナメント参加への手続きは一週間以内に締め切ります。それまでに考えをまとめてください」

さつと背中を見せると、ケン太は出口へと向かった。

その出口にひとりの男が姿を現した。

ひよろりとした痩身、ひどく背が高く、ぺたりと髪の毛をオールバックにしている。

木戸であつた。

## 美和子の決意

太郎は目を見張った。

木戸はなぜかケン太に対しうやうやしく頭を下げ、言葉をかけた。

「お車の用意ができております」

うん、とケン太は当然のようにうなずいた。

目を丸くしている太郎と美和子にたいし、ケン太は肩をすくめた。

「言い忘れた！　じつはこの木戸君は近ごろぼくの召し使いとなつて奉公することになったのだよ」

「木戸さん！」

太郎は叫んだ。

木戸はにやりと笑った。

「何を驚いている。わたしにふさわしい主人は高倉ケン太さまひとりだ。召し使いはじぶんの実力を認めてくれる主人を選ぶ権利を与えられているからな」

太郎の顔色は変わっていた。美和子のかれの表情を見て戸惑いを見せた。

いまの太郎はいままで彼女が見たことのない表情を見せている。只野太郎は怒りに身を震わせていたのだ。めったに見せることのない、太郎のむきだしの感情であった。

ふふん、と木戸はそんな太郎を見て冷笑した。

「馬鹿なやつだ。そんなに感情をあらわにするやつがいるか！　執事はつねに冷静であれ……執事学校の教えではないのかね」

ふつと太郎は息を吐き出した。その顔色は平常にもどっている。

「その通りです。執事はつねに冷静でなくてはなりませんね。木戸さん、あなたの選んだケン太さんが、あなたにふさわしいご主人であることをばくも願っていますよ」

無言で太郎と木戸は視線を交し合った。目に見えない火花が散っているようだった。



先に目をそらしたのは木戸だった。

「では、わたしは車でお待ちいたしておりますから……」

つぶやくと背を向け、出て行った。ケン太はそんなふたりの様子を面白そうに見ていたが、出口へと向かった。

妹の杏奈は立ち止まっている。

ケン太は彼女を見た。

「どうした、帰らないのか？」

「ちょっと、美和子さんにお話があるの。お兄さま、それまで待つていただけるかしら？」

ふむ、とケン太は肩をすくめた。

「まあいい、お前も美和子さんとは女学院で通った仲だからな。なにか話があるのだろう。車で待つているからな」

そう言つとさっさと部屋を出て行った。

残された杏奈はゆっくりと美和子に近づいた。わざとらしく差し押さえ状が貼られた家具に指をすべらせる。

「この家具も、その本棚の本も、みな美和子さんのものではなくなつたというわけね。破産というのはみじめなものよね……」

彼女の言葉に美和子は顔を上げた。

「なにが仰りたいの？」

ふ……と杏奈の口の端に笑みが浮かぶ。

「あなた、まだお兄さまに未練があるのね」

美和子の頬に赤みがさした。

「どういう意味？」

「考えさせてください、なんて言ったけど、あなたトーナメントに出場するつもりでしょ？　そう顔に書いているわ！」

杏奈の言葉に美和子は頬をおさえた。やっぱりね、と杏奈は皮肉に笑った。

「そしてトーナメントで優勝して、お兄さまと結婚するつもりなん

だわ。そうすれば賞金はあなたが自分のちからで勝ち取ったことになるし、お兄さまと一緒にになれば高倉コンツェルンの財産もじぶんのものになるものね。考えたものよね！」

美和子の拳がわなわなと震えていた。

「そんな……そんなこと考えていないわ！　だいいち、トーナメントのことも今日はじめて知ったし、高倉家の財産なんてそんなこと……」

杏奈はあざけるような表情になった。

「どうかしらね？　でも、あたしがそうはさせないからね！　スケバンの称号はあなたに渡さない！」

美和子はぼかん、とした表情になった。なにかとんでもない勘違いを、杏奈はしているようだと思っただ。太郎も思った。

「あたしもトーナメントに出場します！　そしてあなたを打ち負かして見せます！」

杏奈は宣言した。

「あなたが……？」

美和子はあつけにとられた、といった表情になっていた。

ぼうぜんとなっっている美和子を尻目に、杏奈はふん、と顎を上げるとさっさと部屋を出て行った。

残された美和子は太郎を見つめた。

「どういうことでしょう？　杏奈さんは、なにか誤解していらっしやるようね」

そうですね、と太郎は同意した。

それにしても、美和子はトーナメントに出場するつもりだろうか？

「あたしトーナメントに出るつもりです」

ケン太と妹の杏奈が帰ると、美和子はきっぱりと太郎に宣告した。

「そして優勝して、その賞金で真行寺家を再興するわ！　よろしく  
てね」

はい、と太郎は頭を下げた。

最初からこうなるのではないか、と思っていた。美和子の返事に、太郎は微笑していた。太郎の微笑に、美和子は首をかしげた。

「どうしたの、太郎さん。嬉しそうね」

「いえ、お嬢さまこそ、なんだか生き生きなさっておいでです」

ま！　と、美和子はじぶんの顔を手で押さえた。

「あたし、そんな顔をしているかしら？　トーナメントに出場する  
ということは、喧嘩をしなくてはならないのよ。あたし、喧嘩した  
がっているように見える？」

いいえ、と太郎は首を横にした。喧嘩ではない。これは仕合なの  
だ。美和子はじぶんでは気づかない、格闘家としての本能が目覚め  
かけているのだ。太郎の見たところ、美和子は格闘家としての才能  
は抜群である。その才能が彼女にトーナメントへの出場を決意させ  
たのだろう。

「お嬢さま。わたくしもお供させていただきます」

「あなたも？」

「はい、筆頭執事として、お嬢さまにご不便をおかけすることはで  
きませんから」

「でも、トーナメントということは、危険がともなうのではないか  
しら。あたしはいいいけど、あなたは……」

とても喧嘩が出来るようには見えない、と言っているような目で  
美和子は太郎を見た。太郎は大丈夫ですと言いたい気持ちをぐっと  
こらえた。

美和子は知らないのだ。

太郎は執事教育の一環として、格闘技の訓練を受けている。それ  
が役立つときがきた！　自分の身を守るだけでなく、もしかした  
ら美和子の身も守ることになるかもしれない、と太郎は考えていた。

「わたくしも、島へお供いたします。よろしいですね」

押して重ねる太郎に、美和子は圧倒されたようにうなずいていた。島への出発に一週間の準備期間がある。

その間に、太郎はあることをひとつやりとげておこうと思っていた。

## 執事協会

大京市の中心部、官庁街の一角にその建物はあった。

十階建て以上の、目も眩む高さにそびえるビル郡にあつて、その建物は平凡な、三階建ての古ぼけた建物である。古い様式の、窓にちいさな張り出しがついた、アール・デコ形式の飾りがいかにも時の経過を物語っている。

ちいさな階段がついた正面玄関には、木の板の看板が掲げられていた。

看板には太く、墨で

### 「執事協会」

とあった。

ここは、執事協会の本部なのだ。

小姓村の執事学校を卒業するとき、太郎は校長の山田勇作氏からこの協会のことを知らされていた。

召し使いの権利を守るための協会　しかし同時に不正な手段を行使した召し使いを排除するための協会でもある。

太郎は玄関のスイング・ドアをくぐり、一階の受付へと進んだ。

受付には三十代なかばと思われる、眼鏡をかけた痩せた女性がなにか書き物をしている。太郎が近づくと、気配を感じて顔を上げた。

「はい、なんでしょう？」

太郎は名刺を差し出した。女性は眼鏡をずらして名刺を読み取った。

「真行寺筆頭執事只野太郎さん　ははあ、真行寺家の破産宣告は知っていますよ。お気の毒ですね。それで、つぎの就職口をお探しのかしら？」

「いいえ、真行寺家の破産にたいし、救済措置を申請したく参上いたしました」

眼鏡の奥の瞳がおおきく見開かれた。

「しかし……それは執事協会としては……」

太郎はうなずいてた。

「そうです、協会はいくまで召し使いと主人の正常な関係を保つための調停機関、破産にたいする救済措置はその職務ではない。しかし今回は特別なのです。ぼくはある召し使いの不正を訴えにきたのです」

女性の顔が厳しいものになった。

「それは大変なことです。わかつているのですか？ 召し使いの不正を訴えるということは、その召し使いの主人の不正にもつながります」

「ええ。承知しています。しかし、今回は特例を認めていただきました」

女性は立ち上がった。

「ここではお話しできませんわ。あまりに重大なことなので。こちらへどうぞ」

受付のカウンターをまわり、女性は奥のドアへ太郎を案内した。

ドアを開くとちいさな執務室になっていて、机のむこうの椅子に彼女は座った。机に両手をのせると、その手の平を組み合わせた。

「さて、お話しをうかがいましょう。わたしは当執事協会大京市本部の本部長、芳川と申します」

芳川と名乗った彼女にうながされ、太郎は正面の椅子に腰かけた。太郎は説明を開始した。

「真行寺家の財産がいまはもと執事の木戸に所有されることになった事情はご存知でしょうか？」

「いいえ、詳しい事情は知りません」

「ぼくは独自に調査したのです。その結果、男爵のおおくの株式は故意に値を引き下げられ、原本割れを引き起こした結果、男爵は破産なされました。そしてその株式はふたたび買い戻され、いまは木戸の手中にあります」

芳川本部長の目が驚きにまるくなった。

「それは……もしかして？」

「そうです。これは計画倒産ならぬ、計画破産の疑いがあります。木戸の乗っ取りだと、いまは確信しています。ぼくは法務局に出向き、真行寺家が支配していたおおくの法人の定款を調べました」

太郎はそう言うと言内懐からメモを取り出した。きちんと整理されたメモを芳川は食い入るように読んでいく。

最後まで読んだところで、彼女は顔を上げた。

「これはなんでしょう？」

太郎は答えた。

「ある書類の複写です。どうぞ、お読みください」

メモの最後に、一枚の写真がはさまれている。写真は書類の複写らしい。こまかな字がびつしりと書かれているが、写真は鮮明にそれを撮影していた。芳川はじつとその複写された書類を読み込んでいった。

それは木戸が男爵にサインを求めた書類をひそかに郵送したとき、太郎が危険をおかして郵便局の配達車に忍び込んでカメラに収めたものだ。太郎は自分にあたえられた部屋で見つけたカメラを使用可能な状態にもどし、身につけていたのだった。それが役に立った。予感にみちびかれ、あの行動をしたのだったが、こんなことに役立つとは思ってもみなかった。

芳川表情が怒りにこわばっていた。

「これは真行寺男爵にたいし、木戸の行為すべてを全面委託するという書類ですね。ということは、木戸氏の行動すべて男爵の事後承諾のもとにあり、どのようなことでも承認されることになる……それが男爵家の全財産を没収するようなことでも！」

太郎はうなずいた。書面は複雑な法律用語でつまり、素人には解読不能なほどだったが、執事協会の芳川は一目見て理解できたようだった。

「これは……許せん！　このような不正が許されるなら、わたしたち召し使いは安心して主人への奉公が不可能になります。それで、あなたはうなされたいのかしら？」

「適正な場所と、時期を選んで、この調査結果を公表してもらいたいです。そうなれば、検察庁が動くでしょう。木戸の不正はこれで正される可能性がある」

本部長はおおきくうなずいた。

「よろしい！　わたしどもはあなたの行動を逐一追うことになるでしょう。そしてあなたの言う、適正なタイミングを知ることになる。それでよろしいのね？」

はい、と太郎はうなずいた。



## コンツェルン

「トーナメント？ お嬢さまがそれに出るって？」

幸司のつぶやきに、コック長は長い顔をふってうなずいた。

真行寺家の厨房である。幸司の説得に、召し使いたち一同はふたたび仕事に立ち戻り、コック長以下、調理人たちもいつもの料理の下ごしらえにかかっている。

「そのトーナメントって、どんなやつだい？」

「お前、知らないのか。高倉コンツェルンが大々的に宣伝しているだろう？ 優勝すれば、ものすごい大金をせしめることが出来るって……全国から、腕自慢が集まっているそうだぜ！」

「そんななお嬢さまが出るのか。つまり、その金で……？」

「そうさ、真行寺再興のためには、大金が必要だ。お嬢さまはそれに出場して、優勝するおつもりらしい」

ふうん、とため息をついた幸司に向け、コック長はぐすんと鼻をこすり、目頭をおさえた。

「なんと御いたわしいことだ……世が世なら、お嬢さまはそんなお金の心配などすることなく、ご勉学に励む年頃なのに……」

コック長の嘆きはつぶやきとなり、愚痴になった。

幸司はそんなコック長の愚痴を、まるで聞いてはいなかった。

かれの頭にある考えが渦巻いていたのである。

自分は腕っぷしなどまるでないし、喧嘩なんかしたこともない。だからお嬢さまの加勢をするなんて無理な話だ。だけど、自分らしいやり方で、お嬢さまをお助けすることは出来るんじゃないか？

そうだ、これなら……。

幸司はコック長に向き直った。

「ね、そのトーナメント、高倉コンツェルンが主催するっていうこ

とだよな？」

ああ、そうだとუნずいたコック長を尻目に、幸司は飛び出した。おい、幸司と呼びかけるコック長の言葉を背中に聞き、屋敷を出て行く。

屋敷を出て、幸司は高倉コンツェルン本社を目指した。

高倉コンツェルンの本社は、高倉ケン太自身の屋敷が兼ねている。高倉ケン太の屋敷は、真行寺家の屋敷からずっと離れたところにある、バスと電車を乗り継ぎ、到着したときはすでに午後の遅い時刻となっていた。

高倉家の正門に立ち、幸司はさてと腕を組んだ。勢いに任せやってきたのはいいが、これからどうすればいいか、まるつきり考えがない。

頑丈な鉄門の隙間から屋敷を覗くと、数人の召し使いだろうか、屋敷をゆっくりと歩いている。しかしただ歩いているわけではなく、警備をしているようだ。思ったより、高倉家は警戒厳重のようである。

ちちちち……とかすかな音に幸司は正門の上に目をやった。ちいさなカメラが遠隔操作で動いている。

駄目でもともと、幸司はそのカメラに手をふった。

「おおーい！　ちよっと！　家の人、だれかいませんか！」  
大声を上げる。

きつ、と屋敷内の警備をしている召し使いたちが正門で騒いでいる幸司に目を留めた。

ただだ……と駆け足でやってくると、鉄門の向こうから声をかけた。

「おいつ、なにを騒いでいる！」

しめた、と幸司は鉄門に顔を押し付けた。

「ね、番長島つてところでトーナメントやるって、この高倉コンツ

エルンのことだよね！ おれ、それで話しにきたんだ！」

幸司の返事に、召し使いたちは妙な表情になって顔を見合わせた。ひとりが尊大にうなずき、返事する。

「そうだ、お前、トーナメントに出場するのか？」

そう言つてにやにや笑いながら幸司のいでたちを眺める。屋敷から飛び出した、コックの制服のまま、ころころとよく肥った幸司の姿は、とても喧嘩が得意には見えない。

「違うよ！ トーナメントには出場者のための料理が出されるんだろっ？ おれ、調理人として雇ってもらおうと思つてきたんだ」

それで召し使いたちは納得したようだ。が、かれらは首を横にした。

「トーナメントの調理人はすでに決まっている。いまさら新しい料理人を雇うという余地はないよ。あきらめて帰んな！」

召し使いの返事に、幸司はがつくりと肩を落とした。

駄目か……美和子お嬢さまのために良い考えだと思つたのだが……。

そこに「どうしたの？」と、女の声がした。

召し使いたちはさつと背を伸ばした。

やってきたのは、メイド服を身につけた女の子であつた。血色のいい、ふくよかな頬に笑窪が浮かんでいる。

「はあ、この少年がトーナメントの調理人のひとりに加えてくれと申しておりますが」

へえ、と彼女は明るい笑みを浮かべた。

彼女のほほ笑みを見て、幸司はぼんやりとなつていた。年は幸司と同じくらい。彼女のほほ笑みは、幸司にとってまぶしいものにつつていた。

「ね、あたしが話を聞くから、門を開けてもらえないかしら？」

そうですね、と召し使いたちは内側から鉄門の開錠装置を操作し

た。

鉄門はなめらかに開いた。

いらつしゃいよ、と彼女は幸司を差し招いた。

「それじゃ、あたしが話を聞きます。いいわね？」

彼女の言葉に召し使いたちはかるく頭を下げる。かれらの態度に、幸司はあつけにとられていた。

屋敷を案内され歩き出した幸司は彼女に話しかけた。

「すげえなあ……召し使いたちあんたの言いつけに従うなんて。あんた、もしかしてこのお屋敷のお嬢さま？」

幸司の言葉にぶつ、と彼女は吹き出した。

「そんなんじゃないわよ！ あたし、高倉ケン太さま付きのメイドのひとりにすぎないわ。ただ、あたしがケン太さま専属だから、あの召し使いたちは敬意をはらっているの。あたしにじゃなくて、あくまでケン太さまに対してだけよ」

なるほど、と幸司はうなずいた。彼女は幸司に向き直った。

「ところで、あたしは山田洋子って言うの。あなたは？」

あつ、いけねえ……と幸司は頭をかいた。

「ごめん！ 自己紹介がまだだった！ おれ、田端幸司。こう見えてもコックなんだ」

そんなの見れば判るわよ、と洋子は笑った。

ころころとよく笑う洋子に、幸司は好感を持った。

「トーナメントの料理人って言ったわね。なんとかなるかも……」

洋子の言葉に幸司は希望を持った。

「本当かい？」

ええ、と彼女はウインクをした。

「あたしに任せて！」

うん、と幸司はうなずいた。

なせばなるもんだ、とかれは思った。

そんな幸司の顔を、洋子にはこにこと見つめている。その視線に、

幸司はわれ知らず顔が赤らむのを感じていた。  
こんなに長い間、女の子と話したことはなかったのだ。

## 海風（前書き）

いよいよ美和子と太郎が番長島へ向かいます。お楽しみに！

## 海風

海風が美和子の髪の毛をねぶっている。

日差しは強く、太郎は美和子のためにグラスにレモン・ジュースを用意して盆にささげもって近づいた。太郎に気づいた美和子は、差し出されたジュースのグラスを礼を言っ受取った。

「とうとう来てしまったわね」

つぶやくと船端に身をもたれさせる。

見渡す限りの水平線。出発した大京市の港は、もう水平線の向こうに隠れ、見えなくなっている。

美和子は船に乗り込む直前の出来事を思い返していた。屋敷に別れを告げ、玄関のドアを開けたとき、彼女は思いがけない光景を目の当たりにした。

なんと、玄関の前に屋敷中の召し使いたちが勢ぞろいして彼女を出迎えていたのである。

かれらを前に、美和子は驚きのあまり立ちすくんでしまった。彼女の背後に、太郎が静かに控えている。

「お出かけでございますか？ 美和子お嬢さま。それならわたしの運転でいらつしやいませ！」

正装した運転手の制服を身にまとった、羽佐間が満面の笑みを浮かべ、声をかけた。かれの背後には、真行寺家の高級車が静かなアイドリングの音をたて止まっている。

「あ、あの……これは？」

驚きのあまり、美和子はうまく言葉を重ねることができなくなっていた。羽佐間のほか、屋敷中の召し使いたちはいつもの美和子の外出の時のように、玄関に勢ぞろいし、にこにこほほ笑んでいた。

「お嬢さま、わたしどもは美和子お嬢さまが真行寺家の再興を賭け、番長島トーナメントという大会へご出発なさることを知りました。わたしどもは何も出来ませんが、こうしてお見送りすることがわたしどもの義務だと思い、こうして集まったのでございます」

五十年、屋敷の窓の開け閉めを続けている老人が声をかけた。かれは屋敷の中でもっとも古株である。その目には忠誠心があふれている。

「どうぞご無事でお帰りなさいますようお祈りしております……」

そう言つと老人は深々と頭を下げる。その細い肩が、かすかに震えていた。

召し使いたちが一斉に頭を下げる。

かれらを前にした美和子の顔は真つ赤に上気していた。

「あなたたち……あたしに……有難う……」

目に一杯涙がたまっている。召し使いたちも鼻をくすん、くすん言わせ、すすり泣くのを必死に耐えていた。羽佐間が口を開いた。

「美和子さま、わたしどもはみな美和子さまの召し使いです。たとえ主家が破産しようと、それは変える事が出来ません」

そう言つとかれは車のドアを開いた。その側に立ち、美和子を見上げた。

美和子は太郎と共に車の後席に乗り込んだ。

それを確認して羽佐間は運転席に座る。

「では、大京埠頭までお送りします」

いつもの外出のときと同じ口調で羽佐間が話し掛ける。美和子はうなずいた。

「羽佐間さん、お願いしますわ」

はっ、とかれは一礼し、車のアクセルを踏み込んだ。

行つてらっしゃいませ！ と、召し使いたちが声を揃えた。



## 覆面

海面を、いま美和子が乗り込んでいる客船と同形船が船足をそろえ、進んでいた。全部で四隻。一隻あたり二、三百人ほど乗り込んでいるから、全部で千人以上乗り組んでいる計算になる。

全員「番長島トーナメント」の出場者である。

今日の美和子は大京女学院の制服に身を包んでいる。白い上着に紺のスカート。スカート丈は膝よりすこし長い程度で、短くも長くもしていないノーマルなままだ。

そんな彼女のいでたちは、この船の中ではいかにも目立っていた。太郎はそつとあたりの出場者たちの服装を見回していた。

まともな格好の者はひとりもない。みな、学生服であるが、これらの学生服はどこか長すぎるか、短すぎるか、あるいは太すぎるか、細すぎるかで、おおもとのラインを極端にディフォルメしていた。

さらには沢山のアクセサリーが服を飾り、それらが身動きをするたびにじゃらじゃらとこすれあい、金属の表面は日差しを跳ね返している。

武器を手をしているものも多い。

バット、チェーン、アイアン・ナックル、竹刀、木刀など。武器の持ち込みは、拳銃のような銃器と弓矢、日本刀のような刃物のついたもの以外は認められていた。

出場者たちの男女の割合は八対二といったところか。数少ない女の出場者たちはいちようにどぎつい、下品とっていい化粧をほどこし、あたりの男たちに敵意むき出しの視線を投げかけている。

太郎は彼女たちの中に、高倉杏奈の姿を探したが、どうやらこの

船には乗り組んでいないようだ。それとももしかしたら出場そのものをあきらめたのかもしれない。どうかそうであってくれ、と太郎は思っていた。

その中でひとり、太郎の目をひいた女性の参加者がいた。

中国の拳法家がよく着る、道服というのか、ゆったりした上下に足もとは軽い中国靴を履いている。上着は半そでで、しろい腕がむき出しになっている。なにより目に付くのは、彼女が顔のほとんどを隠す覆面をしていることだ。目のあたりをわずかに見せるだけで、顔のほとんどは布に覆われている。髪の毛もその覆面のしたに隠され、見えない。

太郎の目を引いたのは、彼女のいでたちではなく、かすかな船の揺れに対応するその身動きであった。よく鍛錬された、武道家のみが見せる、全身の筋肉の動きを太郎は見てとった。

かなりの使い手らしい……。

ちらりと見たただけであったが、太郎の目は彼女の修行の成果を直感していた。

と、彼女の目がちらりと太郎を見た。

はっ、と太郎は目をそらした。

どこかで見たような彼女の視線。

覆面の下からのぞいた彼女の目は、太郎をみとめかすかににやりと笑いの形を作った。

いったい誰だろう。ぼくの知っている女性なのだろうか？

## コック

美和子の出場には、太郎はほとんど不安を感じていなかった。太郎の観察するところ、出場者のほとんどは専門的な格闘技の訓練をうけておらず、ただむやみやたらとあたりに喧嘩をふっかけるだけの、無鉄砲さが身上である。

それに比べ、美和子は幼いころから正式に武道の訓練を重ねて来ている。ちよつとした身動きにも、彼女がいかに鍛錬しているか太郎の目にはあきらかだった。とはいえ、美和子が強さを披露しているということではない。長年の鍛錬により、身動きに無駄がなく、まるで舞を踊る名手を見るような優雅さが彼女には備わっているのだ。それが気品につながり、それを理解できない人間には彼女はただの上品なお嬢さまとしか映らない。

たぶん、出場者の九割は美和子の相手にならない素人だ。太郎はそう判断していた。

しかし杏奈にとってはどうだろう。美和子からの対抗心から、彼女は武道を習い始めたということだが、太郎の見たところ素人とはとんど変わらないレベルである。もし無謀にも、このトーナメントに出場すれば、酷い目にあう確率が高いのではないか？

美和子のグラスが空になり、太郎はそれを受け取って船のレストランへと向かった。船内には乗客のため、レストランが無料で開放されている。酒類はおいていないが、そのほかの食べ物、飲み物はふんだんに用意されている。レストランはそれらを求める乗客で混雑していた。

グラスを返そうとカウンターに差し出すと、その向こうから声をかけられた。

「よう、この船に乗っていたのか！」

はっ、と顔を上げるとまんまるな太っちょの少年の顔が目に入った。

田端幸司だった。

「君は……」

幸司は太郎を見て片目をウィンクさせた。

「美和子お嬢さまがこのトーナメントに出場するって聞いてね、あちこち手を尽くしてコックとして入り込んだんだ。もしものとき、こんなおれでも役に立つんじゃないかと思って……」

うん、と太郎はうなずいた。

「うれしいよ。きつと美和子お嬢さまもお喜びになる」

そうかあ……と幸司は満面の笑みになった。

しかし太郎はこうつけくわえるのを忘れなかった。

「ただし、きみはトーナメントの闘いには参加しないでくれ。こんな大勢の人間がお互い本気で喧嘩をするんだ。まきこまれたら、どういうことになるか判らない。君の役立つときは、きつと来るからそれまで自重するようばくからも頼む」

うん、と幸司は素直にうなずいた。

「わかってるさ。おれだって馬鹿じゃない。喧嘩は苦手だし、そのほかのことできつと役に立つさ！」

じゃあ……と片手を挙げ、太郎はその場を離れた。ちらとふりかえると、幸司は先輩の調理人になにを怠けていたと叱られているところだった。

太郎は甲板に戻った。

## 番長島

美和子の姿はさきほどの場所から動いては居ない。甲板にも乗客が満載で、それらをよけつつ太郎は歩いていく。そんな太郎を、まわりの参加者はじろじろと見つめてくる。視線だけを動かし、太郎はかれらを見た。

太郎の視線が向けられたさきの出場者たちは、視線が合うとじろりとこちらを見つめ返してくる。たいていは太郎のいでたちを見て、あまり警戒心をいだく相手ではないと判断するのか、ぷいと横を向くか無視するのだが、たまにどんな相手でも威嚇しなければ気がすまないという性質の者もいて、まるで犬が吠えかけるような表情になつて睨みつけてくる。

本来なら船旅は楽しいものだが、この船に乗り合わせた乗客たちにとって安息とは縁のないものらしい。おたがいちらちらと盗み見あい、相手の力量をおしはかろうとしている。ちよつと身体が触れただけでも、怒りが爆発しそんな緊張感が満ちていた。

ぶおーっ！

ふいに汽笛が鳴り響き、その場にいた全員がびくりと飛び上がった。

「な、なんだ？」

ひとりがうろたえたようにあたりを見回している。恐怖に、顔色は真っ青になっている。案外、気が小さい男らしい。

「島だよ。島が見えたんだ」

隣の男がうんざりしたようにつぶやいた。最初の男はほつとしたように汗をぬぐった。

「な、なんだ……島か……へっ、脅かしやがる」

そう言うつとわざとらしく背をのばす。

じっと見つめていた太郎の視線に気がついたのか、顔を真っ赤に染めて怒鳴った。

「な、なんでえ、なにじろじろ見てやがる？」

いえ、と太郎はかすかに頭を下げた。

けっ、と男はしたうちをした。じぶんの醜態に後悔しているようだ。

ぞろぞろと甲板にでていた全員が船端に駆け寄った。島が見えたという報せに、好奇心を刺激されたのだろう。

太郎も美和子の側に戻り、水平線の向こうに視線を凝らす。

島影が見えていた。

「あれが番長島というのね」

眩しいのか、彼女は片手を目の上にひさしにしている。前方の海面は太陽の反射でまぶしくくらいにきらきらと輝いている。その輝きの向こうに、白っぽい崖がそびえていた。

崖の上には無人の建物がひしめいている。

太郎はこの島に来る前に、図書館で歴史をあらかた学んでいた。

島の歴史は半世紀以前にさかのぼる。

そのころ、この島は「軍艦島」と呼ばれていた。島の上部に立てられた無数のビル、建物が遠目に軍艦の上部甲板の構造物に似ていたためである。

そのころは島では石炭が採掘されていた。

しかし石炭が掘りつくされ、採算がとれなくなると島を所有していた企業は権利を国にゆずり、公有地とした。しばらく無人のまま放置されていたこの島をあらたに所有したのが高倉コンツェルンである。高倉コンツェルンは島の名前を「番長島」とあらため、こうしてトーナメントの会場として蘇らせたのだ。もともとは映画の撮影用に買い取ったらしいのだが、肝心の映画の計画が中止され、島

の所有権だけは保持していたらしい。それが今回のトーナメント開催で生きたわけである。

## トミ一滝

島が近づき、波止場が見える。もともと小さな船が利用する小規模な波止場があったのだが、高倉コンツェルンはこの島に大規模なものを構築していた。しかしすべての船がひとつの棧橋につけられないようだ。もともと島の規模がちいさいからである。四隻の船は、島の東西南北にわかれて接舷を開始した。

客船が横付けすると、すぐさま階段がおろされ、乗客が上陸を開始する。

波止場はすぐに降りてきた乗客によって立錐の余地もないほどに混み合った。

と、波止場に隣接していた建物から数十人の高倉家のお仕着せを身につけた召し使いたちがやってきて、その人ごみに入り込み、なにかを渡し始めた。

それを受け取り、太郎は見つめた。

渡されたのはバッジである。デザインは高倉コンツェルンの紋章が浮き彫りになり、銅でできている。裏に安全ピンがあり、服につけられるようになっていいる。召し使いたちはそれを身につけているよう、説明した。

周囲の出場者は素直にしたがい、おのれの服にとりつけはじめる。しばらくその作業で手許に集中していたため、それが近づいてくるのをだれも見えていない。

ふいに頭上に影が差し、みな空を見上げた。

ぐおおん……。

低い唸りを上げ、四基のエンジンがプロペラを回転させている。



上空を、ゆつたりとその葉巻型の銀色の物体が漂ってくる。

飛行船だった。

横腹に「TAKAKURA」と描かれた、高倉コンツェルン専用の宣伝飛行船である。

と、いきなり周囲に音楽が鳴り響いた。

ショーの開始を報せる、陽気で豪華なビッグ・バンドの演奏である。

トランペットが金属的な響きをあたりにまきちらし、ドラムが思わず手足が動き出しそうなりズムをきざむ。飛行船がゆつくりと横を向くと、その横腹に巨大なテレビ・スクリーンが用意されていた。スクリーンの中には、どこかの会場らしき様子が映し出されている。演壇があり、数本のマイクが立てられていた。

そこへ軽快な足取りと共に、ひとりの人物が音楽のリズムに乗りながら姿を現した。

「グッド・イブニング！ 兄ちゃん、姉ちゃん、ミーちゃん、ハーちゃん、老いも若きも……と、老いはいなかったね。みんな、みんなお若い人ばかり！ それとも何かな、年ごまかしてるなんてアリ？」

派手な格好をしている。

まっ黄色のスーツに、真っ赤なパンツ。真っ青なシャツと、まるで交通信号のような色合いの衣装に、さらにピンクとミント・グリーンの水玉模様のほかでかい蝶ネクタイといういでたちの人物である。

頭は真ん中からぺたりとポマードでかため、両端がとがった三角形のレンズの眼鏡をかけている。

上唇にはまるで描いたようなコールマン髭をたくわえ、終始にやにや笑いを浮かべていた。

悪趣味の国から悪趣味をひろめにきたようなその格好の人物は、

マイクに口を寄せ前屈みの姿勢になり、早口で喋り始めた。

「ようこそ番長島へ！ トーナメントの開催でござんすよ。あたし、このトーナメントの司会を勤めさせていただきます、トミー滝と申します。あしからず、おこんにちわでございます」

いひひひ……と、トミー滝は下品な笑い声をあげた。

ざわざわ……と出場者たちがざわついた。

「司会ってなんでえ？」

ひとりが声をあげた。

その声が聞こえたように、トミー滝は驚いたような表情になった。聞こえたわけはなく、おそらくアドリブであろうが、まるでそう思えるほど絶妙のタイミングだった。

「あんら、ご存知ない？ よろしいざんすか、みなさん。このトーナメントの様子は、全国ネットでテレビ中継されているんでござんすよ！ この番長島のあちこちにはテレビカメラが仕掛けてあつて、島中でおきているあらゆることをモニターしているんで、ありんすよ！ ですから、みなさんがこの島で戦った場面は、すぐさま全国の視聴者のみなみなさまが、見ることになるって寸法……。よかつたざんすねえ、あんたら今日からテレビ・スターになるかもしれないかもしれません！」

その場にいた全員が顔を見合わせた。なかにはテレビカメラを意識してか、髪の毛をとかしはじめた奴もいる。

太郎はすばやくその場を見回した。

と、その気になって注意すると、島の廃墟となったビルのあちこちに、ちいさなカメラが取り付けられているのを認めた。おそらくあれがテレビ・カメラなのだ。

ポケットからトミー滝はバッジを取り出した。島に到着してすぐ、

全員に渡されたものと同じである。カメラがズームして、それを大写しにした。

「みなさん、注目ですよ！ これ、ご存知ですね。あんたらが渡されたバッジ、こいつは常に身につけてくださいよ。なんでかって、つまりこいつはあんたらの身分証明ってやつで、この島にいるあいだ、いろいろなサービスを受けるための目印になるんでございます。この島にはみなさんのためのホテル、レストランなどがいくつも用意されておりますです。このバッジをつけていれば、それが利用できるってこと。おわかりかな？」

全員が服につけたバッジを確認している。トミーはそれが見えるかのように画面の中でにやにや笑いを浮かべながらうなずいている。

「よろしゅうござんすね。それと、トーナメントを勝ち抜くためバッジが必要です。相手をやつつけた場合、そのバッジが勝利の証しってわけです。相手を倒したら、相手のバッジは倒した者の手に入るってことです。しかし十人、百人倒して、それだけの枚数を用意するのは大変でござんしょう？ そこで、島のいくつかに両替所を用意しました。銅のバッジ十枚で銀の、銀のバッジ十枚で金のバッジに交換できます。ただし、銀のバッジを銅に変えることはできません。銀のバッジ一枚で十人、金のバッジ一枚で百人の相手を倒したと見なします。最終的に一番多くのバッジを手にした者が優勝賞金をいただけるってわけ！ さっきも言ったように、ホテルやレストランはバッジがなければ利用できません。バッジを奪われた人は、見つけしだい、大京市へ送還されます。つまりトーナメント参加資格でもある。トーナメントは午前八時から午後六時まで行われます。その時刻以外でバッジを持たない人間は島にいられません。またその時刻以外で戦うことは禁じられます」

これだけのこと一気にまくしたてると、トミー滝は全員を見渡し

た。みな、あつけにとられてトミーの長広舌を聞いている。

「みなさん、お判りになりましたですね？ それでは暫時、しばらく、リトル・タイムお別れでござんす」

ふたたび音楽が鳴り響く。

手足を舞わすように、リズムにのりながら、踊るようにトミー滝は退場した。スクリーンは暗くなる。

## 勝又勝

ざわめきは終わらなかった。

その場にいた全員が、自分が受け取ったバッジに見入っている。これが島への滞在証明書というわけだ。

「面白え……つまり、強い奴がバッジを沢山持っていられるってわけか。判りやすいぜ」

その声に太郎は顔を上げた。

群衆の中に、ひととき背の高い男がにやにや笑いを浮かべあたりを睥睨している。

傷だらけの顔、鋭い目つき。ぼろぼろのガクランに学生帽。

太郎は思い出した。大京市に最初に来た日、トーナメントのポスターの前で出会った男である。あまりに強烈な印象で、記憶にあざやかに刻み付けられていた。

男は手近の人間にいきなり拳をふるった。

がつ！ という音がして、殴られた相手は数メートルふつとんで地面に倒れる。衝撃で、目を白黒させている。

さつと近寄ると、男は相手を引き寄せ、その胸のバッジを引き千切った。

「まず一枚目だ！ 次はどいつだ？」

咆哮する。

さあつ、と男の周りの人間がいなくなった。ぽかんと空いた中に美和子だけが残った。

男は美和子に気づいた。

「なんでえお嬢ちゃん。逃げること知らねえのかい？」

美和子はゆっくりと首をふった。

「あたし、逃げはいたしません。それにあたしの名前は真行寺美和子と申します。あなたにお嬢ちゃんと呼ばれる理由はありません。あなたの態度はとても失礼だと思います！」

ぐるるるる……と、男はまるで獅子のような唸り声をあげた。眉がひそめられ、目が細くなる。全身が油断なく、身構えられた。

かれは相当の腕前らしい。太郎は男が本能的に美和子が手ごわい相手であることを見抜いたのを見てとった。

ゆつくりと男は美和子に近づいた。

「そうかい、あんたが名乗ったんだ。おれも名乗ろう。おれは勝又かつまた勝かつっていうんだ。おたがい名乗ったんだ。どうだい、ここでお手合わせ願えねえかい？」

「よろしいですわ！」

さつと美和子は身構えた。

勝の肩が盛り上がり、低く構える。

と、いきなり猛烈な勢いでダッシュすると美和子に接近し、両腕をのばしてその肩を掴む。にやり、と勝の唇が笑いに歪む。

しかしつぎの瞬間、勝の顔は苦痛に歪んでいた。

美和子の腕があがって、指先が勝の両肘を掴んでいた。彼女の細い指先が、肘の付け根の神経の集中している箇所に入り入っている。うおおお！ と叫ぶと、勝は思わず美和子の身体から離れていた。悔しさに、顔が真赤に染まっていた。

腕をふるい痛みをこらえると、勝はふたたび掴みかかった。こんどは美和子の手首を掴んでいる。

美和子はほほ笑むような表情になると、すつと身体を沈めた。どう手首をひねったのか、いつの間にか身体が入れ替わり、今度は勝が手首を掴まれ、ひねりあげられている。

くそ！ と叫ぶと勝はじぶんから地面に倒れこんだ。美和子は引き込まれまいと、さつと勝の手首を離す。

地面に倒れこんだ勝は足を伸ばして蹴りをいれた。美和子は宙に浮かび、それをかわす。

その間、一瞬で立ち直った勝は立ち上がると猛然と殴りかかってきた。

美和子の身体が沈み込む。長い髪がふわりとゆれた。

どう！ と、勝は肩を中心として一回転していた。

美和子の鮮やかな投げ技であつた。

投げられた勝はあおむけに倒れこみ、その後頭部を地面の石に打ちつけていた。

がき、といやな音が響く。

うーむ……と唸り声をあげた勝の両目がひっくり返り、白目になっていた。かく！ と勝の全身からちからが抜ける。

かれは気絶していた。

ふっ、と息を吐き美和子は乱れた髪を直した。

みなあつけにとられていた。

「すげえ……」

ひとりのセーラー服を着た女の参加者がつぶやいた。賛辞の表情がそこにはあつた。

その時、太郎は上空をふりあおいだ。

飛行船が空中に停止していた。

まるで監視していたみたいだ、と太郎は思った。

## モニター

「いまのは撮れたか？」

無数のテレビ・モニターが光る中、高倉ケン太はささやいた。このトーナメントを中継するためのテレビ・スタジオにある、モニター・ルームであった。

はい、ばっちりですと背後のスタッフのひとりが返事をする。モニターには島でのあらゆる出来事が映し出されている。美和子と勝の争いもまた、テレビのカメラは捉えていた。

「いまのはつかえるな！ トーナメントの初戦としては絵になる」  
ケン太のつぶやきに、背後のスタッフから賛意があがる。このトーナメントは高倉コンツェルン主催で、テレビ番組として全国に放映をしている。さっきの戦いも、わずかな時間で編集され、ハイライトとして全国に流れるはずだ。

「視聴率が出ました。現在、八十パーセントを越えています」  
うおおお、というどよめきがスタッフの間からあがる。番組は大成功である。ケン太はそのどよめきに眉をしかめた。

「そんなことで浮かれるな！ この視聴率をいかに維持することが大事だぞ」

ケン太の言葉にスタジオ内に緊張がはしる。

かれは美和子にも見せたことのない、独裁者の顔をあらわにしていた。

ケン太の椅子の背後には、洋子がひかえていた。

いまは彼女はメイドのお仕着せになっている。

彼女の目は無数のモニターのうち、ひとつに吸いつけられていた。



画面には太郎が映し出されている。カメラのアングルからすると、相当高い場所から見下ろしているようだ。飛行船の船首にあるカメラが望遠レンズで太郎を狙っていたのだ。

洋子の視線を追ったケン太は、にやりと笑った。

「只野太郎か、美和子についてきたんだな。さすが執事学校の卒業生はどんなときでも忠実だ」

「それが教えですから」

ふむ、とケン太は肩をすくめた。

と、かれは興味津々といった様子でモニターを食い入るように入った。

太郎の側にひとりのガクランを着た男が近づいてくる。あきらかに太郎を標的としていた。

ケン太は座りなおし、結果やいかにと待ち受ける。

## ヌンチャク

おうおうおう！ と、甲高い嘖れ声、といった奇妙な声でひとりの学生服の男がよたりながら太郎に近づく。

太郎はちら、と男を見た。

背が低く、貧相な顔つきの男である。学生服を着ているが、どう見ても年はたちをとうに越えているようである。もっともこの場にいる全員が、学生服を身につけながら、どう見ても学生という年頃とは思えない。

おうおうおう！ と男はもう一度、声を張り上げた。どうやら威嚇しているらしい。

「おめえも出場しているのかよ？」

ひっこんだ奥目が執念深そうに太郎をねめまわした。男の言葉に太郎はちよつと考え込んだ。

じぶんは美和子の世話をするためにトーナメントの開かれている番長島へとやってきた。参加しているかと言われれば、そうですとは一言で返事するにはためらいがある。かといえ、無関係ですと言いつ返すことも躊躇された。

その様子に男は太郎を組みやすしと判断したようだ。

にやりと笑うと、男は背中から武器をとりだした。短い二本の棍棒を、縄でつないだ奇妙な形をしている。ヌンチャクである。はつ、と美和子はその様子を見て息を呑む。

男は喚き声をあげ、ヌンチャクを振り回した。真っ向から振り下ろすヌンチャクの棒を、太郎はわずかな身動きをただけで軽くよける。たしかにヌンチャクは危険な武器だ。ただし、それを操る人間が達人のばあいのみである。そうでないとき、それは揮う人間にとって危険な場合が多い。

ぶん！　ぶん、とうなりをあげる男のヌンチャクを、太郎は楽々とかわしていった。

大振りではやくも息を切らしていた。

「て、てめえ……逃げやがるだけで卑怯だぞ……」

だらだらとこめかみから汗をしたたらせ、男は真っ赤になって喚いた。太郎はそんな相手を哀れに思った。たぶん、かれはトーナメントに本気で参加したわけではないだろう。おれはここにいた、と自慢したいだけで応募したに違いない。なるべくなら強い相手をさけ、最初に手にしたバツジを後生大事にかかえ、こそこそと逃げ回るつもりだったのだ。しかし小柄な太郎を見て、これなら勝てると踏んだのだ。

その感情が太郎の表情にあらわれたのを見てとった男はかつとなったように突進した。

「野郎！」

おめくと力を込めて振りかかる。

太郎はかすかに身をひねってその突進をさけ、足をちょっとだけ出した。

「わっ！」

太郎に足を引っ掛けられ、男はずでんと転倒した。

「野郎！」

叫ぶと立ち上がり、ぐるぐると滅茶苦茶にヌンチャクを振り回した。

こーん！　と、軽く乾いた音が響く。

……！

男は白目をむいていた。

なんと男は自分で自分の頭に棍棒を当てていたのだ。このような

特殊な武器は、よほどの達人でなくては使いこなすことは至難の業である。

ふら、と男は一步前にでる。

もう一步動こうとして、男はどう、とばかりに仰向けにたおれた。完全に気を失っていた。

太郎は身をかがめ、男からバツジを取り上げた。

美和子にバツジを差し出す。

「これはお嬢さまに差し上げます」

「太郎さん、あなた……」

美和子はあつけにとられていた。

「あなた、こういう心得があるの？」

いえ、と太郎は首をふった。

「たんなる偶然です。ぼくはただ、身をかわしただけですよ」

太郎の答えに、美和子は疑わしそうな表情になった。

彼女とて一流の武道家である。自分の動きを見て、なにか感じとったんだな、と太郎は察していた。しかし召し使いとしては、彼女に自慢する気はなかった。あくまでも美和子の影にひかえる、それが太郎の流儀だ。

美和子は太郎の差し出したバツジを受け取った。

きりつと顔をあげ、島の中心を見る。

「行きましょう！ 夜六時までにはまだ時間があるわ！」

はい、と太郎はうなずいた。

ふたりはその場を去っていった。

## サイレン

「面白い！ やつの動きを見たか！」

椅子の肘掛けを握りしめ、ケン太は身を乗り出していた。背後に控える洋子はかすかにうなずいた。

ちら、と洋子を見たケン太は彼女に尋ねた。

「聞いたところによると、小姓村の執事学校では格闘術を教えているようだな？」

ケン太の問いに、洋子はうなずいた。

「はい、ご主人様を守るためのものです。決して、じぶんから戦いを挑むものではありませんが」

ふうん、とつまらなさそうにケン太は自分の顎をなでた。かれの顎はきれいに剃りあげられている。洋子が毎朝、剃刀をあてているのだ。これだけが、洋子にまかされているケン太の身の回りの世話だった。ケン太は髭の薄い体質で、朝きれいに剃りあげれば、一日もつのである。

「一度、あいつの実力を見てみたいものだ」

そこまでつぶやくと、なにかを思いついたようににやりと笑った。「おい！」

呼ばれてスタッフの一人が近づいた。ケン太の手の動きに、耳を寄せる。ケン太はその耳になにかをささやいた。スタッフはうなずいた。

くるりと背を向け、スタッフは背後の通信室に消えた。

なにをささやいたのだろうと、洋子は不安になった。

まあなにがあるうと、太郎の実力からすればなにほどもないだろうが、と彼女は思い直した。

ぱちりと目を開き、勝はむくりと起き上がった。  
さささつ、と倒れた勝を覗き込んでいた群衆の輪がひろがる。

じろり、と勝はものすごい怒りの表情でまわりを見わたした。  
時刻は夕刻ちかくで、勝の顔をオレンジ色の夕日が染めていた。  
その夕日に照らされた勝の顔は、まるで怒りに燃えた仁王像のようだった。

すつくと立ち上がると、腕をのばし、手近にいた学生服の男の襟首を掴んだ。つかまれた男は、わっと叫んで宙に持ち上げられる。  
片手で楽々と吊り上げる、ものすごい勝の腕力である。

「あの女、どこへ行った！」  
顔中口にして勝は怒鳴った。

ひえ、と学生服の男は怯え上がり、その股間からたらたらと湯気をたてて小便をもらしていた。勝の怒鳴り声だけで、魂が千切れるような恐怖を味わっているらしい。

「どこへ行った？ 言え！」  
「し……知らねえ……あんたとやりあって……あのお付きのやろうとどっかへ行っちゃったよう……」

顔を真っ赤にさせ、勝は掴んでいた手を離れた。

ぽい、と投げ出され男は尻餅をついた。

立ち去ろうとした勝だが、ふと気づく。

胸のバッジがない。

くそ！ と勝はつぶやくと、のしのしとさっきの男に近寄るといきなり殴りかかる。

がくん、と男は顎を叩き割られ、白目をむいて気絶した。勝は無言でバッジを奪うと、自分の胸にとめた。

ぐるりとあたりを見回す。

その場にいた全員が勝の凝視に顔をそらすか、くるりと背を向けた。

うーっ、うーっ と手負いの獣のような唸り声をあげ、勝はしきりに手を開いたり閉じたりしている。

「お前ら、勝負しやがれ！」

咆哮する。

しかし、だれも勝の声にこたえるものはいない。あまりの勝の迫力に、恐れをなしているのだ。

「そっかい、お前ら、来ないなら、おれから勝手にやらせてもらっぜ」

覚悟しな、と叫ぶと、勝は走り出した。

がらがらと足元の下駄が、岩だらけの地面で雷のような音を立てる。

ついに勝は逃げ遅れたひとりを捕まえた。

「まずはお前からだ……」

にたりと冷酷な笑みを浮かべ、勝は手を振り上げた。

ひいーっ、と哀れな犠牲者は両手をあげて自分の顔をかばった。

と、島のあちこちから陰々とサイレンの音が響き渡る。物悲しいサイレンの音は、啼き叫ぶように島中に染み入っていく。男ははつ、と顔を上げた。

「ま、待て！ あれを聞いたろう？　ありや、決闘の終了を知らせる合図だぜ！　六時になれば、決闘は終わりなんだ！　あんたも島の規則を耳にしたはずだ」

勝は寧猛な笑みを見せた。

「そんなの知るか！」

ぐっ と腕を引き、殴りかかる。

その時、勝は背後から奇妙な物音を耳にした。

がちゃ、がちゃとなにか金属製の器具が噛みあう音である。

さつとふりむくと、数人の鎧のような防護服を身につけた男たちが、銃に似たなにかを勝に突きつけている。

「な、なんでえ、お前ら……」

銃口は丸く、うつろな漆黒の闇を覗かせている。

ひとりが口を開いた。

「われわれは高倉コンツェルン私設警備隊のものだ！ 戦いは終わりだ！ その男が言ったように、六時以降戦うことは禁じられている」

なにい……と、勝は立ち上がった。すると警備隊のひとりがさつと銃口を勝に向ける。

「これは麻酔銃だ。死ぬことはないが、一日眠りから覚めない。お前が抵抗すれば、われわれは遠慮なく撃つ！」

「なんだと？」

「上陸したときに説明されていたはずだ。もし、どうしてもその男を襲うなら麻酔銃を使い、お前をこの番長島から追放する。どうする？」

むむむ……と唸り声をあげた勝は、男を放した。

ほっとした男は、ほうほうの態でその場から逃げ出していく。銃を突きつけた警備隊員はそれを見て銃口を下ろした。

ゆっくりと立ち上がる勝は悔しそうに唇を噛みしめると、そこから立ち去った。



## アイロン

番長島のおちこちには、参加者のための宿泊施設、食事のための場所が用意されている。

料金はすべて無料で、島に上陸したとき渡されたバッジをしめせば利用できるようになっていた。ほとんど廃墟となつた島の建物の中で、それらは新築で、傷ひとつない新しい建物はひどく目立つた。さらに夜の帳が島をおおうと、電気の照明が建物の内外を照らし、それだけでも目標になった。

太郎と美和子はその中のひとつに投宿していた。一階は受付、休憩室、それと洗濯などができるようになっていて、二階から上が宿泊施設になっている。

太郎は一階の洗濯室で美和子の制服にアイロンをあてていた。すでに宿泊客は寢床に早々ともぐりこみ、あたりはしんと静まりかえっている。

ゆつくりと、丹念に服の皺をのばしていく。執事学校の授業で、とくにうるさく言われたことは仕える主人の身だしなみであった。だらしない皺や、着崩れは主人の恥であり、仕える召し使いの恥でもある、と。召し使いはつねに主人の身だしなみに気を配らなくてはならない……。太郎はアイロンの温度を確かめるため、底面にちよつと指を触れた。

丁寧に霧をふき、低温にしたアイロンで仕上げの作業に入った。作業が終わわり、彼女の制服をハンガーにかけ、カバーでおおった。太郎は自分の作業に納得したのか、ひとつうなずいてそれを持つて階段を上がろうとした。

「とうとう来たわね」

その声に太郎は足をとめた。

入り口の方を見ると、洋子が背中をドアにもたれるようにして太郎を見上げている。入り口を照らす明かりが、彼女をしらじらと浮かび上がらせていた。

「やあ……」

太郎は微笑した。

今日の洋子はメイドの服装で、クラシカルな衣装が彼女の魅力を引き立てているようだ。

太郎の微笑にこたえて、洋子も微笑をかえした。彼女のふくよかな頬に笑窪が出来る。

「驚かないのね。あたしがここにすることはすでに予想していたのかしら？」

いや、と太郎はかすかに首をふった。ただ、驚いても表情にあらわさないよう、普段から心掛けているだけである。ちつ、と洋子は舌打ちをした。

「ちよつとは驚け！　こら！」

洋子はすこしふざけてそんな言い方をした。太郎の前だと、つい子供同士のころの話し方にもどってしまう。太郎は肩をすくめ、口を開いた。

「メイドの服、似合うよ」

太郎の称賛に、洋子はちよつとはにかんだ表情を見せた。

「あんたの奉公した真行寺男爵、破産したって聞いたわ。それでお嬢さまがお家再興のため、トーナメントに出場したって……。あんなはなんのために出場したの」

「決まってるさ。お嬢さまのお世話をするためだ。召し使いは、ご主人がどこへ行こうとついていくもんだ」

な～るほどね、と洋子はわざとらしい声をあげた。太郎はかすかに眉をひそめた。今夜の洋子はどこか変だ。洋子は無意識にか、壁

のかすかな染みに指を這わせていく。なにか言いたいのか、表情にためらいが見える。

「あたしあることをあんたに教えようと思うんだ……」

とうとう沈黙に耐え切れず、洋子は切り出した。

「なんだい？」

彼女はきりつと太郎を見つめた。

「この島の北端、そこに洞窟があるわ。知ってる？」

知らない、と太郎は首をふった。島の地理については、ほとんど知らない。歴史については学んだが、そのほかの情報については手に入らなかったのである。

「海岸を伝っていけば、すぐにわかる。あんたの足なら、夜明け前に行つて帰つてこれるでしょ？」

「そこになにがあるんだい？」

「只野五郎の消息」

えっ、と太郎は息を呑んだ。

只野五郎……つまり太郎の父親である。母親は太郎が生まれたころ、死んだと言っていたが……。

太郎の表情に、洋子は満足そうにうなずいた。

「驚いたようね。あんたの驚く顔、そうそう見られないから貴重だわ」

そう言うときとくすと笑った。

太郎は真面目な表情になった。

「なぜぼくに教える。それにどうしてそこに行けばぼくのお父さんのことが判ると知っているんだ」

「それは秘密よ。でも、あたしの言ったことは本当。そこに行けば、あんたの父親、只野五郎についての消息がわかるでしょう。どう、行つて見たい？」

「そりゃ……」

太郎は絶句した。

行って見たい気持ちはある。しかしそこで知ることがどのようなことか、かすかな怖れがためらいとなった。

さつと洋子は踵を返し、出口から外へ向かい、闇の中へと消えた。  
洞窟よ！

彼女の声が暗闇から響いた。

## 洞窟

ざあ……。

ざあ……。

波の音が単調に聞こえてくる。ときおり、岩礁にあたり、ざぶんと水しぶきがあがるのが、月夜に青く染まっている。

目の届く限り砂浜と、あちこちから顔を覗かせる岩の塊。その間を、太郎はひよいひよいと軽快に駆け抜けていった。

まるで舗装した道を歩くように太郎は先を進んでいく。足もとがごつごつとした岩場であることなど、みじんも感じさせない。

波が引き、打ち寄せると波頭はおおきく崩れ、あたりに水をしたたらせるが、太郎はつねにそれから距離を置いて飛沫から身をよけていた。

満月で足元は明るい。砂浜は月の光を受け、青白く浮き上がっている。

番長島は、北端がすばまった柿の種のような形をしている。別名、軍艦島の異名の通り、北端は軍艦の舳先に当たる。崖は垂直に海面から立ち上がり、北端に洋子の教えた洞窟の入り口が黒々と見えていた。

太郎は洞窟の入り口を覗き込んだ。

月光は入り口近くを照らすだけで、中はまったく見えない。

ポケットからちいさな懐中電灯を取り出し、太郎はスイッチを入れた。

黄色い光があたりを切り裂く。

光の束をあちこち動かすと、どうやら人が住み着いている形跡が見てとれる。調理道具、火を熾した跡、そして毛布のかたまり。

懐中電灯の光があたると、毛布のかたまりがもぞもぞと身動きした。

人がいる！

はっ、と太郎は一步飛びのいた。

むう……と唸り声がして、毛布がばさりと跳ね除けられた。

「だれだ！」

鋭い誰何の声。

光のなかに、ひとりの人物が浮かび上がった。懐中電灯の光に、その人物はぱちぱちと瞬きをした。

男だ。

年のころはよくわからない。

ぼうぼうに生やした髪の毛と、顔中をおおっている髭で表情が読めないのだ。男はまぶしそうに目をしばたかせると、目を細め手をかざした。

気がついて太郎は懐中電灯の光を男から足もとにうつした。

「ご免なさい、おやすみのところを。ぼく、只野太郎というものです」

男の目が見開かれた。

「只野太郎……」

うつむく。髪に隠れ、表情はまったく見えなくなった。

「その只野太郎とやらが、何のようだ？」

「ある人に教えられて、ここにくれば父の只野五郎のことを知ることができるといわれました」

只野五郎、という名前に、男はぴくりと肩を震わせた。

「あなたはぼくの父について、なにかご存知のことありませんか？」

「只野五郎のことについて、何を知りたいと言うのだ」  
「何でも良いんです。ぼくは父のこと、何も知りませんから。召し使い仲間では多くの父は有名ですが、だれに聞いても父の詳しい話を教えてくれないんです。お願いです、教えてください！ 父は何をしたんです？ なぜ、父と同年代の召し使いたちは父の話をすることを嫌がるのです」

くくく……と、うつむいた男の口から笑い声がもれた。

「知っているんですか？ あなたは只野五郎のこと、なにか知っているんでしょう？」

「まあな」

「教えてください。父は何をしたんです？」

「召し使いとして許しがたい罪を犯したんだ。みんな知っていることだ」

「許しがたい罪……」

「帰れ！」

男は喚いた。

「帰るんだ。そして、ここにはもう来るんじゃない」

「父の罪とはなんです？ 教えて……」

男はいきなり立ち上がった。大股で太郎に近づくと、襟首をつかむ。男の腕力で、太郎は足先が地面から浮いてしまう。

「もうここに来るんじゃないと言ったろう。お前は真行寺のお嬢さまの側についてしっかり奉公していればいいんだ。ほかの事は考えるな」

え……？ と、太郎は男を見上げた。

「どうしてぼくが真行寺に奉公していることを知っているんです？」  
ぎくり、と男の動きが止まる。

「ぼくはじぶんの名前を名乗っただけです。どうして真行寺家に奉公していることがあなたには判っていたんです」

太郎はじぶんを見おろしている男の顔をしげしげと眺めた。そして確信を得た。

「お父さん……あなたはぼくのお父さんではないのですか？」

男は太郎を突き飛ばした。

「馬鹿なことを……なぜ、お前はおれをお前の父だと思う？」

「ぼくは執事学校で観相学を習いました。血縁者同士の骨格は似ている。それは顔に顕著にあらわれる……それによると、あなたはぼくの父の若いころに似ている……」

「他人の空似だ！」

男は背を向けた。激しい呼吸に、背中がおおきく波立っている。

太郎はさらに声をかけた。

「お母さんは、お父さんがぼくの幼いころ死んだと……」

あははは！ と、男はいきなり笑い出した。

「死んだ！ 死んだって？ そう、やつは死んだよ。只野五郎は死んだんだ！」

太郎は立ち上がった。

そしてつぶやく。

「さようなら。ぼくはあなたの忠告に従い、お嬢さまに忠実にお仕えます。もう、ここには来ません」

男は無言だった。

「でも、お母さんは今でもぼくの父親、只野五郎のことを愛しています。それだけは、確かにそう思えるんです」

さようなら……、ともう一度言つと太郎は出口へと向かった。月の光に洞窟の出口はぽっかりとまるい形を見せている。

くくくく……。



太郎の背中から、こんどはすすり泣きの声が聞こえてきた。

ロボット！

「なぜ只野太郎にあのことを教えた！ お前は どうして あんなことをした！」

島の全景を一望する室内で、高倉ケン太は怒号していた。

洋子は身をすくめるようにしてケン太の怒りにさらされていた。ケン太の形相は悪鬼、そのものだった。怒りのため、手足が震えている。

こんなことになるとは思ってもいなかった。

洋子は暇つぶしに高倉コンツェルンの歴史を調べていた。奉公したさきの家の過去を知ることが、召し使いとして当然の義務と思っていたからである。

そして見つけたのだ。

ある名前を。

高倉コンツェルンの歴史は浅い。たった十数年で町の工務店からあつという間に一国を牛耳るほどの大企業に成長した秘密は、あるひとりの人物に帰せられる。

その人物の登場と同時に高倉工務店は成長を続け、いまではあらゆる業界にその足跡を残している。

だがあるときを境にその人物は姿を消す。

洋子は社内の記録をたどり、現在のその人物の現状を知り、どうしても太郎に教えたくなったのだ。

「それが正しいことだと思っただのです」

洋子の答えにケン太は目を剥いた。

「正しいこと？ どうしてお前がそんなことを判断できる？ お前はただの召し使いに過ぎんだぞ」

はい、と洋子はうなずいた。

「しかし召し使いとはいえども、間違っただことが行われているのを見過ごすことは出来ません。あの人があんなことになっているのは、間違っています」

ははは……、とケン太は乾いた笑い声をあげた。面白がつてはみじんも思っていない、ただ笑い声をあげただけだ。その声に、洋子はぞつとなった。

「あいつは今の状態に満足している。あいつは望んで身を隠しているのだ。それを知らずにが間違っただことだ？ ん？ 執事学校の教えでは、主人に逆らうことを教えているのか」

「執事学校で習いました。たとえ主人といえども、正義を裏切ることは召し使いの見過ごしで良いことではないと……」

「ほほお！ それが執事学校の教育か？ おれは間違っているのか？」

洋子は息を呑みこんだ。

おおきくうなずく。

「はい、わたしはそう思います」

ふつ、とケン太は息を吐き出した。

いまや怒りはその表情にあらわれていない。

かわりに触れればひやりと切れそうな冷酷そうな表情があらわれている。

ケン太はかすかに視線を動かした。

と、いきなり洋子の手足が数人の男の手によって掴まれていた。気がつかないうち、洋子の背後にほかの召し使いたちが忍び寄っ

ていたのだ。

「離して！」

洋子は悲鳴をあげた。

ケン太が近寄ってくる。

哀れむような表情が浮かんでいる。

「洋子、それはぼくの召し使いとしての範疇にはいかない。召し使いはただ主人の命令を、一から十まで忠実に実行すれば良いのだ。考えるのはぼくひとりでいい。召し使いが考えることをぼくは望まない」

洋子はゆっくりと首をふった。

「違うわ……それは召し使いではない。ただのロボットじゃない？」  
ケン太はにやりと笑った。

「ロボット！　そう、ぼくの望んでいるのはロボットのような召し使いなのさ」

「そんな、まさか……」

洋子の目に涙があふれてきた。ケン太はいま、その正体をあらわにしたのだ。

「ぼくが君を見つけたとき、君は都会にはじめて出てきて、とても不安そうだった。だからぼくは君をメイドに雇った。ほかにだれも頼ることができないなら、ぼくにだけ全面的に頼ってくれると思うたからだ。それなのに、君はぼくを裏切ってくれた……」

洋子の胸に恐怖がこみ上げる。いったいケン太は何を言おうとしているのか？

「洋子君。ぼくは君に理想の召し使いになってもらうため、ある教育を施そうと思う。それがすめば、君はぼくの思う、理想的な召し

使いに生まれ変わる事だろう」

ケン太はポケットから一枚のハンカチを取り出した。そのハンカチにもうひとつのポケットから取り出した、ちいさなガラス瓶の中身を浸す。

かすかな芳香が洋子の鼻腔をうつ。

これは麻酔薬？  
クロロフォルム

ケン太の手が近づき、洋子の顔全体をハンカチで覆う。たちまち洋子の意識は遠ざかり、あとは闇につつまれた。

## 洗脳

ばかりと洋子の意識が戻る。

闇。

どこまでも続く闇が洋子をつつんでいる。

闇の中で洋子は瞼をぱちぱちと瞬かせた。

そんなことをしても何もならないと判っていたが、それでもせざるを得なかった。

ここはどこ？

闇の中で洋子の思考だけが空回りする。

手探りをする。

凝然となる。

じぶんの手がどこにあるのか、まるで感覚がない。動かしても、手はなににも触れず、動かしている実感もないのだ。

手ごたえがないとはこのことか。

足も同様、まったく感覚がない。

あたしはどうなったの？

恐怖が、喉元にこみあげる。

悲鳴。

洋子は悲鳴をあげた。

が、その悲鳴すらあげることは出来ない。

彼女の脳は喉に悲鳴をあげることを命じたが、喉はまったく反応

しない。

気がつけば全身の感覚がなかった。

暑さ、寒さ、痛み、痒みすらなかった。

暗闇の中、ぽっかりと意識だけが宙に浮いている。

あたしは死んだのかしら？

誰か答えて！

洋子は声にならない悲鳴をあげ続けていた。

脳波計が洋子の思考を忠実にグラフにあらわしている。

いまは細かな震動が激しくグラフにあらわれ、彼女の動揺をあらわしている。やがて《アルファ》波と《ベータ》波が睡眠をしめすだろう。《タウ》波が出てくればしめたものだ。ケン太の前にはこの施術専門に雇った精神科医が、洋子の脳の状態をしめす結果をじっと見つめていた。

ふたりの目の前のベッドに洋子が横たわっている。

目には覆いがかぶされ、腕には点滴の管が繋がっている。点滴の容器には蒸留水とブドウ糖、その他の栄養分が混入され、彼女の健康を保っていた。

洋子の延髄には締め付け用のクリップが挟まれて彼女の神経と脳の伝達をさまたげている。これにより、随意筋に脳の出す指令を遮断し、全身の感覚は麻痺している。いま、洋子の主観では完全な闇の中にいるのだ。さらには耳につけられた耳栓が外部の音を伝えない。

目の覆いから一滴、涙が頬に伝う。洋子は今、自分が泣いていることすら確認できないだろう。

「このままの状態であと十二時間 完全を期せば二十四時間が理

想ですな　すれば、彼女は理想的な状態になるでしょう」  
精神科医がケン太を見上げ、陽気に話しかけてきた。ケン太はうなずいた。

心理学の研究に感覚遮断実験というものがある。五感を遮断した状態で、人間がどのような心理状態になるかという研究で、それによると完全に感覚を奪った状態でないと、人間はきわめて暗示にかかりやすい状態になるという。それがどれほど反社会的であろうとも、じぶんの思想と正反対の思想であろうと、感覚を奪った状態においた人間に吹き込むと、完全に従属するようになるというものだ。いわば洗脳の研究である。

これがあきらかになった時点でその研究は中止されたが、その行き先が洗脳であることは明白だ。

ケン太はその成果を利用していた。

召し使いで高倉コンツェルンの闇にふれることのおおい召し使い、社員をこの方法でケン太に対する忠実な家来に生まれ変わらせる。

いま実験が続けている当の精神科医もこの方法でケン太の忠実な部下と成り果てていた。

「二十四時間……短くても十二時間……。それでは遅すぎる。もっと早める方法はないのか」

ケン太の質問に精神科医は唇をすばめ、考え込む様子を見せた。

「そうですね……そうなるとエンドルフィン、ドーパミンなどの投与と、覚醒させるためメラトニン・ブロックなどの処置が必要で、これにより、彼女は二十四時間暗闇にいたのと同じ状態になり、処置がスムーズにいくでしょう。ただし、洗脳が完全とは言えませんが、なんらかのきっかけで、解けてしまう可能性がありますから」

精神科医の口調はうきうきとしているようだった。ケン太は眉をひそめた。



洗脳処置により、ケン太の命令どおり動くロボットになった人間たちは、一様に不安定さを露呈する。いくら洗脳でケン太に絶対服従を誓っても、心の奥深くでは納得していないに違いない。それが、奇妙なほど陽気な様子や、躁鬱的な態度にあらわれるのだ。

「それでいい。やってくれ」

それでは、と精神科医は両手をすりあわせ、薬品棚からいくつの薬品を取り出した。

それらをカクテルをつくるシェイカーに放り込み、シェイクした。シェイクしながらかれはケン太に笑いかけた。どうです、面白いでしょうといっているようだ。

ケン太にはまったく面白くはなかった。この手の冗談に付き合っていたら、神経が磨り減ってしまう。洗脳を受けた連中は、たいていこういった笑えないジョークを披露したがる特徴がある。

ケン太の反応がまったくくないのも気にせず、精神科医はシェイクした薬品を点滴の容器に注ぎ入れた。

腕をまくり時計を覗き込む。

「これで二時間！ お待ちください」

うん、とケン太はうなずいた。

## 命令

暗闇の中、洋子はぼんやりとしていた。

最初のパニックはおさまり、あとは平穏な状態になっていた。じつは医師の調薬した薬品のためなのだが、洋子は奇妙な平安の中に漂っていた。

洋子……洋子……聞こえるか？

ふいの声に、洋子は身をこわばらせた。とはいえ、あいかわらず全身の感覚はないから、身をこわばらせようとしてのだが。

誰？ いまのは誰？

暗闇の中、洋子は叫んでいた。しかし喉はあいかわらず声を発せようとはせず、思考だけが独走している。

ぼくだ……ケン太だ。高倉ケン太……わかるかい？

ああ、ケン太さんだ……。洋子は声の正体がわかってなぜかほつとなった。彼女をこういう状態に突き落としたのはケン太なのに、いまは全身でかれの声を欲していた。

なんでもいい！ もう一度声を聞かせて！ そうすれば、あたしあなたのため何でもできる！

洋子、ぼくはがっかりしたよ。君はぼくを裏切ったね

そんな……洋子は絶望のふちに落ちていた。せつかくひさしぶりに聞けた人間の声だというのに、その言葉は洋子を打ちのめした。

しかしぼくは君にもう一度チャンスをあげようと思う。もし、君がぼくの忠実な召し使いとなるなら、そこから救い出してあげる。どうだい？　そこから出たいかい？

ケン太の言葉は絶望の底からふたたび希望の中へと洋子を引き上げた。

洋子は熱をこめて誓った。

はい、もちろんです！　あたし、これからケン太さんの忠実な召し使いになります！　もう、ケン太さんの言うことに異議を唱えることはいたしません！

洋子は本気だった。

今や彼女は、ケン太の忠実な召し使いになっていた。熱烈に、ケン太の命令に従いたいという欲求が彼女の全身を駆け巡っている。

「反応は上々です。脳波も、それを裏付けています」  
精神科医の報告に、ケン太はうなずいた。

「目を覚まさせてやれ。そうしたら、ぼくのところへ来させるんだ」  
はい、と医師はうなずいた。

ケン太はその場を離れた。

やらねばならぬことが山積している。

## 交換所

ざらざらとぶちまけられたバッジに、交換所の係員は目を丸くした。見上げると、ぼろぼろの学生服を身につけた大男がうつそりと立って係員を見おろしている。

鋭い眼光、顔には無数の傷跡があり、足元は重そうな下駄を履いている。大男の鋭い眼光に、係員は震え上がってしまった。

「数えてみる。百枚はあるはずだ」

大男の命令に、係員はものもいわず目の前に積み上げられたバッジの山に手を伸ばした。

ひとつ……ふたつ……と丁寧に数え、十枚ごとに山を作る。

山は九つ、そしてバラが六つ……。

「九十六枚になりますな」

係員の答えに、大男はちら、と不機嫌な表情になった。百枚あると思ったのが、すこしかけたのであてがはずれたのだろう。

係員は九枚の銀のバッジを揃えると大男に手渡しながら口を開いた。

「それにしてもずいぶん、集めましたなあ！ たった三日間で、こんなに集めるとはたいしたものですよ」

大男は係員の称賛にうるさそうに手を振った。胸に渡された銀と銅のバッジをとめて、交換所を出ようとする。

と、かれの足もとがとまった。

交換所の入り口に掲げられている名簿に目がとまる。

名簿の一番上には「真行寺美和子」とあり、その下に「風祭俊介」とあった。

「こいつはなんでえ？」

係員はカウンターから身を乗り出すようにして答えた。

「あ、それですか？ この島の交換所で交換に来た参加者の獲得した枚数を表示したもので、昨日までの上位十名です。あなたが今日持ってこられた九十六枚は、いまのところ二位ですな。よろしければお名前をうかがわせていただだけませんかでしょうか。ほかの交換所に連絡しますので」

大男はそれにはこたえず、ひくく唸った。

掲示板の一位の名前を睨みつけている。

「この名前……」

係員はにやにや笑った。

「ああ、その一位の名前ですな。真行寺美和子とか言う女性参加者だそうで、いやたいしたものです。なんでも最初に島に上陸した早々、勝又勝まゆみとかいう腕自慢の男をあつというまに叩きのめしたという噂ですな。二位の風祭俊介というのも結構腕自慢らしいです。昨日、この交換所に来ましたが、すごい大男で……そうですなあ、あなたより頭ひとつは背が高そうでしたなあ」

大男の顔色が見る見る変わっていく。係員はそんなかれの様子に気づくこともなく、会話を続けていく。

「しかしその勝又勝とかいう男、本当に腕自慢だったのですかねえ。女にいきなり殴りかかって、あつという間に返り討ちにあうとは、油断していたんですかなあ……」

そこで係員はじめて男のものすごい視線に気付いた。大男の両目からは、炎が吹き上がっているかのような凝視が係員にむけて突き刺さる。

係員の口がぱくぱくと開く。

「あつ、もしかしてその勝又勝……？」

「うるせえっ！」

勝は怒号した。

どた、と係員は尻餅をつき、カウンターの背後にひっくりかえった。

ぱり、ぱりん……と、交換所の窓のガラスが、勝の大声で割れるか、ひびが入ったりした。

がらがらと下駄の足音を響かせ、勝は交換所を出て行く。

外に出た勝はつぶやく。

「二位だと？ 馬鹿にしゃがって！」

ふん、と肩をゆすり歩き出す。

今日も番長島は晴れ上がり、ビルの白い壁面は太陽のひかりをまぶしく反射している。

時刻は昼近く。

あたりはしん、と静まり返り、人影ひとつ見当たらない。

たった三日で、参加者は半数に減っていた。

残っているのは本当の腕自慢と、とにかく一日でも多く残っていたいとばかりに、こそこそと隠れている卑怯者ばかりである。

その人影のない通りを、がらがらと勝の下駄の音が響いていく。かれは不機嫌であった。

くそっ！　くそっ！

何度もつぶやき、足元の小石を蹴った。

まったく面白くない。

近ごろは勝の姿を見ただけで参加者たちはこそそこそとあたりに隠れ、かれの拳はむなく宙を打つだけになっていた。

と、勝の耳がなにかをとらえた。

わあっ……という大勢の声がどこからか聞こえてくる。

その方向へ足を向けると、そこは島のあちこちに設けられている食堂であつた。

ここは参加者たちに無料で食事をふるまう休憩所である。この内部では、宿泊所同様、戦いは禁止されている。いわば安全地帯となっているのだ。食堂ではバイキング式で、いろいろな料理が並べられている。ひとりひとり注文をとると、おれの注文が遅い！　などのクレームで暴れる人間がいることを考慮してのことだった。

腕に自信のないものは、たいていの時間ここにたむろしている。ここに住み着き、トーナメントの最終日まで粘るつもりなのだ。

最終日になれば強制的に退去され、最終決戦地に向かわなければならぬが、おれは最終日まで残ったぜと自慢することは出来る。

卑怯者の隠れ家である。

ぬっ、と勝が食堂に姿を現すと、そこにいた数人の男たちが気配を感じてふり向いた。

さっとかれらは勝の視線をさけ、顔をそらす。

勝は食堂で、かれらが見ていた視線の先を追った。

テレビがある。

そこでは島に上陸した初日、トーナメントの規則を解説していたトミー滝というタレントがあいかわらずの派手な格好で、なにか喋っていた。

「視聴者のみなみなさまがた、トーナメントも三日目になりましたでげすよ！ 参加者もしぼられ、ますます目が離せない状況になってきましたですねえ！」

画面のトミー滝はにたとと歯をむき出したような笑いを見せた。下品で、視聴者を心底から馬鹿にしきつたような表情がかれの十八番だ。おはこ

「四隻の船で番長島へやってきた参加者のみなさまがた、おたがいのバッジを賭けての戦いは見ごたえございましたねえ……今日はアンコールにお応えしまして、視聴者のみなさまがたのリクエストが多かった戦いをお見せいたしますですよ。まずは最初に……！ この戦い！」

画面が切り替わり、埠頭の場面が映し出される。上陸した参加者たちがおたがい盗み見合い、一触即発の雰囲気がただよっている。

そこへ勝又勝が登場する。真行寺美和子と何か言い合い、勝はいきなり殴りかかった。

美和子は優雅な身の動きでそれをかわすと、あざやかな技で勝を一回転させてしまう。勝は目をまわし、気絶する。

その一部始終が、カメラの前にあらわになっていた。



勝にとつてははじめて見る映像だった。

ぼうぜんとなつてゐる勝を、まわりの男たちはこわこわ見上げている。

ふたたびトミー滝があらわれ、くすくすと笑つた。

「みなさん、見ましたか？ みつともないですねえ……相手が女の子だと油断したんでしょうが、この勝又勝という参加者。島に上陸して早々にあつという間に倒されたなんて恥ずかしくていまごろ、本土に逃げ帰っているんじゃないですかねえ？ とにかくこの女の子 真行寺美和子とおっしゃるそうで 大注目ですね」

勝の顔は真つ赤に染まっていた。

いまにも爆発しそうなかれの様子に、まわりの人間はそろそろと足音をしのばせ、食堂の上の階へと避難しはじめる。

ぐわしゃーん！ と、あたりに響くような大音響とともに、食堂の窓ガラスを突き破りテレビが外の地面にたたきつけられた。

どすん、とテレビはおおきく地面にとびはね、ごろりと横倒しになる。

画面は完全に破壊され、ちりちりと回路がショートしていた。がらがらと下駄の音を響かせ、勝が出口から飛び出してくる。かれの両目は怒りにまん丸に見開かれ、唇は震えていた。

「畜生っ！」

全身をこめ、勝は怒号した。

「畜生っ！ 誰か出てきて、勝負しやがれっ！」

勝は喧嘩を欲していた。しかしかれの叫びはあたりの壁にむなしくこだまするだけだった。

## 挑発

「わたくしとバッジを賭け、戦いませんこと？」

美和子に話しかけられた参加者は驚きに目を白黒させた。

膝まで達するコートのような学生服に、やけに太いズボン。学生服のボタンはすべて外され、逞しい胸があらわになっている。学生服の胸にはこれまで戦ってきた勝利のあかしである幾つものバッジが、燦然と輝いていた。

「ぬぁにい……？」

奇妙な抑揚をつけて男は美和子をねめまわした。

むさくるしい口髭をわざとたくわえたかれは、その目に可笑しそうなきらめきをたたえ、美和子の全身をじろじろとながめた。

ほっそりとした肢体の美和子は、とてもここ番長島トーナメントに参加するタイプには見えない。

たしかにトーナメントには女の参加者も幾人か来ているが、みなどくどくしい化粧をほどこし、体力のハンデをカバーするため武器を携えているのが普通だ。

しかし目の前の美和子の制服はまったくノーマルなままで、武器も持っていない。化粧気のない素顔はすずしげで、ポニー・テールにした後ろ髪を束ねた真っ赤なりボンだけが唯ひとつのアクセサリである。

彼女の背後には太郎が目立たない形でひかえている。

男は太郎にむけて顎をしゃくった。

「そいつは、なんでえ？」

美和子はうつすらと笑った。

笑うとまっしろな、真珠のような形の良い歯並びがあらわになった。

「わたくしの執事ですわ。身の回りの世話をしているだけで、戦いには加わりません」

ふうん、と男は眉をよせた。

実は美和子のことは耳にしていた。

やけに強い女の参加者がいる、ということは島中で噂になっていく。

女の参加者はたいてい、グループを組んで島を動き回っている。そして弱そうな相手を見つけると、集団で襲い掛かり、バッジを奪うのだ。戦いのルールは事実上、ほとんどなく、一対一だろうが、多数で戦おうがまったく制限はされていない。

その中で美和子はたったひとりで戦い抜き、多数のバッジを手に入れていた。

だから彼女がどんな女なのか男には興味があつたのだが、まさか目の前のお嬢さま然としたほっそりとした彼女がそれとは思わなかったのである。

それよりも彼女の胸に輝いている金のバッジが男の目を奪っていた。

金のバッジ……つまり百枚分である。

あいつを手に入れることが出来れば、おれは島でもっとも多くの敵を倒した男ということになる。

欲望がかれのもともと無に等しい思慮を吹き飛ばしていた。

やったるうじゃねえか……。

男は決意していた。

にやりと唇をゆがませ、笑いを見せる。  
背をそびやかせ、男は戦いの構えを取った。

顎をしゃくり声をかける。

「来な！ 叩きのめしてやる！」

「では……まいります！」

美和子は上品に一礼した。  
その態度に男は戸惑った。

するすると美和子は男に迫ってくる。両手をだらりと下げ、歩調はまるで普通である。まったく戦意というのを感じない。

あっ、と思ったときはもう遅かった。

美和子の長い足が旋回し、かれの足首を襲っていた。  
がく！ と、男は膝をおった。

うつ、とかれが顔をあげた瞬間、美和子の膝が顎を襲ってきた。  
彼女の膝が顎をとらえ、かれの目の前に火花がちった。視界が空になり、上半身が完全にあおむく。見上げた空に、美和子の顔がのぞく。

畜生っ！

かれは大急ぎで立ち上がった。

焦りが行動を短兵急なものにしている。

しゃにむに突っ込むかれを、美和子はひらりとかわし、伸ばした腕を掴んだ。

何が起きたのか、気がつくとかれは地面に仰向けに倒れている。  
はっ、と起き上がるが、そこには誰もいない。あわてて制服をさ  
ぐると、案の定バッジは一枚残らず奪われたあとだった。

虚脱感がただ支配する。

負けた……。

ちからなくつぶやいた。

## 筆頭執事

夕日が水平線のむこうに沈もうとしている。

オレンジ色のひかりがあたりを真っ赤に染め上げ、灰色の廃墟となったビルを黄金色に輝かせていた。

海が眼下に見える崖の側で、太郎と美和子は休息をしていた。

太郎はコンクリートのブロックにいままで獲得したバッジを並べ、枚数を確かめていた。

「お嬢さま、これで五十枚になりました。そろそろ交換所へ持って行って、銀のバッジに交換いたしましょうか」

そうね……、と美和子は気のない返事をして海を見つめている。

太郎はかすかに眉をひそめた。

「あの……お嬢さま、もしかしてお疲れになっていられるのでしょうか？」

美和子は太郎を振りかえり、うつすらと笑いを浮かべた。

「そう見えるかしら？」

どうだろうか、と太郎は美和子の様子を仔細に観察した。疲れているようには見えない。体力的な疲れではなく、心理的なものらしいが、太郎にはどうすることも出来ない。

「あたし、この島に来てなんだか自分が変わってきたような気がするの」

太郎は無言で首をかしげた。

「最初は決闘するなんて、いやだった。見も知らない相手と戦ってあげくのはてに相手のバッジを奪うなんて、あたしを教えてくれた師範が聞いたらきつと叱るでしょうね。そんなことのために武道を教えたのではない、と……」

そこで美和子は言葉をきった。

しばらくしてまた口を開く。

「でも、なんだか戦いを続けているうち、それが楽しくなってきたみたいな」

そう言うとき彼女は頬を押さえた。

「あたし変かしら？」

太郎は無言だった。

召し使いとしてこういう場合、どう言葉をかけるべきか判らなかつたからである。

もしここに父親の只野五郎がいたら、なんと言っただろうか？ 最高の召し使いという称号を得た父親の助言を太郎は心底から欲していた。

美和子は黙って立っている太郎を見つめた。

「ねえ、太郎さん。あらためて聞きたいけどどうしてあたしについてきてくれるの？ いまのあたしは、あなたに払ってあげるお金もないのよ。それなのにどうして召し使いの仕事を続けるの？」

太郎は晴れ晴れとした顔になった。

これなら自信を持って答えられる。

「それはお嬢さまに”忠誠の誓い”をしたからです。いったん、この誓いをしたからには召し使いは一生、仕えることが決まっているのです。お金でばくはお嬢さまにお仕えしているわけではないのです」

静かに、しかし確信に満ちた太郎の言葉に胸を打たれたように美和子の目が感動に潤っていく。

顔をそらせた美和子に太郎は話しかけた。

「お嬢さま、ばくからひとつお願いがあります」

「なに？」

「ぼくがはじめてお嬢さまと”忠誠の誓い”をしたとき、お嬢さまはあまり本気ではなかったようでしたね」

「そうね……あのとき、お父さまがそう言われたからしたけど、なんだか遊び気分だったわ！」

「ですからお嬢さま、ここであらためて誓いの儀式をさせて欲しいのです。いま、ぼくはお嬢さまの真の召し使いとしてお仕えしたく思っているのです。いかがでしょうか？」

美和子は目を大きく見開き、太郎を見つめた。

唇がわなないで、彼女はうなずいた。

「いいわ！ あなたとあたしだけの誓いの儀式をしましょう」

太郎は膝まづき、頭をたれた。

「わたくし只野太郎は、真行寺美和子様にお召し使いとして献身的にお仕えいたします。どうか末永くお使いくださるようお願いいたします！」

美和子は膝まづいた太郎の前に立つと、ずっとその腕を伸ばし、頭に触れた。

「わたくし真行寺美和子は、この只野太郎の主人として命令する！ わたくしに従い、裏切ることなく、その命令を忠実に実行することを望む。もしわたくしが主人としてふさわしくない行動をした場合、かれはいつでもわたくしを見限ってよいことを、ここに約束するであろう」

太郎は顔を上げた。

美和子はじつと太郎の目を見つめていた。  
ふたりは見詰め合っていた。

わたしの筆頭執事になってね……。

遠い日の約束が太郎の胸に蘇ってくる。その約束は、いま果たされた。

太郎は正真正銘の、美和子の筆頭執事になったのである！

波の音がいつまでも続いていた。



## 杏奈

「感動的だな……いまの場面は視聴者をさらっただろう？」

島にあるトーナメントの番組を制作しているスタジオで、ケン太は太郎と美和子の誓いの場面をモニターで鑑賞していた。その場面にオーケストラの音楽がかぶり、感動を盛り上げる。ふたりの誓いの場面はすぐに編集され、効果音やBGMが挿入され、視聴者に届けられている。

あいかわらずケン太は真っ赤なガクラン、金髪のリーゼントというスタイルで長い足を投げ出すようにして目の前の無数のモニターに見入っている。

ケン太の声に、背後から番組スタッフのひとりが相槌をうった。

「その通りで……なんでもあの場面が放映されたあとで、全国の執事学校に入学希望者が殺到したという報告がきました」

その言葉にケン太はくくく……と肩をふるわせて笑いをこらえた。

「まったく、只野太郎には毎度驚かせてくれるよ……。あの忠実さは評価されていいな」

そう言くと、ケン太は背後に控えているメイド姿の山田洋子をふり返った。

洋子は無表情で身じろぎもしない。

ふっ、とケン太は唇をゆがめた。

彼女にほどこした”処置”のあと、洋子はほとんど感情をあらわすことがなくなった。

何を言われようと、何を見ようとまったくの無表情で、無感動を貫き通している。

”処置”の結果は人さまざまである。

ひどく感情の振幅が大きい者もいるが、いまの洋子のようにまったくあらわすことのなくなる者もいる。しかしケン太は気にすることとはなかった。とにかくあの”処置”によって、洋子はケン太にとって忠実な召し使いになったのだから。

と、スタジオの奥のドアが開き、ひとりの男が姿をあらわした。ひどく背が高く、痩せた男である。

オールバックの髪型、顔はひどく扁平でボタンのような鼻をしている。

木戸であった。

かれはいま、高倉ケン太の執事となっている。

かれはぬつと室内にはいると、主人を見つけ近づいた。

かすかにうなづく。

ケン太は声をかけた。

「お前がここにいて、ということとは彼女が来たのかね？」

「はい、どうしてもと仰るので……」

ケン太は肩をすくめた。

「しょうがないな。おれはやめろ、と言ったんだが。まあ、来てしまったのはしかたない。いま、どこにいる？」

こちらです……と木戸は先に立った。

ケン太は木戸のあとに続き、スタジオを出た。ケン太のあとに洋子も続いた。

長い廊下を歩き、会議室とプレートが架けられているドアの前に立つ。

木戸がドアを開き、ケン太と洋子を招き入れた。

ケン太は室内を見渡した。

がらんとした室内に長い会議用テーブルがしつらえており、その端にひとりの少女が所在無げに座っていた。

彼女はケン太を認めると弾かれたように立ち上がった。

「お兄さま！」

「しょうがないな、お前には来てもらいたくはなかった」

ケン太はつぶやいた。

少女は妹の杏奈だった。

兄の言葉に彼女は顔を赤らめ、ずいとは近づく。

「どうして来てもらいたくなかったの？ あたしだってトーナメントに参加したかったから、木戸に言って船を出してもらったのよ」

ケン太はちら、と木戸を見た。

木戸はかすかに頭を下げた。

「申し訳ありません。どうしても、と仰るので……しかたなく」

口調は神妙であるが、表情はまったく変わらない。おれの知ったことではないよ、という内心が現れているようだ。

「お兄さま、わたしトーナメントに参加しますからね！」

ケン太はどつかりと椅子に腰掛け、だるそうに尋ねた。

「なぜだい？」

「真行寺美和子に参加しているからよ！ あたし、あの人をこのトーナメントで優勝させたくないの！ あたし、あの人を倒すわ」

くつく、とケン太は短く笑った。

「お前が彼女を倒す？ 馬鹿を言うな！ 美和子はお前なんかが相手になるような女じゃない。彼女は幼少のころから一流の師範について武道を習っているのだぞ。お前のような付け焼刃じゃ、かなう

もんか！」

杏奈の顔色がじょじょに真っ赤になり、表情が険しくなった。

「どうして？ あたしだって一流の人について……」

「甘いよ！ おれだって伝説のバンチヨウと呼ばれる男だ。美和子の实力はよく判る。お前の实力では無理だ」

くっ！ と、杏奈はうつむいた。

肩が震えている。

ケン太は心配そうに声をかけた。

「おい、泣いているのか？ お前が泣くなんて信じられんな」

「泣いてなんか、いないもん！」

顔を上げ叫んだ杏奈であつたが、その目にいっぱい涙がたまっている。

ふー……とケン太は息を吐いた。

「しょうがないなあ……まあいい。そこまで言うのなら、トーナメントに参加してみる。おれがなにを言っても、いまのお前にはわかるまい。自分で体験するんだな」

喜色を浮かべた杏奈に、ケン太は指を一本立てて見せた。

「その代わり！ お前には付き人をつける。ま、用心のためだ」

そのままくりと振りかえり、洋子を見た。

「ここにいる山田洋子をお前につける。それなら許そう」

杏奈は静かに控えている洋子を見た。

「この人は……？」

「ああ、彼女は小姓村の執事学校を卒業したメイドだ。執事学校では召し使いに、主人を守るための格闘術を教えている。そうだな？」

と、これは洋子に向けた言葉である。

洋子は静かにうなずいた。

「はい、その通りです」

「それでお前はその格闘術を？」

「はい、習得しております」

うなずいたケン太は杏奈を見た。

「つまり護衛だ。女同士だから、やりやすいだろう？」

杏奈はぶん、とむくれた。

「そんなにあたしを信用できないの、お兄さま？」

ケン太はじつと杏奈を見つめた。

見つめられ杏奈はどきまぎと目をそらす。

やがて杏奈はうつむいた。

「いいわ、その人と一緒に行動します」

小さい声で答えた。

よろしい…… というようにケン太はうなずいた。

洋子をふりむき、声をかける。

「今日からお前は杏奈の専属だ。いいな？」

「はい、一生懸命、お仕えます」

まるで熱意を感じさせない平板な口調で洋子は答えた。

「” 忠誠の誓い ”…… か！」

ケン太はなにか物思いするかのようにそうつぶやいた。

## 追跡者

夜明けのしらじらとした光があたりをまぶしく染めていた。この時間は気温も肌に粟粒をたてそうなほど低く、廃墟の壁はじつとりと朝露に濡れている。

からり……と、地面に積み重なっている破片のひとつが音を立てた。

はっ、と息を呑む気配。

卵形の顔をした、目の大きなひとりの少女が、あたりの気配を読んで用心深そうに歩を進めていた。

年は十四か、十五……まだ子供といっていい身体つきをしている。肌は陽に焼け、ミルクをたらしたコーヒーの色をしていた。

髪の毛は赤く染め上げ、おもいきり短くしたショートにしている。後れ毛が朝日をあび、金色にひかっていた。身につけているのは夏用のセーラー服だ。半そでから伸びている二の腕はほっそりとしているが、ふと見せる俊敏な動きと、ぱつちりと見開いた目が小猫のような印象を与えていた。

彼女はかすかに唇を噛んだ。

ひとり、ふたり……唇がそう動いていた。

「出てきなさいよ！」  
叫んだ。

「いるんでしょう？ そこらにこそこそ隠れたって無駄よ！ あたしわかつているんだからね……ずっと前から、あたしを尾けている

のは知ってるんだから……いったい、何のようなの？」

少女の声はひと気のない廃墟に凜々と響いていた。

ぐわあり……と音を立て、あたりの廃墟の影から数人の男が姿を現した。

人数は四人。

みな思い思いの格好で、見るからに不良、といった服装であった。少女は背を壁につけ、身構えた。

男たちの背後に朝日が昇っている。逆光を受けたかれらは無言で少女を取り巻いていた。

少女は目を細めた。

いったいかれらは何者なのか？

服装から見るとトーナメントの参加者に見える。しかしここ数日、どういうわけかかれらは少女一人を標的に、尾行を続けていた。

それに気付いたとき、少女は心底震え上がった。

島に来た当初、後をつけてくる男たちは何人かいた。たいていはひとりでいる少女が心配だから、一緒にいて守ってやるよというセリフだったが、ありありと下心が透けて見えて、彼女はいつさい相手をしなかった。

彼女が島にやってきた目的はトーナメントにはなかった。ほかにあったのである。

そのためにはひとりで行動する必要があった。つきまとう男たちをふりきり、少女は島のあちこちを移動していた。

ひとりで行動するには制限がある。

島で生き抜くためにはバッジが必要であったし、それを奪われな

いために人目を避ける一日はなにかと不便だ。

そんなある日、彼女は尾行に気付いたのである。  
また下心のやからか……と思ったのだが、どうも違う。ただ、ひつそりと、無言で、なにをするでもなく、たんたんと尾行しているだけである。

それに気付いたとき、なぜだか心底から怖ろしくなった。  
こいつらはほかのやつらとは違う！

それから少女は必死に尾行をふりきろうとしたのだが、かれらは楽々と追いつき、まるで監視するように遠巻きに取り巻くだけで、いつさい手出しはしなかった。

それが今朝にかぎって姿をあらわにした。  
なにが目的なのだろう？

取り巻いている男たちは無表情に少女を見つめている。なにをするでもなく、ただ少女が逃げないよう見張っているだけのようだ。  
と、ひとりがかすかに目配せをした。

その瞬間、男たちの表情が激変した！  
それまでの無表情から一変して、下卑た、野卑なものに変化した。  
にやにや笑いが浮かび、みだらな目つきで少女の全身を舐めまわすように見つめている。

へへへへ……と軽薄な笑い声がかれらから沸き起こった。

なんなのこいつら……？

少女は首をふった。

まるで芝居の一場を見ているようだ。

それも安っぽい、三文芝居。

なにかのスイッチが入ったように、男たちは欲望をむき出したぎらぎらする視線で、じりっ、じりっとして少女に近づいてくる。



氷の塊のような恐怖が少女の胸元にこみあげてくる。

「やめてよ……こないで……」

少女の目に涙がこみあげた。

「いやーっ!」

彼女の叫びがこだました。

「待ちなさい!」

その時、あたりを圧するような女の声がした。

## 恐縮

はっ、と男たちは動きを止める。

少女は目を開けた。

まぶしい朝日の中に、ふたりの人影が見えていた。

ひとりは女、もうひとりは男のようだ。

女はセーラー服、男はタキシードで、ふたりとも朝日をバックに  
こいシルエットとなっている。

少女を取り巻いた男たちは身構えた。

「なんでえ……邪魔すんなよ」

「そうだ。おれたちや、この可愛い娘ちゃんと一緒に、トーナメントを戦い抜こうと相談していたとこなんだ」

「帰れ！」

口々に口を開く。

「あなたたち……恥ずかしいと思わないの。ここはトーナメントをするところよ」

女の声は威厳がこもり、聞いているだけで少女の胸に安堵がわきあがってくる。

大丈夫だ……この人なら信頼できる。

なぜかそういう確信がわいた。

へへ……と、男たちは野卑な笑い声をあげながらふたりの方へ向きを変えた。

「なんだか叱られているみたいだぜ」

「そうだよ、おれたちママに叱られたんだぜ！」

ひやははは……と笑い声。

「それじゃあ、その女からおれたちの相談に乗ってもらうか……」

そうつぶやき、ひとりの男がいきなりセーラー服の女に襲い掛かった。

女はそれを予期していたように身を沈め、素早い動きで抜き手を男の下腹部へ突きたてた。

すごい！

少女は目を見張った。

女の動きはよく鍛錬された、達人クラスのものだった。あの抜き手がまともに突き刺さったら、ただではすまない。あつという間に反吐を吐き、ころげまわって苦しむだろう。

が、男はまるで平気だった。

「なんでえ、こりゃ？ え、なんの真似だい。お嬢ちゃん！」

女の目が大きくなった。信じられない、という表情になる。すばやく側に立つ少年に声をかけた。

「気をつけなさい太郎さん。この男たち服の下に……」

太郎と呼ばれた少年はうなずいた。

「判っております。この男たちは服の下に防具を隠しております。わたくしにお任せください」

すつ、と少年は女の側をすりぬけ、前へ出る。

と、さっきまでへらへらしていた男たちの態度が急変した。表情は真剣になり、油断のない構えを取る。

少年はすすると男たちに近寄った。

とん、と少年の足もとが突き出した岩角を踏む。その途端、少年の身体はまるで宙を飛ぶように浮き上がった。稲妻のような動きで、かれは男たちの間を駆け抜けた。

一瞬の出来事だった。

まるで舞を見ているようだった。

少年の腕が目にもとまらぬ速さで旋回し、男たちの身体にわずかに触れたのは見てとれた。が、次におきた変化に少女は息を呑んだ。

なんと、男たちは全員その場に倒れ、うめき声をたてていたのである。

何が起きたのだろうか？

呆然となっているのは少女だけではなかった。隣に立つ、女もまた驚いているようだった。

「太郎さん、あなた、いまなにをなさったの？」

太郎と呼ばれた少年はかすかに頭を下げた。

「申し訳ございません。でしゃばるつもりはなかったのですが……」

少年は本当に恐縮しているようだった。

あんなことして、すまながるなんて変な奴！

少女はぼんやりそう思っていた。

## 茜へあかね

「あたし、勝又茜あかねっていいいます。助けていただき、有難うございました」

そう言つて茜と自己紹介した少女はぺこりと頭を下げた。

「よろしく茜さん。あたくしは真行寺美和子と申します」

「ぼくは只野太郎です。よろしく」

茜が襲われた場所から少しはなれたところで、三人は自己紹介しあつた。太郎に倒された男たちはすぐ気がつき、無言でおたがいうなずきあうと黙つたまま三人の前から姿を消した。

茜はぴしゃりと自分の額を叩いて叫んだ。

「いつけなあーい！ こんな挨拶するなんて、一生の不覚だわ！」  
そう言つと、彼女は美和子の前に出て、いきなり姿勢を変えた。

下腹に力をいれ、スカートから出ている足をがばつ、と大股に開き腰を落とし、左手を背中に、右手を前へ突き出す。右手の手の平は上を向きぐつと美和子を見上げる姿勢をとる。

「お控えなせえ！」

叫ぶ。

その声に、美和子と太郎は顔を見合わせた。

「な、なにかしら、太郎さん」

さあ、と太郎も首をひねつた。

なにかの挨拶らしいが、このような挨拶は執事学校では教えられていない。

「お控えなせえ！」

茜は再度叫んだ。

叫びつつ、彼女はぐっと上目遣いになって美和子を見つめている。いや、睨んでいるといった按配である。

ひそひそと太郎は美和子にささやいた。

「とりあえず、彼女と同じ姿勢をとられてはいかがでしょうか？」

「そうね……」

疑わしそうな視線で、美和子は茜を見た。

ぎこちない動きで腰を落とし、茜の真似をして手を突き出す。

「こうかしら？」

「さっそくのお控え、有難うござんす！」

茜は声を上げました。

「わたくし姓は勝又、名は茜。上州勝又村に生を受け、十五の春まで地元の高校に通い、わけあって中退、いまはこの番長島にてゆえあつて姐さんにお世話となりかたじけない次第にございます。わたくし育ちましたところの上州名物はからっ風にかかあ天下、利根川にて産湯をつかり、気風と度胸は三国一の土地柄。一宿一飯の恩に、不肖この勝又茜、どのような恩返しもいたしますので、姐さんにはお引き立てよろしく願います！」

まさに”立て板に水”といった調子で、美和子はぽかんと口をあけているだけだ。

茜が腰を上げたのを確認して、美和子もまっすぐの姿勢に戻った。

「あの……、これでよろしいのかしら？」

「はい！ちゃんと仁義を切れるかどうか、心配だったけど美和子の姐さんに受けてもらえて、嬉しかったです！これであたし、姐さんの妹分ってことになりましたので、よろしく！」

「妹分？」

「そうです！ 美和子姐さんと、その太郎さんに助けられたんです。あたし、おふたりの妹分になって、なんでもいたします！ どうぞ、よろしく！」

そう言つてぺこりと頭を下げた。

美和子と太郎は顔を見合わせた。

とにかく話を聞こうと、美和子が提案し、三人はちかくの食堂へと移動した。

食堂は二十四時間、いつでも開いている。

朝が早いため、食堂にはあまり人がいない。

トーナメントの参加者がここに顔を出すのは、昼近くになってからだ。不良と呼ばれるかれらは、朝が弱いのである。むしろ美和子のように朝早くから活動しているほうが異例である。

「なにか頂きましょうよ」

美和子の言葉に、茜のお腹から「キュウツ」と、空腹を訴える音がした。

茜は顔をあからめた。

「ごめんなさい、昨夜からずっと食事抜きだったもんで……」

くすり、と美和子は暖かな笑みを浮かべた。

「いいのよ。一緒にお食事しましょう」

美和子が椅子に腰かけると、太郎はかすかに頭を下げ、トレーを持ってバイキング式の食事コーナーに向かった。

いつもの習慣で、手は料理をトレーに持っているが、目はすばやく食堂を見渡している。その太郎の視線が、食堂の一角にとまった。

ひとりの女性参加者がトレーに食事を盛っているとこだ。

あの、島に上陸する前に船で出会った、中国服の女である。あい

かわらず表情は覆面におおわれ、わからない。彼女はトレーに食事を用意すると、そのまま階段をのぼって上階へ上がっていった。おそらく部屋の中で食べるためだろう。ちら、と彼女は階段に上がる直前、太郎を見た。

につ、と彼女の瞳が笑いに細くなる。

そのまま彼女は階段をのぼっていき、姿が見えなくなった。

太郎はトレーに食事を用意した。

太郎はふたりぶんのトレーを手に持って戻って、美和子と茜の前に並べる。

「今日の朝食はベーコンとサニー・サイド・エッグになります。つけあわせにマッシュ・ポテトとサラダをご用意いたしました。あとで果物をお持ちいたしますので」

太郎の言葉に茜は顔を上げた。

「どうしてふたりぶんなの？ あんたは食べないの？」

「わたくしはあとで頂きます」

茜は口を尖らせた。

「どうしてよ、一緒に食べたほうがおいしいよ」

「そう言うわけにはまいりません。わたくしは執事でございますので」

はあ？ といった表情になった茜に、美和子は説明した。

「只野太郎さんは、わたしの正式な召し使いなんです。ですから一緒に席で食事することはないのよ」

召し使い、と茜は素っ頓狂な大声をあげた。じろじろと太郎を見る。

「はあー、驚いた。そんなものが居るなんて、信じられないわ。召し使いねえ……」



ふーん、と彼女は顎に手をやり、考え込んだ。

「あんたお嬢さまなんだ」

美和子を見てそう言う。

「はい、そうです。美和子さまは真行寺家のあとりでございます」  
太郎が茜の言葉を引き取った。

腕に白いナプキンを乗せ、太郎は美和子の側で給仕を開始する。  
上品にナイフとフォークを使い、食事をする美和子をちらちら眺めながら、茜は手づかみでパンをちぎり、盛大に音を立て食事を続ける。

そんな茜にも太郎は手際よく前菜、スープ、食後のデザート、さらにはコーヒーなどを給仕していった。

満腹になった茜は首をふりながらつぶやいた。

「本当にあんた、召し使いなんだねえ。堂に入っているわ!」

お褒めを頂き、ありがとうございますと太郎は受け答えをした。

美和子はまっすぐ茜を見て口を開いた。

「あなたのお話をうかがいたいわ。どうしてあんな朝はやくから、あんなことになったのか」

茜はうなずいた。

「あたし、この島にお兄ちゃんを探しに来たのよ!」

「お兄さまを?」

「うん、勝又勝かつまたっていうんだ。名前、聞いたことない?」

茜の言葉に美和子と太郎は顔を見合わせた。太郎はひかえめに言葉かけた。

「その方のことなら、心当たりがございます。確か、美和子さまがこの島に上陸したとき、最初にお手合わせをなさった方かと存じますが」

美和子も同意した。

「ええ、憶えているわ。とても背の高い方で、顔にたくさん傷跡がございましたわ」

それよ！ そいつがあたしの兄ちゃんよと茜は勢い込んだ。

「どこにいるか知ってる？　ね、そのあとお兄ちゃんを見かけた？」

たたみかける茜に、美和子は首をふった。

「判らないわ。なにしろ最初の日に会ったばかりだし、あのあとあたしたち、島のおちこちに出かけたから」

そう……、と茜はあきらかにながかりした表情になった。そんな彼女に美和子は声をかけた。

「どうしてお兄さんをお探しになっっているの？」

「お兄ちゃん、家出したんだ。お父ちゃんと喧嘩して……全国一のバンチヨウになるって言いつた残して家を飛び出して……。あたし、お兄ちゃんに家に帰ってもらいたくて、このトーナメントのこと知って参加したんだ。お兄ちゃんのことだから、絶対参加していると思ってる。お父ちゃん、口には言わないけどおにいちゃんのこと心配している。だから探しに来たの」

そうなの……と、美和子はつぶやいた。茜は続けた。

「だからあたし、この島で戦うつもりなかった。へたに戦って、負けたらいらなくなるもんね。夜になって戦う時間が終わるのを待って、島のいろんなところにある食堂や宿泊所を探したんだ。そんなこと続けていたら、あいつらがあたしを尾けてきたのよ。最初はなにをするでもなし、ただあとを尾行するだけだったけど、どういふわけか今朝にかぎってあんなことになって……美和子さんたちが来てくれなかったらどうなっていたか」

そう言つと茜はいまさらながらに怖くなってきたのか、ぶるっと震えて腕でじぶんの胸を抱きしめた。

今朝に限って……。

太郎はひそかに茜の言葉を聞きとがめた。

まるで太郎と美和子を待っていたかのような言葉だ。

美和子はそつと手を伸ばし、茜の手をとった。茜は顔を上げた。

「茜さん。あたし、あなたのお兄さん探しのお手伝いをさせてもらうわ。この番長島はひろいけど、お兄さん喧嘩にお強いから、きつと最終日には残っている可能性があるわよ。それまであたしたちと一緒に行動いたしませんこと？」

茜は目を丸くした。

「本当？ あたし、美和子さんと一緒にいていいの？」

「当たり前よ。それにわたしたち、良いお友達になれそうね。ね、茜さん。わたくしのお友達になってくれませんか？」

茜は真つ赤になってうなずいた。

「美和子姐さん、どうしてスケバンっぽい格好にしないの？ そりやお嬢さまだつてことは知っているけど、いつまでそんな服装だと相手に舐められるよ！」

食堂で、デザートをつつきながらふいに茜は話しかけた。

美和子は首をかしげた。

「スケバンっぽい………どういう意味？」

茜は首をふった。

「あきれた………本当に知らないのねえ。こりゃ、無理ないわ……。美和子さんのセーラー服、ノーマルでちゃんと似合っているけど、もうちょつとまともな格好にしないと。ね、立ってみて！」

茜に言われ、おずおずと美和子は立ち上がった。すると茜はいきなり美和子のスカートを短くたくしあげる。形の良い膝があらわに

なつて、美和子は真っ赤になった。

「ちょ、ちよつと茜さんっ？」

いいから、いいからと茜は言いながらこんどは美和子の胸元をぐいと広げた。胸の谷間がのぞく。

「このくらいしないと、相手から舐められるよ！ 姐さん、舐められるの平気？」

「そりゃ、まあ……でも、どうしてわたくしを舐めたがるのかしら。わたしの顔を舐めておいしいのかしら？」

ぷつ、と茜はふきだした。

「そう言う意味じゃないって。つまり……ええと、軽く見られるってこと！ 勝負は最初の印象が大事なんだ。そのためにガンを飛ばすことも必要だしね」

「ガンを飛ばす？ 拳銃をどうするの？」

茜はいらいらして足を踏み鳴らした。

「違つて！ 眼<sup>がん</sup>だつて！ いい？ こうすんの！」

彼女はぐつと顎をひき、上目がちになって視線にちからをこめた。「ね、こうして相手を睨めば、勝負の前にこっちは強いんだってことが判るでしょ？ さあ、やってみて！」

美和子は必死に真似をした。それを見て茜は頭をかかえた。

「違つ、違つ！ それじゃより目になつちゃう……。それに顎を引きすぎだよ。こう、目に力を込めるんだ！」

美和子はため息をついた。

「難しいのね……」

## 執事護衛術

「もう一度、再生してみる」

スタジオのモニター・ルームでケン太は命令した。その命令に、スタッフがビデオのスイッチを入れる。

モニターのひとつに、太郎が四人の男たちを相手にした一件が再生されている。ひらひらと太郎の両腕がひらめき、次の瞬間、四人の男たちはうめき声をあげて倒れている。

ケン太は身じろぎひとつせず、じっとモニターを見つめている。顎に手をやり、指先をこめかみに当てている。ケン太の背後に洋子がトレーを手に持ち、あらわれた。トレーにはコーヒー・ポットと、マグ・カップが載っている。ポットから注がれたマグのコーヒーをケン太は受け取り、一口すすった。

「うまい！ いつものコーヒーと違うな」

「新入りのコック見習いが淹れたものです」

洋子の答えにケン太はちよつと首をかしげた。

「新入りの…… ああ、もと真行寺家に奉公していたという少年か。見習いにしては、いい腕をしている。ちゃんとしたコーヒーを淹れられるやつは、いまだき貴重だからな」

洋子は頭を下げ、トレーを持って退出した。退出するとき洋子が確認すると、ケン太はまたモニターに太郎の動きを再生させ、あきもせず眺めていた。洋子はそのまま部屋を出て、キッチンへ向かった。

キッチンでは田端幸司が、食器や、調理器具の後片付けをしていた。洋子が入ってくると、幸司はちらりと目を上げた。

トレーを返し、洋子が口を開いた。

「ケン太さまは、あなたの淹れたコーヒーの味を誉めていたわよ」  
口調は平板で、時刻表を読み上げるように感情がない。幸司はうなずいた。

「そうかい、そりゃよかった」

幸司がそう言うと、それじゃ、と返事をして洋子は戻っていった。その後ろ姿を見て幸司はちよつと肩をすくめた。

「どうした幸司。あの女の子、気になるのか？」

先輩の調理人がにやにや笑いを浮かべ、幸司に話しかけた。幸司はちよつと赤くなると、答えた。

「そんなんじゃないですよ。ただ、あの山田洋子って女の子、ちかごろひどく無愛想になったと思いませんか？」

ふむ、と調理人はうなずいた。

「そうさな……あのメイド、入ってきたときはうるさいくらいおれたちにも気軽に話しかけてきて、もつと陽気だった気がするな」  
そうでしょう、と幸司も相槌を打つ。

いったいどうしたんだろぅ……。

幸司はなぜか洋子のことが気になっていた。

洋子がふたたびスタジオに戻ると、ケン太はモニターの前で椅子の背に背中を押し付けるようにして両手を後頭部にまわしてつぶやいていた。

「ふうむ、妙な動きだな。あの四人は帰還しているのか？」

「はい、お呼びを待っております」  
「入れる。質問したい」

はっ、という応答と共に、太郎に倒された四人の男たちがぞろぞろとモニター・ルームに入室してきた。着替えたのか、ごく当たり前前のスタッフの服装をしている。かれらはケン太の前にずらりと整列した。

この四人はケン太の部下である。ケン太はかれらに太郎の技を引き出すため、罠をかけることを命じていた。そのために一人で行動している茜に目をつけ、後をつけさせたのである。やがて茜と太郎たちが接近すると、おびき出すためにあの芝居を打たせたのだ。

ケン太は居住まいを正すと、口を開いた。

「お前たち、太郎と戦ったとき、何が起きた？ 太郎はお前たちに何をした？」

判りません、とひとりが首をひねった。

「首や、背中にあいつの指が触れたのは憶えているんですが、あのあと全身が痺れたようになって……」

もう一人がうなずいた。

「そうなんです。あつという間の出来事でした。まるで撫でられただけ、と思ったんですが、どういうわけかあの後まるで身体が動かなくなつて……」

みな訳がわからない、といった表情になっている。

ケン太は背後の洋子をふり返った。

「洋子、太郎の使った技についてなにか知っているか？」

「あれは”執事護衛術”のひとつです。人間の神経の結節点を刺激

する秘法なんです。正しい順路で神経を刺激すると、あらゆる効果を発揮します。達人クラスになると、相手を殺すことすらできるそうです」

「お前はそれが出来るのか？」

洋子は首をふった。

「いいえ、太郎のような使い手になるには才能が足りませんでした。わたしの知っているのは、初歩的な執事格闘術だけです」

ふうむ、とケン太は顎をなでた。

なにか考え込んでいるようだ。

もし、あいつと戦うことになったら……。

モニターをじっと見つめるその視線は、いつか、その日が来るのではないかと予感している目つきだった。



## 対峙

勝又勝またかつの下駄げたの音ががらがらと廃墟にひびく。

がらつ、がらつと大きな音を立て、勝は肩をいからせ、あたりを睥睨しつつ歩き回っていた。

戦う相手を求めていた。

このごろは篩い落しがすっかりすみ、こそこそ隠れていた連中もバッジを取り上げられ、島を後にしている。勝の胸にも金色のバッジが光っていた。

もうすぐ決戦は近い……。

勝はその日が待ち遠しかった。

交換所にバッジを交換しに行くたび、上位の名前に「真行寺美和子」の名前を確認し、そのたび頭に血が昇ったが、いつか再び合間見えることを思ってみずからを慰めていた。

それよりもうひとつの名前が気になっていた。

風祭俊平……。

この名前はバッジ獲得者の上位に、つねに食い込んでいる。

美和子が一番であることは変わらないが、勝と俊平のふたりは二位、三位を入れ替わって常にかかげられていた。

いったい、どんなやつだ？

交換所の係員の話によると、ひどく身体の大きい奴らしい。勝自身、百八十以上ある長身だが、そいつはさらに頭ひとつ凌駕しているという。となると、最低でも二メートルはあるということだ。

ぽつり、と一粒の雨が勝の鼻を打った。

ん？

勝は空を見上げた。

日差しが急に翳り、あたりが急激に暗くなっていく。

ひゅう……、かすかな風が勝の髪をなびかせる。

ぽつ、ぽつ……。

雨粒がぱらぱらと降り注ぐ。そしてざあつ、と音を立てあたりが白く飛沫いた。

通り雨だろうか。

雨のカーテンの向こう、だれかが立っている。勝は目を細めた。

「誰だ！」

人影はかすかに身動きをした。

ひどく大柄だ。

背も高いが、肩幅も広い。というより、まるで樽に手足が生えたような異様な身体つきをしている。

「おめえが勝又勝ってやつか……」

ひどく野太い声が雨音を突き刺すように聞こえてくる。勝は腰を落とし、身構えた。

「そう言うおめえこそ、誰なんだ」

くくく……と相手は笑った。

聞くまでもない……勝は直感していた。

「おめえが風祭俊平か？ 会いたかったぜ」

いつしか勝の頬に笑みが浮かんでいる。

ゆらり……と、相手は足を踏み出した。

## 通り雨

「お兄ちゃんの声がする……」

雨に打たれながら、茜はつぶやいた。

彼女の側で美和子は顔を上げた。

「本当？」

うん、と茜は強くうなずいた。

あれから茜は美和子と太郎と行動をともしていた。茜の助言で、美和子は制服に手を入れ「スケバン」らしい格好になっている。

スカートは短く、上着の胸元は大きく開き、胸の谷間が強調されている。太郎の手によって制服は仕立て直され、身体のラインをくつきりと見せるデザインに手直しされていた。太郎の裁縫の腕に、茜は感嘆していた。

太郎にとって美和子の服に手を入れることは当たり前のことだった。洗濯はもとより、ほころびを繕うのは召し使いとしての必要な技能であつたのである。仕立て直された制服に着替えるとき、美和子は恥じらいを見せた。

太郎が着替えを手伝うと申し出たとき、美和子はそれを拒否したのである。そのやりとりを耳にして茜はあきれたといった口調になった。

「女の子の着替えに、男のあんたが立ち会うなんてありえねえっ、つつの！」

茜の言葉に太郎はちよつと首をひねった。

「しかしいままでお嬢さまのお着替えには、わたくしが同席してお

りましたが」

太郎の返答に茜は目を丸くして叫んだ。

「うつそーっ！ そっちのほうがおかしいよ！ いいから、美和子姉さんの着替えはあたしが付き合うから、あんたは外で待ってなよ！」

宿泊所の部屋から太郎は茜によって廊下に押し出された。人気のない廊下に、太郎はぽつんと取り残され所在無げに立ち尽くした。

どうということだろう？

いままで美和子は太郎の前に、平気で下着姿を見せていたのに。ぼんやり考え込んでいると、ドアの向こうから茜の声がする。

「入っていいよ！」

その言葉にほっとした太郎はドアのノブに手をかけた。

「失礼いたします……」

開け放たれたドアの向こうに、美和子があらたな服装で立っていた。

太郎は目を瞠った。

「どうかしら？ あたし、似合って？」

美和子の質問に、太郎はゆっくりとうなずいた。

「とてもお似合いですよ」

実際、仕立て直されたセーラー服は、美和子の新たな魅力を引き立てていた。強調された胸の谷間、すらりと伸びた足。ウエストはぎゅっと絞られ、かすかな隙間が彼女の細い胴回りの肌を覗かせている。

そう……、と美和子はうつむいた。

頬がピンクに染まっている。

そんな美和子を、茜はいぶかしげに見つめていた。

「お兄ちゃんの声だ！ 戦ってる！」

叫んで茜はばしやばしやと水溜りを走り出した。ざあつ、と横殴りの雨がたたきつける。

待って！ と、美和子も走り出す。太郎も追いかけた。

## 集結

やはり通り雨だったようだ。

突然降り出した雨は、降り出したときと同じくさつとあがり、雲間から太陽のまぶしい光があたりを照らし出した。

ふたりの巨漢がにらみ合っている。

ひとりは勝又勝。

もうひとりは風祭俊平。

ふたりの身体からは、しろい蒸気が立ち上っていた。

全身にちからをこめ、激突に備えているのだ。体中には力強く血液が流れ、体温は急上昇して服にしみこんだ雨を蒸発させている。

ふたりともぴくりとも動かない。

いや動けない。

ちよつとでも身動きすれば、それが決着につながるという予感に相手の出方をうかがっている。

うおおおおっ！

突然、俊平が雄たけびをあげた。

地鳴りに似た、あたりを圧する音声に、からからと乾いた音を立て、コンクリートの破片が廃墟となったビルから路面にころげ落ちる。

ぐわあああゝっ！

負けじと勝も雄たけびをかえす。

ぱりん、と音を立て、あたりの窓ガラスが割れて弾けとんだ。

ばさばさばさ……と羽音をたて、このあたりに住み着いてい<sup>からす</sup>る鳥が驚いて集団で飛び上がった。

ふたりを中心として、同心円にほこりが舞い上がる。闘気が目に見える形で、あたりの空気を舞い上がらせているのだ。

いざ対決！ と、ふたりはじりつと足を動かした。  
そのとき……。

「お兄ちゃん！」

がくつ、と勝はたたたらを踏んだ。  
へ？ という顔でふり返る。

たたた……と、一心に走ってくる少女が目に入った。

勝の目がおおきく見開かれた。

「茜……？」

お兄ちゃん！ と、大声をあげ茜は表情を泣き顔でぐしゃぐしゃにして飛び込んでくる。勝の胸に顔をうずめ、泣きじゃくる。

「お、おい……茜、お前どうして？」

茜は顔を上げた。

「馬鹿！ お兄ちゃんの馬鹿！ 探したんだよお……」  
よお……の語尾が泣き声でかすれた。



勝は苦い顔になった。

ぐつと茜の肩を掴んでいる腕を伸ばし、言い聞かせる。

「ちよつと待て！ いまおれが何をしているか、判んねえのか？」  
だつてえ……と茜はぐずった。

その時、砂利を踏んで近づいてくるふたりの足音に勝はそちらに注意を向けた。

かれの目がさらに見開かれた。

「真行寺美和子……」

つぶやいた。

「なに、いまなんと言った？」

それまであつけにとられ、ふたりのやりとりを聞いていた俊平が緊張した表情になり、勝の見ている方向に目を向ける。

「その女か……一度お目にかかりたいと思っていたんだ」  
にやりと笑った。

その笑いに、美和子は眉をひそめた。

ぎらりと俊平の口もとが日差しを反射する。

かれの齒はすべて義齒になっていた。しかも鋼鉄製の。

かれらが顔を合わせたのは偶然のようだが、しかし偶然の要素は少ない。

すでに島のトーナメントが始まって数日経過している。それまで大多数の参加者が落伍し、参加者は十数名に限られていた。参加者の数が減るにつれ、島のあちこちに用意された宿泊所、食堂はその数を減らしている。少ない人数のためにすべての施設を開く必要は

ないからだ。

とうぜん、その施設を利用する参加者たちの活動範囲もせばまっていくな。勝たちが施設を利用するかぎり、顔を合わせるとは必然でもあった。

バッジ獲得者上位の者がここに集結したわけだ。

## 最後に立っていた男

「どうすんだよ、お前ら」

ふてくされた俊平は不機嫌にうなった。

せっかく勝と一勝負できると思ったとたん、邪魔がはいって気分がしけたらしい。

俊平は思い切り不満であった。

「おれが美和子を倒す！」

勝は叫んだ。そして俊平を見る。

「だがその前に、おめえと勝負してえ！ おめえを倒して、その後美和子とやる！」

断言した。

俊平は笑った。

「面白え！ そうじゃなくちゃな……だが、その女と勝負するのはおれだ！ まずはおめえ、勝又勝を倒してからだが……！」

それを聞いた勝は背をそびやかした。

「承知！ おい、美和子！」

美和子を睨む。

「逃げるんじゃないぞ。この勝負が終わったら、かならず勝った方と勝負するんだぞ！」

指先を突き立てた。

美和子はゆっくりとうなずいた。

「よろしくてよ。わたしはどなたの挑戦も受けましょう」

あちゃー、と茜が額をたたいた。

「ね、美和子姐さん。そんなんじゃ駄目だよ……もつと格好よくきめないと！ そんなんじゃ、いいところのお嬢さん、まるだしじゃない！」

茜の言葉にくすり、と美和子はほほ笑んだ。

「ご免なさいね、わたくし、あなたの言うような喋り方はなれていませんの」

「うるせ　　い！」

いらいらしているように勝は顔を真っ赤に染めて怒鳴った。

「どいつもこいつもペチャクチャさえずりやがって！　茜、おめえはどいている！」

どん、と茜の肩を突いて俊平に向き直った。

腰を落とし、目を怒らせた。

「来い！　やり直した！」

俊平はうなずくと勝に身体をむけ、闘いの構えをとった。

ふたたび廃墟にふたりの闘気が満ちていく。

勝と俊平の視線による火花が、目に見えそうである。

……………。

どちらかともなく、ふたりは動いた。

目にもとまらぬ速さといっている。

ほとんど同時に「がつーん！」という、衝撃音が響いていた。ひっ、と茜は目を閉じた。その側に立つ美和子は、彼女の手を握りしめている。

静寂。

おそろおそろ、といった感じで茜は閉じていた目を開く。  
ふたりはぴくりとも動かない。  
額をよせあい、おたがいの手の平をぐつと掴んでいるだけだ。

「どうしたの？」

茜のつぶやきに、美和子は「しっ！」と唇に指をあてた。

ぶるぶると勝と俊平の全身がこまかく震えている。

ふたりはほとんど同時に走り出し、全速力で頭をぶつけ合ったのだ。その時の音が、まるで二台の戦車が正面衝突したような音となつてあたりに響いたのである。

頭突きし合ったふたりは、同時におたがいの手の平を組み合い、そのままちからまかせに相手を組み伏せようと戦っているのである。すさまじい力比べであった。

びりっ！

びりびりびりっ！

勝と俊平の学生服のあちこちに裂け目があらわれ、たちまち袖がちぎれとんだ。遅しい腕があらわになる。縫い目がふたりの力瘤によつて裂けてしまったのである。

がくり！ と、最初に一歩しりぞいたのは俊平だった。わずか一歩だが、しかし確かに勝の圧力に屈したのである。

巨大な、碁盤のような俊平の顔に焦りがつかぶ。勝はおのれの勝利を確信し、にたりと笑みを浮かべた。

たまらず俊平はじぶんから組んでいた手を離し、ぱつと飛び下った。

うおおっ、と叫び声をあげ勝は腕をふりあげ、いきなり固めた拳を俊平の顎に叩き込んだ。

ぼこっ、と低い音が響く。がくっ、と俊平は横向き、目が虚ろになった。たたり……と口もとから血が一滴、こぼれる。

つぎに勝はアッパーを顎にめり込ませる。

どう、と俊平の巨体が宙に浮く。

もんどりうち、かれは地面に倒れこんだ。

うつ伏せになり、唸り声をあげる。

「立て！ このくらいでまいるわけ、ないだろう」

勝は怒号した。

さつと俊平は地面に手をつき、低く構えた。片手に握りこぶし大の石を掴んでいる。

勝は眉をよせた。

と、いきなり俊平はその石をあんぐりと口を開け、その中に放り込んだ。

ばりばり、がりがり俊平の鋼鉄製の義歯が石を噛み砕く。

ぷーっ、とかれは口中の砕いた石粒を吹き出した。

「わっ！」

勝はおもわず手を挙げ、じぶんの顔を守った。

隙が出来たと見るや、俊平はかがんだ姿勢からダッシュして頭を勝の鳩尾みぞおちにまっすぐに突き刺した。

ぐふう……、と勝は顔を真っ赤にさせる。

うづくまる勝の顎を、俊平の膝が蹴り上げた。さらに素早くまわし蹴り！

きりきりまいをして、勝は横たおしに倒れこむ。俊平は止めをさすべく、爪先でなんども蹴りを入れた。

どすつ、ばきつ！ と、俊平の靴先が勝の身体に突き刺さるたび、いやな音が響く。どうやら俊平は靴先に鉄片かなにか、特殊な加工を施しているようである。

「お兄ちゃん……！」

たまらず茜が飛び出そうとするのを、勝はぐつとにらみつけた。

「そこにいろ！ 来るんじゃないえ！」

低く、唸るように命令する。びくつ、と茜は立ち止まった。

ぐぐぐ……、と勝は必死の力をこめて立ち上がった。

ほう……と、俊平は賛嘆の表情になった。立ち上がれるとは思ってもみなかったようだ。

たらたらと、勝の口もとからいくすじも血液があふれている。内臓にダメージを負っているのかもしれない。

ふつ、ふつ、ふつ、とせわしく呼吸をしながら、勝はゆらり、ゆらりと左右に身体を揺らしていた。立っているだけで必死のようだ。

「立てるとはな…… 誉めてやるよ。しかしそこまでだ！」

叫ぶと、俊平は大腿に勝に近づき、拳をふりあげた。

うつろな目つきで勝は俊平を見上げる。

俊平は口を引き結び、渾身のちからをこめ、殴りかかった。

ばしつ、と鋭い音と共に、勝は俊平の拳を手の平で受け止めていた。

俊平の顔色が変わった。

ぐぐぐぐ……、と全身にちからを入れている。しかし動けないようだ。

俊平の拳を受け止めた勝は、ぎりぎりとその腕を絞り上げていく。俊平の顔に苦痛の色が浮かんた。

「まだ終わりじゃねえ……まだな……」

勝はささやくと、勢い良く自分の額を俊平の額に打ち付けた。

ごっくん！ 重々しい打撃音が響く。

「……！」

俊平の目が見開かれた。かく、とその膝がおれた。

その顎を勝は殴りつけた。

ごき！ といやな音がして、俊平の顔があさつてを向く。二度、

三度、勝は無言で俊平の顎を殴りつけた。

がはっ、と俊平が口を開いた。

ぼろぼろと口中から鋼鉄製の義歯（じぎ）が零れ落ちた。

くそお……と俊平が顔を上げ、唇を噛みしめた。

野郎！ と、叫ぶと同じように殴りかかる。

ぼくっ！ ばきっ！ と、その場でふたりは殴り合いを続けていた。どちらが倒れるか、意地の張り合いである。足を止め、逃げず、真正面に相手の拳を受け止める。

顎に、腹に、わき腹に拳がめりこむが、おたがい一步も退かない。いや、退くわけにはいかなかった。

それを美和子、太郎、茜の三人はじつと身じろぎもせず見つめていた。

ふたりの動きはしだいにスローモーになっていく。打撃の音も間遠になって、腕を上げることすら大儀のようである。

とうとうふたりの動きは止まった。

ふーっ、ふーっ、と獣のような呼吸音をたて、にらみ合っている。



両腕はだらりと垂れ下がり、肩がおおきく波打っていた。額からこめかみ、そして顎さきにかけて大量の汗がしたたっている。

顔も変形していた。

瞼は腫れ上がり、頬も内出血で変色している。

ゆっくりと、勝の腕が上がっていった。

しかし肩より上へ持ち上げるとは困難なようだ。ぶるぶると腕全体が震え、勝は歯を食いしばった。

うおおーっ、と勝は咆哮した。

最後の力をふり絞り、かれは全身の力をこめ、俊平の顎に拳を叩き込む！

ぐしゃ！ と物が壊れるような音を立て、俊平は棒のように倒れていく。

大の字に俊平は倒れた。

すでに意識はない。

ゆらゆらと揺れながらそれを見おろす勝は、ゆっくりと膝まづいた。

手を伸ばし、俊平の胸のバッジをむしりとる。それを自分の胸に震える指先でとめた。

最後ににやりと笑うと、勝はそのまま倒れこんだ。

「お兄ちゃん！」

弾かれたように茜が飛び出した。

膝をつき、勝の頭をじぶんの膝枕にのせた。

うつすらと目を開け、勝は茜の顔を覗きこんだ。身体を回転させ、腕でじぶんの身体をささえ、手を地面についた。無言で立ち上がるうつとする。

「お兄ちゃん、動いちゃだめ……」

唸り声をあげると、勝は茜の肩をささえに何とか立ち上がった。その視線のさきには美和子がいた。

「真……行……寺……美和子！ つぎはおめえだ……！」

じりっ、じりっ和美和子に迫っていく。

「お待ちなさい。あなたは怪我をしています」

美和子の声に、勝は目を瞠った。

「その怪我が治ったら、お相手しましょう。茜さん、お兄さんを大事にするのよ」

茜は力強くうなずいた。勝に話しかける。

「お兄ちゃん、聞いたでしょ？ いまは怪我を治すときよ！」

悔しそくに勝は唇を噛んだ。茜がさきほどの言葉を繰り返す。

判った……と、勝は短く応えた。

茜にささえられ、勝はその場を立ち去っていく。

ふたりを見送った美和子は、じっと動かず見つめていた。

太郎はちらりと美和子を見る。

彼女は何を思っているのか、ただ激しい葛藤があるらしく、唇を固く引き結んでいる。

## 食欲

「もっと飯をもってこい！ 足りねえぞ！」

宿泊所にたどり着いた勝は、一階の食堂で席につくや茜に命じ、料理を持ってこさせた。テーブルに山盛りにされた料理をあつという間に平らげると、追加を茜に命じる。

「お兄ちゃん、そんなに食べて大丈夫？」

茜はあきれて勝に話しかけた。勝は面倒くさそうに骨付きのチキンを持った手を振り回した。

「おれは腹が減っているんだ！ さつさと手当たりしだい、持ってこないか！」

はいはい、と茜は小走りに料理が並べられているバイキング・コーナーに向かうと、勝の言葉どおり「手当たり次第に」トレーに乗せ、運んだ。

目の前に運ばれたあらゆる料理を、勝は次から次へと口に運ぶ。ろくに咀嚼もしない。

がつがつと肉を、魚を、米を、そしてサラダを食らい、ピッチャーになみなみと注がれた一リットルの野菜ジュースで胃袋に流し込む。

驚異的な食欲である。

そしてさらに驚異なのが、食料を腹に詰め込むたびに体力が回復しているかのようなのである。食事がダイレクトに身体に受けたダメージを修復しているようだ。

傷跡がふさがり、血色もよくなる。顎が動いたび、血液が生産さ

れているようで、食後のデザートの中には普段の顔色に戻っていた。

そんな勝を、茜はあきれたように見ていた。

「お兄ちゃん、すごい回復力ねえ……あんな怪我だったのに」  
「なに」

勝はまだ口をもぐもぐさせながら肩をすくめた。

「こんなのたいした事じゃない。島に残っている奴はたいていこうだ。そうでないと、残っていられないがね」

そう言つてにやりと笑った。

そんな兄を茜はテーブルに肘を寄せ、顎に手の平をつけて見つめた。

あきれた……これじゃ家へ帰るのは、当分先のことみたい……。

## 飛行船

ぐおおおん……。

エンジンの重々しい音が頭上で聞こえている。

高倉コンツェルンの飛行船だ。

銀色の機体は朝日にまぶしく輝き、ゆっくりと番長島の上空を旋回している。

美和子と太郎は宿泊していたホテルの窓を開け、それを見た。

飛行船がぐるりと横腹を見せ、空中に静止する。その横腹には巨大なテレビ・スクリーンが設置されていた。スクリーンに高倉コンツェルンのロゴ・マークが輝き、音楽が鳴り響いている。スピーカーからは島全体に届くような音量でアナウンスが流れていた。

「トーナメント参加者のみなさん！ 大事なお知らせがあります！ どうか起きて！ 目を覚まして！ 大事なお知らせですよ！」

何事かと、あちこちに宿泊所の窓から参加者が顔を出す。空を見上げ、飛行船に気付く。

スクリーンが輝き、画面にひとりの人物の顔が浮かび上がった。

高倉ケン太であった。

かれはにっこりとほほ笑みかけ、口を開いた。

「やあ、トーナメントも今日で最終日となった。今日まで勝ち残ったのは、わずか十数名……まさに精鋭中の精鋭というわけだ。そこで今日最終日は、特別な闘いのステージを用意した」

画面が切り替わり、島の全景が映し出される。その島の北端に、

カメラがズームした。円形の構造物が見えてくる。

円形闘技場であった。

コロシウムだ。ローマ時代のコロシウムを再現した、建物がそこにはあった。

ふたたび画面にケン太があらわれた。

「ここで最終決戦をおこなう。トーナメント最終勝者は、ここで勝ち抜き戦を行ってほしい。ではよい勝負を！」

額に指をやり、にやりと笑みを浮かべたケン太はまっすぐカメラを見つめた。

その視線の先に美和子がいた。

まるでふたりは飛行船のスクリーンを介して見詰め合っているようだった。

美和子は太郎に顔を向け口を開いた。

「まいりましょう、太郎さん。いよいよ最後の戦いです」

太郎はうなずいた。

「おともいたします。お嬢さま」

## コロシアム

ぞろぞろと各宿泊所からトーナメントの参加者が姿を現して、島の北端を目指す。

全員の胸にはバッジが輝いている。銅色、銀色、そして金色のバッジ。

みな、この島での戦いに勝ち抜いてきたつわものだ。

男ばかりではなく、女もいる。北端を目指す彼らは、ちらちらとおたがいの胸に輝くバッジの数を確かめ、どいつがもっとも多く獲得しているか勘定していた。

その中で、美和子と勝のバッジの数は圧倒的だった。

昨日、風祭俊平のバッジを奪った勝は、美和子の数をうわまっていた。

勝の隣には茜が元気良く足を運んでいる。

彼女は美和子と太郎に気付いた。

手を振り、太郎の側に近づいた。

太郎はちらりと勝を見た。

あれほどの傷が、いまはすっかり癒え、傷跡はもう薄皮がはっている。

「お兄さん、元気になったんだね」

茜はうなずいた。

「そうなの。兄貴ったら、あんなに酷い目にあつたのに、今朝になったらぴんしゃんしてんだから！　ありや、処置なしよ。殺されたって、死ぬような人間じゃないわ。このトーナメントが終わらないと、家に帰るつもりにはならないわね」

太郎は苦笑した。

一緒に歩いていた美和子は、太郎の顔を覗きこんだ。

「太郎さんの笑うところ、初めて見ましたわ」

彼女の言葉に太郎は耳まで真っ赤になった。

茜もくすくす笑う。

「そうよねえ、太郎さんって、いつもしんねりむっつりで、笑う顔想像できないもん！でも、それなりに可愛いわ！」

勝が唸り声をあげた。

「おい、お前らうるせえぞ！もっと真面目にやれ！」

茜は肩をすくめ、舌をぺろりと出した。

目の前にまるい建物が見えてくる。

まるでローマのコロシウムをそのまま移築したような外観。古びて風化したところまでそっくりに作られている。全員、その中へと歩を進めた。

円形のコロシウムの一角にはステージが組まれていた。ステージには大理石で出来た豪華な玉座が置かれている。

と、ステージに飛行船が近づいてきた。

ばらばらとコンツェルンの制服を身にまとった作業員が飛び出し、飛行船の着陸準備をはじめた。飛行船からロープが投げ落とされ、作業員はわれがちに飛びつき、ロープの先を繫留塔のウインチに続した。ウインチがロープを巻き取り、飛行船は繫留塔に繋がれ、地面へしずしずと降下していく。

地面に近づくと、飛行船の下部から斜路が伸びて接地した。その斜路から人影が地面に降り立った。



高倉ケン太であった。

ずかずかと玉座に歩いていくと、どっかりと腰をおろす。

いつもの真つ赤なガ克蘭に、今日は真つ黒な艶のあるマントをまとわせている。彼の周りにはまるで王を取り巻く臣下のように、何人もの高倉コンツエルン警備隊の制服を身につけた護衛がずらりと居並んでいた。

飛行船の斜路からは最後にひよろりとした瘦身の男が姿をあらわした。

木戸であった。

かれは無言で歩いてくると、当然のようにケン太の背後に立った。背中に腕を組み、無表情にコロシアムを眺めている。

トーナメントの参加者が入ってくると、ケン太は立ち上がった。

コロシアムを吹き渡る風に、かれのマントがはたはたとひらめく。その様子は、まるでローマ皇帝の姿を再現したかのようなだった。

見上げた太郎の目が見開かれる。

ケン太の背後に、洋子がいた。

メイド姿で、玉座のすぐそばにひっそりと控えている。

太郎は眉をひそめた。

洋子のやつ、あんなところだなにをしているんだろう……。

それに彼女の様子にも気になった。いつもの洋子ではない……なんだか、表情がうつろで、心ここにあらずといった感じである。

洋子の背後には、杏奈がいる。いつものボディ・ガードを従え、

燃えるような目でコロシウム全体を見おろしていた。

と、杏奈の視線が美和子に止まった。

はっ、と彼女がちいさく喘いだようだった。

その途端、さつと身を翻しステージからコロシウム内部へ通じる階段へ姿を消す。杏奈の行動と共にボディ・ガード、そして洋子までもが姿を消していく。彼女たちの行動に、太郎はますます首をかしげた。

きらり、とコロシアムの観客席でなにかが日差しを反射している。

見るといくつものテレビ・カメラが会場全体を撮影しているところだった。どうやら高倉コンツェルンは、トーナメント最終日の決戦をテレビで公開するつもりらしい。さらに観客席の一角に記者席が用意され、ワイシャツの腕をまくりあげた新聞記者たちが、必死になって原稿用紙に記事を書いていた。今回のトーナメントは全国レベルの話題になっているのだ。

その時、ステージに着地していた飛行船がゆったりと飛び上がり、その鼻先をまわし始めた。全員が見守る中、飛行船のテレビ・スクリーンのある面がコロシウムに向けられ、画面が明るくなる。

## 伝説のガ克蘭

さつとケン太が片腕を上げた。

それを合図に、いきなり観客席から賑やかなオーケストラの音楽が鳴り響く。けたたましくトランペットが甲高い音をたてると、軽やかなステップと共にトミー滝が現れた。トミーは片手にマイクを掴み、やや前屈みの姿勢で声を張りあげた。

「グーッド・イブニング！ 視聴者のみなみなさま！ いよいよ番長島トーナメント、最終日でござんすよう！ 今日で最後の勝者が決まるのでございますねえ、いや、ワクワクドキドキいたしますです。あたしゃ、ゆんべからせんぜーん、眠れませんでしたよ。ほれ、この眼真っ赤に充血……していないか。うそ！ いまのは真っ赤な嘘！ へへへへ、ばつちり眠っていないけりや、今日の重大な司会、できませんですから！」

喋りながらくねくねと腰をふり、大げさな身振りを交えるトミーはまるで躁病患者のようだった。

そのトミーを、何台ものカメラが同時に捕らえている。宙に浮かぶ飛行船のスクリーンには、その様子が中継されていた。

トミーはさつとケン太にむけ、指をさした。

「こちらにこのトーナメント主催者でありますところの、高倉ケン太さまがご光臨なすっております。それではケン太さまにトーナメント最終日のご挨拶を願いましょう！」

トミーの紹介を受け、ケン太はステージの真ん中に立った。後ろ手に腕を組み、すこし踵に体重を移してゆっくりとコロシアムの全

景を目におさめる。

ざわついた会場が徐々に静かになっていく。

ケン太は口を開いた。

「トーナメントもこれで最終日……」

ケン太の声は静かで、抑揚もおさえていたが、コロシアムの設計がよほどすぐれているのだろうか、マイクなしでも、会場のすみずみまで響き渡っている。

「みな、よくやった！ 君らの戦いはすべて見させてもらった。じつに感動的な闘いだっただといえる……。君らはこの島で、伝説を作ったのだ！」

ケン太の顔は紅潮し、口調にも熱が入ってくる。

「いよいよ今日、最終日にあたり、最後のそして最強のバンチョウ、スケバンがその称号を得ることになる。最後まで勝ち残ったものには、賞金そしてこの僕に対する挑戦権が与えられる」

ぐつとマントに手をやり、それを跳ね上げた。背中を見せつけ「男」の刺繍をよく見えるように上半身をひねった。

「この”伝説のガ克蘭”、手にしたくはないかね？」

うおおお……、と参加者たちからどよめきが沸き起こる。全員、手をふりあげ、足を踏み鳴らし興奮を抑えきれないようだ。

勝もまた顔を真っ赤にさせ、拳を宙に振り上げている。

「その”伝説のガ克蘭”絶対、おれが貰ってやるぜ！」

その騒ぎの中、美和子と太郎は静かに立っていた。ちらりと太郎

は隣の茜を見ると、彼女もまた頬を紅潮させ、目をきらきらと輝かせていた。

「そんなにたいした褒美なのかい？」

太郎が話し掛けると、茜はあきれた、という目つきで見つめ返した。

「知らないの？ あれは代々のバンチヨウが伝えてきたガ克蘭なのよ！ あれを着ることがするのは、最強だと認められたバンチヨウだけなんだから……。昔っから、あのガ克蘭を巡っていくつものバンチヨウ連合が戦ってきたわ……」

そう言う彼女の目は、憧れにうるんだ。

「素敵だったでしょうね……。一着のガ克蘭をめぐって、何人ものバンチヨウやスケバンたちが勝負しただなんて、あたしもそのころに生まれたかったわ……。いまはあの高倉ケン太さまが受け継いでいるけど、いまだにかれを倒すバンチヨウは現れていないの」

なるほどね、と太郎はうなずいた。ともかく、なにか判らないが一着の学生服がこんな騒ぎを巻き起こすことだけは理解できた。もっともあんな学生服、金をやると言われても受け取る気はないが。

## 警

「それでは勝負の組み合わせを行う。全員、籤を引いて対戦相手を決めるのだ！」

ケン太が宣言し、コンツェルンの制服を着た従業員が籤が入った箱を持って、参加者の間を歩き回った。

箱の穴に手を入れると指先に丸いボールが触れる。ボールの色が同じ者が対戦するのである。ボールを引いた参加者は、同じ色の持ち主をさがし、すばやく目配せしあう。

美和子も箱に腕を入れた。

太郎は参加しなかった。美和子の従者ということで、直接の戦闘には参加しないのである。ゆえにこれからは美和子ひとりの闘いになる。

太郎は美和子の対戦相手を見た。

そして驚いた。

あの中国服の女だ。

彼女も驚いているようだ。

全員の抽選がおわったところでケン太が宣言した。

「これより勝ち抜け戦をおこなう。第一回の対戦は、真行寺美和子と……」

そこでケン太は眉をよせた。

「その女！ 名前はなんと言っ？」

中国服の女を指差す。

女は無言でかぶりをふった。

ケン太は肩をすくめた。

「それじゃ名無しの女でいいか……ふたりの対戦だ！ コロシラムの真ん中に出て、戦え！ 勝負はどちらかがギブ・アップするまでだ……」

と、トミー滝がいきなり太鼓の撥を持ってステージに置かれている青銅の銅鑼に駆け寄った。撥を銅鑼にたたきつける。

ぼお〜ん……。

ハリウッド映画に出てくる、東洋を象徴する一場面のように銅鑼の音がコロシラム全体に響きわたった。

美和子と覆面の女がコロシラム中央に歩み寄った。まわりを他の参加者が取り囲み、観客席からは複数のテレビ・カメラがレンズの砲列を向ける。

みな、固唾をのんで見守る中、いきなり覆面の女は脱兎のごとく美和子に駆け寄り、宙に飛び上がった。

見事な跳躍だった。

たった一度の跳躍で、数メートルの距離を一気に縮め、着地するやいなや足を旋回させて廻し蹴りを美和子に殺到させる。

美和子はそれを楽々とかわし、いったん引き下がり態勢を立て直した。

覆面の女は廻し蹴りをいれた勢いでさらにくるりと旋回し、こんどは背面になって後ろ蹴りをいれた。

今度は美和子はそれをかわさず、両手で持って受け止めた。

はっ、と覆面の女の動きが止まった。

美和子の両手が覆面の女の足首をおさえている。片足だけで身体をささえ、覆面の女はあきらかに不利な態勢にある。

だが美和子も攻撃できない。

しばらくにらみ合ったあげく、美和子はぱんと覆面の女の足首を離した。

覆面の女はびょん、と飛び上がり、ぽーんとんぼをきって着地した。

そこへ美和子が駆け寄る。今度は攻守が交替した。

はっ、と顔を上げた覆面の女に向け、美和子の膝蹴りが襲い掛かる。

がつ、と彼女の顎に美和子の膝がくいこんだ！

げふっ、と覆面の女はのけぞった。

どた、と音を立て彼女はコロシアムの地面に大の字になっておおむけになった。

目をまわしているのか、顔を上げるが立ち上がれないでいる。ようやく両手をつかって上半身を起こしたところに美和子のつぎの攻撃だ。

上から美和子が肘をつかって攻撃する。

あわや、という瞬間、覆面の女は地面を横に転がりそれを避けた。美和子の肘が地面につきささる。

覆面の女は立ち直り、美和子にのしかかった。美和子はさつと彼女の手をのがれ、こんどは背後にまわって腕を覆面の女の首筋にからみつかせる。

！

ぎりぎり、と美和子の腕が覆面の首筋をしめあげる。

とんとんと覆面の女は手の平を地面にたたきつけた。

「そこまで！ ギブ・アップだ！」

ケン太が宣言した。

ふっ、と美和子は覆面の女から身を離した。

けほけほと覆面の女は咳き込んで、その場から立ち去った。



美和子は立ち上がった。

そのまま太郎の側へ戻っていく。

茜が称賛の声をあげた。

「すごいわ、美和子姐さん！」

いいえ、と美和子は首を振った。

ちらり、と立ち去っていく覆面の女を見る。

「あの人、まるでやる気がなかったわ。なんだかあたし、お芝居の相手をさせられた気分……」

そう言って太郎を見る。機嫌が悪いのか、眉をかすかにしかめていた。

太郎はかすかにうなずいた。

美和子の観測はあたっている。覆面の女はまるで本気ではなかった。勝つ気がないというより、わざと負けたように見えた。

## 勝へまさるの戦い

ステージではトミー滝が踊るような仕草でマイクに向かっている。

「みなさあーん！ 今の見ましたですか？ いやーおっそろしいほどの迫力でござんしたですなあ！ さすが、最終日に残るほどの実力者同士の戦い！ あたしや、興奮いたしましたです！ それでは次の闘いにまいるといたしましょう！」

にやりと笑い、ふたたび撥をふりあげ、銅鑼をならす。

今度は勝の番だ。

うおおーっ、とときの声をあげ、勝はずかすかとコロシアムの真ん中へ進み出た。

その顔は期待に輝いている。

しんから闘いが好きなのだろう。

勝はステージの上のケン太を見上げ、叫んだ。

「おい、おれはちまちま勝ちあがることはしねえぜ！ 面倒くせえ、どうせならここにいる全員と勝負してやる！ どうだ、それなら美和子とすぐ勝負できらあ！」

勝の提案を聞いたケン太は、からからと笑い声を上げた。

「面白い！ ほかの全員、だれでもきみを倒したなら、最終勝負に望むことが出来る、それならどうだね？」

へっ、と勝は鼻の先をぬぐった。

「あたぼうよ！ さあ、全員、おれにかかってきやがれ！」

じろり……と、その場にいた全員を睨んだ。

美和子を除いたその場にいた参加者たちは素早くおたがいの顔を見合った。

ひとりひとりでは勝に勝てるわけない、しかし全員でかかれば…

かれらの間にそういった合意がなされたようだ。うなずきあうと、そろそろと勝に向け包囲の輪を作る。じれたのか、勝は吠えた。

「はやくかかってきやがれ！ 臆病者！ 弱虫！」  
勝の罵倒にかれらの顔が赤らんだ。

うおっ、と全員の足並みがそろい、中心に立っている勝に襲いかかる。

一瞬、勝の全身がかれらの輪に呑みこまれた。

と、まるで爆発がおきたように輪を作っていた参加者が投げ出された。

うつ…、と何人かは苦痛のため地面でのたうちまわっている。言葉にならない声で喚き、勝は滅茶苦茶に手足をふりまわした。

ごき！ ぼくっ！ といった鈍い打撃音が響く。そのたびにうめき声があがり、地面に倒れこむ参加者たち。

ついに悲鳴を上げ、残った挑戦者は勝の手を逃れるため走り出した。

勝の下駄の足音ががらりと響き、追いかけて、髪の毛をつかみ、あるいは襟首を掴んで引き倒す。ちぎっては投げ、ちぎっては投げといった形容がぴったり来る戦いだ。

もう、それは勝負ではなかった。一方的な苛めといっていい。たったひとりが、逃げ惑う参加者たちを一方的に叩きのめしているのだ。

とうとう全員が戦意をなくし、ギブ・アップしていた。

「だれだ、まだいるのか！」

勝の目が、がたがたと震えているひとりのガ克兰の男に止まった。ひよろ長い身体つきに、手には木刀を握っている。馬のような長い顔に、ふさふさとしたもみ上げを蓄えて、それだけ見ると歴戦の勇士に見えるが、勝を見る男はすっかり戦意を無くしているようで、その顔は青ざめていた。

男はきよときよと落ち着かなく周囲を見回している。なんとか逃げ出す隙はないかとさぐっているようだ。

勝はずい、とコロシアムの中央から男の側へに足を踏み入れた。

「こいよ！ 勝負だ！」

男はいやいやをするように顔をふった。

「い……いやだあ……！」

からん、と音を立て木刀を放り出し、あとじさる。まるつきり怖気づいている。

勝はいらいらしたように叫んだ。

「なんだとう……」

ひいつ、と男はぴょんと跳ねるように飛び上がると、脱兎のごとく走り出した。

勝はぼかん、と口を開けたが、むっと口を一字に引き結ぶと後を追いかける。

「待て、卑怯者！」

コロシアムの中でふたりの追いかけてこがはじまった。

太郎はふと観客席に通じる通路を見た。

そこにさっきの覆面の女が近づいていく。彼女はさっとあたりを見回し、通路の入り口へと消えた。

太郎はその後を追って走り出した。

ふりむくと美和子と茜は夢中になって勝の追いかけてここに見とれ、太郎の動きには気付いていない。

太郎は足音をしのばせ、覆面の女の後を追った。

## 尾行

コロシウムは外観だけ忠実に再現しているようだが、その内部は近代的な設備になっている。通路に進むと、滑らかな床面に白い、清潔な壁に変わる。覆面の女は、その通路をひそひそと足音を消して歩いている。

太郎には気付いていないようだ。

通路は円形のコロシウムに沿って作られているから、なだらかなカーブをもっている。一定の距離を保っていれば、追跡することはたやすい。ぎりぎりの距離につかずはなれず尾行し、ふりむく気配を感じれば立ち止まれば視界から遠ざかる。

女は通路から階段の入り口に進んでいる。

階段入り口に近づくと、上へと昇り始めた。

太郎も後に続いた。

と、彼女の姿が見えない。

あっと思って太郎はあわてて階段の踊り場へ踏み込んだ。見失ったのか？

その時、太郎の背後に人の気配がした。ふりむくと覆面の女が立っている。

「尾行されるのは御免だね」

そう言うにつ、と目元で笑う。

あんたは……と、太郎は口の中でつぶやいた。

「とつくにあたしの正体は知っていると置いていたけどね」

太郎はうなずいた。

「ああ、ぼくの推測が確かなら、きみとは会ったことがあるね。だけれどちゃんと正体をあらわしてくれないか？」

女はうなずき、腕を上げると顔をおおっている覆面の結び目をほどいた。

はらり……、と彼女の覆面が床に落ちた。

あらわになつた彼女の顔を見て、太郎は口を開いた。

「きみの名前は確か、栗山千賀子といったはずだね」

「憶えていてくれたのね。嬉しいわ」

そう言つて彼女はにっこりと笑つた。

大京女学院で、太郎に話しかけてきた小姓村の執事学校を卒業したメイドである。

いまは中国服を身にまとい、髪の毛はきつちりとまとめているから印象は変わっているが、確かに彼女であつた。

執事の重要な役目として、人の顔と名前を覚えるというのがある。来客にきちんと応対するには、顔と名前を覚えているというのが必要な能力であるからだ。覆面からわずかにのぞいた彼女の目元から、太郎ははやくから正体を察していた。しかし彼女の目的がわからず、黙っていたのである。

「どういうことだい？　なぜこのトーナメントに参加したんだ？」  
ちつつ、と千賀子は舌打ちをした。

「慌てない、慌てない！　あたしは執事協会から派遣されてきたんだ」

執事協会……。

意外な名前を聞かされ、太郎は驚いた。

「そう、あんたが執事協会である依頼をしたから、あたしがここに送り込まれた、というわけ。トーナメントの最終日に残れるほどの戦闘能力を持つている召し使いは数が限られる。小姓村の、執事防衛術を学んでいるあたしにそのお役目が回ってきたというわけよ」

そうか、と太郎は納得した。

「大変だったんだから！ トーナメントに残るためには戦いに勝ち残っている必要があるし、あんたの大事な美和子さんを負かすわけにはいかない。上手に負けてあげるには、結構演技力があるんだからね！」

肩をすくめると太郎に顔を近づけた。

「ね、あんたはここにいないで、お嬢さまについてあげて！ あたしはあたしで、執事協会の仕事をすませなきゃならないの。こっちはひとりでやれるから」

太郎はうなずいた。

言われてみればその通りだ。

「わかった。よろしく頼む」

うん、とうなずき千賀子は階段を上がっていった。それを見送り、太郎は踵を返した。



いじめ？

コロシアムに戻った途端、太郎めがけてだれかが猛烈に走り寄ってきた。

「た、助けて……！」

長い顔をさらに長くし、さっきの男が恐怖の表情をいっばいにして駆け寄ってくる。

男はあわてて太郎の背後にかくれた。

その後からがらがらと下駄の音を響かせ、勝が走ってくる。顔に憤怒の表情をうかべ、勝は太郎に気付くと足を止めた。

「野郎！ さっさと勝負しやがれ」

これは太郎の背後に隠れている男へ向けて言ったのである。男は太郎の肩を掴んだ手にちからをこめ、ぶるぶると震えているだけで動こうとしない。

「その勝又勝の対戦相手！ どうした、棄権するつもりなのか？」  
ケン太はステージから叫んだ。

その声に、男はほつと安堵の表情を浮かべた。

「そ、そうだ！ 棄権だ！ おれ、棄権するよ……な、それがいい！」

震える両手で胸のバッジをひきむしり、勝にむけて差し出す。

「な、おれのバッジは全部やる！ だから、勘弁してくれ！」

勝の握りこぶしがぶるぶると震えだした。

「なにおう……そんなこと許せねえ！ 男らしく勝負しやがれ！」

いやだったら、この場で叩きのめしてやるぞ！」

「い、いやだあ……」

男は泣き顔になった。ひよろ長い身体を思い切り縮め、太郎の背後に隠れる。勝はずかずかと近づくと、腕を伸ばし背後に隠れた男の襟首を掴んで引き寄せた。

「やめて……やめてくれ……」

ずるずると男は勝に引きずられるようにしてコロシアムの中央へと引っ立てられていく。

「お待ちなさい！」

しん、と静まりかえった中、美和子の声がその場を切り裂いた。ぎくり、と勝が立ち止まる。

「いま、なんつった？」

つぶやく。

美和子はじつと勝を見つめた。

「そのかたは嫌がっています。これは弱いものいじめではないですか？」

勝の顔が真赤に染まった。痛いところをつかれた、といった表情だ。

「お、おれが、おれが弱いものいじめ……だとう？」

男は一縷の望みをいだき、美和子を見つめた。

「それじゃなにか？ おめえが、こいつの替わりにおれと勝負する、つてのか？」

美和子はうなずいた。

「あなたが望むなら、そういたしましょう」

勝の顔が喜色にそまった。

「そうこなくちゃな！ おい！」

と、ケン太のほうを見上げ叫んだ。

「文句ねえな？ いまここで、おれがこの女と勝負しても」

ケン太はコロシムを見おろし、うなずいた。

「いいだろう、変則ではあるが、認めよう」

勝は男の襟首を掴んだ手を離し、拳を手の平に打ち付けた。男はこれ幸いと、よたよたとした足取りで逃げ出していく。

勝はもう男のことなど忘れたように背を伸ばすと、ぼきぼきと指の関節をならし、ごきごきと音を立て首をまわす。勝負の予感に張り切っている。

「こい！ 美和子！ おめえと勝負だ！」

美和子はうなずき、勝とともにコロシムの中央へと進んだ。

## ピンタ

「これは大変なことになりましたです！　なんと優勝候補の勝又勝と、おなじく優勝候補の真行寺美和子のふたりが、はやばやと決闘をすることに！　一度、勝又勝は真行寺美和子に破れ、これは遺憾試合となりました！　さあ、勝負の行方はいかに？」

トミー滝が夢中になってマイクに口を押し付けるようにして喚いている。

他の参加者は興味津々といった表情で、ふたりを見守っていた。飛行船のスクリーンには、勝と美和子のふたりが大写しになっていた。

その時、ひゅう……と一陣の風がコロシウムを吹き渡った。乾燥した地面から、黄色いほこりがまきあがる。

息詰まるような緊張がみなぎっている。

と、茜が太郎の側へ近寄り、耳に口を寄せささやいた。

「ね、聞きたいことがあるんだけど」

太郎は不審な表情を見せ、茜を見た。

こんなときになんだろう？

彼女はなぜか悪戯っぽい顔つきになって太郎を見上げている。

「あのさ、あんたとあのお嬢さま、どうなってんの？」

「なんだい、藪から棒に……」

太郎はささやき返した。茜はくりくりとよく動く瞳で太郎の顔を覗きこんでいる。

「もしかして、あんた美和子姐さんに恋しているんじゃない？」

馬鹿っ、と太郎は小声で彼女を叱った。

「そんなこと、あるわけないだろう！　ぼくはお嬢さまの執事だぞへええ……」と、茜はわざとらしくため息をついて肩をすくめた。

「それより、きみのお兄さん、心配じゃないのかい？　美和子お嬢さまと、どっちを応援するつもりなんだ」

へっ、と茜は舌を出した。

「知ったこっちゃないわ。お兄ちゃんが勝とうと負けようと。でも負ければ家に帰るって言っているから、あたしは美和子姐さんのほうを応援するな」

あっ、と茜は背伸びをしてコロシアムの中央に視線をやった。その視線を追った太郎は目を見開いた。

コロシアムの壁の一部が開き、そこに人影が現れたのである。

「その勝負、待ったあ！」

少女の声が響き渡る。

がくっ、と勝はたたらをふんだ。

「なんでえ！　また邪魔がはいったのか？」

待った、待ったあ、とかけ声をかけ、ひとりの少女が駆け込んできた。背後に数人の執事と、メイドを率いている。

メイドは洋子であった。

そして駆け込んできたのは、ケン太の妹、杏奈であった。

たたた……と走り寄った杏奈は、勝と美和子の間に割り込むと声を張り上げた。

「その真行寺美和子と戦うのはあたしよ！　この高倉杏奈が、勝負するわ！」

馬鹿野郎と勝は怒鳴った。

「おめえ、なに考えてやがる！　おれたちの勝負に割り込むんじゃない！」

こめかみに血管を浮かせ、顔を真っ赤にして杏奈につめよる。杏奈の肩に手を触れようとした刹那、背後にひかえた洋子が無言

で近づき、勝の腕をひねりあげた。

「痛え！」

勝は激痛に顔をゆがめた。

それを見て太郎は驚いた。

たしかに洋子は執事学校で格闘術を会得している。しかし実際にあんなことができるとは思っていなかった。洋子には人のよさというのがあって、他人に冷酷になれるような性格を持っていない。しかしいまの彼女は、まるで別人である。無表情に勝の腕をひねりあげたまま、杏奈の命令を待っている。

不意をとられた勝は、洋子によって腕を背中にひねられ、身動きできないでいた。

ゆっくりと杏奈は美和子の前へやってくる。値踏みをするように美和子の顔をまじまじと見つめ、口を開いた。

「美和子お嬢さま……でも、いまは一文無しの女。あんたなんかにお兄さまを渡すわけにはいかないわ」

憎々しげに顔を近寄せる。

腰に片手をあて、もう一方の腕を上げると美和子の顔に指を突き立てた。

「さあ、あたしと勝負しなさい！」

さっと美和子の手が一閃した。

ぱああんっ！

杏奈の頬に美和子のビンタが炸裂したのである。

ぼうぜんと杏奈は固まっている。

その頬に、美和子の手形がじょじょにピンクに染まって浮き上がってきた。

すとな、と杏奈は腰を抜き、その場にへたりこんだ。見おろす美和子を見上げる。

唇がこまかく震え、目に涙がたまってきた。

ぐうつ、と彼女は嗚咽をもらした。

そして

「うえええええ……」

と、泣き声をあげたのである。

## 変貌

「すげえ……」

勝は感嘆の声をあげた。

いつの間にか洋子は勝の腕から手を離していた。  
厳しい顔つきで、美和子は杏奈を見つめている。

「あなた、なにを考えていらっしやるの？」

口調は怒りに満ちていたが、言葉はあいかわらず丁寧なままだ。  
が、それがかえって迫力がこもっていた。

びく、と杏奈は震えた。

「ここは真剣な対決の場です。あなたのようなかたが、いらっしやるべきところではないのよ」

くす、くすん……と、杏奈は鼻を鳴らす。

「だ、だって……あたし……あなたがお兄さまを……」

「これはあなたのお兄さまとは関係ありません！ それにわたしは、あなたのお兄さまと結婚する気持ちはありません！」

ぽかん、と杏奈は口を開いた。

「え……？ でもトーナメントに優勝すれば……」

「そう、優勝すれば真行寺家は再興できるでしょう。あなたのお兄さまとわたしはたしかに許婚でした。でも、それはわたしのお父さまが生きていらっしやったころの話です。それはそれ、これはこれ。わたしの気持ちはまた別なのですよ」

はあ……と、杏奈はため息をつく。

くすくすと笑いがこみあげてくる。

「あたし、あたしって……なんて……」

美和子もまた柔らかな表情になっていた。



す、と片手を杏奈に差し出した。

「さあお立ちなさい。あなたはこんなところにいてはいけません……大京市に帰って、お家に戻るのです」

杏奈は美和子の手を掴み、立ち上がった。

美和子と杏奈は見詰め合う。

杏奈は恥ずかしげにうつむいた。

「ご免なさい……」

小声でつぶやいた。

そして歩き出す。うつむき、やや肩を落とす淋しげであった。洋子と護衛の召し使いたちも後に続いた。

「洋子……」

思わず太郎は彼女に声をかけていた。

太郎の声に、洋子は立ち止まった。

彼女の視線に、太郎はたじろいでいた。

冷たい、なんの感情もこめていない視線。

これがあの山田洋子なのか？

「何か用？」

平板な声音に、太郎は言うべきことを失っていた。洋子は太郎が黙っている側を、さっさと杏奈の後に続く。

出入り口にいくと、彼女はふっとふりかえる。

コロシアムの中央に立っている勝と美和子を見つめた。そしてなにか振り切るようにさっさと顔をそむけると、小走りに建物の中へ消えた。

太郎は胸の中でつぶやいた。

洋子、いったい君になにがおきたんだ？

## 決勝戦

こほん、とステージでケン太が咳払いをした。

「さて……妙な邪魔がはいったが、決勝戦の続きを再開しよう。真行寺美和子と勝又勝の勝負だ！」

その声に勝はぐい、と身体をひねって美和子に向かい合った。

「そうだ！ 勝負だ！」

美和子はうなずいた。

それを見おろすケン太は、ぐっと身体を乗り出すようにしている。

背後から木戸がささやいた。

「よろしいのですか？ 真行寺美和子は婚約の解消を示唆したのですぞ」

うるさい、という風にケン太は手をひらひらさせた。木戸は肩をすくめ、ふたたびもとの無表情にもどる。

ケン太は口の端で小声で答えた。

「あいつがおれとの結婚を、本当は望んでいないのは察していたよ。父親の真行寺男爵に言われていたから、そのつもりでいたのは明らかだ。だが、そんなことはどうでもいい。おれは、彼女を自分のちからでものにしていみせる！」

暗い、激情をこめた声は、なにかを吐き出すかのようにだった。ぐっと拳を握りしめ、勝と対決している美和子を見つめた。

「おれはずっとときみを愛していたよ……美和子！」

その言葉は、木戸にも聞こえないほどのささやきであった。

木戸は妙な顔をしてケン太を見ていた。

じりじりとふたりの距離が詰まっていく。

先に動いたのは勝だった。

ものも言わずにがらがらと下駄の音を響かせながら美和子に向けて突進していく。

美和子はステップして、勝の突進をかわそうと横に飛んだ。

それを予測していたのか、勝は横に飛んだ美和子に腕を伸ばした。がつき、と勝の手が美和子の細い腕を掴む。

掴まえた！ とばかりに、勝の顔に笑みが浮かぶ。空いている片手を挙げ、平手で美和子の顔にむけて振り下ろした。

ばしっ！

音高く、美和子の頬で勝の平手が見事に決まった。

ふら……、と美和子は足取りを乱した。

頬が真っ赤に染まっている。

きつと彼女は勝を見上げた。

美和子の膝が上がった。

うつ、と勝が息を止める。

なんと美和子の膝が勝の股間をとらえていたのだ。

うつ、うつ、と勝は苦痛に喘いだ。

「てめえ……」

怒りの形相ものすごく、勝は目を見開いて美和子を見つめた。

腕をふりほどくと美和子はさっと一歩引き下がり、回し蹴りを下がつた勝の顔に叩き込んだ。

衝撃で勝はきりきりまいをして地面に倒れこんだ。

が、すぐさま立ち上がるとひと声喚いて猛牛のように突進する。  
勝の動きは思ったより素早い。

かれの頭が美和子の鳩尾に決まった。

受け止めた美和子は身をふたつにおる。

そのまま後ろに跳ね飛ばされた。まるでトラックに正面衝突した  
かのような。

勝は手足をひろげ、まるでダイビングするように美和子の上への  
しかかる。

寸前、美和子は横にころがって逃れた。勝の指はむなしく地面を  
かいた。

ころがった美和子の指が、さっきの男の放り出した木刀にふれた。  
木刀を手にし、美和子は立ち上がった。

はっ、と勝が緊張した。

美和子はすつくと立ち上がり、木刀を正眼に斜に構え、勝に対し  
真正面に向かっていた。

ふふ……、と勝は含み笑いを浮かべた。

「面白え……木刀とはな」

じりじりと動き、すばやくあたりを見回す。

そこらに他の参加者たちが投げ出した武器が地面に転がっている。  
素早く腰をかがめると、もう一本の木刀を手にとる。

ぶん、と振り回し手ごたえを確かめる。

「おれはこう見えても、剣道は得意なんだ。あんたの細腕で、そい  
つが振り回せるかどうか、試してみるか？」

「やってみないと判りませんわ」

美和子は静かに答えた。すでに呼吸は整っている。  
ふうん、と勝は顎をひくと両手で構えた。

勝の目が細められた。

美和子の剣先が妙な動きを見せている。

ぴく、ぴくと細かく震えるように動いている。美和子は剣道は北辰一刀流を学んでいた。その剣先を見ている勝は、だんだんいらしてきた。上下に動く剣先を見ると、誘い込まれるような感じを憶えていた。

きええーっ、と勝は甲高い叫びをあげ、木刀を振り上げただだっ  
とばかりに走り出す。

活っ、とふたりの木刀がふれあい、乾いた音を立てた。

勝は美和子の面を狙い、振り下ろす。その瞬間、美和子の木刀が横に薙ぎ払われた。

ぼくっ、と鈍い音が響く。

彼女の木刀は勝の胸に決まっていた。

ぼろり、と勝の手から木刀が地面に落ちていた。げふっ、と勝は息を吐き出した。ついでその顔が真赤に染まった。両手で腹をかかえ、うずくまる。

びくっ、びくっとなんが全身が痙攣している。

呼吸が止まっている。

けええ……けええ……と大口をあげ、なんとか空気を吸い込もうとしている。しかし横隔膜が痙攣しているのか、息が出来ない。

それを見てとった美和子は、勝の背後にまわり、腕をかれの脇に

差し入れた。

ぐつと力をいれ、活を入れる。

けふつ、と勝は息を吸い込んだ。

はあーっと大きく呼吸を再開した。

ようやく顔色がもとにもどった。

ふうーっとため息をつき、勝は地面に座り込んで美和子を見上げた。

ふたりの視線がからみあった。

勝はにやりと笑いかけた。

「負けた……おれの負けだ！」

がつくりと首を垂れた。

## イニシャル

ぱん、ぱん、ぱんと拍手の音が聞こえてくる。

ケン太が身を乗り出し、コロシウムを見おろしている。手を挙げ、何度も拍手をしていた。

「素晴らしい！　素晴らしい勝負だった！　さすが最終決戦にふさわしい、闘いだ」

勝はようやく立ち上がり、頭をふりつつコロシウムを後にした。茜が素早く側に近寄り、ふたり肩を並べて出口へと向かう。

「どうだね、美和子。最後に、ぼくと戦わないか？　そして、この伝説のガ克蘭」を手に入れたとは思わないか？」

美和子は首をふった。

「いいえ、そんなもの欲しくはありません。それより優勝賞金を頂きたいと思います」

ケン太はうなずいた。

「そうか残念だな……。しかし、この大会は有終の美を飾ったことになって、ぼくは満足だよ」

「そうかしら？」

ふいに響き渡った女の声に、ケン太はぎくりと身をすくませた。

「高倉ケン太さん、あなたは偽善者です！」

「だ、だれだ？　どこから聞こえている？」

ケン太はきよきよと周りを見わたした。

「ここですわ」

ぎよつとケン太は背後をふり返った。

飛行船のスクリーンにひとりの女が大写しになっていた。

栗山千賀子であった。

コロシウムにあるスタジオの一室で、杏奈はさめざめと涙にくれていた。

返す返すも自分の愚かしさが恥ずかしい。すこしばかり格闘の技術を習っただけで、トーナメントに出場しようとしたじぶんの思い上がり、そして美和子に対するいわれない嫉妬。

彼女の手の中でハンカチがぐしょぐしょに濡れていた。

背後にひかえていた洋子がそつと自分のハンカチをさしだした。

杏奈は顔を上げ、洋子の顔を見つめた。

あいかわらず、表情のない目がじぶんを見ている。

ありがとう、とつぶやくと杏奈はハンカチを受け取った。目に押し当てようとして、ふとハンカチに縫い付けられているイニシャルに気付いた。

T・T

杏奈は首をかしげた。

山田洋子のイニシャルはY・Yのはずだ。

「洋子さん、このハンカチどなたのかしら？」

そう言ってイニシャルを見せる。それを見た洋子の表情が微妙に変化した。



洋子の記憶がよみがえった。

このハンカチは、小姓村の執事学校を家出する直前、太郎にもらったものだ。あの時、洗濯して返すつもりだったのがそのままになっていた……。

イニシャルは只野太郎のものである。

「どうなさったの？ 洋子さん」

杏奈の声にはっ、と洋子の目の焦点がもどった。顔がたちまち無表情になり、冷静な声で答えた。

「なんでもございません。失礼いたしました」

杏奈は内心奇妙に思った。いまの洋子はいつもの無表情から、なんだかかすかに人間らしい、年頃の女の子に見えた。

と、ドアの向こうからどやどやとした人の騒ぐ声と、乱れた足音が聞こえてくる。

どうしたのかしら、と杏奈は立ち上がった。

細めにドアを開け、廊下を覗き込む。

緊張した表情のケン太の部下が、足早に廊下を走り回っている。

どこかでどんとドアを叩く音が聞こえた。

目の前を通り過ぎようとするひとりに杏奈は声をかけた。

「どうしたの？ なにがあったの？」

「あつ、杏奈さま……」

男はすっかりうろたえきつた表情で相對した。

「その、放送室を占拠されたんです！」

「放送室？」

「ええ、放送室には送信設備も付属していますから、勝手な放送を

されることを防ぐことが出来ないので大変なことに……」

かれはいらいらと足踏みをしている。杏奈は訳がわからないなりにうなずき、男を解放することにした。男はあたふたと立ち去っていった。

杏奈は部屋の中に戻った。

一角にテレビが置いてある。

スイッチを入れると、画面に栗山千賀子の顔が映し出された。

「高倉ケン太さん、あなたは偽善者だわ！」

彼女の言葉に杏奈はぎくりとなった。

## 契約書

「なにが偽善者だ！」

ステージの上でマントをなびかせるケン太は怒りに吠えていた。コロシウムに残っているのは美和子と、太郎だけである。ほかの参加者、勝と茜の兄妹はすでに出口から外へ出て行った。

ケン太の怒りに燃える視線は、飛行船のスクリーンに突き刺さるようだった。コロシアムの観客席に残っている記者たちは食い入るようにそれを見つめている。

スクリーンの千賀子はにこりと笑った。

「あら、言い方が悪かったかしら？ それじゃ詐欺漢と言い換えたほうがいいかも」

くっ、とケン太は唸った。

おそらくコロシアムのマイクの音を拾って、放送設備から送信しているのだろう。

木戸がそつとケン太に近づき、ささやいた。

「お言葉にお気をつけてください。おそらく、いまのやりとりは本土のほうにも送信されているはずですよ。うっかりしたことを言ってしまう……」

わかってる、とケン太は手をふった。

「わたしは執事協会から派遣された栗山千賀子というものです。この報告を公にするため、チャンスを狙っていたの。トーナメントの最終日というのは、見逃せなかったわ」

執事協会……？

ケン太は眉をひそめた。

「わたしたち執事協会は主人と、召し使いとの健全な雇用関係をまとめるための協会です。真行寺家の破産にたいし、ある疑惑があるため、わたしたち協会は独自の調査を続けてきました」

ぎりり……ケン太は歯噛みをしていた。コロシアムでは美和子と太郎が、じつと飛行船に映し出される千賀子の顔を見つめている。

「高倉コンツェルンの筆頭執事である木戸という人物、かれは以前真行寺家の筆頭執事でありましたが、その来歴を調べますと、真行寺家にはいりこむ以前、高倉コンツェルンに所属していたことがわかりました」

千賀子の言葉に木戸の顔が見る見る青ざめた。はっ、と美和子と太郎は顔を見合わせた。

木戸が、真行寺家以前に高倉家の執事をしていた？

「ということは、木戸氏は高倉ケン太によって真行寺家に送り込まれた可能性があるのです。これを否定いたしますか？」

「出鱈目だ！」

ケン太は吠えた。

画面の千賀子はうなずいた。

「そうですか。しかしほかにも疑わしい証拠があります。これは真行寺家の財産を、木戸氏が所有するにあたっての契約書の写しです」画面が切り替わり、書類が映し出された。

観客席の記者たちはそれを見て、いつせいにカメラを持ち出しシヤッターを切った。

ケン太は凝然となった。

「なんであんなものがある？」

木戸は無言でその場を離れた。

## 潜水艦

わあわあど騒がしい廊下に、杏奈はふらふらとさ迷いだした。

廊下を進むと、放送室のドアの前に数人の部下が顔をつきあわせ、なにか作業している。ドアを破ろうとしているのだろう。と、反対側からガス・トーチを持ってきた部下がやってきて、ドアの前に陣取った。

ぱん、とガスが引火する音がして、トーチの青白い炎がドアの取っ手に近づいた。

見る見るドアの一部が真っ赤に焼け、ペンキの焼けるいやな匂いがこもった。

「お嬢さま！」

声をかけられふり向くと、木戸がそのひよる長い身体を運んでドアの前に立ったところだった。

「杏奈さま、ここにいてはいけません！ お兄さまのところへいらしてください」

「お兄さまのところへ？」

木戸はうなずいた。

「そうです、非常事態です。なにがおきるかわかりませんから……おい！」

と、これは洋子に向けて木戸は命令した。

「お前はお嬢さまをつれて、飛行船に乗り込むんだ」

「飛行船？ どういうこと？」

杏奈はじれったげに足踏みをした。説明されないのが頭にきたのだ。

木戸はじろりと冷たい目で杏奈を見つめた。

その視線に杏奈は身をすくめた。

そっと背後から洋子が杏奈の腕を取った。

「さあ、行きましょう」

ささやくと、ぐいぐい引っ張り、その場を離れていく。

杏奈が洋子によって連れられていくと、もう関心をなくしたのか、木戸はトーチを持った部下に命じた。

「ドアをとにかく、破るんだ。いつまで勝手なことをさせるわけにはいかん！」

はっ、と部下はうなずいてさらにトーチの火を近づけた。

「この書類によると、木戸氏は真行寺男爵に対し、詐欺同然の方法で財産分与の権利を獲得した疑いがあります……」

カメラを前に千賀子は喋り続けていた。

モニターにはケン太の怒り狂った顔が映し出されている。観客席を映しているモニターには、招待された記者たちが盛んにメモを取ったり、カメラのシャッターを切っている様子が映し出されていた。

かすかな熱を感じ、千賀子はドアを見た。

鍵がかけられたドアの取っ手あたりがオレンジ色に溶け、溶解した金属がとろとろと垂れている。

もうすぐ破られるだろう。

このへんでじゅうぶんだ。

千賀子はカメラをそのままに、隣の部屋へ移動した。

その瞬間、ドアが破られ、部下と共に木戸が放送室に踏み込んだ。木戸はカメラの前に掲げられている書類に気付き、さっと引き破った。書類は複写されたものだったが、内容はおなじものだ。それに目を通し、木戸は渋面をつくった。

さっと部屋の中を見回すと隣の部屋へのドアが開いている。

「あっちだ！」

叫んでもうひとつの部屋へ踏み込んでいく。

ひゅう……！

海風が木戸の顔をなぶった。

かれは目を瞠った。

部屋の窓がおおきく開かれ、外の空気がおしよせてくる。

中国服を身にまとった千賀子が、窓枠をつかみ、身を乗り出していた。彼女のほつれ毛が風になびいて揺れていた。

「貴様……！」

木戸の叫びに千賀子はふりむいた。

「そこからは逃げられんぞ！ 下は断崖になっている。飛び降りることはできん！」

木戸の言葉に千賀子は窓から身を乗り出して下を見下ろした。

ふっと顔を上げると、嫣然と笑う。

「そうかしら？ 試してみる価値はありそうね」

「なにっ？」

木戸が一步踏み出すのと、千賀子が身を躍らせるのが同時だった。あわてて両手を伸ばし、掴もうとするが遅かった。彼女の身体はすでに落下をはじめていた。

窓から木戸は身を乗り出し、見下ろした。

はるかな高みから断崖が絶壁となつて立ち上がり、海面に白い波が砕け散っている。

千賀子の身体が小さくなり海面に落下し、同心円の白い波を作っていた。

「馬鹿な……」

木戸はうめいていた。

ざぶん、と波をけたて、千賀子は海面下に沈んでいた。数メートル沈み、彼女は待った。

ほどなくアクアラングを身につけたダイバーが近寄り、彼女にボンベのマウスピースを咥えさせた。空気を吸い込み、千賀子は大丈夫と指で輪をつくる。

うなずいたダイバーは腰から懐中電灯を取り出し、二度、三度と点滅させた。

やがて水中にまるい、巨大な影があらわれた。  
それは潜水艦だった。

ダイバーに案内され、千賀子は潜水艦のハッチへ潜り込んだ。ハッチの水が排水され、ドアが開くと潜水艦内部へと進むドアが開く。

待っていたのは執事協会で太郎の訴えを受理した、芳川女史であった。

これは執事協会の所有する潜水艦なのだった。

「ごころうさん。あんたの放送は、こっちでもモニターしていたよ」  
千賀子は芳川のねぎらいに笑顔をつくった。

うなずくと、身につけていた中国服のボタンを外し始める。彼女の中国服の下から、メイド服が現れた。中国服を脱ぎ去り、メイド姿になった千賀子はおおきくため息をついた。

「ああ、窮屈だった！ やっぱりあたしはこの格好がいいわ！」  
くすくすと芳川は笑った。

「中国服の下にメイド服を重ね着していたんじゃ、窮屈なのも当たり前よ！」

へへっ、と千賀子は舌を出したが、すぐ真顔になって話しかけた。  
「それより真行寺美和子と、只野太郎のふたり大丈夫かしら？ あれで高倉コンツェルンの不正が白日のものになったのかしら」



芳川は頭をふった。

「それは判らない。でも、わたしたち執事協会は裁定者ではないのよ。あくまで協力者の立場をくずすことは出来ません。でも、あそこには大勢の記者がいたから、隠しおおせるわけではないでしょう。それにトーナメントの視聴者もいるから、明日の新聞記事は大変なことになるわ。あとはかれらの自助努力にまかせましょう」

芳川は肩をすくめた。

「あの只野太郎の報告に、わたしたちが独自の調査を開始して判ったことなんだけど、まあ高倉ケン太とは大変な策士ね！　じぶんの召し使いを真行寺家に潜入させ、ひそかに財産を奪うとは……。でも、あんな不正をわれわれ執事協会はぜったい見過ごすことは出来ない！」

芳川の言葉に千賀子はうなずいた。女史はふりかえり、叫んだ。

「さあ、いつまで愚図愚図していないで、戻るわよ！」

部下がきびきびと動いて潜水艦の操舵を開始した。

「了解！　全速前進、深度五十！」

モーターの音が高まり、潜水艦は動き出した。

## 混乱

「なにをする！ おれたちは招待された記者だぞ！」

「うるさい！ それを渡せ！」

「いやだ！」

「なにっ！」

コロシアムの観客席では混乱がおきていた。

高倉コンツェルンの部下たちが観客席の記者たちに殺到し、メモやカメラを無理やり取り上げようとしている。それを拒否する記者たちとの間で、騒ぎになっていた。

その騒ぎの中、木戸がわけいった。

「あんたたちはすぐ船に乗って、この島を出て行ってもらおう！」

木戸の言葉に記者たちはきつと顔を上げた。

「なんだと……！ おれたちは高倉ケン太氏にインタビューを申し込む！ さっきのテレビの内容について……」

「うるさいっ！」

木戸は一喝した。かれの大声に、記者たちはびくりとなった。木戸の表情は一変していた。眉が険しくなり、目はらんらんとしたひかりをたたえている。

「いつまでも甘い顔をしていると思うなよ！ お前たち、だれを相手にしていると思っている。高倉コンツェルンの総帥である、高倉ケン太さまが相手なのだぞ」

「何を言う……あのような不正の証拠を見せられて黙っていられるか！ おれたちは社会の警鐘を鳴らす立場として……」

かっとなった記者のひとりが木戸に食ってかかった。木戸はじろ

りと記者をにらむと、からからと高笑いをした。

「馬鹿なことを！ この国を実質掌握している高倉コンツェルンのちからに対抗できるわけがあるか！ いいか、警告しておく。もしこのことを記事にしようとすれば、高倉コンツェルンの実力を、いやというほど味わうはめになるだろう」

記者は蒼白となった。

「きょ……脅迫するつもりなのか？」

「脅迫？ いいや、ただの事実をのべたにすぎん。あんたらの新聞社の資本は、高倉コンツェルンがすべて握っている。スポンサーの機嫌を損なうことが出来るかどうか、試してみるが良い！」

記者は黙った。しかしその表情には怒りが燃えていた。

さつと木戸は手をあげ、合図した。

部下たちが麻酔銃をかまえ、記者たちを出口へと誘導する。銃を突きつけられた記者たちは口惜しさをあらわにして、部下たちに連れられ、コロシウムを後にした。

がちゃ、がちゃと銃の撃鉄が動く音がして、美和子と太郎のまわりに警備隊の部下がとりまいていた。

太郎は美和子をかばって前へ出た。

「なにをするつもりだ！」

「すこし眠ってもらおう」

「なんだと？」

部下たちはふたりにむけ、麻酔銃の引き金を引いていた。

しゅっ、とため息のような音がして、ふたりにむけ白い煙が噴出した。煙を吸い込んだふたりは、くたくたと全身の力が抜けるように倒れこんだ。

## 特別室

「何か、変だわよ」

茜がつぶやき、勝は立ち止まった。

「何が変だってんだ？」

しっ、と茜は勝を制してコロシウムに引返した。

物影からコロシウムの中をのぞきこむ。

時刻はすでに夕刻近くなっている。

ほのかにオレンジ色に染まった日差しの中、地面に美和子と倒れこんでいたのを見て、茜は息を飲み込んだ。

そのまわりに警備隊の服装をした数人が取り囲んでいる。

やがてふたつの担架が運び込まれ、美和子と太郎はそれに移された。担架が持ち上がり、部下たちが運んでいく。

「なんだあ、ありゃ……わっ、なにするんだ……」

大声を出しかけた勝の口を、茜が手でふさいでいたのだ。

「馬鹿ね、大声出さないの！」

茜の言葉に勝は口を引き結んだ。

「飛行船が動いている……」

茜がつぶやいた。

その言葉どおり、それまでコロシウムのステージ近くに繫留されていた飛行船がゆったりと動き出していた。斜路が内部に引き込まれ、飛行船はしずしずと進みだしている。

茜は勝の身体を引っ張った。

「なんだよ？」

「隠れるのよ！」

茜は勝に空中に浮かんでいる飛行船を指さした。

「美和子姐さんと、太郎さんを助けなきゃ！ そのためには飛行船から隠れないと……」

茜の説明に勝はうなずいた。

飛行船の窓から、ケン太は地上を見下ろしていた。

コロシアムの地面に、美和子と太郎が倒れている。担架が運ばれ、ふたりはコロシアムの施設内部へと運ばれていった。

「これからいかがいたしますか？」

背後に控えている木戸が話しかけた。

ケン太は爪を噛んでいた。いらいらしているときの癖である。

「あのふたりには”処置”を施しておく」

ケン太の説明に木戸は眉をあげた。

「それは……賢明でしょうか？」

「ほかにどうしようがある？ それにあの書類のことがある。どこから漏れたか判らないが、まずいことになった。すぐ本社にもどつて、関連の資料を処分しないと……」

木戸はうなずいた。それには賛成だった。

「杏奈お嬢さまはいかがいたしますか？」

「あいつはどうしている？ 余計なことは耳にしないよう、気をつけたか？」

「はい、特別室にご案内させていただきました」

それでいい、とケン太はうなずいた。

窓に目をやる。

すでに窓の外は大海原になっていた。

「出してよ！　ここから出して！」

木戸の言う”特別室”に杏奈は閉じ込められていた。窓のない、飛行船の後部にある倉庫である。ここに杏奈と洋子が押し込まれ、外から鍵をかけられたのだ。

杏奈はドアに拳を打ちつけ、叫んでいたがだれも彼女の声にこたえるものはいなかった。

洋子は黙って、部屋の一角にある箱にこしかけていた。杏奈は洋子に向き直り口を開いた。

「洋子さん、あなた平気なの？　こんなところに閉じ込められて」

杏奈の声に洋子は顔を上げた。

「いいえ。でも騒いでも何も変わりがないのなら、無駄なことはないほうがよろしいでしょう。いずれ飛行船が着陸すれば、出してもらえます」

杏奈は洋子の答えにがつくりと肩を落とした。ちからなく洋子となり座り込み、頭をかかえた。

いったい何があつたのだろう……杏奈には兄のケン太が理解できなくなっていた。

と、あれだけ静まり返っていたドアから「とんとん」とかすかにノックの音が聞こえてきた。

ぎくり、と杏奈は顔をあげた。

「誰れ？」

ばくです……田端幸一です……という声がする。名前に聞き覚えなかったので、杏奈は首をかしげた。その田端幸一という人は一体なんの用があるのだろう？

その時、洋子が杏奈の耳に口を寄せてきた。

「その人はコックです。最近、ケン太様がお雇いになりました」  
「コック？」

杏奈は立ち上がり、ドアに近づいた。

「何のようなの？」

緊張で彼女の言葉はかすかに震えた。ドアには空気抜きのためのスリットが開けられている。杏奈はそのスリットに目を押し当て、外をうかがった。

ひとりの、小太りの少年が立っている。白いコックの制服にはちきれそうな身体を包んでいる。その両頬は興奮のためか赤らんでいた。

少年は見咎められないかときよときよと落ち着かなく、あたりを見回していた。

「あの……杏奈さまがここに閉じ込められたって聞いて、それにメイドの女の子も……」

「洋子さんのこと？ 彼女ならここにいるわよ」

杏奈の言葉に幸一は飛び上がった。

「そう！ そうです！ 山田洋子です！ 彼女もここにいますね？」

なんとなく杏奈は最初に自分の名前を出したのは言い訳で、この幸一という少年は洋子を心配しているのではないかと思った。

「ええ、元気よ。あなた、洋子さんに言づてもあるの？」

杏奈の言葉に幸一はただでさえ真っ赤な頬をさらに赤らめた。

「言づてだなんて、そんな……。ただ、心配しないでと伝えてくだ

さい。なにかあったら、ぼくが味方になるから……」

「判ったわ、有難う……」

「じゃあ、ぼく行かなきゃ……失礼しました！」

ぺこりと頭を下げると、幸一はあたふたとその場を離れていった。

視界から少年の姿が消え、杏奈は洋子をふりかえった。

さっきのやりとりが聞こえていただろうに、彼女はまったく動揺することもなく、静かに腰かけた姿勢を崩すことなくひっそりと座っている。



## スクープ

ぼおーっ、と汽笛が鳴り、船は棧橋を離れていった。

舷側に記者たちが鈴なりになって遠ざかる番長島を見送っている。

「ねえ、どう思います」

ひとりの若い記者が、となりで煙草をくゆらせている年配の記者に話しかけた。年配の男はぽい、と吸いさしを海面へ投げ棄てると、煙草の箱を胸ポケットから取り出し、若い記者に差し出した。

「いえ、ぼくは吸いませんで」

そうかい、と年配の男はつぶやくと、もう一本を口にくわえた。

「どう思いつて、なにがだい」

「あのテレビに映った書類のことですよ！」

若い記者は勢い込んで喋った。

「あれはぜったい、なにか高倉コンツェルンにとって都合の悪い事実が書かれていたに違いないんだ……畜生、写真があればなあ」

若い記者は悔しそうにつぶやいた。かれのカメラは高倉家の召し使いたちによつて取り上げられていた。だけでなく、ここにいる全員のカメラが没収されていたのだった。

年配の男はちりとあたりを見回すと、若い記者にこつちへ寄れと合図した。若い記者は何事かと年配の男に近寄った。

年配の男はこっそりとふところからなにかを取り出した。銀梨地のなめらかな四角い箱に、レンズとファインダーがついている。手の平にすっぽり収まるほどの小ささだ。

若い記者は目を丸くした。

「それ……カメラじゃないですか？」

「そうだよ、超小型カメラでね、スパイなんか使う奴だ。おれはいつも、これを持ち歩いているんだ。高倉コンツェルンのやつら、

見つけれなかったらしいな」

「じゃ、それに？」

「ばつちりだ！　ちゃんと撮影している」

若い男はそれを聞いて背をのびあがらせると甲板を見渡した。

一段高くなっているところに、トニー滝の姿が見える。かれもまた強制的にこの船に乗り込まされていたのだ。

トニー滝はわけがわからない、といった表情でぼんやりと遠ざかる番長島を見送っている。海風に、いつもはきつちりとポマードで固められている頭髪が揺れていた。

年齢不詳の男であるが、いまはひどく老け込んで見えた。

若い記者はあらためて年配の記者にささやきかけた。

「それじゃ本土についたら？」

「うむ、こいつを現像して引き伸ばし、うちの法律部門の連中に分析させる。そしてなにか判ったら……」

「スクープですね！」

若い記者の声に喜色がおびた。

うん、と年配の男はうなずいた。

煙草に火をつけることを、かれはすっかり失念していた。

## 警備員

「行つたわ……」

茜がつぶやき、ふたりは物影からコロシウムの中へ踏み込んだ。

オレンジ色の空を、飛行船が小さくなっていく。コロシウムには人っ子一人見当たらない。太郎と美和子は麻酔銃で眠らされ、コロシウムの施設内に連れ込まれていた。

「お兄ちゃん、足音たてないで！」

歩き出そうとした勝を茜は叱った。一步踏み出すとがらりと意外におおきな下駄の音がしたのである。

勝は憤然として下駄を脱ぎ、鼻緒に紐をかけて首にかけ、裸足になった。

「これならいいだろ！」

うなずいて茜はそろそろと歩き出した。勝もその後につづく。

コロシウムはしん、と静まりかえっている。

壁にはちいさな窓が規則的にあいている。その窓からだれかが見ているのではないかと茜は気が気でなかった。

つい足取りがちよこちよこと小走りになる。

美和子と太郎が連れ込まれたドアの前に立った。ドアは固く閉められ、ためにドアノブを廻してみたが案の定、鍵がかかっている。「どいてみる」

ずい、と勝が茜をおしのけた。  
ぐいつ、とノブを掴む。

勝の顔が見る見る真赤に染まった。

むっ、とかれは息を詰めた。全身におそろしいほどの緊張が高まっている。茜はそんな兄をばらはらしながら見守っていた。

ぴしっ、となにかが弾ける音がした。

がたん、と大きな音を立て、ドアの蝶番が撥ねとんだ。ふうーつと勝がおおきく息を吐く。

「あいかわらずの馬鹿力ねえ……」

茜がつぶやくと、勝は気分を損ねたのか、ほっとけとつぶやいた。ぐわありとドアを放り出し、勝はうつろに空いた入り口へと足を踏み入れた。

入ったすぐが下へと続く階段になっている。

ふたりは階段を降りていった。

ぴりぴりとした緊張が茜をつつんでいる。

階段は暗く、一步降りることにあたりは暗くなっていった。一階分ほど降りると、踊り場になり先がおれ曲がっていた。角を曲がると、その先は照明があるのか、白々と明るい。

こわごとと顔を突き出した茜はすぐ引っ込めた。

「お兄ちゃん、この先に警備員がいる！」

勝の耳をひっぱり、口を近づけ小声でささやいた。

勝はうなずき、にやりと笑った。

首にかけている下駄から紐を外すと、元の通りに足に履いた。

わざとばかりにがらがらと大きな音を立て、歩いていく。茜は息を詰めて兄を見送った。

その大胆な行動に、警備員は一瞬、気を飲まれたようにぽかんと口を開け、近づいてくる勝を見つめている。

「やあやあやあ！　ちつと道に迷っちゃったんだ……ところでトイ

レはどこかな？」

息を吞まれ、警備員はあっちですと思わず指さそうとしたが、ほかのまだまともな神経の警備員があわてて手にしている麻醉銃の銃口をあげた。

その瞬間、勝は猛獣のように突進した。

引き金を引く暇もなく、警備員の顎に勝の拳が叩き込まれていた！ぐえつ、という悲鳴を上げ、警備員はふっとんだ。ごき、と音を立て、後ろの壁に背中を打ち付ける。ずるずるとそのまま失神してしまう。ほかの警備員もようやく立ち直って銃口をあげたが、すでに遅く、勝はあつという間にかれらを倒していた。

ものの数秒で、数人の警備員は床にのびていた。ぱんぱんと勝は手を打ち合わせた。

「終わった？」

茜は小走りに勝に駆け寄った。

「ご覧の通りだ」

まあ、と茜はため息をついた。やむをえないとはいえ、倒された警備員に同情した。

「行こう！ とにかくふた리를探さねえと……」

うん、と茜はうなずいた。

ふたりは先へと進んでいった。

## 地下室

「迷っちまったなあ……」

勝は不機嫌につぶやいた。

思ったよりコロシアムの地下は広い。廊下は長々とのび、様々なところでふたつ、みつつにわかれ、ドアがいくつも並んでいる。ドアを見つかるたびに開けてみるが、たいていはがらんとした空間が広がっているだけで、いまは使われていない部屋がほとんどのようだった。警備員のひとりを人質に取り、案内させるんだったと後悔したがもう遅い。

いくつかのドアを試したところで、ふたりは立ち止まった。

今度の部屋はほかと違っていた。

かなりの広さの倉庫になっているらしく、目に届く限り棚が並び、段ボール箱が積み上げられていた。天井には黄色い照明が吊るされ、倉庫全体を照らしている。

ふたりは誘われたように中へと侵入した。

少し進んだところで床に動く人影を目にした。

ぎくりとふたりは立ち止まった。

「誰だ！」

鋭い声がして、勝はものも言わずに人影の見た方向へ走り出した。積みあがられた荷物の陰へ姿を消す。

とたんに「ぐえっ」とか「うぐっ」という押し殺した声がした。

どどっ、と勝が物影から飛び出した。どん、と背中を壁に押し付け、目をまん丸に見開いていた。

茜は立ちすくんだ。

たらし。

勝の学帽にかくれたこめかみから一筋の血が流れている。

「お兄ちゃん！」

茜は悲鳴をあげた。

くそつ、と勝は悔しがった。

「いきなり殴りかかるとはこういうことだね？」

落ち着いた、静かな声が物影の向こうから聞こえてきた。勝の睨む方向から、ひとりの男が姿をあらわした。

ぼろぼろの着衣に、背中まで伸びた頭髮、顔はもじやもじやの髭に覆われ、目だけがぎょろりと光っている。

ひょろりと痩せたその男は、じろりと勝と茜のふたりに目をとめた。

ようやく息を整え、勝は吠えた。

「とぼけんな！ おれたちや、真行寺美和子と、只野太郎の行方を探しているんだ。何か知っているなら、とつと吐きやがれ！」

「……」

男の目が見開かれた。

「真行寺美和子と只野太郎だと？ どういうことだ？ ふたりに何があった！」

いきなり、男の態度に変化があった。

勝と茜は顔を見合わせた。

どうやらこの男、敵ではない。なぜかそんな確信がわいた。

「あたしたち、コロシアムのトーナメントに出場して……」

茜が口火を切った。



只野五郎

「そうか……そんなことがあったのか」

話を聞いて、男はがつくりと肩を落とした。

「わたしが目を離れたせいで、ケン太はそこまでやるようになったんだ……」

男の口調には悔恨の響きがあった。

「あのう……あなたはどなた？」

ようやく茜は男の正体について好奇心がわいてきた。

ん、と男は顔を上げ、にこりと笑みを浮かべた。髭にかくれた口許から、まっ白な歯がのぞく。

「わたしのことが……。そう、君らにはわたしの正体を明かしてもいいだろうな」

つ、と男は一本指をあげた。

「きみたち、悪いがここで少し待っててくれたまえ。なに、十分もかからないだろう。わたしはこれからきみたちと行動をとにするつもりだが、それには身なりを整えないとならないからな！」

思いがけず快活にそう言うと、男はひらりと身を翻して姿を消した。

勝と茜はあつけにとられた。

ほどなく男は戻ってきた。言ったとおり、十分もかからなかった。「誰だおめえ！」

勝は叫んだ。

暗がりからあらわれた男の姿は一変していた。同一人物とは思えないほどの変貌である。勝が見間違えたのも無理はない。

すらりと上背のある体にぴったりと合ったタキシードに、髪の毛は後頭部でまとめてきつちりと背中にとらし、顔をほとんど覆っていた髭はさっぱりと剃りあげている。

思わず茜は男の顔に見とれていた。

端正な顔立ちであるが、ただのハンサムとは違う、年令を重ねた渋い魅力に、茜はぼうつと見とれてしまっていた。

「わたしは只野五郎」

「只野……」

「五郎！」

名乗りを上げた男の名前を、勝と茜は繰り返した。只野五郎と名乗った男はうなずいた。

「そう、わたしは只野太郎の父親だ」

只野五郎は茜と勝を案内して、地下の通路を歩いていた。歩きながら、かれは道々説明を続けた。

「あの倉庫にはいろいろ食料があるのでね、じぶんのぶんが足りなくなると、調達しているんだよ」

「だれにことわって……？」

茜の質問に五郎は肩をすくめた。

「だれにことわる必要もない。わたしの行動は黙認されているからな」

ふたりの沈黙に、五郎は説明した。

「つまり高倉ケン太にだよ。わたしはこの番長島で、いわば世捨て人として暮らしていた。ケン太の母親が死んでからずっとだ」

「ケン太の母親？」

「そう、そしてわたしの妻でもある」

勝はそれじゃあ、とつぶやいた。五郎は違う違うと首を横にした。  
「高倉ケン太はわたしの子供じゃないよ。母親の連れ子だ。わたしが彼女とであつたころ、ケン太はもう幼稚園にはいる年頃だった。わたしの子供は太郎と、そしてケン太の妹、杏奈のふたりきりさ」

歩きながら、五郎は回想をはじめた。

茜は叫んだ。

「そ、それじゃ高倉杏奈は……太郎の異母兄妹ということになるわけ？」

そう言うわけだ、と五郎はうなずき言葉を重ねた。

「太郎が生まれてしばらくして、わたしはケン太の母親と出会った。そのころわたしは太郎の母親と結婚していたのだが、不覚なことにわたしはケン太の母親を愛してしまった。そしてわたしは太郎の母親の前から姿を消した。わたしはその不倫で真行寺家の執事の地位を失った……後から聞いたが、わたしの悪評は長い間召し使い仲間に伝わっていたそうだ……」

そう言つて五郎は苦く笑った。

「無理もない！ 執事の不倫とはな……大変なスキャンダルだ。それ以後、わたしはケン太の母親の実家の、高倉工務店に入社し、無我夢中になって働いた。執事としての知識が、経営に役立ち、数年で工務店は有数の建設会社に発展し、やがて建築だけでなく多方面に業種を伸ばし……そして今はご存知の通り国一番のコングロマリットとして君臨している。その過程で、ケン太の母親はひとり淋しく死んだ！ 病気だった……わたしは何も知らなかった」

五郎の顔が苦渋に満ちた。

「わたしは彼女を見捨てたのも同然だ！ 仕事に夢中になって、そもそも彼女を愛したことすら忘れていた。その報せを聞いて、わたしは隠棲することにした。あとはケン太が高倉コンツェルンの業務を引き継ぎ、いまにいたっている……」

言い終わり、五郎は長いため息をついた。

しばらく黙り、かれはふたたび話した。

「世捨て人の暮らしをしていても、わたしは高倉コンツェルンのことを耳にしている。そしてひとつの怖ろしい噂を耳にした」

五郎はふたりにふりかえった。

「きみたち、高倉コンツェルンの警備員たちについて、疑問に思わないかね？」

「疑問、って？」

勝は首をひねった。

茜は眉をしかめた。

「そう言えば、おかしいなって思ったことがあるのよ」

「なんでえ？」

勝の問いかけに茜は慎重に言葉を押し出した。

「なんであいつら、ケン太に対しあんなに忠実かってことよ！ さつきコロシウムでケン太の悪行が暴かれたときだって、あいつらぜんぜん動揺しなかったわ。普通だったら、会社のトップがあんなこととしていたのを知ったら、じぶんの身を犠牲にしてあんなことができるかしら？」

わが意を得たり、と五郎はうなずいた。

「そうだ、高倉家の従業員の忠誠は度が過ぎている！ それにはある秘密があるのだ」

秘密？ と茜は鸚鵡返した。

「そうだ。きみたち、洗脳という言葉を知っているかね？」

ふたりは首を横にした。

「洗脳とは怖ろしい技術だ。本人の意思、思想信条にかかわらず、他人の考えを吹き込む方法だ。この技術により、高倉家の召し使いはいやおうなしに高倉ケン太への忠誠を強制されているのだ」

そんなこと……と言いかけた茜は「あっ！」と叫んだ。

「そ、それじゃその洗脳を……？」

「その通り、真行寺美和子と、太郎に施すつもりだろう。ふたりは高倉家のロボットにされてしまうのだ……」

五郎は静かに答えた。

茜と勝は慄然となっていた。

## 医療区域

茜はくんくん、と鼻をうごめかした。

「なんだか病院の臭いがする……」

そうだ、ここはコロシアムの医療区域だと五郎は返事をした。勝は不機嫌につぶやいた。

「病院は嫌いだ……」

そうよねえ、お兄ちゃんには関係ないわと軽くあしらひ、茜は五郎に尋ねた。

「医療区域って、病院のこと」

「まあ、そんなものだ。病院と違って、入院設備はないが、治療は行える。トーナメントに出場する参加者の負傷にそなえて、設けられたものだ。もっとも、参加者の体力は主催者の想像を超えていたがね。結局、利用されずじまいだった……」

言いながら五郎は鋭い視線をあたりにくばる。しつ、とかれは指に一本指をたて、ふたりに静かにするよう指示をした。

そろり……と、足音を忍ばせ、廊下を進む。

さつ、と角を曲がると五郎は手を伸ばした。

ひゃあつ、という悲鳴が聞こえ、ひとりの男が五郎の腕につかまれ姿を現した。

眼鏡をかけ、白衣を身につけている。

「な、なんですかあ？ あなたがたは？」

おどおどとした視線を眼鏡の奥から三人に投げかける。いちおうまともなのは五郎ひとりで、茜はセーラー服で、勝はぼろぼろのガ克兰である。こういう場所で見かける服装ではない。

「あんた、医者かね？」

五郎の問いかけにかれは咳払いをして白衣の襟をたてた。

「まあね、といつても精神分析を専門にしておるがね」

五郎の目がきらりと光った。

「それじゃさつきここに誰かが運び込まれてこなかったか？ 若い

男と、女の子だ」

男の顔がぎくりとこわばった。五郎はかれの胸倉を掴んだ。

「知っているんだな！ 言え、どこへ運んだ？ もう”処置”は始まったのか？」

ぶるぶると男の唇がふるえた。五郎は迫った。

「知っているんだらう？ あんた精神科の医者だと言ったはずだ。

あの”処置”はあんたがやっているんだらう？」

五郎は男の胸倉を掴んだまま、かれの身体を持ち上げた。ばたばたと男の両足が宙を蹴る。

「言つ、言つよ！ たしかにそのふたりはさつき運ばれてきた……」

五郎は手を離れた。とん、と男の両足が床につき、かれはちよつとよろけた。恐怖で、男の顔にはびっしりと汗が浮いていた。

「さあ、すぐに案内してもらおう」

「わ、わかった……」

ぎくしゃくと精神科医は歩き出した。

「美和子さん！」

横たわる美和子と太郎の姿を見て駆け寄ろうとする茜を五郎は止めた。

「待て、ふたりとも眠っているだけだ。それに、無理に起こして悪い影響があるかもしれない」

そう言つと精神科医を見た。

「どうだね、ふたりは眠っているのか？」

ああ、と精神科医はうなずいた。

「麻醉銃で眠っている。薬のききめがとけるまで、起こしようがない。それに、もうすぐ意識が戻るよ」

医療用のベッドに横たわるふたりの顔には目隠しのマスクがかけられていた。背中側の首筋には金属のクリップが留められている。五郎に命じられ、精神科医はふたりの身体に繋がれている器具をはずしはじめた。

はずしながらかれは説明を続けた。

「これで神経を遮断する。感覚はなくなり、随意筋は反応しなくなる。目の覆いと、耳につめられた脱脂綿で外部の感覚もすべて遮断されるんだ。これで一日放っておけば、あとはなにを吹き込まれても心の底から信じるようになる……」

説明を続けるかれの口調は楽しげであった。ふたりの耳にはヘッド・ホーンがかけられている。それを外し、ヘッド・ホーンから繋がれているオーディオのスイッチを入れる。するとスピーカーからケン太の声が流れ出した。

「僕に従え！ 君は僕のしもべ……君は僕のしもべ……」

ケン太の声はそれを何度も繰り返した。

「どうです、これを一日繰り返し聞かされれば、だれでもケン太さまの言うことをきくようになりますよ」

「なんてひどい……」

茜は本気で怒っていた。彼女の言葉に五郎もうなずいた。

「まったくだ。人間の尊厳というのを無視している所業だな。あんたはどうなんだ？」

と、これは精神科医に向けていった言葉である。言われて、精神科医はきよとした顔になった。

「わたしがどう、って、なんだね？」

「あんたはこの”処置”を受けたのか、ということだよ」

問われた精神科医はにっこりと笑った。



「もちろんだよ！　だが、わたしとしてはなにも変わったとは思えないな。たしかにケン太さまへの忠誠心はゆるぎないものになったが、そのせいで精神に変調があったとか、そういう感じはないね。むしろ迷いがなくなって、頭の働きが鋭くなった気がするよ」

三人は愕然となった。

## 出口なし

マスクをとられ、横たわったふたりは長い間そのままだった。ふたりを前にして、勝はじりじりと苛ついていた。

「なあ、長すぎらあ……本当に目を覚ますのか？」

「焦るな。まだ一時間もたっていない」

五郎は冷静に答えた。この返答に、勝はちえつと舌打ちした。

そして……。

ぴくぴくと最初に太郎の瞼が動き出した。それに気付いた五郎は、身乗り出し顔を覗きこんだ。

ばかり、と太郎の両目が開いた。

ぼんやりとあたりを見回している。

その視線が、五郎にとまった。

太郎は目を見開いた。

「あなたは……？」

五郎はうなずいた。

「そうだよ。わたしはお前の父親、只野五郎だ！」

太郎は起き上がった。じつと五郎の顔を見つめる。かすかにかれの頬が赤らんだようだった。

「そうですか。はじめてお目にかかります、お父さん」

おいおい、と勝は声をあげた。

「それだけか！ 太郎、おまえ父親と出会ってたったそれだけ？ はじめてお目にかかりますだって？ 信じられねえ……」

五郎は苦笑した。

「それが執事というものだ。いつも冷静で、感情をあらわさない。太郎、いまの返答は理想的だったぞ！」

勝は両手をあげた。お手上げ、ということだろう。

つぎに美和子の意識がもどった。

目を開いた美和子に、茜が駆け寄った。

「美和子姐さん！」

「ああ、茜さん……ここはどこかしら？」

「コロシアムの地下よ」

コロシアム……とつぶやいた美和子はようやく意識がはっきりしたようだった。茜にこれまでの経緯を聞かされ、美和子の眉はひそめられた。じっと黙ってそれを聞いていた太郎だったが、ふいに精神科医に向き直った。

「最近、その”処置”をしたひとはいますか？」

いきなり尋ねられ、かれは目を白黒させた。

「最近というと……？」

「山田洋子という女の子です。メイドの……」

ああ、と精神科医はうなずいた。

「思い出したよ！ トーナメントが始まってすぐケン太さまの怒りにふれ、わたしに”処置”がまかされた」

勝が眉をあげた。

「その女の子がどうして気になるんだ？ 太郎、おまえとどう関係するんだい」

「彼女は幼なじみなんだ。きつと、お父さんのことをぼくに教えたのがばれたんだろう」

五郎はそれを聞いて口許をひきしめた。

「そうか、それで”処置”を……」

ばしつ、と勝は拳を手の平に打ち付けた。

「気にいらねえな！ その”処置”とやらで他人をじぶんの思い通りに動かそうなんて、やつはじぶんをどう思っているんだろう」

「それより執事協会によってかれの不正が知られたことが問題だ。ケン太は証拠を隠滅させようとするだろう」

五郎の言葉に美和子は顔を上げた。

「大京市に帰らなくては！　この島から出る方法はありませんの？」  
茜は首をふった。

「だめよ。ケン太は飛行船で逃げ出したし、船は出港してしまったわ」

「出口なし、か」

勝のつぶやきに五郎は咳払いをした。

「もし、君たちが危険をおかすつもりなら、大京市に帰る方法がないわけではないよ」

注目を浴びた五郎はにやりと笑った。

## 滑走路

地下道を太郎、美和子、勝、茜、そして五郎の五人は歩いていった。五郎が最初にあらわれた食糧倉庫の奥にある地下道は、最初はきちんとコンクリートで固められた四角いかたちをしていたが、途中からむきだしの岩になり、足元もごつごつとしたものに変わった。

先頭を歩く五郎は、手にカンテラをかかっていた。

「この島の北端にある洞窟で暮らしはじめて、ほどなくわたしはあの倉庫に通じる地下道を見つけた。どうやら洞窟は簡単な船着場にするつもりだったらしいが、その計画が途中で中断して地下道だけが残されたんだ。それを使って、わたしはちよいちよい食料を失敬していたというわけさ」

「どうしてそんな計画を？」

足もとの小石を踏んで、うわつとよろけた勝はいまいましたに尋ねた。

「聞いていないかな。高倉コンツェルンはこの島を映画スタジオにしようとしていたんだよ。島の廃墟をオープン・セットにして、近未来ものの映画を撮影しようという計画があつたらしい。ま、わたしが隠棲したあとのことだから詳細は知らないが。計画は予算の関係で中止された。しかしその時作られたいろいろの施設が、トーナメントに役立ったというわけさ。あのコロシウムもそのひとつだ」

五郎は立ち止まった。

カンテラをかかげると、光のなかに粗末なドアが見える。ノブをつかみ、開く。向こうに上り階段があらわれた。

のぼりはじめた五郎のあとを一同はついていった。階段はまがりくねり、粗末なできだった。勝のおおきな体は、階段の両側の壁に

くつつきそう、窮屈そうにのぼっていく。

しばらくして階段はおわり、木製のドアが目の前にあった。カンテラを吹き消しドアを開き、五郎は全員を招き入れた。

ドアを出たところはどうかやら倉庫のようだったが、時刻はすでに夜になっていて、物の形もぼんやりとしか見えない。五郎が手さぐりをする気配があり、やがてかちりというスイッチの音がして、黄色い照明が灯った。照明のしたに照らされたそれは、意外なものであった。

「これ……もしかして……」

美和子がぼうぜんとつぶやいた。

一歩、二歩前へ進み、目の前に鎮座しているそれを見つめる。

五郎はうなずいた。

「そつだ。これは飛行機さ！」

倉庫の半ばを占めていたのは、一機の古びた飛行機であった。機首と翼にはおおきなプロペラが三組あり、おおきな翼が倉庫の端から端まで達している。機体には高倉コンツェルンのマークが描かれていた。

「これで大京市に向かう。わたしが操縦するから、みな乗り込んでくれ」

五郎の言葉に全員、顔を見合わせた。茜がおそろおそろ五郎に尋ねる。

「あのおう、太郎のお父さん……お父さんが操縦するって……？」

「そうさ、わたしは飛行免許を取得している。高倉コンツェルンの役員をしていたころ、ビジネスで使っていたのさ。隠棲してからはここに隠していたが、ときどきやってきては整備をつづけていた。大丈夫だよ、ちゃんと飛ぶから……」

美和子はさつさと飛行機のドアを開くと、率先して乗り込んだ。

それを見てしかたないと茜も乗り込もうとタラップに足をかけたが、ちよつと兄の勝をふり返った。

「お兄ちゃん？」

勝は身を硬直させ、目を丸く見開いている。が、その目は何も見えてはいないようで、ぽかりとうつろに開いているだけだ。

顔色は真っ青である。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

茜が尋ねると、勝はぶるぶると顔を小刻みにふった。

「い……いやだあ……おれ、高いところ、苦手なんだ……」

たらたらと勝は顔中から汗を噴き出し、顎からしたたっている。

顔色は真っ青から、すでに紙のようにまっ白に変わっている。茜はかつとなつて叫んだ。

「なに馬鹿なこと言っているのよ！これに乗らないと、ケン太に追いつけないのよ」

迫る妹から勝はたじたとあとじさる。

両手をつきだし、全身で怯えをあらわしていた。

その背後に太郎がいた。

太郎はすつ、と手を伸ばし、勝のうなじに手の平を押し当てた。

瞬間、太郎の手が勝のうなじを掴んだようだった。と、勝は白目をむきだし、全身がびくりと痙攣した。そしてくたくたとその場に崩れ落ちた。

あつけにとられた茜に太郎は静かに話しかけた。

「申し訳ありません。しかしこうでもしないと、お兄さんは飛行機に乗り込むことは出来ないでしょう」

勝は気絶していた。茜は口を開いた。

「あんた、なにしたの？」

「ちょっと意識をなくしてもらっただけです。命には別状ありませんから」

太郎の説明に茜はあつけにとられていた。

「さあさあ、乗った、乗った！ はやく大京市に着かないと間に合わないぞ！」

五郎は勝の身体をかかえあげ、無造作に飛行機の中へ放り込む。茜は肩をすくめて、その後に続いた。太郎も乗り込む。

五郎は倉庫の扉を開き、飛行機の操縦席に座った。エンジンがかかる、プロペラが旋回しはじめた。

出力全開になって飛行機はしずしずと動き始めた。倉庫の外に出ると、さらにエンジン音が高まった。

ぐおおおん……、と轟音をたて、飛行機は即席の滑走路を走り出す。舗装されていないむき出しの地面に飛行機の手輪が乗り上げ、がたがたと機体は震動していた。

茜は悲鳴をあげた。

「見て！ 海よ！」

彼女の言うとおり、滑走路はもうすぐ崖でつきている。月明かりに照らされた海原の白い波が見えていた。

もうすぐ断崖から飛び出そうとする直前、飛行機はふわりと浮かんだ。すぐすくと落下する感覚があり、五郎がぐいと操縦桿を引くとのろのろと上昇を開始する。

ふう……と、五郎は額をぬぐった。

背後をふりかえり、微笑した。

「あぶなかった！ 定員オーバーだったことを忘れていたよ。その勝君の体重が、思ったより重かったようだ」

全員、ほっとため息をついた。



茜が叫んだ。

「もう寿命が縮まったわ！　ねえ、大京市につくのはどのくらいかかるの？」

「夜明けにはつく。みんな、一眠りしたほうがいいぞ」

五郎の言葉に茜は眠れるわけないわよ、とぶつぶつ文句を言った。が、それでも兄の勝の肩に頭をつけて目を閉じた。

すぐ彼女の寝息が聞こえてきた。

その時、太郎はじぶんが美和子の手をしっかりと握りしめていることに気付いた。手をゆるめると、ふたりの手の平が離れる。ちらりと美和子を見ると、まっすぐ前を見て表情にはなにもあらわれない。

太郎はじぶんの手の平に目をやった。

手の平はびっしょりと汗で濡れていた。

## 取材要請

高倉邸の広大な敷地には飛行船がその巨体を横たえていた。朝もやがあたりに漂い、高倉邸はぼんやりとしたシルエットになって浮かんでいる。

突き出たように高々とした建物に明かりが灯っている。ここには高倉ケン太の執務室があった。執務室にはどっしりとしたデスクが備えられ、その引き出しをつぎつぎと開けてケン太は腕いっぱい書類をかかえ、それを部屋の暖炉に投げ込んでいった。暖炉には炎が燃え、投げ込まれた書類はつぎつぎと灰になっていった。炎に照らされたケン太の表情は焦燥のため悪鬼のように歪んでいた。

「くそ！　なんてこった！　こんなはずじゃなかったのに……」

ノックの音がして、ケン太はぎくりとふり返った。

「なんだ！」

叫ぶ。ドアが開くと、メイド姿の洋子が立っていた。洋子は無表情でふかぶかと頭を下げると口を開いた。

「杏奈お嬢さまはお部屋でお休みになりました。あとはいかがいたしましょうか？」

「ドアに鍵をかけておいたろうな？　あいつは当分、出すつもりはないから、見張ってる！　いいな、外へ出すなよ」

念を押すケン太に、洋子はゆっくりとうなずいた。引き下がろうとした彼女は、思い出したようにふり向いた。

「なんだ、なにかあるのか？」

「はい、正門前に人が集まっております」

なにい……とうなったケン太は大腿でデスクに戻ると、側のスイッチに指を近づけた。

スイッチを入れますと、部屋の壁がぱくりと反転し、そこにテレビ・モニターが現れた。モニターには屋敷のあちこちが映し出されている。番長島にあった、監視カメラと同じ仕組みである。

素早くケン太はスイッチを操作し、モニターに正門前の映像を映し出した。

鉄門に数十人の人間が集まっていた。かれらは手にマイクを握り、その背後に手持ちのテレビ・カメラを担いだスタッフが控えている。鉄門の内側に高倉家の召し使いが数人立って、外側の人間と押し問答をしていた。召し使いたちの中に木戸の姿もあった。木戸は召し使いたちの背後に立ち、傲然と腕をくみ、険しい顔で外を眺めている。

「なんだ、あれは……」

「テレビ局の人だそうです」

洋子の答えにケン太のこめかみに血管がういた。

「テレビ局だと……いったい、何のようだ？」

つぶやき、音声のスイッチを入れた。たちまち騒ぎがスピーカーから流れる。

「入れてくれ、おれたちは大京テレビの人間だ。ぜひ、高倉ケン太氏にインタビュを申し込みたい」

「ケン太さまはお疲れで、ただいまお休みになっておられます。インタビュの申し込みなら、代表部に……」

「待てないなあ！ 今朝はこの新聞も、昨日のトーナメント開催中に流れた、あの書類のことでおおわらわなんだ。是非、あの書類の真偽についてかれのコメントを聞きたい。これは重大なことだぜ。高倉コンツェルンの真行寺家乗っ取りの疑いが濃厚だからな」

「そこにいるのは木戸さんだな！ あんた、高倉ケン太のスパイだつて噂だぜ。あんなことをした理由は、高倉コンツェルンの重役の

椅子を約束されたからかね？」

罵声を浴びせられた木戸はぴくりと眉をあげた。しかし返事をせず、ただ無言で立っているだけだ。返答する必要をみとめなかったのだろう。

くそ、とうめいてケン太は音声のスイッチを切った。

足音荒く窓際になると、窓ガラスをおおきく開く。

朝霧は朝日と共に薄れていき、あたりの景色がじよじよにはつきりとしてきた。にじんだ朝日が高倉邸のすみずみまで金色に染め上げていく。

顔を窓外に突き出したケン太は、妙な物音を耳にした。

ぐおおん……。

なんだろう、とケン太は首をかしげた。音は空から聞こえている。

と、ふいに霧の中から一機の飛行機が姿をあらわした。

わっ、とケン太は首をすくめた。

飛行機は執務室のある建物をぎりぎりにかすめ、旋回していった。ひどく旧式の飛行機である。その横腹に、高倉コンツェルンの紋章が描かれていたのをケン太はみとめた。

その時、朝霧はすっかり腫れ上がった。

しらじらとした空を背景に、飛行機はゆったりと高倉邸の上空を旋回している。

エンジンの轟音がとだえた。

ぷすっ、ぱすっというたよりない音に変わり、飛行機のプロペラが停止した。

## 着陸

「降ろしてくれ！ 頼む、助けてくれえ！」

飛行機の座席で勝は絶叫していた。全身をふんばり、顔からはたらたらと脂汗が噴き出している。

「お兄ちゃん、暴れないでよ！」

「いやだあ！ 死ぬ、死んでしまう！ おれは高いところが嫌いなんだあ！」

「騒ぐな、もうすぐ着陸だ！」

操縦席で五郎が叫んだ。

その時、エンジンの音がとだえた。

ぎくり、と茜と勝は身体を硬直させた。

ぱたぱた……と、回転していたプロペラが停止した。あとはひゅうひゅうという風の音だけである。

「ど、どうしたの？」

茜の質問に五郎は首をふった。

「燃料切れだ……やはり航続距離が足りなかったようだな」

「そ、そんなあ……」

茜はいやいやをするように頭をふった。勝はまっ白な顔になり、すでに喚く気力もなさそうである。

「着陸するぞ……」

操縦桿を握り、五郎は宣言した。翼の揚力だけで飛行機を操る覚悟をきめたらしい。

ぐいーん、と飛行機はおおきく旋回の飛行経路をとる。すこしでも揚力をかせぎ、接地速度を遅くしたいのだ。

太郎は窓ガラスに顔を押し付けるようにして高倉邸の全景を見ていた。もしかしたら、高倉邸の全景の様子を記憶しておけば、あとあと役立つと考えてのことである。

しかしこれが邸宅といえるのか？

美的ではなかった。すくなくとも、太郎の知識に照らし合わせても、このようなかたちの邸宅は見当たらない。

なにしろ建物……というより、建物群といったほうが正しい。どの建物が母屋なのか、離れなのかさっぱりわからない。手当たりしだい増築を繰り返して、その間を無数の通路が繋いでいる。通路は地上をうねうねと伸び、そして空中へと続いてまるで絡み合ったスパゲッティのような有様だ。あきらかに思いつきで建物をつけくわえ、それを新たな通路で接続しているらしい。

建物の壁には無数の窓ガラスが不規則についていて、それらがちかちかと朝日を反射している。

高倉邸からすこし離れた空き地に飛行船の巨体が横たわっているのが見える。飛行船の前にはこんもりとした森があり、木々の緑が盛り上がっている。飛行機はそこを目指しているようだ。

窓から飛行機の翼を見ると、ぱたぱたとフラップが動いていた。着陸態勢をとったのだ……。

しかし高倉邸にこの飛行機が着陸する場所はない。唯一の空き地は、飛行船が占有している。

太郎は父親の五郎がどう着陸させるつもりなのだろうと思った。

「あの飛行機はなんだ……」

上空を見上げ、木戸はつぶやいた。高度を下げる飛行機を見て、かれは走り出した。

## 着陸

目の前に飛行船の巨体が見えてきた。飛行機は飛行船の機首方向からまっすぐ突っ込んでいく。エンジンの音が途絶えているので、聞こえているのは翼をすり抜ける、風のひゅうひゅうという音だけだ。

まさか……。

太郎は父の意図をはかりかねた。もし、そんなことを実際にしようとしているのなら、信じられないほどの無謀さである。

「太郎さん……」

となりの美和子が太郎の手を握ってきた。顔色は青ざめ、唇は震えている。

太郎は声をかけた。

「大丈夫です、お嬢さま。ぼくは父の只野五郎の腕を信じます」  
その言葉に美和子はほっとしたような顔つきになった。うん、とうなずき目を閉じうつむいた。しかし彼女の恐怖を感じる。太郎は腕をまわし、彼女の肩を抱き寄せた。この行動にじぶんでも驚いたが、美和子はあらがうこともなく、頭をよせ太郎の肩にもたれかけてくる。

父の背中があきらかに緊張をはらんでいる。

飛行船の巨体が見る見る近づく。

飛行機の手輪が、飛行船の機体に接触した！

ぼおん……。

飛行船の骨組みに張られた帆布が、飛行機の衝撃を受け止めた。

とん、と軽く飛行機は飛行船の船体に跳ね返され、ふわりと空中に浮き上がったが、すぐまた接地した。

とん、とん、とん、とまるで水切りをする小石のように飛行機は飛行船の機体の上で跳ねていく。撥ねるたびに、勝と茜が声のかぎりに悲鳴をあげていた。

停まらない！ 見る見る飛行船の船尾が近づいてくる。船尾のむこうは森である。

太郎はそれでもぴくりとも表情を動かさなかった。

五郎はぐつ、と飛行機のフラップを下げた。

しかし飛行機は飛行船の機体をかすめるようにして空中に飛び出していく。もう、森はすぐそこだ。

太郎は静かに目を閉じた。

ばきばきばき！

枝の折れる音が猛烈に聞こえてくる。そして衝撃……。飛行機は滅茶苦茶に揺れている。

が、その揺れも音も、ふいに途絶えた。しん、とした静寂が耳に痛いほどだ。

。

はあはあという勝の喘ぎ声。茜の鼻をすする音ただかすかに聞こえる。

太郎は目を開けた。

周りを見る。

飛行機は停まっていた。



「危なかったな。なんとか、木の枝を使って、飛行機をとめることが出来たよ」

五郎のあきらかな安堵の声が響く。

かれの言つとおり、飛行機は森の樹上に停まっていたのである。木々の枝が、クッションとなって飛行機を受け止めてくれたのだ。

「じよ……冗談じゃねえ……！」

勝がつぶやいた。

「こんな着陸つて、あるもんか！」

かれの言葉に五郎は肩をすくめた。

「ほかに方法はなかったものでね。着陸できるような広い場所が見当たらなかったし、あとはどうこの飛行機を停止させるか、だけだったからな。さてと、ひとまずこれで高倉邸には到着したわけだ。これからどうする？」

「まず、ケン太さんに会うべきです！ わたくし、色々聞きたいことがありますの」

美和子はすでに平常に戻り、背筋をのばし口を開いた。太郎にすがりついたことなど、まったく忘れていたようだ。

彼女の言葉に五郎はうなずいた。

「それならすぐに行動しなくては。こう、派手な着陸をしたからには、高倉コンツェルンの武装召し使いたちがすでに動き出しているはずだ」

「なんなの、それ？」

「あれだよ」

茜の質問に、五郎は窓の外を指差した。

木の間ごしに、はるか高倉邸の方向から数人の男らしき人影があたりふたとこちらへ向けて走ってくる。服装はごくあたりまえのタキシードだが、そのプロポーションがひどくこつこつしている。肩や肘が突き出し、タキシードの下になにか、プロテクターを入れてい

るようだ。

かれらは武装していた。その手に握るのは、番長島でも目にした麻酔銃である。

「行くぞ……」

五郎はつぶやくと操縦席のドアを開け、外へ足を踏み出した。

あっ、と茜と美和子が悲鳴にちかい叫びをあげる。墜落した、と見た五郎は、身体を伸ばして突き出した枝を掴み、くるりと体操選手のように回転すると、まるでましろのように枝から枝へ飛び移っていく。それを見て太郎もドアを開けた。

「待って！」

美和子が太郎を止めた。

「あたし、子供のころから木登りは得意だったのよ！」

につこりとほほ笑むと、彼女は目の前の枝を掴んで宙に飛び出した。くるりと身を翻し、手と足を使ってすると降りていく。そんな彼女を、太郎は呆れて見ていた。美和子の後を続こうと足を踏み出した。

「おい太郎！」

勝が泣きそうな声をあげた。

「おれ……だ、だめだ……こんな高いところ、動けねえ！」

太郎は同情したような表情になった。

「わかった。ロープかなにか探してくるから、待っててくれ。茜さん、お兄さんを見てあげてくれないか」

茜はうなずいた。正直、兄がこれほどの高所恐怖症だとは知らなかったのである。

太郎は美和子を追って外へ踏み出した。しなやかな枝を選び、体重をかける。ぐいつ、と枝はしななって、その反動を使って太郎は宙

に飛び出した。かれもまた五郎と同じように、枝から枝へ飛び移って地面を目指す。

## 酔拳

かれらの姿は異様であつた。

いやにこつこつとしたデザインのタキシード。肩や肘にプロテクターが入れてあるらしく、ひどく突っぱらかっている。頭には召し使いの外出着らしく、山高帽をかぶっているが、その山高帽から顔全体をおおうマスクと一体化して、つまりはヘルメットなのだ。

そして手にしているのは麻醉銃。銃身が長い、ライフルである。命を奪う道具ではないが、じゅうぶんな武装といえる。

飛行機が不時着した大木の根本に集合したかれらは、樹冠をながめた。緑の葉がくれに、飛行機の機体が見えている。

召し使いたちは無言でうなずきあつた。

ひとりが鉤つきのロープを用意して手に持った。鉤がついたほうを錘に、ぐるぐるとふりまわす。じゅうぶんに反動をため、ロープを投げ上げる。

鉤ががつき、とばかりに木肌にくいこんだ。

ぐいぐいとしつかりとくいこんだのを確認して、ロープを握って木を登りはじめる。

かれの姿が緑の葉にかくれた。

ふたりめがロープを握ったその時、頭上で「うわあ！」という悲鳴が聞こえてきた。

はっ、と身構えたところにかさがさと葉擦れの音がして、さっきの召し使いが落下してきた。

どすん、と音を立て地面に投げ出され、その衝撃で気絶したのか、力が抜けたように手足をながながと伸ばして動かなくなった。

顔を上げたかれらの真ん中に、三人の人間が飛び降りてきた。

五郎、太郎、そして美和子の三人である。

虚を突かれた召し使いたちは、三人の襲撃にわっ、とばかりに陣

形を崩してしまった。

プロテクターで守られた身体に打撃はきかない。襲撃側は、関節技を主体に攻撃していた。

ぐき！　ぐき！　と、いやな音を立て、手足を逆にねじられ、武装召し使いたちはつぎつぎと悶絶していた。手にした武器を使う暇もない、素早い攻撃である。

と、高倉邸からもうひとりやってきた。

はっ、と五郎は顔を上げた。

近づいてくる人影は、ひどくひよる長い瘦身、オール・バックの髪型。扁平な顔に、ボタンのような鼻。

木戸だ。

長い足を使って、木戸は急ぐでもなく、まっすぐ五郎を睨むように歩いてくる。

「太郎、美和子さん。あんたらは屋敷に急げ！　あいつはわたしが引き受ける」

「しかしそれでは……」

言いかける美和子を、五郎は手をあげて制した。

「いいから行くんだ！　太郎！」

しかし太郎は逡巡している。飛行機に取り残されている勝と茜が気になるのだ。五郎はちら、と樹冠を見上げた。

「かれらのことはおれが引き受ける。お前は心配しなくていい！

さあ、行け！」

はいっ、と太郎は返事をする。と美和子の手をとった。美和子はびっくりしたように太郎を見た。

「お嬢さま、行きましょう。木戸はお父さんにまかせるんです」

いつにない強い調子に、美和子はうなずいていた。太郎は父の五郎にうなずくと、美和子の手を引き走り出した。

ふたりが屋敷に走りこんだのを確認して、五郎は木戸に向き直った。

木戸はにやりと笑った。視線はまっすぐ五郎に当てていて、ふたりが屋敷に走りこんだことなど気にしていないようだ。数メートルの距離を置いて、ふたりはにらみ合った。

「ひさしぶり……と言っべきかな？」

五郎が口を開いた。その言葉に、木戸は驚愕の表情を作った。

「おれを知っているのか？」

「ブン太だろう？」

「なぜ……？」

がくり、と木戸はよろめいた。信じられない、と首を横にふる。つるりとじぶんの顔をなで、問いかける。

「なぜ判った？ 顔を変えているのに……」

「わたしは執事だよ。いくら整形手術で顔を変えていても、骨格まで変えられるものではない。目と目の距離、歯の形、それに耳の形でわかる。われわれ執事は、一度覚えた人間の顔は、絶対忘れない。いつかきみとは再会すると思っていたがね」

ふん、とふてぶてしく木戸はうなずいた。

「まったく。こんなかたちで再会するとは思わなかったが。いつかお前とは決着をつける必要があると思っていたぞ」

「そういうことだな……」

五郎はゆっくりと木戸に近づいた。その顔にはどこか哀しみが満ちている。

待ち受ける木戸は、ごきごきと肩の関節を鳴らし、ウォーミングアップに余念がない。

ものも言わず、木戸は五郎に走りよると、回し蹴りを五郎にいれた。さつと五郎は背をそらし、蹴りをかわす。先刻承知と木戸はすぐさま足を入れ替え、もう一方の足で後ろ蹴りにうつる。たん、と

五郎は背面とびをして宙返りでかわす。

その瞬間を待っていたのだらう、木戸は両足をそろえ空中に飛び上がった！

両膝をそろえ、仰向けになった五郎に向かった飛びかかっていく。地面に両手をつき、五郎はあやうく木戸の攻撃をかわしていた。

さつと立ち上がり、木戸の次の攻撃を身構える。もし木戸が深追いすれば、逆襲する腹積もりであった。

そんなことは予想していたのだらう、木戸は油断なく五郎の次の動きを見守るだけで動く気配はなかった。

ふら……と、木戸の足がもつれた。

五郎は眉をひそめた。

誘いの一手か？

ととと……と、木戸はまるで酔っ払った酔漢のように千鳥足になる。目はうつろで、焦点が定まっていはいない。

「その動き……酔拳か？」

五郎はつぶやいた。

酔拳。中国形意拳のうち、もっとも奇妙で、その動きが予想できない拳法である。酔漢の動きをもとに組み立てられた技は、秘伝といていい特殊な拳法である。

見守っているうち、いつの間にか木戸はおのれの攻撃範囲に近づいてきていた。あつと思つた五郎が飛び離れようとした瞬間、木戸の長い足が五郎の足にからまっていた！

どつと倒れた五郎がしまったと思つたときはすでに遅い。木戸は猛禽のようにのしかかってきていた。

その両手が五郎の首にがつきとくいこみ、木戸は力を込めて締め上げていた。

「死ね！」

木戸は呪いをこめて叫ぶようにつぶやくと、ぐいぐいと両腕に力を込める。

見る見る五郎の顔が充血し、意識が遠ざかる。視界一杯に木戸の扁平な顔がせまる。木戸は笑いを浮かべ勝利を確信しているようだった。



## 敗北

「ねえ、どうすんのよ！　いつまでも、ここにはいられないのよ！」  
飛行機の座席で、茜は口を尖らせ、兄の勝に話しかけた。茜のとなりで、勝は青ざめた顔をぶるぶるとふった。

「駄目だ……とてもじゃねえが、こっから下にいけるわけ、ねえ……！」

かれの視線はまっすぐじぶんの膝に落ちていて、窓の外など一顧だにしようとはしない。茜はあーあ、とため息をついた。

「まったく兄貴にこんな弱点があつたとは知らなかったわ……！」

情けない、という言葉は茜は飲み込んだ。さすがにそれは口には出来ない。

窓外に目をやった茜はぐいと身を乗り出した。

「あつ、あれ……太郎のお父さんが……」

妹の必死の口調に勝はぎくりと背をのばした。

「殺されちゃう！」

茜は口を手でおおう。

五郎と木戸の死闘を見おろしているのだ。木戸は五郎の上にのしかかり、長い腕を伸ばして首をしめあげている。樹の上から眺めていても、五郎の絶体絶命の状況はここからでも見て取れる。  
ど、どうしよう茜は身動きをした。

その時。

ぽきり……と、枝が折れる音がした。

はっ、と勝は緊張した。

「おい……」

と、妹に声をかける。

なによ、と茜は勝に顔を向けた。

ばき……、もう一度音がする。

今度ははつきり、茜の耳にも達していた。

ふたりは顔を見合わせた。

ぎぎぎい……。

木の枝のしなるいやな音。

そしてどすん、とばかりに衝撃が突き上げる。

わあ、と勝は悲鳴をあげた。

どすん、また衝撃。

どす、どす、どすと飛行機は揺れていた。

「落っこちてる！」

勝は叫んでいた。

まさにその通り、飛行機をささえていた枝がその重みに耐えかね、折れてしまったのだ。

ばきばききともものすごい音を立て、飛行機は沈み込む。ざざざと葉ずれの音を立て、落ちていった。

きやあ、と茜は悲鳴をあげていた。

どん、と下腹を突き上げる衝撃！

飛行機の乗っていた大木の幹を、飛行機は滑走して落ちていく。がたがたという震動に、ふたりは必死に座席にしがみついた。

「死ねえ！」

ぎりぎりぎり、と木戸は五郎の首を締め上げる。もう、五郎は意識をほとんどなくしていた。

勝利を木戸は確信していた。

その時、背後から聞こえてくる音に木戸はふり向いた。

驚愕に木戸の顔がゆがむ。

飛行機が斜めになった大木の幹をすべり落ちてくる！ しかもまっすぐこちらへ向かってくる！

「わわわ……！」

木戸は立ち上がった。

五郎は目を開いた。

ふう、と息を吸い込む。

ぱちぱちと瞬きをして、あたりを窺う。

その目が、迫ってくる飛行機をとらえた。

ものも言わず、五郎は身体を回転させ、その場から逃れる。

わずかの差で飛行機は五郎の側をすりぬけた。がつがつと車輪が地面を掘り返し、飛行機は横倒しになって停まった。

がちやり、と飛行機のドアが開いた。

ころげ落ちるように、勝と茜のふたりが外へ飛び出す。地面に腹ばいになった勝は、たしかに安全な状態になったのを確認するかのように両手で地面をまさぐっていた。

五郎は立ち上がった。

目を見開いた。

木戸が地面にながながと手足を投げ出し、横たわっている。かれは飛行機の突進をかわしそこねたのだ。五郎は倒れている木戸に近づいた。腰をおろし、その顔を覗きこむ。

うつ……、と木戸はうめいた。

生きている。

目を開くと、五郎の顔を見上げた。

くそ、と齒噛みすると、木戸は立ち上がろうと身動きした。ぐっ、とその顔が苦痛にゆがむ。

くくく……と苦痛をこらえ、足に手をやった。五郎は木戸のふとももに手を添えた。

「折れている。動かないほうがいいな」

「殺せ！」

木戸はつぶやいた。

「なにしている。おれを殺せ！ 生きている限り、おれはお前を付けねらうぞ」

五郎は首をふった。

「馬鹿なことを言うな！ あとで医者を呼んでやる。お前には悪いことをしたと思っっているよ」

畜生、と木戸はつぶやいた。

そこへふらふらになって茜と勝が近づく。ふたりをふり返り、五郎は笑った。

「無事だったか！」

「無事だったか……じゃ、ないわよ。もう、死ぬかと思った……」  
ちら、と倒れている木戸を見る。

「その人、木戸っていう人ね。真行寺の財産を騙し取った……」

木戸はかつとなった。

「何を言う！ 何も知らないくせに……あれは合法だ！」

五郎はつぶやいた。

「さて、それはどうかな？ いずれにしろ、あの書類は世間に知られているんだ。いずれ検察庁が動くことは間違いない」

その言葉に木戸は黙ってしまった。五郎はふたりに声をかけた。  
「それより、太郎と美和子はすでに高倉邸の中へはいった。君らは

どうする？」

「決まつてらあ！ おれたちも加勢するぜ！」

元氣を取り戻した勝は威勢の良い声をあげた。その声に、五郎はくすりと笑つた。

「そうか。それじゃ、わたしはこいつのために医者呼びに行かないといけない。それにいろいろやることもあるしな」

「五郎さん、一緒に行かないの？」

茜は目を丸くした。

うん、と五郎はうなずいた。

「ああ、わたしは後から行く。まずは君たち、先に行つた太郎と美和子さんと合流するんだね」

判つた、とふたりは高倉邸へと歩いていった。茜はなんとなく、納得したようだった。それを見送り、五郎は高倉邸の正門へと足をむけた。

「待て！」

木戸が呼び止める。

なんだ、と五郎はふり返つた。木戸の目には必死の色がある。

「お前……ケン太にあのことを言うつもりか？ おれのことを」

「あのこと……？」

一瞬、五郎の顔に戸惑いが浮かんだが、すぐ首を横にした。

「いいや、言うつもりはないよ。しかしケン太のことだ、とつくに悟っているのではないかな？」

木戸は目を見開いた。そしてがつくりと首をたれる。

「そつだな……あいつのことだ……」

そんな木戸を、五郎は痛ましそうに見やつたが、すぐ正門へと歩いていく。

医者と呼ぶつもりである。

## カメラ

「あいつらが中へ入った！」

モニターを前にケン太はつぶやいた。モニターには太郎と美和子、勝と茜の二組の姿が映し出されている。広い屋敷の中で、二組は油断なく歩を進ませていた。その姿を、邸内に仕掛けられている無数のカメラが追っていた。

ふむ、とケン太はデスクで手を組み合わせ考え込む姿勢になった。ドアのところで立っている洋子に目をやる。

「洋子、お前は執事学校での戦闘訓練を受けているはずだな」

はい、と洋子は無表情に首をたてにした。

よし、とケン太は顎を引いた。

「お前、太郎と手合わせしろ。出来るか？」

出来ます、と洋子は返事をする、ふいと部屋を出て行く。それを見送るケン太は、ふたたびモニターに目をやった。

じい　とかすかなモーター音をたて、ゆっくりとカメラが首をふる。それを見上げ、幸司はそろそろと歩を進めた。

屋敷の中はどこもかしこもカメラだらけだ。

かれはカメラの視界からなるべく離れるようにして、屋敷の中を進んでいった。

じぶんがなにをすればいいのか、まだ分からない。とにかく美和子のためになることなら、なんでもやってやろうと思っていたが、肝心の美和子がどこにいるのか判らない。

飛行機が墜落して、太郎と美和子が出てきたのを見て、幸司は動き出した。ふたりが邸内に入ったのは確認できたが、複雑な屋敷の

構造のせいで、会合うことすら出来ない。

幸司はさ迷っていた。

いったい、ふたりはどこにいるのか？

かすかな声が幸司の足を止めさせた。

耳をすませる。

それは

すすり泣きの声だった。声は女である。

ぎくり、と幸司は凝然と固まった。

広い屋敷で、女性のすすり泣く声を聞くのは、正直いい気分ではない。

しかし聞いた声だ。

幸司は思い当たった。

声をたよりに歩き出す。

すすり泣く声は、ひとつのドアから聞こえてくる。幸司はドアにぴったり耳を押し当て、中の気配をさぐった。

「あのう……」

ささやく。

すすり泣く声がぴたりと止まった。

急ぎ足で近づく音がして「だれ？」と尋ねる。幸司は早口でこたえた。

「ぼく、田端幸司っていいいます。以前、お話しましたね」

ああ　　というこたえ。

声の主は杏奈である。しかし高倉ケン太の妹である彼女が、なぜ泣いているのか？

「コックの人ね。こんなところで何をしているの？」

「その……道に迷ってしまって……」

「ここから出して！」

向こうから切迫した声がした。

「あたしだったら、この屋敷のこと何でもわかるわ！ 道を教えてあげるから、ここから出して！」

「判りました！」

幸司は返事をした。

ドアノブを掴んでまわすが、がちゃがちゃと鍵がかかっていて開かない。ドアの向こうの杏奈は苛立った声をあげた。

「だめよ！ 鍵がかかっているわ」

どうしよう、と幸司はあたりを見回した。消火器が目についた。

消火器の架けてある壁に、非常用の棚がある。開けてみると、斧が消火ホースとともにしまっていた。幸司は斧を手にし、ちよっと考えた。

ええい、非常事態だ！

「お嬢さま、ドアから離れて！ 壊します！」

息を呑む気配があつて、ばたばたと足音がする。ドアから離れたのだろう。

幸司は斧をふりあげた。

がつん！ と、斧がドアにめりこんだ。

がつん、がつん！ めりめり、ばきばきと幸司の斧で、ドアは木屑を跳ね散らかし、真っ二つに割れた。

がたん、と音を立ててドアは倒れこんだ。

その向こうに、ひとりの少女が目を見開いて立っている。紺のワンピースに、おおきなピンクのリボンを髪にとめている。卵形の顔に、びっくりするほどおおきな目をしていた。

美人だなあ……というのが幸司の第一印象であった。

「杏奈さまですね。はじめまして、田端幸司といいます」

ありがとう……と彼女は答えた。

立ったままなにかを待っている。



幸司は彼女の足元を見た。  
木屑が散乱している。

ああ、と納得。

幸司は手をのばした。

杏奈はその手を取り、ぴよんとちいさく飛び上がってドアの残骸を飛び越えた。

ちかちかと瞬くライトにケン太は唇を噛みしめた。

「杏奈のやつ、外に出たのか。閉じ込めておいたのに……いったい、どうやって？」

すばやくカメラを操作する。モニターに、幸司の姿が映った。ふたり、手を取り合って廊下を歩いていた。

「あれは……先週雇ったばかりのコック見習いじゃないか」

憤然としてデスクのボタンを押した。スピーカーに部下の声がする。

「はい、なにか御用でしょうか？」

「コック見習いの田端幸司について知りたい。やつの前歴は？」

少々お待ちください、とあつてすぐさま応答があった。

「ええと、真行寺家に奉公していた記録があります。どうやら首になったかどうかしたようですな」

「そうか、わかった……」

ケン太はスピーカーのスイッチを切った。  
考え込む。

「真行寺家のコックだと？ そいつが杏奈を外に出した……。なにがあるな！」

なにもなかった。

幸司はなりゆきで閉じ込められた杏奈を出してやっただけのことである。

歩きながら、かれは杏奈に話しかけた。

「いったい、どうして閉じ込められていたんです？」

それがねえ……と、杏奈はかわゆく唇をとがらせた。

「あたしが勝手なことするから、お兄さまが学校が始まるまで、部屋から出るなって言うのよ！ もう、頭にきちゃう！」

「お兄さま……それは高倉ケン太……さんのこと？」

一応彼女の前だ。「さん」付けで呼ばないとまずいだらう。

「いいのよ！ 呼び捨てで！」

杏奈はぶりぶり怒っている。と、何か思い出したように幸司を見た。

「ところで、あんた道に迷ったって言ったわね。どこに行くつもりだったの？」

あ……！ と、幸司は頭をかいた。

「すみません。それがぼくにも判らないんです」

そうだ、どこへ行けば良いのだらう。素早く頭を働かせた幸司はあることを思いついた。

「ねえ、その高倉ケン太さんのところへ行くにはどうすれば良いんです？」

美和子はケン太のところを目指しているはずだ。だからそこへ行けば良い。幸司は満足だった。なんてじぶんは頭が良いんだらう！

「お兄さまのいるところ？」

杏奈は繰り返すと、うんとひとつうなずいた。

「それじゃいらっしやいな！ お兄さまのいるところなら見当がつくわ！ それにあたしもお兄さまに言いたいことがあるの」

ひらりとスカートをひるがえし、杏奈は急ぎ足になった。幸司はその後を追って走り出した。

## 格闘術

立ち止まった洋子は耳を澄ませた。

廊下の向こう側からかすかな足音が近づいてくる。足音はふたりである。

間違いない、あの足音は太郎だ。もうひとつは多分、美和子だろう。

小姓村の執事学校で、彼女は人の足音のリズムを覚える訓練を受けている。それにより、知り合いの足音を聞き分けることができるのだ。同じことを太郎もできるだろう。だからじぶんが近づいていることは、太郎もわかっているはずだ。

手合わせしてこい……。

ケン太の言葉が彼女の胸でこだまする。

ということは、太郎を倒せという命令だ。

ケン太さまの命令は絶対だ……。

洋子は急ぎ足になった。

びたり、と太郎は立ち止まった。

「どうしたの？ 太郎さん」

しずかに、と太郎は手を挙げた。

無言の仕草に、緊張があらわれている。

「洋子です。近づいてきます」

「洋子さんって、あなたと同じ小姓村で執事学校でのクラスメートね。どうしてそれがわかるの？」

「足音のリズムでわかります。走っているようですね」

まあ……と美和子は口を丸くすぼめた。

「そんなことが判るの？」

はい、と太郎はうなずいた。

「そう訓練されていますから」

しかしいまの洋子はかつての知っていた彼女ではない。あの番長島でつけた”処置”により、人格変容を遂げているはずだ。

太郎はそれが心配だった。

ほどなく洋子が廊下の向こうから姿をあらわす。メイド服を身につけ、女の子らしい髪飾りをつけた彼女は、それだけならどこにでもいそうな感じである。

しかし顔は凍りついたような無表情を保っている。

「洋子……」

呼びかけた太郎の声が途切れた。

彼女はものも言わず、まっしぐらに太郎向けて駆けてくる。はつ、と太郎が身構えたのもかまわず、するどい前蹴りをしてきた。

さっ、と太郎はそれをかわすと、洋子は手刀でもって、首筋をねらってきた。

あわや、という瞬間、太郎は手の平で受け止めた。ぱしん、と鋭い音がひびく。

太郎は真剣な表情になっていた。

これは手ごわい！

かつて、執事学校での洋子は、格闘術の授業においては優等生ではなかった。生来の呑気さと、特有の人のよさがあって、他人を本気で攻撃できるような性格ではなかったのである。

しかし、いまの彼女はすべての優柔不断さをかなぐり捨て、太郎を倒すべく本気で攻撃してくる。

洋子はしゃにむに攻撃している。すべて、太郎の急所を狙ってい

る。それを受け流す太郎の額に汗が浮かんでいた。

モニターに見入るケン太の顔に薄笑いが浮かんでいた。  
うまくいった！

洋子は本気で太郎を攻撃している。執事学校で習ったという格闘術を使って。

いままで何度も執事学校の格闘術について耳にしたが、肝心なその動きについては何も判らなかった。

それがいま、ケン太の目の前にあらわになっている。

そうか、格闘術とはそういう動きをするのか。

ケン太は太郎と戦うことを想定し、洋子に立ち向かわせたのだ。

その結果、洋子がどうなるうとも構わない。

いずれ太郎と美和子は、いま、じぶんがいるこの部屋を探し当てるだろう。その時、ケン太の計画は完成する。すべては美和子を手に入れるための、ケン太の計画であった。

飛行機を目にし、ふたりが出てきたのを望遠鏡で確認したとき、ケン太の計画は決まっていた。島でうるたえたあまり、美和子にあの”処置”を施すように言いつけたことをいまは後悔している。太郎の父親、只野五郎によって救出されることを想定していなかったのだ。

しかしいまは新たな計画にみちびかれ、美和子はケン太に会いにここへやってくるだろう。その時、ケン太はすべてを話すのだ。

なにを？

かれの愛を！

そう、高倉ケン太がいかに真行寺美和子を愛しているかを語るつ

もりなのだ。

かれはモニターを切り替えた。

廊下が映し出され、そこに勝と茜のふたりがいた。ケン太はかすかに眉をしかめた。

勝又勝、そして茜の兄妹か……。あのふたりはとんだ飛び入りだ。まあいい、なんとか処理できるだろう。ケン太はマイクを掴み寄せた。

## 覚醒

ばしっ、びしっという打撃音が聞こえている。なんだろう、と幸司はのびあがった。

角を曲がり、幸司は戦っている太郎と洋子を目にした。

わっ、と幸司は声をあげた。

「なに、なんなの？」

背後から杏奈が尋ねてくる。幸司は黙って指さした。

廊下の真ん中で、太郎と洋子が激しくあらそっている。いや、争うというより、太郎が洋子の攻撃を必死になつてそらしているといったほうが正確か。太郎の実力からすれば、洋子を打ち負かすのは簡単だ。しかし太郎はそれをしたくはなかった。洋子はいま、正常な状態ではない。番長島でうけた”処置”により、盲目的な服従心を植えつけられているだけなのだ。

杏奈は思わず叫んでいた。

「洋子さん！ やめなさい！」

彼女の声に、洋子はぎくりと身をこわばらせた。攻撃が中断し、太郎はほっと息をついた。緊張で、全身にびつしりと汗をかいていた。

つかつかと洋子の前に近づくと、杏奈はとん、と足踏みをする。

「いったい、どういうわけなの？ こんなところで喧嘩して！」

洋子は無言で、おおきく呼吸をくりかえしていた。

激しい葛藤があるようだった。



杏奈はケン太につぐ主筋であり、洋子に命令する権利をもつ。したがって彼女の命令には従わなければならない。しかしケン太の命令にも従わなければならない。現在直接洋子に命令しているのは杏奈だが、ケン太の命令も強い強制力を持っていた。そのふたつの命令ポテンシャルが、彼女を立ち止まらせているのだった。

それを見てとった太郎は口を開いた。

「洋子！ 召し使い三原則を思い出せ！」

太郎の言葉に洋子の瞳がうつろになった。

召し使い三原則！

それは執事学校で繰り返し教え込まれる、召し使いとしての大原則である。

太郎はその大原則を大声で叫んだ。

#### 召し使い行動規範三原則

第一条 召し使いは主人の生命、財産を守らなければならない。  
またそれを看過 してはならない。

第二条 召し使いは、第一条に反しない限り、主人の命令を守らなければならない。  
い。

第三条 召し使いは、第一条、第二条に反しない限り、自分の生命、財産を守る ことが出来る。

ぶつぶつと洋子は三原則の言葉を口の中で繰り返していた。

「洋子、君はケン太によって服従心を無理やり植えつけられている！ それは君だって自覚しているはずだ。違うかい？」

太郎の言葉に洋子は首をなんども左右にふった。

「あたし……あたし……！」

ぼろぼろと瞳から涙が溢れ出す。

美和子が静かに語りかけた。

「洋子さん。高倉ケン太さんが、主人としてふさわしい人間かどうか、考えなさい。召し使いに服従を強制するなど、どうかしていません。わたしはそんな主人になど、なりたくないし、なるつもりもないわ」

かくん、と洋子の膝がおれた。廊下の床にぺたりと座り込む。肩が落ち、がくりと首をたれた。太郎はその側に膝をつき、洋子の肩に手をおいた。

手を置かれ、洋子は顔をあげる。

その目を覗き込むようにして太郎は口を開いた。

「洋子。きみは騙されているんだよ。薬と、深層意識への洗脳でね」  
「あたし、どうすればいいの？」

「なにもなくていいよ。きみは立派なメイドじゃないか」

わっ、と洋子は声をあげて泣き出し、太郎の肩に顔をうずめた。

太郎は彼女の背中を優しくなでてやった。

やがて泣き声がおさまり、洋子は恥ずかしそうに顔を上げた。

くすん、くすんと鼻を鳴らしているが、その表情にはもとの明るい、彼女らしいものが戻っていた。

杏奈はそつとハンカチを差し出した。

それを受け取り、ちーん、と鼻をかんて洋子はハンカチを目にした。彼女はあつ、とちいさく叫んだ。

ハンカチに縫い取られている「T・T」のイニシャル。

太郎のものだった。

洋子はくすりと笑った。

「ごめんね。また汚しちゃった。洗濯して、かえすね」  
「いいのさ」

太郎は笑った。その後、真剣な表情になった。

「洋子、ケン太の居所がわかるかい？」

うん、とうなずき洋子は立ち上がった。もう、涙はすっかり乾い

ている。

太郎を前に、両腕をすばやくひらめかす。指を折り曲げ、その合間に「右3」とか「左十五」とか短く言葉をはさみこんだ。それを見て、太郎はうなずいていた。

「ありがとう、これでかれのもとへ行ける」

美和子に向け頭をさげた。

「お嬢さま、急ぎましょう。高倉ケン太の居所が知れました」

美和子はあつけにとられていた。

「今で道を教えてもらったというの？」

そうです、と太郎は答えると先に立つて歩き出す。あわてて美和子はその後に続いた。

ぼうぜんとそれを見ていた杏奈は、はっと気付くと後を追おうとして洋子をふり返った。

洋子は動かない。

「あなたは行かないの？」

はい……、と洋子はうつむいた。

「あたし、やっぱりメイドには向かないかもしれません……いまのではつきり判りました。小姓村に帰ろうかな……」

そう、と杏奈はつぶやくと歩き出す。

もう彼女のことはすっかり念頭から消えている。考えることは兄のケン太のことである。

太郎の言葉が杏奈の胸にこだましていた。

ケン太は主人としてふさわしいのか？ いや、それ以前に高倉コンツェルンの総帥としてふさわしい人物なのか？

見送った洋子は、のろのろと廊下の窓際に近づいた。ぼんやりと高倉邸の庭を見つめている。

空は灰色の雲におおわれ、風があるのか雲は見ている間にまたたくまに流れていく。雨になるのだろうか？

そこに幸司が声をかけた。

「あの……洋子さん……」

え、と洋子は幸司を見た。

幸司はもじもじとしている。

「さつき小姓村に帰るって、言ってたけど。それどういう意味？」  
ふっと洋子はほほ笑んだ。

「あたしのお父さん……小姓村の執事学校の校長なんですけど、あたしに帰ってもらいたがっているの。執事学校はホテルも経営しているんだけど、あたしに婿をとってホテルの経営者として収まって欲しいらしいのね。あたしはせっかく執事学校でメイドの訓練を受けたんだから、メイドになりたくて家出したの。でも、もういいの。もうメイドになるのはやめるわ！」

「ど、どうしてさ？ 洋子さん、とってもいいメイドじゃないか！」

幸司の言葉に、洋子は顔を上げた。

「本当？ どうして、そう思うの？」

「だって、洋子さん……番長島に行く前はとても元気で明るくて……。なんだか洋子さんといると、こっちまで元気になる気がするんだ」

洋子は顔をそむけた。その頬が真っ赤にそまっている。

「あたしね、メイドになりたいと思ったのは、太郎……只野太郎がいたからなの！ 太郎とはこんな小さいときからの幼なじみで、太郎が執事を目指して執事学校に入学したからあたしも一緒に学んだの。でも判ったわ。太郎は生まれながらの召し使いだけど、あたしはそうはなれなかった。あたしは普通の女の子だって、そう判ったのよ」

幸司は笑顔になった。

「普通の女の子でいいじゃないか」

かれの言葉に、洋子はぽかんとした表情になる。

「そのほうがずっといいよ。それに、普通の女の子のほうが、おれ好きだな」

洋子はうつむいた。

「ありがとう……」

ちいさく答えた。

## 橋

「くそっ！　なんだこの屋敷は……ひろいし、道はわからねえし、迷子になっちまうぜ」

苦々しげに勝はつぶやいた。となりで茜が知らん顔で歩いている。ぶつぶつ文句をたれる勝をまるつきり無視している。

しかし勝の文句も判らないではない……茜はひそかにこの屋敷のぬしの正気を疑っていた。通路は奇妙な角度で曲がりくねり、思わぬところに段差や、行き止まりがある。さらには、ドアを開けた途端まるで落とし穴のような暗闇がぽっかり口をあけているしまつである。屋敷全体が見知らぬものを拒否しているようであつた。

ふと茜は通路の天井を見上げた。

じーつとかすかな音を立ててカメラがゆつくりとふたりの行動を見守っている。カメラは屋敷内のあちこちにあり、それを見つければ、茜は落ち着かない気持ちになっていた。

いつしかふたりはかなり上の階へ登っていた。上へ向かう階段を見つけると、そのたびに登っていたのである。ときおり出現する窓から外を眺めると、高倉邸の庭園の眺望がのぞめられる。なんとなく、ケン太は最上階にいると直感していたからだ。

しかし屋敷はひろい。方向を見失い、なんだかおなじところをぐるぐる回っているような感じである。

「あーあ、あたし疲れちゃったなあ！」

嘆息して茜はぐったりと窓辺に寄りかかった。勝はそんな妹を見てうなつた。

「弱気になるんじゃないやねえ……これからじゃねえか！」

「だってえ……」

茜は唇を尖らせた。

「せめて地図でもあればいいのに。ほら、館内案内図みたいな」

「そんなもの、あるわけねえだろ馬鹿！」

「馬鹿つてなによ。お兄ちゃんだって道がわかんないで迷ってるんじゃないの？」

なにい……と勝の声はしり上がりに高まる。

なによ！ と茜も負けていない。

「まあまあ、ふたりとも喧嘩しないで落ち着くんだな」

ふいに聞こえてきたケン太の声に、ふたりはぎくりと凝固した。

「な、なんだいまの声は？」

勝は目を飛び出さんばかりに剥きだし、あたりをきよるきよる見回す。あつ、と上を見上げ口を開けた。

廊下の天井からテレビ・スクリーンが下りて、そこに高倉ケン太の映像が映し出されている。皮肉な笑みを浮かべ、ふたりを見おろしていた。

「ぼくを探していたんだろう？ はるばる番長島からご苦労なことだ」

勝は一瞬に立ち直り、ぐい！ とばかりにケン太の映像を睨んだ。

「あたぼうよ！ てめえを見つけて……そして……ええと……」

その先が思い浮かばない。結局かれらしい結論に落ち着いた。

「ぶちのめしてやる！ この拳でなあ！」

ぐつと握りこぶしをつくった。スクリーンのケン太はくすりと笑った。勝はかつとなった。

「なにが可笑しい？」

「いや……きみらしいと思ってね。なるほど、勝負したいというんだな。それはぼくも望むところだ」

「そうか！」

勝は急に生き生きとした。

「おめえとは一回、勝負してえと思ってたんだ。おめえがやるってんなら、どこへでもいくぜ！」

「ちよつとお兄ちゃん」

たまらず茜は口を出した。なんでえ、と勝は不機嫌にうなった。

「罨かも……」

ささやいた茜にぼかんと勝は口を開ける。罨とはなんだ、と言いかけたその時

がたん！

床がいきなり口を開け、ふたりを飲み込んだ。

「きやあつ！」

「うおっ？」

ふたりはつるつる滑る床を落ちていく。落ちていく寸前、がたんとなたたび床の蓋が閉じ、あたりは真っ暗になった。

必死になって手がかりを探すが、ふたりの落ち込んだそこは滑らかな円筒状になっていて、ただただ落ちていくだけである。

どすん、とふたりはどこかに落下した。

きよろきよるとあたりを窺うが、真っ暗でなにも見えない。

と、急激に上昇する感覚があり、どうやらエレベーターのようなもので運ばれているらしかった。上昇はだしぬけに停まり、こんどは床が持ち上がる。

わっ、と叫ぶひまもなく、ふたりはふたたびつるつる滑る床を落ちいった。

と、前方が白い光に満たされているのに気付く。

出口だ！

ころころとふたりは転がるように外へ吐き出された。



「ふう……なんてこった！」

勝はぶるぶると頭をふった。すっかり目が回っている。ぱたんと音がしたので背後をふりかえると、ふたりが吐き出された穴に蓋が閉じられたところだった。

ひゅう……と、風がふたりの髪の毛を逆立てる。

空気が湿っぽい。

いきなり強い風が吹きつけ、ふたりははっと頭をあげ、あたりを見回した。

「こりゃあ……」

勝は言葉を呑みこんだ。

「屋上だわ！」

茜がつぶやいた。

ふたりは立ち上がった。

そう、ふたりが運ばれたのは高倉邸のどこかの屋上であった。かなり高い場所にあるらしく、目の前には別の建物の上部しか見えない。その建物は急角度の切妻屋根をもち、高倉コンツェルンの紋章が装飾されていた。

勝は背後をふりかえった。

そこには勝たちを吐き出した壁があるだけで、ほかの出入り口はない。つまり後戻りできないのだ。

「さあ、ぼくと勝負したいのなら、目の前の橋を渡ってくるんだ！」どこからかケン太の声が聞こえてくる。

「橋を？」

勝はぼんやりとつぶやいた。

橋なんか、どこにある？

「お兄ちゃん、あれじゃない？」

茜が指さす。

その方向を見て、勝はがくりと口を開いた。

「橋って、あ、あれかあ！」

大声を上げた。

いまいる屋上から、目の前の切妻屋根の建物に、一本の橋がかけられていた。

幅、わずか一分しかない。しかも手すりなどない。ただの板が、一本、切妻屋根の建物に延びているだけだ。

切妻屋根の建物にも、こちらとおなじような屋上がある。その屋上に、ひとりの青年が立っていた。

真っ赤なガクラン、金髪のリーゼント。足もとは編み上げのスニーカーだ。

高倉ケン太である。

そのケン太は、橋のたもとに後ろ手をして悠然と立っていた。口許には笑みを浮かべている。

くそつ、と勝は唇を噛みしめた。

一步、前へ踏み出す。

橋に足をかけた。

## 面目

「さっきのあれ、なんなの？」

急ぎ足で歩く太郎のとなりで、美和子は歩きながら尋ねた。

「ああ、あれですか。洋子にケン太の居所を教えてもらったんです」  
「でも手をふったりしただけじゃない。すこしはなんか喋っていたみたいけど、あれで道順がわかるの？」

「はい、召し使いにとって屋敷内の地理を覚えるのは重要なことですから、わたしたちは学校で道順を覚えたり、おたがい教えあう方法を学びます。言葉だけでは教えるのに時間がかかりますので、さっきの洋子のような手振り身振りを交えます」

へえ……と美和子は感心した。説明を受けるほど、執事学校で習ったという技術に感銘を受けるばかりだ。ほかに太郎はどんなことを習ったのだろう。ふと気付き、後ろから追いかけてきた杏奈に声をかけた。

「杏奈さん、そういえばあなたはお兄さまのいるところ知っていないの？」

杏奈は肩をすくめ、首をふった。

「知らないわ。お兄さまは屋敷にいたときも、ほとんどあたしと顔を合わせないし、それにお兄さまのいる棟はあたし、一度も入ったことないのよ。なにか用があるときは、お兄さまからテレビで伝えられるだけなの」

「一度も入ったことないって、どういうことかしら？」

「あそこの棟は……」

杏奈は窓から見える切妻屋根の建物を見上げた。建物には高倉コンツェルンの紋章が看板となって装飾されている。

「つい最近、建てられたもののなの。だからあたしも入ったことない

の。それにお兄さまったら、気まぐれに屋敷の改装や増築を繰り返すことが多いから、あたしだってうっかりしていると迷子になるのよ」

美和子はふう、とため息をついた。

考えてみれば、ケン太は美和子の婚約者である。その婚約者のことを、美和子はほとんどなにも知らないということに気付いたのだ。

「どうした？ さっさとその橋を渡ってくればいいだろう！」

橋の向こうでケン太が笑いながら叫んでいた。

一步を踏み出せず、勝は立ち往生していた。

細い、一本の板がまっすぐ切妻屋根の屋上へ続いている。そのたもとはケン太が立ちはだかるようにして待っている。

くそっ、と勝は何度かの歯噛みを繰り返した。額から顎にかけ、びっしりと汗が噴き出ている。

足もとを見ると目も眩むような高さである。

高さは十階ほどもあるうか。遠くを見渡すと、大京市の眺望が開けている。そこにはこれほど高い建物は数えるくらいしか建っていない。

さらには吹きつける風が恐怖感を増す。

空気は湿っぽく、気圧が低いせいか、しきりと耳鳴りがする。顎を動かすと、ぽん、と鼓膜がなった。

ぽつり……。

勝の額に冷たい雨粒が当たった。

はっ、と勝は空を見上げた。

ぽつ、ぽつんと数滴の雨粒が勝の顔をうった。

勝は顔をもどした。

ケン太がにやにや笑いを浮かべている。

くそお……そうか、そんなにおれを馬鹿にするのか……！

生来の負けん気が頭をもたげた。

ぐつと一步を踏み出す。

大丈夫、橋は丈夫そうだ。

「お兄ちゃん！」

背中で茜が声をかけた。

「茜、お前はそこで待つてろ……！」

ふりかえると先に進めなくなりそうな予感がして、勝はそのまま歩を進めた。

「ごおっ！」

強い風が勝の足もとをすくうように吹き付ける。風は高倉邸の複雑な形状で思いがけない方向にそれ、ときには真正面から、ときには背後から吹き付ける。

やっかいなのは降り出した雨だ。

慎重に、じりつ、じりつと勝は前へ進んでいった。気がつくと橋の表面が雨で濡れ始めている。気をつけていないと滑りそうだ。

そら滑った！

あやうく立ち直り、勝は目を閉じ立ち止まった。心臓が爆発しそうだ。

ケン太の笑い声が響いた。

「ははははは！　そうか、きみは高所恐怖症なんだ！　知らなかったよ。悪かったな、そんなところを渡らせて」

てやんでえ……。

勝は不敵に胸のうちで思った。

こんなところ、高所恐怖症でなくとも渡るのは怖ろしい。出来るだけ足元を見まいと思うのだが、それでもつい下に視線がいく。

怒りだけが勝の推進力であるようだ。

歯を食い縛り、がくがくする膝をこらえながら、勝は一步、一步前へと進んでいく。

ようやく半分まで進んだとき、ケン太がふいに動き出した。

「まったく、待ちくたびれたよ！ きみがさつさと来ないなら、こっちから行くぞ！」

大股で歩き出し、橋を渡りだした。

凍りつく勝の目の前に、ケン太は恐れもせず近づき、立ち止まった。

「な、な、なにを……？」

勝の叫びは悲鳴ににっていた。

「ここで一丁、勝負するってのは、どうだい？ 面白いんじゃないのかい」

ケン太はにやにや笑いを浮かべていた。それはひどく嗜虐的で、頭ひとつ背が高い勝を完全になめきっている。

「う、う、う……！」

勝は完全に動揺していた。

こんなところで？

勝負？

「どうした、怖いのか」

「怖い？ おれが」

勝の怒りに火がついた。無意識に拳がかためられ、ケン太に殴りかかる。

ひよい、とケン太はそれをよけ、沈み込むとどすんと勝の胸に頭突きをくらわす。

わっ、と勝はおおきく両腕をふりまわした。とっ、とっ、とっ、とっ、とつと小刻みにあとじさる。つい視線が足もとにいつてしまった。

数十メートルもの高みにある自分が痛いほど意識された。すとなと内臓が落ち込むような恐怖が喉元にせりあがる。

ひいーっと、声にならない悲鳴がこみあげた。

ついに座り込んだ。両手が必死に板の端をつかむ。

もう動けなかった。がくがくと両腕が勝手に震え、青ざめた顔で立ちはだかるケン太を見上げていた。

「やれやれ…… まったくがっかりだ。こんなところまでやってくるから、もうすこし歯ごたえがあるものと思っていたが、ぼくの買いかぶりだったな！」

ケン太はちっ、ちっ、と指先を左右にふった。

くるりと背を向けた。背中の”男”の刺繍がきらめいた。

「ま、待て……っ！」

勝は必死に声をふりしぼった。

ケン太は立ち止まり、首だけねじむける。

「どうした？ まだやるのか」

くそう……と勝は足掻くが、足はまるで自分のものようではなく、へろへろとまるで力がいらない。それでも四つん這いになって、橋をわたっていく。

ほう　と、ケン太は感心したようなため息をついた。

「その意気は買ってやる。しかしこれまでだな」  
はっ、と声をかけると足先を旋回させた。

がつん、とケン太の爪先が勝の顎をとらえる。げっ、と勝は痛み

に気が遠くなった。

とんとんと踊るような足取りで、ケン太は四つん這いの勝を足先で攻撃していた。容赦なく、残酷に。

ぶん、とうなりをあげ、ケン太の回し蹴りが勝の首根っこをとらえた。この痛打に、勝はがくりと腕からちからがぬけ、指先が離れてしまう。

わっ、と勝は橋にしがみついた。足がぶらぶらと揺れている！

ケン太の攻撃で、かれは橋から身体を半分、落としてしまっていた。しゃにむに掴む、片方の指先だけが命の綱となっている。

必死に足先が足がかりをさがすが、むろんそんなものはない。

「やめてーっ！」

茜の叫び声が勝の頭のうえを通過した。彼女のスカートの端っこが勝の視界を一瞬、かすめた。

うおっ、とケン太のくぐもった声がする。

なんだ、と勝はようやく顔だけあげた。

ケン太がよろよろと胸をおさえていた。痛みに、眉間に皺がよっていた。

「貴様……」

ものすごい形相である。

「茜！」

勝は叫んだ。

なんと、茜が橋の上に立っていた。板一本の橋を彼女は駆け抜け、勝の身体を飛び越えてケン太の胸めがけ、とび蹴りをくらわしたのだった。蹴られたケン太は、切妻屋根の屋上へ位置を変えている。

ようやくのことで勝は橋に這い上がった。茜はケン太に向かって、さらに攻撃を加えようと橋を渡りきっていた。

がくがくする手足で、必死になって向こう側の屋上へたどりつく。その時、ケン太は怒りのあまり茜に襲いかかっていた。両腕を伸ばし、彼女の細い首にまきつけている。茜は顔を真っ赤にさせ、必死



になって振りほどこうとするが、ケン太の腕は万力のように彼女の首を締め上げていた。

うおおっ、と雄たけびを上げて勝はケン太に体当たりを食らわした。

わっ、とケン太はたたらを踏み、茜の首から腕を離していた。茜はけけけと咳き込み、しきりと首筋をなでている。

「茜、おめえ……」

勝は絶句した。

じぶんが半死半生の思いで、やっとのことで渡りきったあの橋を、彼女は軽々と駆け抜けたのである。兄貴の面目丸つぶれ！

咳き込みながらも、茜は兄の言葉の意味を悟って弱々しくほほ笑んだ。

と、その目が見開かれた。

「お兄ちゃん、うしろ！」

はっ、と勝がふり返る。

ケン太が肩から勝に体当たりをしてきた。

どすん、とケン太の肩が勝の胸板を突き上げ、かれの両足が一瞬、屋上の床から持ち上がる。背中から勝は倒れこんだ。

「てめえら！ 殺してやる！」

ケン太は荒々しく叫んだ。いままでの冷ややかな態度は豹変していた。いや、いまのかれが本来なのかもしれない。顔は真っ赤に染まり、ひくひくと唇がめくれあがった。

「だれを殺すというの？」

ふいの女の声に、ケン太はぎくりと身をこわばらせた。

勝、茜もその声の方向に顔をねじむけた。

美和子が立っていた。

## 戦いの時間

ざあつ、と横殴りの雨が吹き付ける。飛沫しぶきが白くあたりを煙らせていた。

ばたばたと音を立て、ケン太のガ克兰の袖がまくれあがった。背中から吹きつける風に、ケン太は揺れながら立ち尽くしていた。きつちりとセットした金髪のリーゼントがくずれ、髪の毛がばらりと顔にかかっている。

屋上のドアが開かれ、美和子が立っていた。背後に太郎、そして杏奈が続いている。

ふつ、とケン太は笑い顔を見せた。いつもの、どこか他人を突き放したような笑顔である。

「やあ、美和子さん。来てくれたんですね」

朗らかに声をあげた。一瞬にして人格が変貌していた。美和子はそんなケン太に眉をひそめた。

「あなた…… どうしてあんなことを？」

「あんなこと？ なにをですか」

ケン太は反問した。

かれの言葉に、美和子はぼうぜんとした表情を見せた。まるで罪悪感のない態度に、戸惑っているようである。

「ずい、と太郎が前へ出た。」

「あの書類です。木戸に真行寺家の財産が渡され、男爵が破産されることとなった、あの書類です。あれにはあなたの名前もありましたよ」

太郎の言葉にケン太の唇がひくひくと痙攣していた。

「つまりは真行寺家の破産は、あなたの画策したことである、ということですよ。これは意図的な企みです。美和子さんの婚約者である

あなたが、なぜそんなことをする必要があつたのです？」

怒りの表情がケン太の顔にあらわれた。

「お前に教える必要は認めない。お前は、ただの召し使いではないか！」

そうです、と太郎はうなずいた。

「しかし召し使いは主人の利益を守る立場でもあります。主人である美和子さまの利益が損なわれたいま、その理由をただすのは当然の義務でもある……」

とうとうと並べ立てる太郎に向け、ケン太は「うるさいっ！」と大声で叫んだ。

「つべこべつべこべと、お前は実に気に入らない奴だ！ 美和子と結婚してからは、お前も召し使いのひとりとして遇しようと思つたが、いまはやめた！ お前などおれの召し使いとして必要のない奴だ！」

「つまり洋子さんにしたような”教育”をするつもりなんですな」  
太郎の言葉にケン太はがくり、と口を開けた。

「そうだ……そのつもりだった……。あの”処置”がすめば、万事もうまく行くはずだった……」

「ケン太さん、恥ずかしくなくて？ それをわたしにもさせるつもりだったのでしょうか」

美和子が叫んだ。

その言葉に、ケン太の表情にはじめて苦悶が浮かんだ。

両手をよじり合わせ、なにかに必死に耐えているようである。

「おれは……おれは……。美和子、おれはお前を愛している！」

言われた美和子の目がおおきく見開かれた。さっぱり判らない、というように首をゆっくりと横にする。

「わたしとあなたは婚約者として紹介された、あのときが初めて顔

をあわせたきりではないですか？ それなのに愛しているとは信じられません」

ふっ、とケン太の表情に苦い笑みが浮かんだ。

「そうだろうな、君がそう言うのは予想できた。しかしずっとぼくは、君の事を愛していたよ。ずっと以前からね」

「ずっと以前？」

「そう、きみがまだ子供のころだ。憶えていないのか？ となりのケン兄ちゃんのことを……」

「ケン……兄ちゃん……！」

美和子の顔にじよじよに理解が達しつつある表情が浮かぶ。なにかを思い出しているようだ。

「そうだ、子供のころ、ぼくときみは幼なじみだった。きみは何かというと、ぼくのことをケン兄ちゃん、ケン兄ちゃんと追いかけていたね」

驚きに、美和子は頬を両手でおさえていた。

「わ、わたし……そう言えば……あれが、あなた？ でも、なぜ？」

「ぼくの一家は、かつて真行寺男爵に雇われていた召し使いだっただ。父はそのころ、高倉という名前だった」

「高倉？」

「そう、ぼくの父、高倉ブン太はいまでは整形して顔を変えているが、木戸という名前で真行寺家に入り込んだ……」

まるで爆弾が破裂したようなショックが一同を支配した。

「木戸は整形して名前を隠し、ぼくに接近した。ぼくは気付かないふりをして、かれを使った。しかしぼくは雇う人間のことを徹底的に調査する性分だ。木戸が姿を変えてぼくの前に現れたとき、その調査で整形した父だとすぐわかったよ。だからかれのことは全面的

に信用できた。どうやら父はぼくのため、なんでもやるつもりだった。真行寺家乗っ取りの計画も、木戸……つまり父の主導で行われた」

ケン太はちらりと太郎を見た。

「ぼくの義理の父親にあたるのが只野五郎、つまりきみの父親だ。只野五郎とぼくの母親が人目を忍んで愛し合うようになって、ぼくは真行寺家から離されてしまった。しかしぼくの心の中に美和子のことはずっと存在していた……。かつての召し使いの息子がいまでは全国一の財閥の長になれたのも、只野五郎のおかげだ。だがそれによって、ぼくの心にきみにたいする愛が目覚めたのだ」

「それがなぜ、真行寺家の財産を奪うこととつながるのです？」

太郎の質問にケン太はかっとなった。

「もう質問はなしだ！　これからは戦いの時間だ！」

ひと声叫ぶと、ケン太は猛然と太郎に向け走り出した。たん、とひとつ床を蹴り、宙を飛翔し爪先を太郎の胸元にむけ襲いかかる。

臆

洋子と幸司は、高倉邸の玄関に座り、空を見上げていた。ざあざあと音を立て、大粒の雨が降り続けている。膝を抱え、ふたりは無言で雨を見つめていた。

「これからどうしようか……」

ぼつり、と幸司がつぶやいた。うん、と洋子はうなずいた。

「あなた……幸司さん。なにか計画はあるの？」

その言葉に幸司はにっこりと笑顔になった。

「決まったら！ きつと美和子お嬢さまは真行寺家を元通りにするから、そうなたらおれはもとのコック見習いに戻るさ！ そうして、いつかお嬢さまにおれの料理を食べてもらうんだ！」

幸司のあけつびろげな言葉に、洋子はほほえましく思ったのか、かたほうの頬に笑窪をつくった。

ふわん、ふわんと甲高い音を立て、一台の救急車が正門前に止まった。洋子と幸司はその方向を見やる。

わっ、とばかりに記者がそのまわりを取り囲んだ。車内に運び込まれているのは、木戸のひよる長い身体であった。取り囲んでいる記者はマイクを突きつけ「なにか一言！」と繰り返している。木戸は無言で車内に運び込まれた。

救急車のライトが旋回し、人垣をかきわけるようにして走り去る。記者たちは傘の用意をしていなかったのか、雨の中ずぶぬれで立ち尽くしている。

「あいつ……どうしちゃったんだろう？」

幸司はつぶやいた。

あれ、と洋子は立ち上がった。

雨の中、ひとりの人物が正門から近づいてくる。

すらりとした上背、タキシード。長い髪の毛を、後頭部でまとめている。

かれは玄関にいる洋子と幸司に気付いた。

「やあ、きみらは？」

声をかけたかれを、洋子は熱心に見つめていた。

おずおずと言葉をかける。

「あのう……もしかして、あなたは太郎の、つまり只野太郎の……？」

かれはにつこりと笑顔になった。

「そう、わたしは只野太郎の父親。只野五郎だ！」

やっぱり、と洋子は顎をひいた。

「高倉コンツェルンの歴史を調べたことがあるんです。その時、あなたの写真が創業の歴史のときにならず入っていました。名前から、もしかして太郎のお父さんかも、と思っていたんです」

うん、と五郎は手で後頭部をなでた。

「そう、高倉コンツェルンをここまで育て上げたのはわたしだ。執事としての経験がそれを可能にした。しかしいまでは後悔している。高倉コンツェルンはある意味、怪物のようになってしまった……」

ぐつと顔を上げた。

「コンツェルンの歴史を調べた、といったね。なぜそんなことを？」

「わたし執事学校でメイドの訓練を受けたんです。じぶんが奉公する家の歴史を知ることが大事だと教えられていましたから」

「執事学校？」

「はい、わたしは山田洋子といいます。太郎とはクラスメートでした」

「ぼくは田端幸司です。真行寺家の見習いコックをしていました！」  
なるほど……と、五郎は肩をすくめた。

ちらり、と洋子を見つめる。

「きみはいいメイドになりそうだな」  
誉められ、洋子は顔を赤らめた。

「でも、あたし、この高倉家を辞めようと思っています」  
「なぜだね？」

「主人である高倉ケン太さまに、どうしても忠誠を誓うことが出来ないからです！」

五郎の顔に理解が浮かぶ。

「そうか、番長島で受けた洗脳処置だね。たしかにあれば主人としてやってはいけない禁じられた方法だ」

そこで五郎は何かを決意するような表情になった。

「これからわたしがやろうとすることは、ある意味ケン太の破滅につながるのだ。あの正門にいる記者を見たかね？」

そう言って親指を立て、正門を指し示す。

「あの記者たちに、高倉コンツェルンの……というよりケン太のやつてきたことだな……を教えるつもりだ。膿は出すだけいいんだ。それで高倉コンツェルンは生まれ変わることができるだろう。また、そうでなくてはならない」

洋子を見る。

「きみ、手伝ってくれるか？」

彼女は息を吸い込んだ。

「やります！」



決着！

激しい雨で息も出来ないほどだ。滝のような雨が、ふたりを押し流そうとする。

唸り声を上げ、ケン太は太郎に拳をふりあげた。ばしっ、と音を立て、太郎の手の平とかばう腕がケン太の攻撃を受け止める。

くそっ、とケン太はいったん身を引くと、屋上から屋根へと移動した。がらがらと瓦を踏み、這うようにして登っていく。ちらりと太郎をふり返り、叫んだ。

「どうした？ 怖いのか、登って来い！」

唇を噛みしめ、太郎はケン太の後を追って屋根を登りだす。急勾配の屋根瓦には雨が水流となってほとばしり、つるつると滑って足元がたよりない。

「ケン太さん、もう、やめて！ こんな戦い、意味はないわ」

美和子が屋根に上ったケン太を見上げ、叫んだ。その声が聞こえたのか、ケン太は美和子を見てにやりと笑った。

「意味？ 意味が必要なのか？ そうじゃない！ これはおれの戦いだ。戦いに意味などいらない！」

ようやく屋根の天辺に登ってきた太郎を見て腕をあげた。

「来たな……さあ、かかってこい！」

くい、くいっ指を指し示す。

太郎は息を吸い込んだ。前へ歩き出そうとするが、足もとがぐらつく。そして滑る。

ためらう太郎を見て、ケン太はしてやったりという笑みを見せた。

「そうだ、お前の靴では動けないだろう」

太郎はケン太の言葉にじぶんの靴を見た。

黒い革靴である。靴底は固い。対するケン太の足はやわらかなスニーカーで、靴底はやわらかなゴムで、滑り止めの溝が彫つてある。ケン太は太郎をわざとこの足もとが悪い、屋根へと誘つたのだ！太郎の顔に理解の色が浮かんだのを見て、ケン太はうなずいた。「そうだ……執事はつねにきちんとした正装をしていなくてはならないからな。それがどんな場所であっても……」

勝ち誇つた表情になつたケン太は屋根瓦をがちゃがちゃと音を立て踏みつけ、太郎へ向け突進していった。

肩をつきあげ、どんと全体重を乗せて体当たりをくらわす。

わつ、と太郎は浮き上がるようにして吹っ飛んだ。

だんっ！ と、屋根瓦に横倒しになる。がらがらと音を立て、太郎は急角度の屋根を転がっていった。手を伸ばし、爪をたてるようにして滑るのを止める。足が空を蹴る。

はっ、として足元を見ると、足先が宙に突き出している。屋根の端つこに太郎は停まつていたのだ。雨樋にやつとのところでもうかたほつの足がかかつていた。

わあああゝっ、と喚き声をあげ、ケン太が屋根をすべり落ちるようにして走ってきた。

腕をのばし、身体を持ち上げようとした太郎の手の平を、ケン太の靴が踏みにじる。激痛に太郎の顔がゆがんだ。

「死ねえっ！」

憎々しげに叫ぶと、足をあげ太郎の顎を蹴り上げた。太郎の両腕が滑つて下半身が完全に屋根からずり落ちる。下は地上数十メートルまでまっさかさまである。落ちたら命はない。

勝利を確信し、ケン太はさらにダメージを与えようと足を上げ、

太郎の足めがけ踏みつけた。

がちゃん！ ケン太の足はむなしく瓦を踏み抜いた。

はっ、とケン太は目を見開いた。

太郎はどこにいる？

ケン太は太郎の姿を求め、伸び上がった。

雨樋に指先が見えている。

太郎はじぶんから身体を滑らせ、雨樋に指先だけでぶら下がって  
いたのだ。

その雨樋がついにべりべりと音を立て、屋根から弾けとんだ。ぶ  
らん、と太郎は雨樋にぶら下がっている。

すっ、と沈み込み、その姿がケン太の視界から消えた。

はははは……と、ケン太は笑い声を上げる。

死んだ、やつは死んだ！ この屋上から、まっさかさまに落ちて  
死んだ！

大声で叫び、顔を上げて笑い続けた。

くそお……、と勝が立ち上がる。

ゆっくりとそれを見ていた杏奈は首を横にふった。

「どうして……お兄さま……？」

きつとケン太は杏奈を見た。

「杏奈！　なんで大人しくしていないっ？　そんなことでは、わが  
高倉コンツェルンの一員として認めることは出来んぞ」

「お兄さま、あなたは人殺しをしたのよ？　その意味が判って？」

「人殺し？　いいや、太郎はじぶんから足を滑らせたただけだ。お前

も見ていただろう?」

ケン太の言葉に全員、ぼうぜんと立ち尽くした。ここまできて、そこまで強弁するかれの正気を疑っていたのだ。

「いいや、まだ太郎は死んではないよ」

しずかな声が響く。

はっと、一同がその方向を見た。

屋上のドアから、五郎が顔を出していた。その背後に洋子と幸司が立っている。

「なんだと? もういつぺん、言ってみろ」

「太郎は死んではないと言ったのさ」

そう言って五郎は指さした。

そちらを見た全員はあつ、と声をあげた。

屋上の、屋根の端に指先が見えている。指先はしばらく手がかりを探しているようだったが、やがてぐつと力が込められ、その上半身が持ち上がった。

太郎だった。

かれは雨樋を伝って、ケン太の視界の届かない場所まで移動していたのだ。

さつと一動作で屋根に這い登った太郎は、立ち上がりケン太を見つめた。

畜生……とケン太はつぶやく。

「往生際の悪い奴だ……」

太郎に身体を向けるとゆっくりと歩き出す。太郎はゆらりと身体をかたむけ、するするとケン太にむけ走り出した。足音はまったくたてない。瓦を革靴で踏んでいるのかかわらず、まるで毛足の長

い絨毯を歩いているかのような静かさだ。執事独特の速歩術だ。

とん、と太郎の身体が宙に浮く。

はっ、とケン太は顔を上げた。

両腕をひろげた太郎に、ケン太は腕をあげてじぶんの顔をかばった。

瓦を踏んだ太郎は、急角度で横に飛んだ。まったくその動きを予測していなかったケン太は、次の攻撃を受け止めるため身体をぐりつまわした。

それが間違いだった。

急傾斜の屋根瓦に足をとられ、ケン太の上半身がバランスを崩していた。

しまった、という表情が浮かぶ。バランスを取り戻すべく、両腕がひろげられ、防御ががらあきになっていた。

そのふところに、太郎の手刀が吸い込まれていく。

一瞬にして太郎はケン太の前面を攻撃していた。胸を腹を、そして喉元を！

うあつ、と叫んでケン太は吹き飛んでいた。

がちゃがちゃと騒々しい音を立て、ケン太の身体は屋根瓦を割りながらごろごろと転がっていた。

くそ、とうめきながら立ち上がろうと手をついた。

その腕がぐくりと折れる。

ぼうぜんとした表情がケン太の顔に浮かぶ。

もう一度もがく。

しかし四肢にはまったく力がこめることが出来ない。まるで手足がゴムのようになっていた。

「なんだ、なにがおれに……？」

「執事格闘術の精髓だ……相手を傷つけることなく、その戦闘力の  
みを奪う……」

五郎がつぶやいた。

ふっ、と太郎は息を吐き出した。

顔を上げ、五郎と見詰め合った。五郎はゆっくりとうなずいた。

「見事だった！」

はい、と太郎はうなずきかえした。はればれとした笑顔が浮かんで  
いる。

## 敗北

完全に身体のちからを抜けたケン太を、五郎はかるがるとかかえて部屋の中へ運び入れた。デスクの椅子に腰かけさせ、ほかのものはその周りに集まった。全員の注視を受け、ケン太はいつもの皮肉な笑みを浮かべていた。

「しばらくしたらもとに戻る。それまですこし話しをしようじゃないか」

五郎はそう言うと、ケン太の前に椅子を引き出し、背もたれにまたがるようにして腰をおろした。

「話し？ ……なにを話そうというんだ？」

「理由だ。なぜ、あんなことをしたんだ？」

ケン太はふたたび笑いを浮かべた。

「決まってる。おれは美和子を愛しているからだ」

「それならそれなりの方法があつたはずじゃないか。なぜこんな、美和子さんを苦しめるようなことをする必要があるんだ」

ケン太は苦悶の表情を浮かべた。

「おれは……おれは、不器用だ……。あんたがおおきくした高倉コンツェルンを受け継いだが、他人に命令することは憶えても、他人に愛されることはできなかった。他人はおれを恐れるし、尊敬もするだろう……しかしそれだけだ！」

五郎は眉をひそめた。

「わからんな……」

ケン太は美和子を見た。

「なあ、美和子さん。あんた、番長島で戦いを繰り返してどう感じた？」

いきなり話しかけられ、美和子は戸惑った顔つきになった。

「どう……と言われても……」

「生きていることを感じなかったかい？ 戦っているのが楽しくはなかったか？」

美和子は胸を突かれたようだった。はっ、と息を呑み、目を見開く。

「おれの言ったこと、思い出してくれ。最強のバンチョウと最強のスケバン。この組み合わせはどう考える？ きみはいまや番長島トーナメント最終勝者、つまり最強のスケバンってわけさ！」

「このわたしが、スケバン？」

「そうさ、あの戦いの日々は充実していたんじゃないのか？ 道場でいつものメンバーと試合するのは違う、鮮烈なものがあつたはずだ！」

美和子の唇がふるえていた。ケン太の言葉を認めたくはなかったが、その言葉には真実が含まれていることを悟っている顔つきであった。

「そのために真行寺の財産を？」

太郎の問いかけに、ケン太はふっと笑った。

「そうさ、美和子はなんとしても真行寺家を再興させようとするだろう。まあ、男爵が死んだのは計算外だったが、ま、寿命だろう。そのために番長島トーナメントのことを教えれば、かならず参加する。そして彼女はスケバンになる！」

ケン太の言葉に全員が美和子を見た。美和子はぐっと息を吸い込



み、胸を張った。

「ええ！ あたしはあなたの言うとおり、正真正銘のスケバンとなりました！ 認めましょう、あの番長島のトーナメントは充実していました……でも、あなたを許すことは出来ません」

そう言うつとぐつとケン太を睨む。

「あなたとの婚約は正式に解消します。あなたとは結婚する気はありませんから、そのおつもりで！」

そうか、とケン太はがつくりと肩を落とした。

「ぼくはふられた、ってわけか……」

「まだよ！ これで終わりじゃないわ！」

え、と一同が声の主を見た。

声をあげたのは杏奈だった。

彼女は燃えるような目つきでケン太を睨んでいる。いぶかしげにケン太は顔を上げた。

「いまさら何を言うんだ」

「お兄さま。あたしはお兄さまが高倉コンツェルンの総帥としてふさわしくないと判断いたします。ついてはあなたに総帥の地位を退いていただきたいの。どう、同意なさってくださいる？」

見る見るケン太の顔に怒りがのぼる。

「何を言う……お前がそんなことを言える……」

「それが言える立場ですわ。お忘れですか？ あたしは高倉コンツェルンの株式を三十パーセント持っておりますのよ。株式総会で役員 の弾劾決議を提出できる割合だわ」

ケン太はあつけにとられた。

「し、しかし、あの株式の決定権はおれに委任されているはずだぞ。お前が口出しは出来ない……」

「慣例ではそうです。しかし法律はそれを認めてはいません」

素早く五郎は口を挟みこんだ。

杏奈を見てうなずいた。

「こうなったら、あなたにあれを渡したほうがよさそうだ。洋子君……」

はい、と洋子が一步前へ踏み出した。彼女はケン太のデスクに近づくと、その操作パネルを開き、ボタンを素早く操作した。

ぱくん、と壁が開きモニターの列が現れる。

モニターが明るくなり、ケン太の部屋が映し出された。どうやら録画したものを再生したらしく、画面の片隅に日付が表示されていた。

ケン太がデスクの向こうに座っている。そこへ現れた人物を見て、幸司は驚きの声をあげた。

「ありや、前の総理大臣じゃないか……」

その通りだった。総理大臣とケン太は親しげに言葉を交わし、なにやら密談をしている様子だ。

「音声は絞っているが、ちゃんと録音はできているよ。ほかにも防衛軍の大物、財界の重鎮、いろいろな人物とケン太はあっているようだ。かれは後々脅迫の種を握るつもりで、この場면을録画していたんだろうが、逆もまた真なりということだな」

畜生……とケン太は椅子の上でじたばたともがいた。

杏奈は宣言した。

「これらの記録はすべて報道機関に公開しましょう！ 高倉コンツエルンはもう、このような裏取引で利益をあげることはないことを明らかにしますわ」

彼女の言葉にケン太はうつむいた。

それは敗北を知った男の顔だった。

## 大団円

記者会見式場はしずかな熱気につつまれていた。会場は高倉邸の一番ひろいラウンジがあてられている。

この日、再建された高倉コンツェルンと、真行寺財閥の提携が発表される運びであった。会場の奥まった場所には金屏風がおかれ、その前の長テーブルには白いクロスが敷かれている。そこにはすでに高倉杏奈がしとやかなイブニングドレスで座っていた。

ばしゃばしゃと音を立て、カメラマンのフラッシュが焚かれる。そのたびにシャッター音がうるさいほど聞こえていた。会場のすみでは即席の調理場が作られ、そこでは幸司が鍋を揮い、あるいは包丁を手につぎつぎと料理を作っている。出来てくるそばから、洋子がトレーに乗せ、招待客たちに出していた。ふたりは絶妙のコンビであった。

「なあ……なんでこんなことしなきゃ、ならないんだろうな？」  
退屈そのもの、といった顔つきで勝がつぶやいた。手にはシャンペンが注がれたグラスが握られていたが、まるで手をつけた様子はない。

勝はじつは下戸だったのである。酒一滴、口にすることは出来ない。  
「いいじゃないの……おめでたいことなんだから……」

勝のすぐ側で妹の茜がほんのり赤い顔で答えた。その顔を見て、勝はぎよつとなった。

「おい、おめえ……まさか！」

なによつ……と茜は勝を見上げる。目が据わっていた。いつの間にか、彼女はシャンペンの瓶を片手で握っている。それを傾け、手

にしたグラスにどぼどぼと注ぎ入れる。

ぐいーつと一息であけると、ふーつと熱い息を吐いた。

「お、おめえ……未成年じゃねえか！」

「かたいこと、言いつこなし！　まるで太郎さんみたいなことを言うのね、兄貴ったら」

太郎の名前が出て、勝はあたりを見回した。

招待客のなかに太郎の小柄な姿が見えている。片腕にナプキンを下げ、するすると身体をくねらせるようにして客の間をすりぬけ、接客を行っていた。

近くに來た折を掴まえ、勝は話しかけた。

「おい、太郎。おめえは招待客なんだろう？　そんなこた、するこ  
とねえんだぜ」

勝に話しかけられ、太郎はくすりと笑った。

「しかしこうお客さまが多くては……やはりぼくは召し使いですか  
らね。当然の義務といえるでしょう」

「はあ……と勝は声をあげた。

「そうだなあ、今日のおめえは、なんだか生き生きして見えるぜ」

太郎はかすかに頭を下げた。しかし勝は眉をひそめた。

「それより美和子お嬢さまはいつてえ、なにグズグズしてんだろう  
な？　見ろや、記者たちもなんだかいらいらしてるぜ」

その通りだった。出席しているのは高倉杏奈ひとりで、美和子の  
姿はまだ見えなかった。

だから杏奈に対し、さまざまな質問をしているが、そのたびに彼  
女ははぐらかし、美和子が現れたらすべて話すとそらしていたので  
ある。なかなか発表の全貌が見えてこないの、記者たちははつき  
りと苛立ちを見せていた。

と、会場がふいにざわついた。

入り口のドアが開き、美和子があらわれたのである。姿を見せた美和子の格好に、いならぶ客、記者たちはあつと声を呑んだ。

なんと今日の美和子はセーラー服を着ていた。スカートは足首までたつする長いもので、髪の毛はポニー・テールにし、耳には派手なイヤリングが光っている。片手には木刀を握り、どこをどう見てもスケバンそのものであった。

美和子はじろり、と会場の全員を見渡した。

ずかずかと足音を立て、杏奈のとなりに席をつく。どつかりと椅子に腰をしずめると、なんとその形の良い足をあげ、テーブルにどんと下ろした。くちやくちやと口許が動き、どうやらガムを噛んでいるようだ。

完全に記者たちは美和子のこの態度に吞まれてしまっていた。カメラのシャッター音さえ、聞こえてこない。

いや、杏奈さえすっかり美和子の変貌には驚いている様子である。ぱくぱくと口が言葉なく動いている。

ぷーっ、と美和子の口からガムが膨らんで風船をつくった。ぱちん、と音を立てはじけると、彼女は言葉をおしだした。

「で、あたしに何の質問があんの？」

見ていた勝はぼかんとしていたが、はっとなつて妹を見た。

茜はただひとり、声を出さずに笑い転げていた。

「おい……」

「なによ？」

そう言つと彼女は悪戯っぽく、兄を見上げる。勝は目を剥いた。

「おめえ、美和子になにか吹き込んだな？」

「ぺろり、と茜は舌を出した。」

「美和子さん、これからは立派なスケバンになるつもりだって言っ

て、あたしにスケバンらしくなるよう、教えてくれって言ってきたんだ！ だから、あたし教えてやったの。本当、美和子さんって、勉強熱心だから、たった一日でスケバンの口調憶えちゃったわ！」

勝は太郎を見た。

「おい太郎…… おめえ、お嬢さまがあんなになつて平気なのか？」

「お嬢さまがそうなさりたいと思つておいでなら、わたしは召し使いですからついてまいるだけです」

ふうん、と勝はうなずいた。

ようやく記者たちはたちなおり、おずおずとだが質問を開始した。  
「あ、あの…… 真行寺と高倉の提携ですが、その内容は？」

とんとんと、美和子は手にした木刀を肩にあてて叩いている。ふん、と横を向くと口を開いた。

「つまんねえこと、聞くんじゃないよ！ あたいと杏奈はマブダチなんだから、おたがい協力し合う！ それでいいだろ！」

ざわ……と、会見場がざわめいた。それでも熱心な記者のひとりが質問をする。

「あらたな事業計画をお聞かせください」  
その質問に、美和子にはやりと笑った。

「あたい、番長島のトーナメント、もう一度やるつもりなんだ！」

おう！ というどよめきがひろがった。数人の記者が電話口にとびつき、早口でこのニュース出版社に伝えている。

美和子は立ち上がった。

「いいかい、耳をかつぽじいてよく聞きなよ！ あたいは番長島のトーナメントを主催する。そして、全国からバンチョウとスケバンを集める！ ついでにあたいの結婚相手も募集します！」

どん、と木刀を床に突き立てた。

「あたいと結婚したい男たちは、この番長島のトーナメントで最終

勝者に残ること！　そしてあたいと決闘して、あたいを負かすことができたら、結婚してやるよ！　あたいは強い男が好きなんだ……だから、腕に自身がある誰でも、番長島に来てくんな。よろしく……」

会場は興奮につつまれていた。

わあわあど騒がしい中、勝の顔に笑みが浮かんでいた。

「面白れえ……面白れえぜ！　こうじゃなくちゃな……！　よし、決めた！　おれも番長島のトーナメントに出場する。そして美和子をおれの嫁さんにする！」

ぐつと拳を握りしめる。と、かれを見つめている太郎の視線に気付いた。

「なんでえ、その目は」

はつと太郎は目をそらした。

それはいままで勝が見たことのない、太郎の表情であつた。

「いいえ、あなたには美和子さまは譲れません……」

「なんだとお？」

「ぼくもトーナメントに出場するつもりですから」

勝は目を見開き、まじまじと太郎を見つめた。太郎はなんだかなにかを吹っ切つたような表情でいる。

「そつか、おめえ……」

にやりと笑つた。

手を挙げ、どんと音を立てて太郎の肩を叩く。

「面白れえ……！　よし、どっちが美和子の旦那になるか、勝負だ！」

太郎はうなずいた。

そして……

番長島。

北端の洞窟。

とろとろと焚き火が燃え、飯盒容器を炎があぶっている。飯盒容器ではぐつぐつとなにかが煮えていた。

スプーンでそれをかきまわし、五郎はちょっと味見してみた。うん、とうなずき塩をひとつまみ入れてみる。

こんどはよくなった。

奥をふり返ると声をかける。

「飯ができたぞ、ケン太」

ああ、と物憂い声でケン太は答えた。

のろのろと身動きし、五郎の手から煮えている食物を皿に移し、それをかかえるようにして戻っていく。

それを見て、五郎は眉をひそめた。

あの高倉邸でのことがあってから、五郎は再び番長島の洞窟に戻って、隠者の暮らしを続けていた。高倉コンツェルンの混乱をまとめあげ、すべてが終わった今、やはり洞窟での隠者の暮らしがまっていると痛感して戻ってきたのだ。

そこへやってきたのがケン太だった。

すべての役職を解かれ、罪に問われたケン太は、懲役を宣告されなかったが執行猶予の身で絶望に逃れてきたのだ。五郎は何も言わず、住まわせてやった。

あいつはもう駄目だな……。

五郎はそう判断していた。



かつてのケン太は目がぎらぎらとしていた。脂っこい野望に、全身が浸されていた。が、いまはすっかり抜け、なんだか抜け殻そのものといった感じである。良くも悪くも、かつてのケン太は生き生きとしていたのだ。

膝をかかえ、こそこそと盗み食いをするように皿を抱えスプーンを口にかけていくケン太は、なんだかいじましい。

その側にラジオがある。

ラジオでは、真行寺と高倉の提携の記者会見の様子が実況されていた。

と、ケン太の手の動きがぴたりと止まった。

ラジオの音声に聞き入っている。

手を伸ばし、音量の調節つまみをひねった。音がおおきくなり、洞窟に美和子の声が響き渡った。

「あたいと結婚したい男たちは、この番長島のトーナメントで最終勝者に残ること！そしてあたいと決闘して、あたいを負かすことができれば、結婚してやるよ！あたいは強い男が好きなんだ……だから、腕に自身がある誰でも、番長島に来てくん。よろしく……」

ケン太の目が見開かれた。

見守っていた五郎は居住まいを正した。

かれの目が生命を取り戻したように見えたのである。

ぱちり、とケン太はラジオのスイッチを切った。

洞窟に静寂がもどる。

ふらり、と立ち上がったケン太は五郎の側へ近寄った。目が真剣である。

「頼みがある……」

「なんだね？」

「おれに、執事格闘術を教えて欲しい」

「どうして……？」

「聞いただろう。美和子が番長島でトーナメントを主催する話を。そして試合の勝者と結婚するということを」

「それで？」

「おれは美和子と結婚したい！」

ケン太の瞳が欲望に燃え上がった。

「そのためには強くならないと駄目だ！ おれはあんたの息子の太郎の執事格闘術には結局、勝てなかった。だからあんに、執事の格闘術を習いたいんだ」

しばしの沈黙の後、五郎は答えた。

「いいだろう……しかし修行は辛いぞ！」

「望むところだ！」

ケン太の全身に闘志が燃え上がった。

五郎は立ち上がった。

「こい！ ケン太……まずは第一段階だ……！」

ケン太はうなずき、身構えた。

「いくぞっ！」

ひと声叫ぶと、五郎へ向けて飛び掛った。洞窟の中、ふたりの死闘が始まった……。

そして……（後書き）

「新スケバン」遂に完結です。今まで読んでくれた皆さん、有難う御座いました。

また、別の作品でお会いしましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0731g/>

---

新・スケバン！～少年執事とお嬢様～

2010年10月8日13時36分発行